

京都大学構内遺跡調査研究年報

1996年度

京都大学埋蔵文化財研究センター

卷首 図版



京都大学病院構内A G 20区 蓮月焼

序

本年報は、1996年度に埋蔵文化財研究センターがおこなった、大学敷地内の発掘調査の成果をまとめたものである。京都大学の構内には、吉田キャンパスにおける先史時代から近世にいたる遺跡のほかにも、大阪府高槻市の農学部附属農場内にひろがる弥生時代の安満遺跡、和歌山県白浜町の理学部附属瀬戸臨海実験所構内にある縄文～平安時代の瀬戸遺跡など、貴重な遺跡が少なくない。進行するキャンパスの再整備と、これらの遺跡の調査研究や保存活用とをいかに両立させていくかが、もっとも重要な課題として、つねに問われてきたところである。現在のところ、可能な限り精緻な発掘調査と報告を継続しておこなっていき、その積み重ねこそが今後の成果の活用につながるものと考えている。

吉田キャンパスを含めた北白川一帯における歴史的環境の変遷は、過去の調査によっておおよそ把握されたものと思われてきたが、新たな発掘調査の結果は、その内容を充実させるだけでなく、見のがされてきた高い価値をあらたに認識させる場合がある。この年報に収められた報告のうち、総合人間学部構内の濠状の大溝や大量の軒瓦類、病院構内出土の蓮月焼一括資料などは、その好例と言えよう。報文の作成にあたっては、木材の樹種同定について、木質科学研究所の伊東隆夫氏に分析いただいたほか、学内学外の各研究分野のご協力をいただいている。ご高覧いただき、御批評をお願いしたい。

おわりに、これらの調査を進めるにあたって学内学外の多くの関係者および関係機関から御指導、御助言をいただき、また、総合人間学部、医学部附属病院、医学部、施設部の関係者各位には、多くのご協力を賜った。ここに厚くお礼申し上げる次第である。

2000年8月

京都大学埋蔵文化財研究センター長

山中一郎

例 言

- 1 本年報は、京都大学構内で1996年4月1日から1997年3月31日までに発掘、整理作業を終了した埋蔵文化財調査と保存の報告、および京都大学埋蔵文化財研究センターにおける研究成果をまとめたものである。
- 2 国土座標にしたがって一辺50mの方形の地区割りをして、遺跡の位置を表示した。
- 3 層位と遺構の位置については、国土座標第Ⅵ座標系 ($x = -108,000$ $y = -20,000$) が ($X = 2,000$ $Y = 2,000$) となる京都大学構内座標によって表示した。
- 4 遺構の略号は、奈良国立文化財研究所の方式にしたがって、井戸：S E，土坑：S K のように表示し、各調査ごとに通し番号を1から付した。
- 5 遺物には、遺跡の調査名を示すローマ数字と、調査ごとの通し番号を1から付した。この遺物番号は、本文、実測図、写真を通して表示を統一した。
Ⅰ：京都大学総合人間学部構内A R 25区の発掘調査
Ⅱ：京都大学病院構内A G 20・A F 20区の発掘調査
Ⅲ：京都大学医学部構内A N 20区の発掘調査
(例 I 1：京都大学総合人間学部構内A R 25区出土遺物1番)
- 6 原則として、遺物の実測図は縮尺1/4，遺物の写真は約1/2に統一した。他の縮尺のもの、それぞれに縮尺を明記した。
- 7 参考文献は、本文中に〔著者名 発表年〕の形式で表わし、巻末に一括した。
- 8 古代・中世土師器の型式分類は、とくにことわりがない場合、『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』(1981年)にしたがっている。
- 9 本文の執筆者名は各章の初めに列記した。また、遺物の撮影はそれぞれ報告者が担当した。
- 10 編集は、伊藤淳史が担当し、清水芳裕，千葉 豊，富井 眞，阪口英毅，磯谷敦子，中田敬子，柴垣理恵子が協力した。

京都大学構内遺跡調査研究年報 1996年度

目 次

第1章 1996年度京都大学構内遺跡調査の概要	1
1 調査の経過	1
2 調査の成果	1
第2章 京都大学総合人間学部構内A R 25区の発掘調査	3
1 調査の概要	3
2 層 位	4
3 縄文・弥生時代の遺跡	8
4 古墳時代・古代の遺跡	15
5 中世の遺跡	25
6 古代・中世の瓦類	43
7 近世の遺跡	67
8 小 結	74
第3章 京都大学病院構内A G 20・A F 20区の発掘調査	81
1 調査の概要	81
2 A G 20区の遺構と遺物	83
3 A F 20区の遺構と遺物	117
4 小 結	126
第4章 京都大学医学部構内A N 20区の発掘調査	131
1 調査の経過	131
2 層 位	131
3 縄文・弥生時代の遺跡	134
4 中世の遺跡	140
5 近世の遺跡	145
6 小 結	147

参考文献	149
京都大学構内遺跡調査要項	153
報告書抄録	161
図版	巻末

図版目次

巻首図版	京都大学病院構内A G 20区	蓮月焼
図版 1	京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点	
図版 2	京都大学総合人間学部構内A R 25区	
	1 調査区全景 (南から)	2 溝S D 11と畝溝群 (北東から)
図版 3	京都大学総合人間学部構内A R 25区	
	1 南調査区表土除去後 (東から)	2 北調査区表土除去後 (東から)
	3 南調査区近世遺構 (東から)	4 北調査区近世遺構 (東から)
	5 南調査区完掘後 (東から)	6 北調査区完掘後 (東から)
図版 4	京都大学総合人間学部構内A R 25区	
	1 南調査区近世遺構 (南から)	2 南調査区中世遺構 (南から)
	3 近世段差と杭列痕 (西から)	4 中世段差と植栽痕 (西から)
	5 耕作溝と根茎痕 (南から)	6 東調査区完掘後 (南から)
図版 5	京都大学総合人間学部構内A R 25区	
	1 土坑S K 13 (東から)	2 S K 13半割断面 (東から)
	3 土坑S K 9 (南から)	4 瓦溜S K 8 (東から)
	5 土器溜S K 10 (南から)	6 S K 10下層土坑 (東から)
図版 6	京都大学総合人間学部構内A R 25区	
	1 井戸S E 5 (東から)	2 S E 5井筒内 (東から)
	3 溝S D 13・16~21 (南から)	4 埋納遺構S X 2出土状況 (北から)
	5 溝S D 11東西畦断面 (南から)	6 調査区西壁断面 (東から)

- 図版 7 京都大学総合人間学部構内 A R 25区
縄文・弥生時代の遺物(1)
- 図版 8 京都大学総合人間学部構内 A R 25区
縄文・弥生時代の遺物(2)
- 図版 9 京都大学総合人間学部構内 A R 25区
縄文・弥生時代の遺物(3)
- 図版10 京都大学総合人間学部構内 A R 25区
1 縄文・弥生時代の遺物(4) 2 古墳時代の遺物
- 図版11 京都大学総合人間学部構内 A R 25区
S K 5 出土遺物, S K 10 出土遺物, S K 11 出土遺物, S K 12 出土遺物,
S K 17 出土遺物, S D 62 出土遺物, 黒褐色土出土遺物
- 図版12 京都大学総合人間学部構内 A R 25区
S D 55 出土遺物, S D 16 出土遺物, S D 56 出土遺物, S D 33 出土遺物
- 図版13 京都大学総合人間学部構内 A R 25区
S D 11 出土遺物(1)
- 図版14 京都大学総合人間学部構内 A R 25区
S D 11 出土遺物(2)
- 図版15 京都大学総合人間学部構内 A R 25区
S D 11 出土遺物(3), S D 53 出土遺物, 茶褐色土出土遺物,
段差内堆積層出土遺物, 斜面堆積層出土遺物
- 図版16 京都大学総合人間学部構内 A R 25区
古代・中世の瓦(1)
- 図版17 京都大学総合人間学部構内 A R 25区
古代・中世の瓦(2)
- 図版18 京都大学総合人間学部構内 A R 25区
古代・中世の瓦(3)
- 図版19 京都大学総合人間学部構内 A R 25区
古代・中世の瓦(4), 窠記号・刻印
- 図版20 京都大学総合人間学部構内 A R 25区
S X 1 出土遺物, S X 2 出土遺物, 灰褐色土出土遺物, S E 20 出土遺物

- 図版21 京都大学病院構内A G 20・A F 20区
 1 A G 20区東調査区全景（北東から） 2 A G 20区西調査区全景（西から）
 3 溝S D 4～6（北から）
- 図版22 京都大学病院構内A G 20・A F 20区
 1 井戸S E 14遺物出土状況（東から） 2 井戸S E 13（東から）
 3 土坑S K 3（南から） 4 土坑S K 6（東から）
 5 井戸S E 2（北から） 6 井戸S E 5（北から）
- 図版23 京都大学病院構内A G 20・A F 20区
 1 A F 20区全景（東から） 2 井戸S E 1（南から）
 3 流路S R 1・池S G 1（北から） 4 S R 1，杭列S A 1・2（南から）
 5 埧塙出土状況（西から）
- 図版24 京都大学病院構内A G 20・A F 20区
 淡褐色砂質土出土遺物
- 図版25 京都大学病院構内A G 20・A F 20区
 1 S R 7出土遺物 2 S R 4出土遺物，S R 5出土遺物
- 図版26 京都大学病院構内A G 20・A F 20区
 S E 14出土遺物，S K 6出土遺物
- 図版27 京都大学病院構内A G 20・A F 20区
 S D 4出土遺物(1)
- 図版28 京都大学病院構内A G 20・A F 20区
 S D 4出土遺物(2)
- 図版29 京都大学病院構内A G 20・A F 20区
 S D 5出土遺物，S E 7・8出土遺物(1)
- 図版30 京都大学病院構内A G 20・A F 20区
 S E 7・8出土遺物(2)
- 図版31 京都大学病院構内A G 20・A F 20区
 蓮月焼(1)
- 図版32 京都大学病院構内A G 20・A F 20区
 蓮月焼(2)

- 図版33 京都大学病院構内A G 20・A F 20区
蓮月焼(3)
- 図版34 京都大学病院構内A G 20・A F 20区
蓮月焼(4)
- 図版35 京都大学病院構内A G 20・A F 20区
S G 1 出土遺物(1)
- 図版36 京都大学病院構内A G 20・A F 20区
S G 1 出土遺物(2)
- 図版37 京都大学病院構内A G 20・A F 20区
埴 塙
- 図版38 京都大学医学部構内A N 20区
1 調査区全景(西から) 2 黒褐色粘質土内木材出土状況(南から)
- 図版39 京都大学医学部構内A N 20区
出土木材の樹種(1)
- 図版40 京都大学医学部構内A N 20区
出土木材の樹種(2)

挿 図 目 次

総合人間学部構内A R 25区の発掘調査	図9 縄文・弥生時代の遺物(3)……………12
図1 調査地点の位置……………3	図10 縄文・弥生時代の遺物(4)……………13
図2 南北方向の層位……………5	図11 縄文・弥生時代の遺物(5)……………15
図3 東西方向の層位(1)……………6	図12 古代以前の遺構……………17
図4 東西方向の層位(2)……………7	図13 古墳時代の遺物……………18
図5 縄文・弥生土器の地区別出土点数 ……………8	図14 S K 5・S K 10・S K 11・ S K 12・S K 16・S K 17出土遺物 ……………19
図6 土坑S K 13土器出土状況……………9	図15 S D 25・S D 60・S D 62・ 黒褐色土出土遺物……………20
図7 縄文・弥生時代の遺物(1)……………10	
図8 縄文・弥生時代の遺物(2)……………11	

図16	S D 55出土遺物	22	図39	灰褐色土(2)・S D 8・S E 16・ S E 20・S D 1出土遺物	73
図17	S D 12・S D 13・S D 16・ S D 24・S D 56・S D 61・ S K 6・S K 8・ 茶褐色土出土遺物	23	図40	近世瓦と刻印	74
図18	中世の遺構	26	図41	調査区主要遺構の変遷	77
図19	井戸S E 5	27	病院構内A G 20・A F 20区の発掘調査		
図20	S D 19・S D 33・S D 66・ S E 5出土遺物	31	図42	本調査区の位置と 病院東構内の遺跡	82
図21	S D 11出土遺物(1)	33	図43	東調査区の層位	84
図22	S D 11出土遺物(2)	34	図44	東調査区検出の遺構	85
図23	S D 11出土遺物(3)	35	図45	井戸S E 11・S E 13	86
図24	S D 11出土遺物(4)	37	図46	井戸S E 15	87
図25	S D 53出土遺物	40	図47	井戸S E 9・S E 3・ S E 2・S E 5	89
図26	S D 54・不定形土坑・茶褐色土・ 段差内堆積層・斜面堆積層 出土遺物	41	図48	淡褐色砂質土出土土器	90
図27	軒丸瓦(1)	47	図49	淡褐色砂質土・S R 7出土土器	91
図28	軒丸瓦(2)	49	図50	S R 4・S R 5出土土器	92
図29	軒丸瓦(3)	50	図51	S E 14出土遺物(1)	94
図30	軒平瓦(1)	54	図52	S E 14出土遺物(2)	95
図31	軒平瓦(2)	55	図53	S X 17・S X 9・S E 10・ S X 12・S K 9・S X 16 出土遺物	97
図32	軒平瓦(3)	60	図54	S K 3・S K 5出土遺物	98
図33	軒平瓦(4)・平瓦(1)	61	図55	S K 10・S E 15・S X 13 出土遺物	99
図34	平瓦(2)・丸瓦	63	図56	S K 6・S E 11出土遺物	101
図35	籠記号・刻印	65	図57	S D 4出土遺物(1)	104
図36	近世の遺構	69	図58	S D 4出土遺物(2)	105
図37	S X 1・S X 2出土遺物	70	図59	S D 5出土遺物	106
図38	灰褐色土出土遺物(1)	71			

図60	S E 7・8, S E 9 出土遺物 ……………108	医学部構内A N 20区の発掘調査	図73	調査区の層位 ……………132
図61	S E 2・S E 5・S X 1 出土遺物 ……………109	図74	先史時代の層位 ……………133	
図62	蓮月焼(1) ……………111	図75	先史時代の地形 ……………134	
図63	蓮月焼(2) ……………112	図76	青灰色シルト・黄灰色シルト・ 不定形土坑出土土器 ……………136	
図64	蓮月焼(3) ……………113	図77	不定形土坑出土土器 ……………137	
図65	蓮月焼(4) ……………115	図78	中世の遺構 ……………141	
図66	蓮月焼(5) ……………116	図79	不定形土坑出土遺物(1) ……………142	
図67	A F 20区の層位 ……………118	図80	不定形土坑出土遺物(2) ……………143	
図68	A F 20区検出の遺構 ……………119	図81	軒丸瓦・軒平瓦 ……………144	
図69	S G 1出土遺物(1) ……………121	図82	近世の遺構 ……………145	
図70	S G 1出土遺物(2) ……………123	図83	井戸S E 8 ……………146	
図71	埴 塙 ……………124	図84	S E 7・S E 1・柱穴 出土遺物 ……………147	
図72	埴塙の使用状況 ……………125			

表 目 次

表 1	S D 55出土土師器 の計測結果 ……………21	表 5	調査地関連年表 ……………75
表 2	軒丸瓦の遺構別出土点数 ……………45	表 6	S E 14・S K 3・S K 10 出土土師器計測結果 ……………102
表 3	軒平瓦の遺構別出土点数 ……………53	表 7	出土木材の樹種 ……………139
表 4	籠記号・刻印の遺構別出土点数 ……………64	表 8	京都大学構内遺跡のおもな調査 ……………154

第1章 1996年度京都大学構内遺跡調査の概要

山中一郎 清水芳裕 伊藤淳史

1 調査の経過

京都大学埋蔵文化財研究センターでは、吉田キャンパス及び附属施設での建物新営やその他掘削工事に際して、予定地の埋蔵文化財調査を、発掘、試掘、立合に分けて実施している。1996年度には、以下の発掘調査2件、立合調査4件、資料整理3件を実施した。

発掘調査	放射性同位元素総合センター新営予定地（医学部構内A N20区）（第4章，図版1-248）
	総合人間学部校舎新営予定地その2（総合人間学部構内A R24区）（発掘中，図版1-249）
立合調査	工学部物理系校舎第3期新営予定地（本部構内A U28区）（図版1-250）
	人文科学研究所附属東洋学文献センター改修工事（北白川小倉町）（第1章，表8-251）
	法・経済学部本館屋外排水管布設工事（本部構内A V25区）（第1章，図版1-252）
	文学部研究棟新営工事（本部構内A X26区）（図版1-253）
資料整理	総合人間学部校舎新営予定地（総合人間学部構内A R25区）（第2章，図版1-238）
	病院地区外来診察施設棟新営予定地（病院構内A G20区）（第3章，図版1-239）
	病院地区MR I - C T装置棟新営予定地（病院構内A F20区）（第3章，図版1-240）

2 調査の成果

前節で掲げた調査のうち、1996年度に整理を終えたものについて、その成果を略述する。なお、総合人間学部構内A R25区、病院構内A G20・A F20区、医学部構内A N20区の発掘調査については、それぞれ第2章～第4章でも詳述している。

縄文・弥生時代の遺跡 これまで縄文・弥生時代に関する情報に乏しかった医学部・病院構内でも、多くの成果が得られている。病院構内A G20・A F20区の調査では、流路内より、縄文後期北白川上層式2期の土器が、比較的まとまって出土した。また、医学部構内A N20区では、縄文前期以前とみられる流路から木材や種実類が、基盤のシルト層や不定形土坑の埋土から縄文前期～弥生中期までの土器が、それぞれ出土している。このほか総合人間学部構内A R25区で、弥生前期末のまとまった土器資料と、壺棺墓の可能性が高い遺構が見つかった点も特筆される。

古墳時代の遺跡 総合人間学部構内A R25区で、微量ながら形象埴輪や須恵器が出土した。埴輪の出土は南方約150mのA O22区に次いで2件目であり、周辺に埴輪を伴う古墳が存在している可能性がいっそう高まった。今後の調査に留意する必要がある。

古代の遺跡 総合人間学部構内A R25区で、奈良時代の土坑や土器溜、平安時代の溝群がみついている。奈良時代の資料は、これまで本部構内や総合人間学部構内で確認されてきたものと同時期の8世紀中葉に比定され、この時期の遺跡が、周辺一帯に面的な広がりをもっていたことが明瞭になった。また平安時代の溝群は、10・11世紀代に属するもので、うちひとつからは、これまで構内遺跡で少なかった11世紀前葉の土師器がまとまって出土し、土器編年を考える上で貴重な資料が得られた。

中世の遺跡 各調査区でそれぞれ成果が得られているが、とりわけ、総合人間学部構内A R25区における、直角に近いコーナー部分を有する室町時代の大溝が注目される。溝内からは、多種類の軒丸・軒平瓦や建築物に付属する飾金具をはじめとした多量の遺物が出土しており、中世後半期の屋敷地や寺域の一画であった可能性が高い。

近世の遺跡 病院構内A G20・A F20区一帯は、旧聖護院村の北辺にあたり、今回の発掘調査によっても、近世の生活史をものがたる多様な情報が得られた。なかでも特異な遺物として、近世後半の池とその周辺からまとまって出土した埴塙があり、植木鉢などに加工転用するために集められた可能性が推測されている。また、幕末の歌人大田垣蓮月の手になる蓮月焼も大量に出土し、西側の141地点出土の資料と合わせて、蓮月焼の実態解明に重要な資料が追加できた。このほか大溝群からは、これまで構内遺跡ではみられなかった17世紀の土師器や陶磁器類が一括出土し、編年の空白を埋める貴重な成果となった。一方、総合人間学部構内A R25区では、中世後半期以降存続していた北から南および東から西へと下る落差の大きな段差と、耕作関連の無数の柵列や野壺群がみついている。近代の大学設置にともなう造成により平坦地化されるまで、段々畑のつらなるのどかな農村的景観が広がっていた様子を具体的に知ることができた。

立合調査の成果 本部構内時計台北側の252地点の調査では、表土下のごく浅いレベルで、縄文土器の細片を含む厚い遺物包含層の存在が確認された。本部構内の随所に先史時代の遺物包含層が存在し、それがかなりの起伏をもっていたことを示す注目すべき成果といえよう。また、北白川小倉町地内の人文科学研究所敷地内の調査では、時期不明の包含層の確認にとどまった。一帯は、縄文前期を主体とする北白川小倉町遺跡として周知されているが、不明な点も多く、今後より詳細な調査を実施する必要がある。

第2章 京都大学総合人間学部構内A R 25区の発掘調査

伊藤淳史

1 調査の概要

今回の調査地点は、吉田山西麓の、京都大学総合人間学部構内北東端に位置し、1989年に火災で焼失した尚賢館の跡地にあたる（図版1-238）。この地に、人間環境学研究科校舎新営ともなう共同溝敷設と総合人間学部校舎の新営が計画されたため、双方の予定地全面の2092㎡を、1995年10月18日から1996年5月17日にかけて発掘調査した。なお、工事進行の都合上、調査対象地を北・南・東の3つに区分し、北および東調査区の発掘を先に実施して埋め戻した後、隣接する南調査区を調査した。また、期間中に西側の管路掘削にもなう立合調査を並行しておこない、遺物包含層の良好な遺存を確認した（図1）。

これまで周辺では、東北東100mの75地点で奈良時代の竪穴住居跡や中世の木棺墓が、また南方100mの14・167地点でも中・近世の溝群などが確認されており、今回もこうした時代の遺跡のひろがり予想された。しかし、調査の結果はきわめて多岐にわたり、弥生時代前期の土器棺墓の可能性が高い遺構、奈良時代の土器溜や小溝、平安時代の溝群、鎌倉～室町時代の大溝・井戸・砂取穴、近世の柵列や野壺群など、各時期の遺構と整理箱147箱におよぶ遺物の出土をみた。調査地一帯が、先史時代以来大学設置にいたるまでの長期にわたり積極的に利用されつづけた空間であることがあらためて明らかとなったといえよう。とりわけ、直角に近いコーナー部分をもつ中世後半期の大溝の発見は特筆される。



図1 調査地点の位置 縮尺1/5000

なお、発掘調査は伊藤淳史と古賀秀策が担当し、整理作業は、主として古代～中世の土器類を古賀が、それ以外を伊藤が分担しておこなった。発掘と整理を通じて、中田敬子・小沼ゆかり・安見昌幸・大岡由記子・長尾玲・菅野類・土井明子が補助した。本章は、その結果にもとづき伊藤がまとめた。

2 層 位

調査前の地表面はほぼ全域が平坦で、56.2m前後をはかる。ただし、近世以前には、北から南および東から西へ下る大きな段差が存在し、さらに、調査区東南辺一带には奈良時代以前の包含層がひろがるなど、堆積は一様ではない。したがってここでは、南北方向を調査区西壁の層位であらわし（図2）、東西方向についてはX=1500ラインに沿って設けた東西畦の南壁と、その約30m南方の調査区南壁の2ヶ所の層位を示す（図3・4）。

調査区の基本層序は、上から表土・攪乱（第1層）、灰褐色土（第2層）、茶褐色土（第3層）、黒褐色土（第4層）、黄褐色砂（第5層）、白色砂Ⅰ（第6層）、赤褐色土（第7層）、黄褐色粘質土（第8層）、黄白色砂質土（第9層）、白色砂Ⅱ（第10層）、である。そして、茶褐色土以下の層を掘り込んで、X=1514とY=2262ライン付近に、北から南および東から西へ下る段差が造出されており、その崖面堆積層を斜面堆積層（a～f層）、段差内に堆積して面的にひろがる層を段差内堆積層（g～m層）とした。

基本層序のうち、灰褐色土は、19世紀代を中心とする陶磁器類や土製品を多量に含む層。明治10年代までの貨幣を含み、段差内に厚く均質に埋積している灰褐色土Ⅰ（2a層）と、段差より外側の高地に堆積し、堅く締まっているが層厚に乏しい灰褐色土Ⅱ（2b層）に細分する。明治30（1897）年に、第三高等中学校の現総合人間学部構内への移転に際して地均し工事が実施されており、その際の埋め立て土が灰褐色土Ⅰ、削平の対象となったのが灰褐色土Ⅱ、と理解できる。

茶褐色土（3a層）は、調査区北半を中心に薄く堆積し、10～14世紀代までの遺物を含む。そして、下層に向かって漸移的に色調が薄くなり、無遺物の淡茶褐色土（3b層）となる。さらにその下層が、調査区全域の基盤層となっている厚い黄褐色砂層（5層）である。ただし、調査区東南辺では、茶褐色土や淡茶褐色土はみられず、縄文晩期中葉～8世紀代までの遺物を含む黒褐色土（4a層）が堆積している。この層も、下半は漸移的に色調が薄くなり遺物の包含も稀となるため、淡黒褐色土（4b層）として区別した。

白色砂Ⅰ（6層）は、白色の粗砂層で、北調査区から東調査区にかけて黄褐色砂層に入り込むように厚く堆積する。白川系の流路にともなうものだろう。その下層の赤褐色土（7層）は、地点や層の上下で粘性や色調の濃淡に違いが見られるものの、ほぼ調査区全域に安定して堆積している。X=1500付近より南側では、これより下層にさらに黄褐色粘質土（8層）や黄白色砂質土（9層）の堆積を認めた後、白色砂Ⅱ（10層）に達する。こ

層位

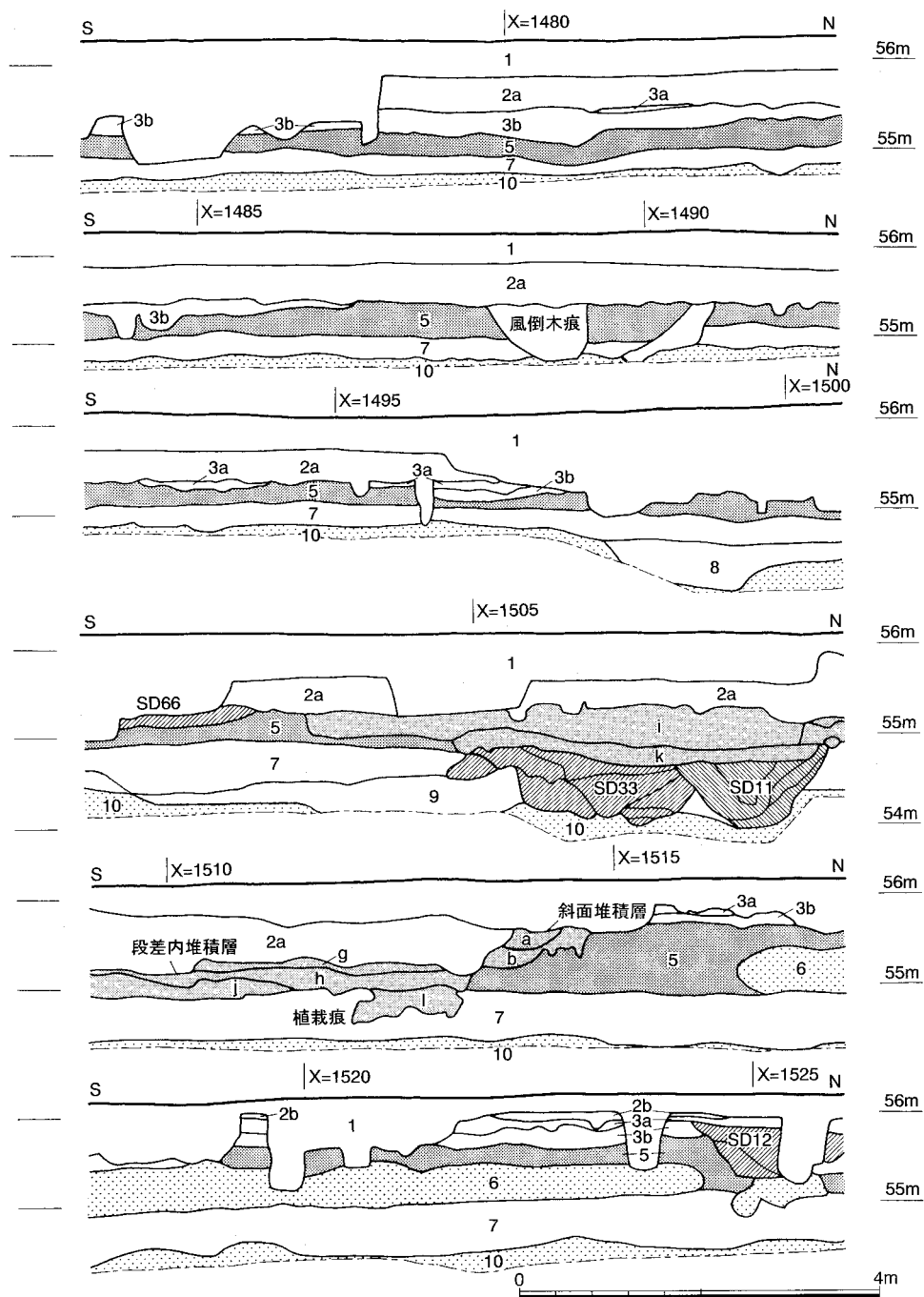


図2 南北方向の層位 (調査区西壁) 縮尺1/80

京都大学総合人間学部構内A R25区の発掘調査

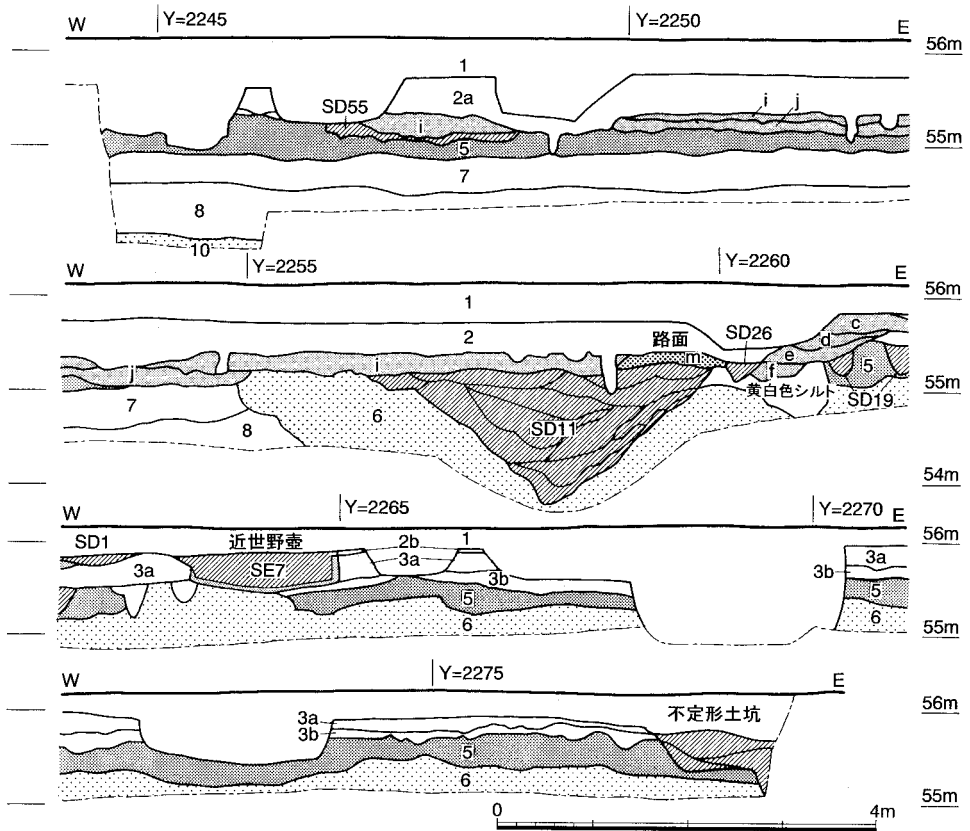


図3 東西方向の層位(1) (X=1500ライン東西畦南壁) 縮尺1/80

の白色砂Ⅱは、白色砂Ⅰと全く同質の粗砂層である。以上の6層以下の堆積はいずれも無遺物の自然堆積で、白川系の流路による洪水で運ばれた粗砂と、安定期に形成された粘質系の土壌によって調査地の基本地形が形成されてきた状況を示すものといえよう。

斜面堆積層 (a～f層) は、砂や礫を交えた暗褐色土が主体で、堅く締まる砂質土とや軟質の粘質土が縞状に互層をなす。南方へ向かうほど段差の高低差が解消されるため、斜面上に堆積する層も薄くなり、調査区南壁ではほとんど認められない。中世末期までの遺物を中心に含むが、最上層では近世の遺物も含まれる。中世前半の溝SD19や茶褐色土を覆って堆積していることから、おそらく中世後半期に段差が造成されて以降、近世を通じてこの崖面に堆積していったものだろう。

一方、段差内堆積層 (g～m層) は、やや軟質の明るい褐色土が主体で、下層の黄褐色砂質土や粘質土がブロック状に混じる層と混じらない層とが、入り組んで堆積する。ただ

層 位

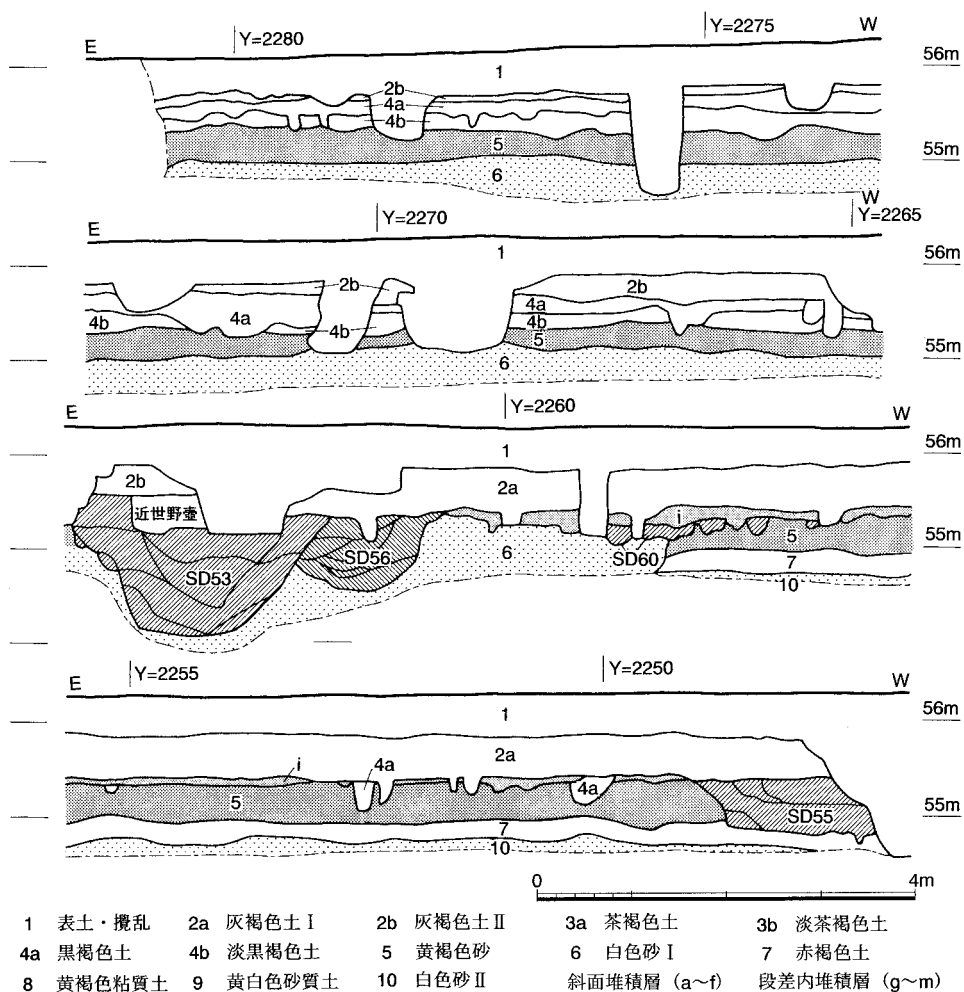


図4 東西方向の層位(2) (調査区南壁) 縮尺1/80

し、m層のみは細礫を交え堅く締まった砂質土で、路面状に盛り上がる。いずれの層も中世末期までの遺物を微量含んでおり、濠状の溝SD11・53が埋積した後、段差内が耕地化した時期の耕土や畦道であったとみられる。

なお、今回の調査地点では、周辺一帯での鍵層となっている弥生前期末~中期初頭の洪水堆積層(黄色砂)は全く存在せず、弥生前期の土器は、もっぱら黒褐色土中から奈良時代の遺物とともに出土している。調査区一帯が微高地上に位置するために黄色砂に覆われなかったのか、あるいは覆われたとしても薄いために流出してしまったと推測され、その結果として、奈良時代において弥生前期の遺物包含層が地表面として攪拌されたのだろう。

3 縄文・弥生時代の遺跡

(1) 遺 構 (図版5, 図5・6・12)

弥生前期以前の遺構と遺物は、黒褐色土層のひろがりとおおむね対応するように、調査区の東南部を中心に確認された。ただし、同層が完全に削平されている西南部でも遺構が存在するほか、土器の出土点数も比較的多い(図5)。遺物の希薄な調査区北半については、古代以降の削平や破壊があったとしても、本来的にこの時代の遺跡の中心からはずれていた可能性が高い。

遺構としては、弥生前期の壺が横倒しになって出土した土坑SK9・13がみつかるほか、調査区東南部を中心に黒褐色土の不定形な浅い落ち込みが多数ある。そのうちいくつかは奈良時代のものであったが、輪郭が明瞭で弥生前期以前の土器のみがまとまって出土したものにSK14・15がある。以上の遺構の位置関係は、古代の遺構と合わせて図12に示した。層位で述べたように、本来的に弥生前期の包含層であった黒褐色土が奈良時代に攪拌された結果、両時代の遺構が入り交じるような状況をもたらしたのだろう。

SK9は、上面の削平と破壊により輪郭が曖昧だが、東西1m南北50cm程度の楕円形土坑であったとみられる。埋土は淡褐色の粘質土で、出土した壺I29は、口縁側を西に向けて横倒しとなり、頸部より下の部分のうち7割程度が残っていた(図版5-3)。横位に埋置されていた壺が、上面を削平された結果だろう。

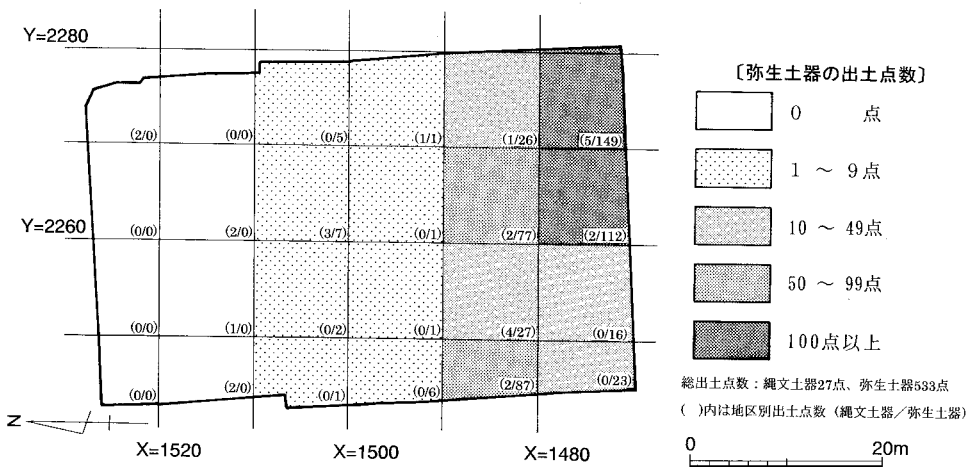


図5 縄文・弥生土器の地区別出土点数 縮尺1/800

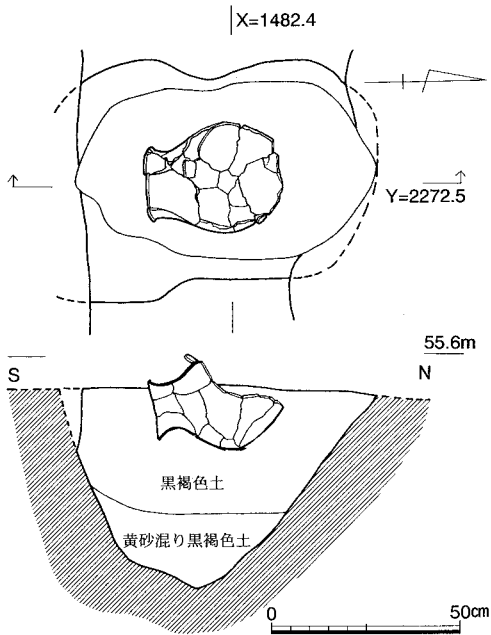


図6 土坑SK13土器出土状況 縮尺1/20

SK13も、同様な楕円形土坑で、南北70cm東西50cm深さ60cm程度が残存している。埋土は黒褐色の砂質土で、上層から出土した壺I28は、口縁側を南に向け、胴部最大径部付近から底部にかけてを欠いていた(図版5-1, 図6)。やはり横位に埋置したものが削平された状態とみられる。壺内および土坑内の埋土はすべて水洗したが、このほかに遺物は確認されなかった。SK14は、直径50cm程度の円形土坑で、壺胴部の大破片I26が出土した。SK15は、平面約2m四方で深さ60cm前後をはかる方形の落ち込みで、滋賀里Ⅲb式と遠賀川式の土器破片が多く出土した。以上のうち、SK9・13は土器棺墓、SK14もその残存であった可能性がある。

(2) 遺物 (図版7~10, 図7~11)

本調査区からは、縄文土器が27点、弥生前期の土器が533点(条痕文土器2点を含む)、が出土した。このうち、図化可能な口縁部と底部および有文破片のほとんどを呈示した。弥生時代の遺構から出土したのは、SK9(I29・I37・I44・I87), SK13(I28), SK14(I26・I88・I96), SK15(I9・I15・I39・I49・I86・I89)のみであり、それ以外は包含層および後世の遺構埋土からの出土であるが、全体で時期的に良くまとまっているとみられるので、遺構単位ではなく器種や部位毎にまとめて説明する。なお、石器は、頁岩の剥片が9点出土したのみで製品は無く、ここでは省略する。

縄文土器 (I1~I11) I1は縄文前期土器の雰囲気がかがわれる破片。器壁が非常に薄手で、胎土中に角閃石を多く含む。かなり摩滅しており、外面にLR縄文がわずかに認められる。I2~I6は縄文後期ごろとみられる有文土器。I2は、外面にLR縄文を施文した口縁部片で、口唇部は丸い。胎土中に角閃石や雲母を多く含む。I3は、外面に1条の細い沈線と、その下側に細く鋭い条痕が横位にみられる口縁部片。黒色を呈し、口唇部から内面にかけては丁寧に磨いている。I4はLR縄文地に沈線施文、I5は逆に沈線施文後にRL縄文を充填している胴部の破片。I6は、浅く幅の広い沈線施文のみ。

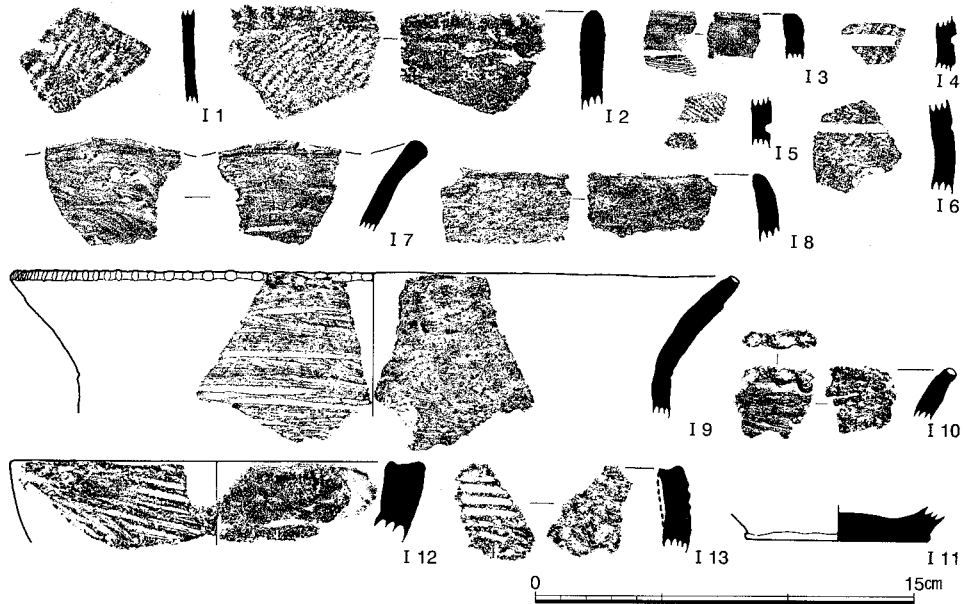


図7 縄文・弥生時代の遺物(1) (I 1～I 11縄文土器, I 12・I 13条痕文土器) 縮尺1/3

I 7の口縁部片は、黒色を呈し、外面は撫で、内面は磨いている。晩期精製浅鉢の、ゆるやかな波状口縁の頂部となる可能性がある。I 8は粗製深鉢の口縁部。内外面とも撫で調整で口唇部は丸い。I 9・I 10はともに口唇部にO字状の刻みを施しており、滋賀里Ⅲb式の深鉢口縁であろう。I 9の外面には横位の粗い条痕調整がみられる。I 11の底部は、こうした深鉢にともなうものであろう。

条痕文土器 (I 12・I 13) 石英砂粒を多く含む胎土で、器壁が厚く、外面を条痕調整する口縁部破片が2点出土している。I 12は、口縁がほぼ直立する浅い鉢形になるとみられ、外面は条溝の幅が2mm程度の浅い斜位条痕、内面は撫で、口唇部は指で強く押さえられて凹む。黄白色を呈する。I 13は、口縁がやや内湾する器形となるようで、外面の口縁付近に条溝幅2mm程度で断面半円形の横位条痕が深く施される。内面は幅広く器面が剥落し、本来は口縁部付近が内側に肥厚していた可能性がある。これらは、少なくとも近畿地方の縄文晩期・弥生前期の土器とは特徴が大きく異なる。ここでは、伊勢湾地方の弥生前期～中期初頭の条痕文土器で、一般に「内傾口縁土器」と呼ばれているものの範疇で捉えておきたい。同種の土器は、西南100mのA Q 23区で出土している〔宇野・岡田79〕。

弥生土器 (I 14～I 115) いわゆる遠賀川式土器。特徴的な個体を中心に説明する。

縄文・弥生時代の遺跡

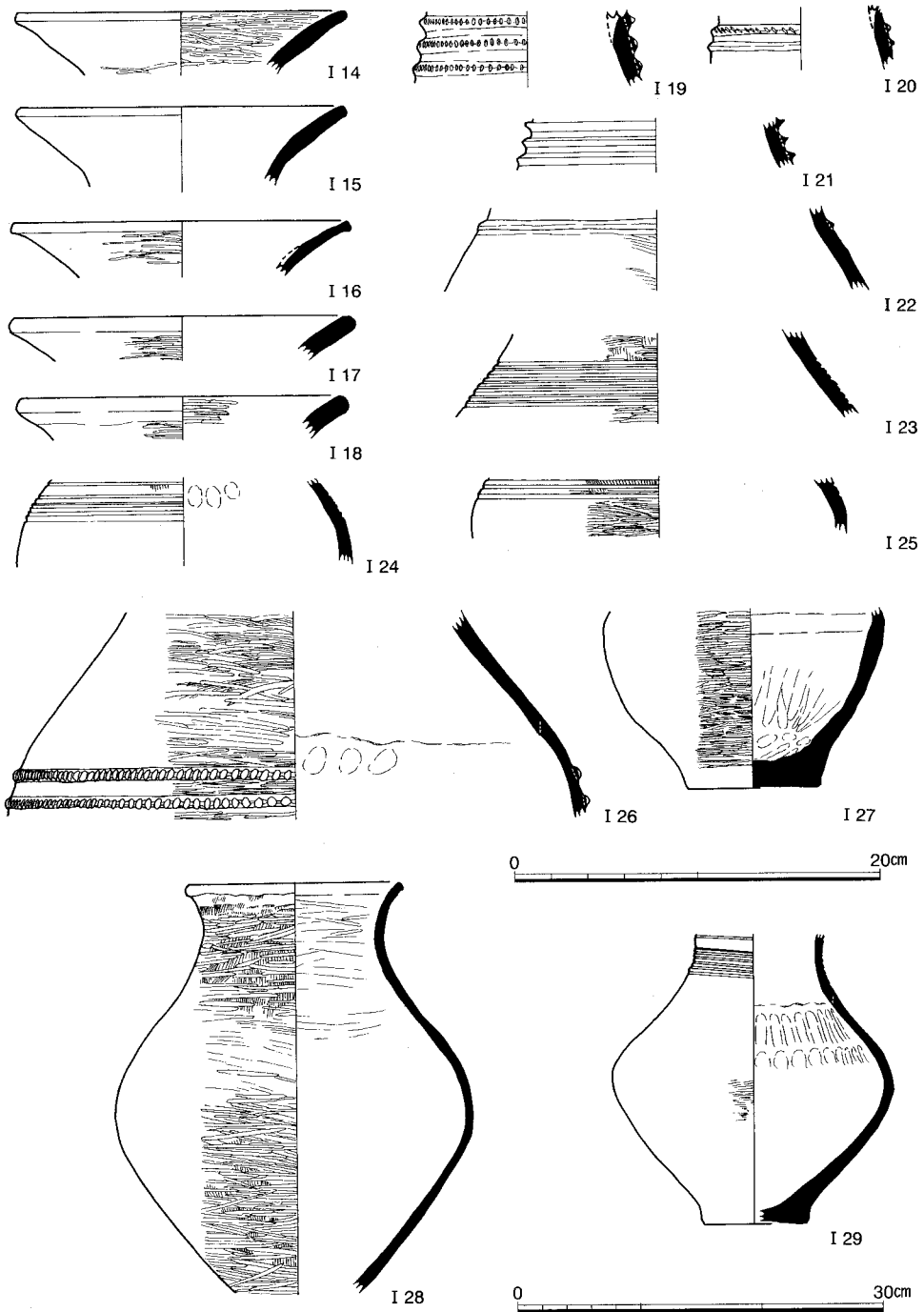


図8 縄文・弥生時代の遺物(2) (I 14~I 29弥生土器) I 14~I 27縮尺1/4, I 28・I 29縮尺1/6

京都大学総合人間学部構内A R25区の発掘調査



図9 縄文・弥生時代の遺物(3) (I 30~ I 70弥生土器) 縮尺1/3

縄文・弥生時代の遺跡

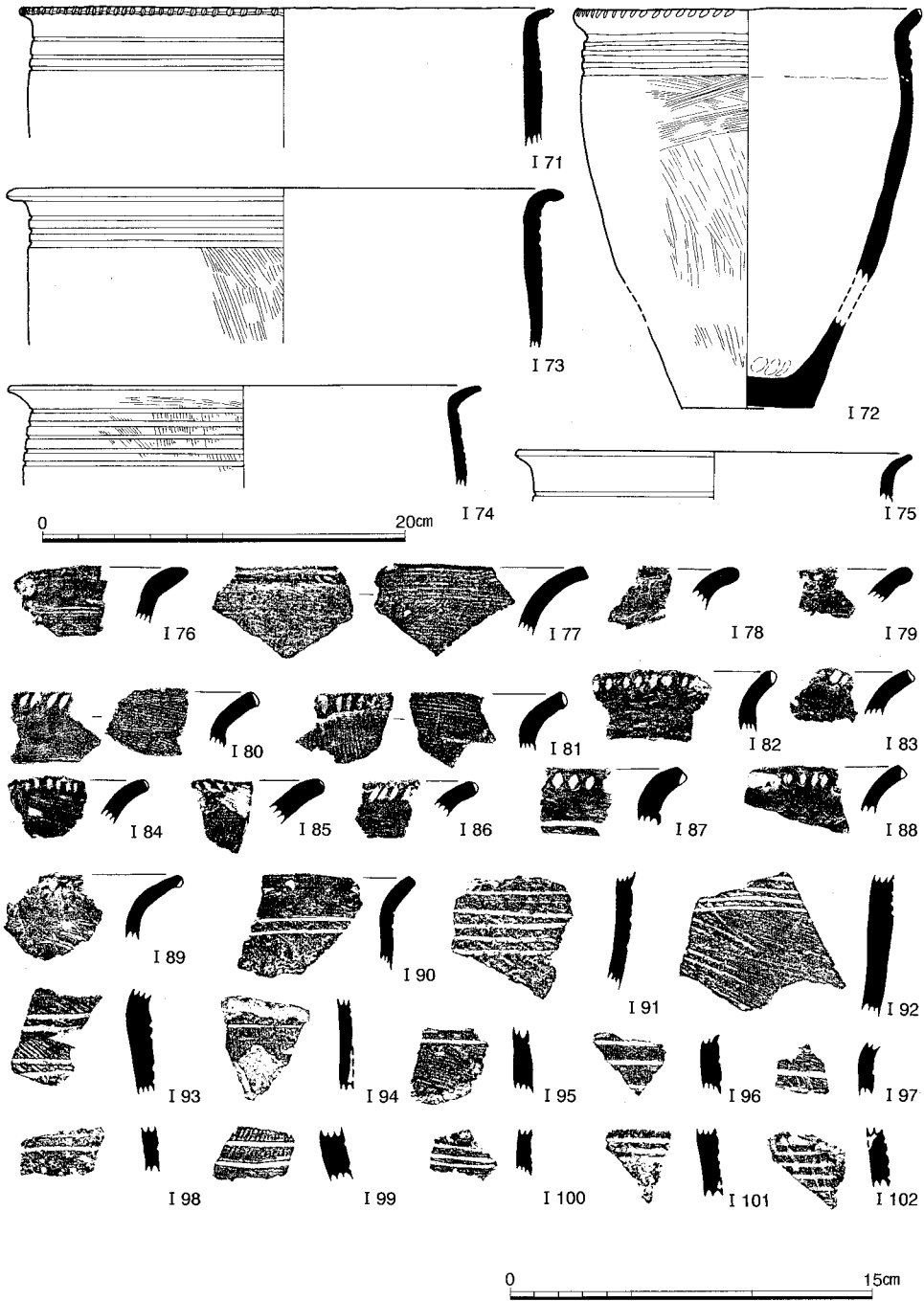


図10 縄文・弥生時代の遺物(4) (I 71~ I 102弥生土器) I 71~ I 75縮尺1/4, I 76~ I 102縮尺1/3

I 14～I 70は壺。いずれも器表面を良く磨いている。I 14～I 18・I 30・I 31は口縁部の破片で、強く外反するものが目立つ。I 30は口唇部に沈線を、I 31は同所に刻みを施している。I 19～I 26・I 33～I 70は頸部や胴部の破片。I 23～I 25・I 33～I 52は篋描沈線で、I 19～I 22・I 26・I 53～I 70は貼付突帯で飾るものだが、ともに多条化の傾向が顕著にみられる。I 26はS K 14出土の大破片であり、強く張る胴部に2条まで貼付突帯が確認できる。I 57は、非常に細い紐状の貼付突帯で、その上に微細な篋刻みが施される。I 64は貼付突帯に先行する下書きの篋描沈線があり、また突帯上のO字状押捺には布目痕が認められる。I 65もO字状の押捺を連ねるものだが、通有のものとは趣が異なる。I 27は小型の壺の胴部下半。外面は底部付近まで全面を密に横位の篋磨きし、内面は縦位方向中心に強く撫でつけられているほか、底部には指頭圧痕が著しい。I 28はS K 13からの単独出土品で、恐らく土器棺として用いられたものだろう。口縁があまり外反しない器形で、装飾は無く、外面は全面を縦位の刷毛調整の後に横位に篋磨きするのを基本としているが、胴部上半のみ撫でて消したような部分が带状に残される。精良な胎土で、黄褐色を呈する。I 29はS K 9の出土品で、これも土器棺であった可能性が高い。外面は荒れていて、一部に刷毛調整が確認できるのみ。頸部の篋描沈線は、多条のものが2帯以上になるようで、6条のもの1帯の上方にやや間隔をあけてさらに1条施されているところまで把握できる。内面には黒色のタール状付着物が広い範囲に認められる。I 32は、直口壺の口縁部分か、あるいはそのままコップ状の器形になるものか、いずれにしろ前期としては類例をみない器形。口唇部は撫でて面取りしている。外面の篋描沈線施文、胎土や色調などの雰囲気は遠賀川式土器と同じであり、前期に属するものとみて差し支えない。

I 71～I 102は甕。口縁部は「く」字状に短く外折し、口唇をV字やO字状に刻む通例のあり方のものが中心だが、刻みを施さないものも一定量存在する。沈線は5条までのものが確認できる。使用の痕跡とみられる黒色の付着物は、おおむね内外面ともにみられる。I 72は、外面の上半に横位の、下半に縦位の細密な条線が残されており、撫で調整に近い処理が行われている。I 73は口縁が強く巻くように外反し、刻みをもたない。I 75・I 77・I 87・I 88・I 90は口唇部を面取りするもので、I 87はその下端部に刻みを入れる。

I 103～I 115は底部。I 103～I 108は壺の底部で、外面を横位の篋磨きや撫でを中心に調整している。I 109～I 115は甕の底部で、斜め上方にまっすぐに器体が立ち上がり、外面は縦位の刷毛調整している。

以上は、壺の口縁の強い外反、篋描沈線の多条化といった特徴をもつことから、明らか

縄文・弥生時代の遺跡

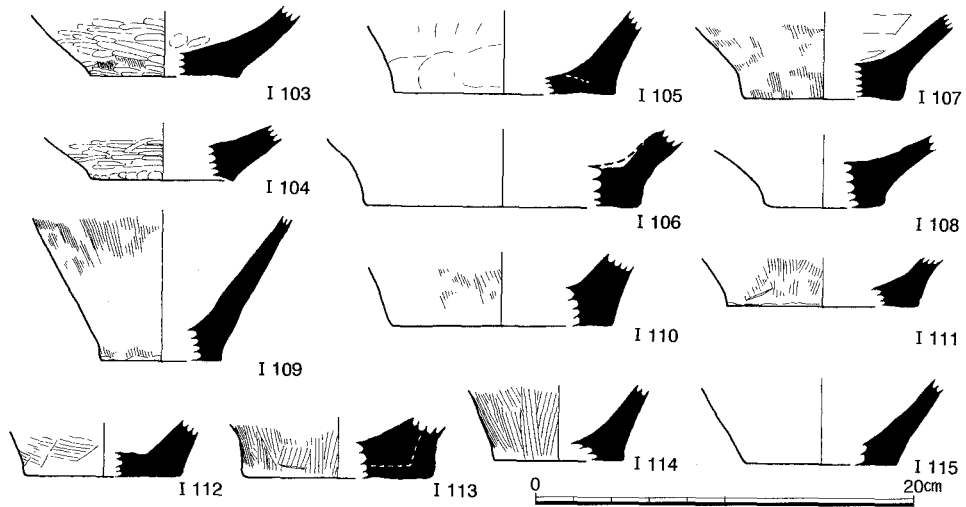


図11 縄文・弥生時代の遺物(5) (I 103～ I 115弥生土器) 縮尺1/4

に前期新段階に位置づけられるものである。本調査区の出土品は、このほかに、貼付突帯が多条化している点や、I 29やI 93にみられるように多条の沈線文帯が複数帯化している点に注意され、新段階でもより新しい時期に属するものといえる。

4 古墳時代・古代の遺跡

(1) 遺 構 (図版3・5, 図12)

古墳時代については、遺構は確認されなかったが、5～6世紀代を中心とする遺物が少量出土している。古代の遺構には、奈良時代と、平安時代後半期のものがある(図12)。以下、時代順に説明する。

奈良時代の遺構 小規模な溝と、大小さまざまな規模の土坑が多数ある。いずれも黒褐色土を埋土としており、出土する土師器から8世紀中葉に比定される。遺構の密度や遺物の出土量は、黒褐色土の堆積している東南部で高くなる傾向がみられる。ただし、調査区北半では後世の削平や破壊が著しいこと、にもかかわらず少ないながらも遺構が存在することを考慮すると、本来的には全域にこの時代の遺跡が広がっていたものと想定される。

南北方向の溝S D60は、南流するように掘られ、幅80cm前後深さ最大で20cmをはかる断面U字形の溝。北端は浅くなって消滅しているが、削平された可能性が高い。東西方向の溝S D25・62は、それぞれ蛇行しつつ平行して東流する、幅50cm深さ30cm程度の断面U字形の小溝。西側は中世以降の破壊により不明。東端で南北方向の溝S D63と直交している

が、埋土は全く同一で、ともに奈良時代の遺物を含むため先後関係は不明。これらの奈良時代の溝は、後世の遺構と異なり方位を無視して蛇行気味にはしることがおおきな特徴となっている。また、出土する遺物は少ない。

土坑SK5は、一辺80cm程度の方形の土坑で、SD25に接するようであるが、切り合い関係は不明。出土した須恵器がやや新しい様相を示しているため、9世紀代に下る可能性もある。SK10・11はともに小規模な土器溜で、土器のほかには礫もまじえる。検出時には掘形ははっきりしなかったが、下層に円形の小土坑が確認できた(図版5-6)。SK12は、一辺60cm程度の方形土坑だが、東半は攪乱に壊される。遺物は、半分程度残る須恵器の杯I138が上面から出土したのみである。SK16・17は、SD53やSD56に破壊され輪郭がはっきりしなかったが、残りの良い遺物がややまとまって出土したため、その範囲を土坑と認定した。このほかに調査区東南部には、黒褐色土の不定形な浅い落ち込みが多数ある。また、北調査区では、円形の小ピットSP1・3・5・14があり、黒褐色の埋土中から炭化物や土師器の細片が出土している。性格は不明だが、建物や柵列の柱穴となるピット群であった可能性もある。

平安時代の遺構 東西・南北方向にはしる大小の溝群が中心となる。おおむね10世紀中葉と11世紀前葉の2時期に大別される。ともに茶褐色土を埋土とするが、前者の遺構のなかには、黒褐色土に近い色調の埋土のものもみられる。

10世紀中葉の遺構には、SD12・13・16・24・56・61、SK6・8がある。溝については、いずれも方位を真北からやや西に振っていることを特徴としている。SD12は、調査区北端をはしる断面U字形の東西溝で、幅1.6m以上、深さ70cmあまりをはかる。東方は攪乱に破壊され、直交したであろうSD13・16との関係は不明である。SD13とSD16は心間距離が4mで平行してはしる南北溝。SD13は、幅80cm深さ20cm前後の浅い溝。SD16は、中世の溝SD17に東側を切られるものの、幅2.5m深さ60~80cmをはかり、南へ向かうほど深くなる。ともに南への延長は大溝SD11によって切られてしまい不明だが、それを越えた南側には続いている。SD24は、調査区北西隅にある南北溝で、周囲を大きく攪乱に破壊された状態でみつかった。溝底は2条に分かれ、幅1.5m深さ50cm程度をはかる。SD56は、X=1485付近より蛇行しながら南へはしるが、調査区南端付近ではSD53をはじめ多数の遺構と切り合い輪郭がはっきりしない。基本形は幅2m深さ80cm程度の断面U字形である。SD61は、幅60cm深さ20cm程度の浅い東西溝。SK6は、このSD61の北側に接してある不定形な落ち込み。広い範囲に10世紀中葉の遺物を含む茶褐色土が

古墳時代・古代の遺跡

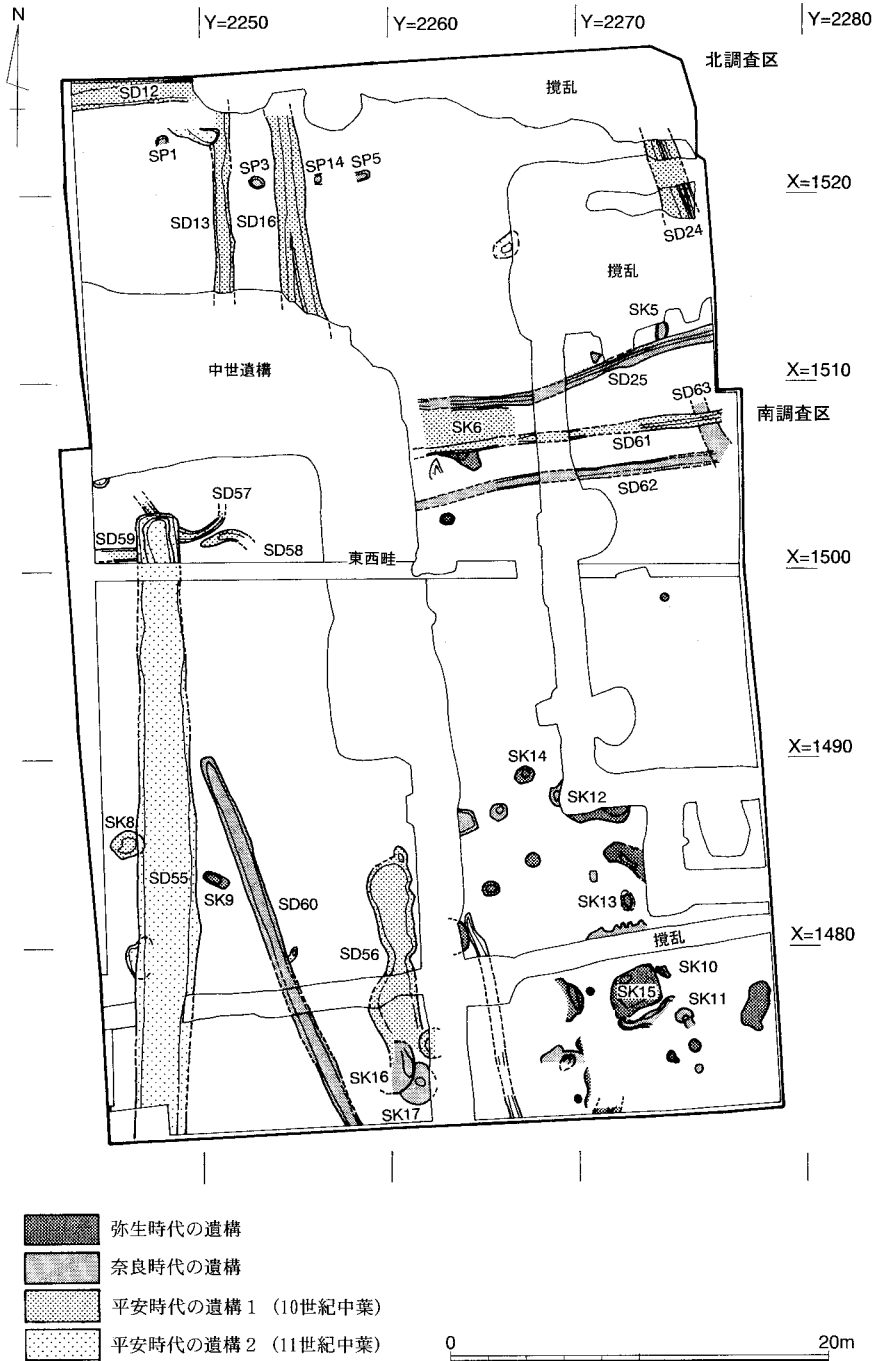


図12 古代以前の遺構 縮尺1/400

落ち込んでいたが、全体の輪郭ははっきりしない。SK 8は瓦溜で、径1 mあまりの浅い土坑に少量の古代の平瓦のみがまとまっていた。ただし、瓦はいずれも小片でやや摩滅しており、後世の2次的な堆積の可能性もある（図版5-4）。

11世紀前葉の遺構には、やや東に振れる方位ではしる南北方向の大溝SD55がある。断面逆台形で、検出面で幅約3 m、南方ほど深く掘られ、調査区南端では深さ80cmをはかる。X=1502付近で立ち上り、北へは続かない。土師器皿類を中心に多くの遺物が出土した。

(2) 遺物（図版10~12、表1・図13~17）

古墳時代の遺物（I 116~I 122） 遺構にともなうものはないが、須恵器片（I 116~I 120）と形象埴輪の破片（I 121・I 122）が出土している。I 116は甗の胴部破片で、凹線に挟まれて板状工具端面の刺突列が1帯めぐり、下半は回転篋削り調整されている。陶邑編年のTK23~TK47型式に相当するものであろう。I 117は壺の口縁部とみられ、外面の口縁下に断面三角形の突帯がめぐっている。I 118~I 120は外面に櫛描波状文がみられる口縁部の破片で、器台や壺となるものであろう。I 121の形象埴輪片は、砂粒を多く含む胎土で、表側に梯子状のモチーフが線刻され、端面は斜めに面をもつ。家形埴輪の

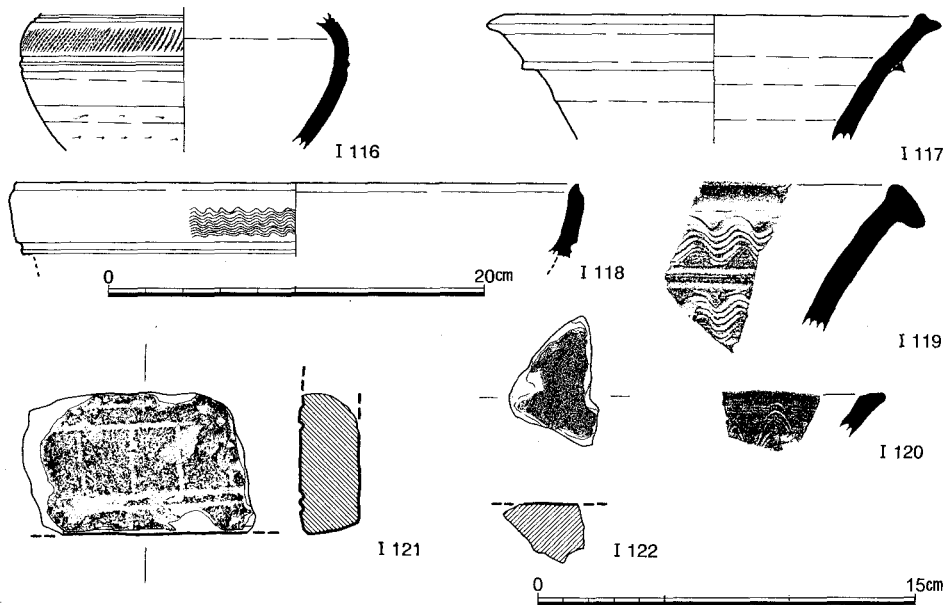


図13 古墳時代の遺物（I 116~I 120須恵器，I 121・I 122埴輪）
I 116~I 118縮尺1/4，I 119~I 122縮尺1/3

古墳時代・古代の遺跡

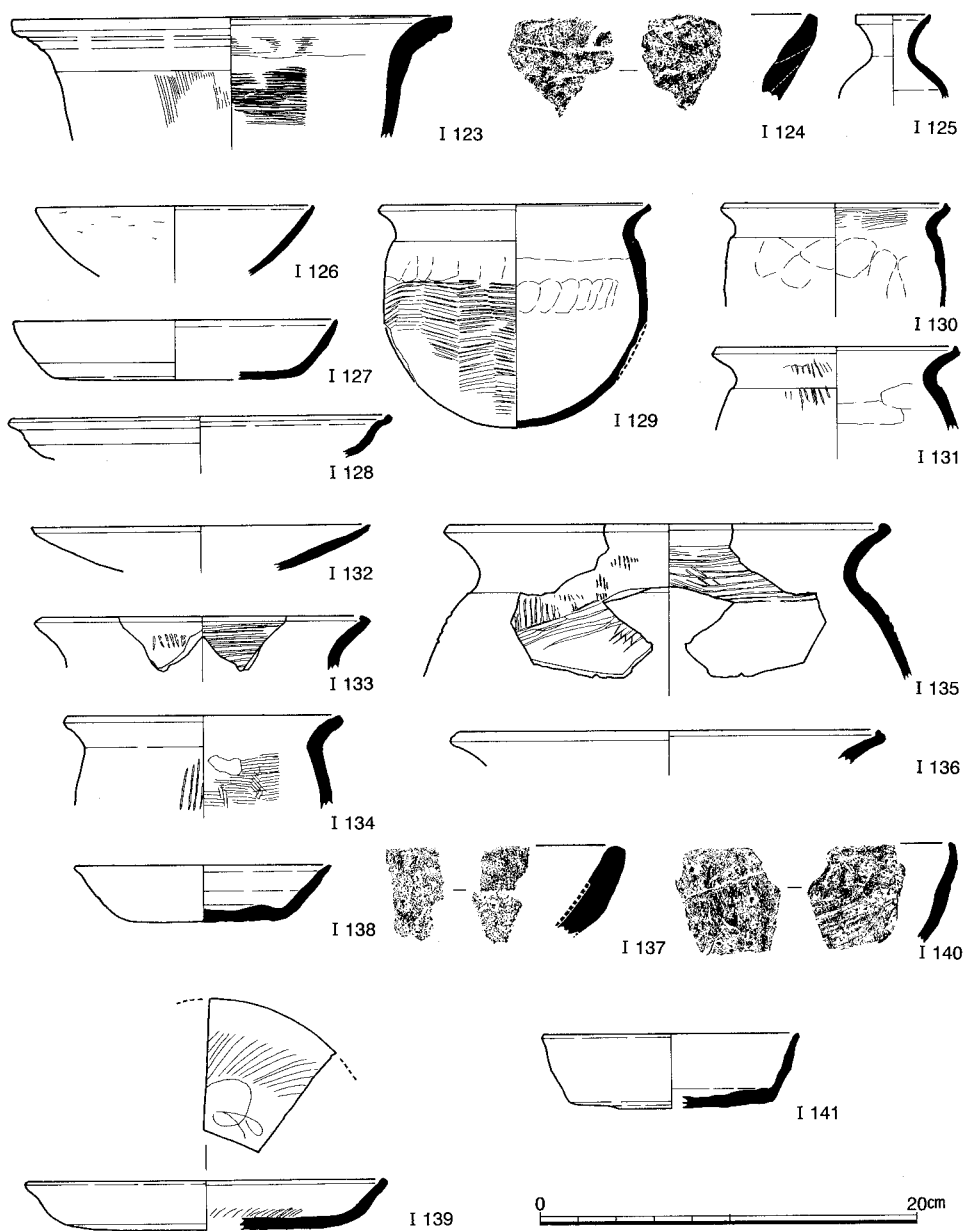


図14 SK 5出土遺物 (I 123・I 124土師器, I 125須恵器), SK 10出土遺物 (I 126~I 131土師器), SK 11出土遺物 (I 132~I 137土師器), SK 12出土遺物 (I 138須恵器), SK 16出土遺物 (I 139土師器), SK 17出土遺物 (I 140土師器, I 141須恵器)

軒先の部分だろう。I 122も同種の胎土をもつ無文の小破片で、残存する表面に赤彩が認められる。以上の古墳時代の遺物は、須恵器が6世紀初頭ごろに比定され、家形埴輪は5世紀代のものとみられる。

奈良時代の遺物（I 123～I 151） 総量で整理箱3箱分程度の土器が、遺構や黒褐色土中から出土している。それぞれ様相が似ているため、まとめて説明する。種類別では、土師器の杯・碗・皿類が最も多く、甕がこれに次ぎ、製塩土器や須恵器が少量ともなう。

杯や皿には暗文が顕著なものがある。I 148は内面に斜放射文帯とその上下に螺旋文がめぐり、外面は杯部に横位の暗文状の細い磨きが施され、底部を篋削りしている。I 139では調整・装飾ともこれより明らかに簡略化され、内面上側の螺旋文や外面の磨きが省略されている。I 144・I 145は底が深く直線的に立ち上がる器形で、暗文はなく、内面は撫で調整、外面は篋削りのち磨く。外面の色調は黒色を呈している。そのほかの個体は、おおむね底部篋削りでそれ以外を撫で調整、という仕上げ方にしている。

甕には、口径12～15cm程度の小型品と25～30cmの大型品がある。いずれも口縁端部は小

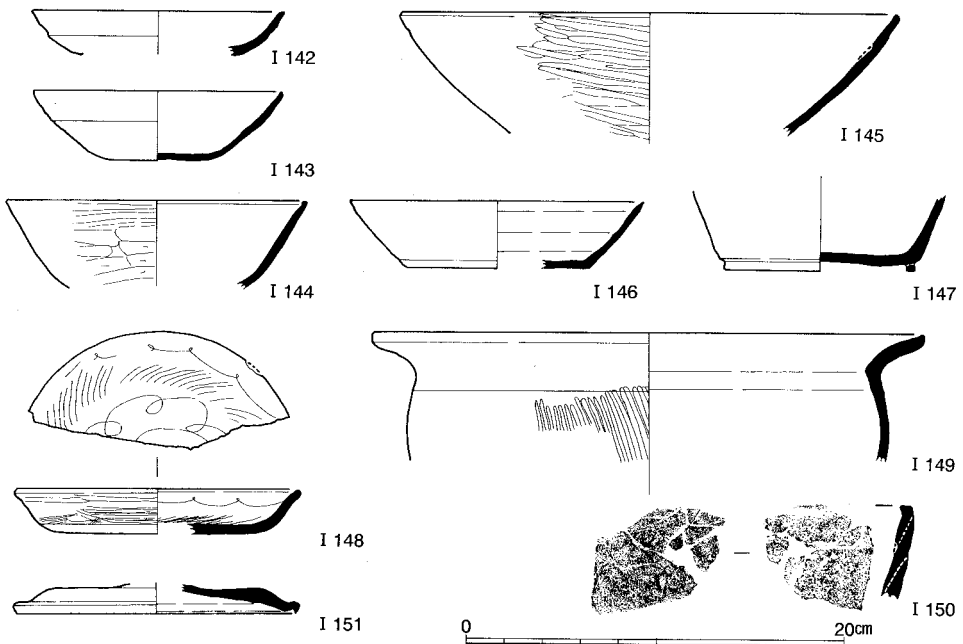


図15 S D25出土遺物（I 142土師器）、S D60出土遺物（I 143～I 145土師器、I 146・I 147須恵器）、S D62出土遺物（I 148土師器）、黒褐色土出土遺物（I 149・I 150土師器、I 151須恵器）

さく内側に巻き込む形状で、外面の調整には横位の叩き（I 129）、刷毛（I 135・I 149）、撫で（I 130）の各種がみられる。器形の判明するI 129は薄い器壁の丸底を呈し、外面は火を受けて黒変と剥離が著しい。一方、I 123はこれらと特徴が大きく異なり、厚手で強く外反する口縁部を強く横に撫で、胴部が張らない器形を呈している。

製塩土器は、やや厚手（I 124・I 137）と薄手（I 140・I 150）がある。いずれも砂粒を多量に含む胎土で、内外面とも雑に撫で調整し、粘土紐の積み上げ痕が残されている。ただし、I 137は口唇部を弱く面取りするなどやや趣が異なる。

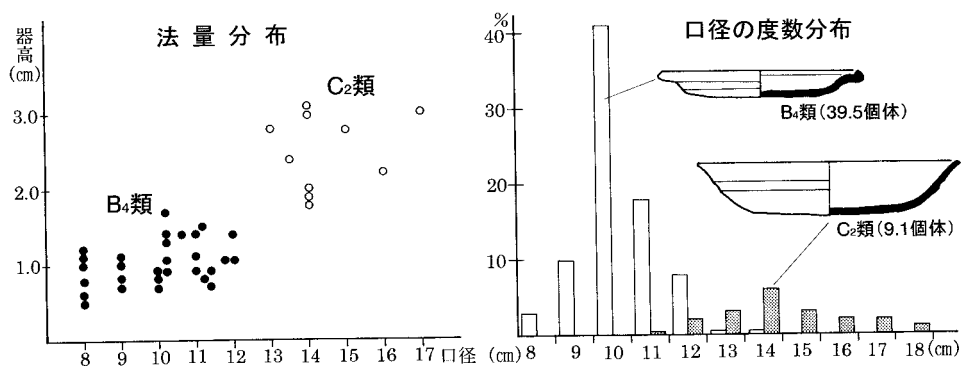
須恵器では、杯A（I 138・I 141・I 146）が多く、ほかに杯B（I 147）、蓋（I 151）、小型壺（I 125）がある。杯Aは、口径は13～15cm、器高3～4cmに収まる。いずれも焼成はやや甘く暗灰色を呈し、底部の回転範削り痕が撫で消し不十分で残る。杯Bは、焼成堅緻で青灰色を呈し、底部は丁寧に撫で調整される。小型壺は、器形からみて時期が下るものである可能性が高い。

以上の土器群は、土師器の暗文に平城宮Ⅱ期およびⅢ期双方の特徴が認められることや〔奈文研76〕、形態や法量などの諸特徴からみて、一部に時期が下る個体を含みながらも、ほぼ8世紀中葉を中心とした時期に帰属するものだろう。

平安時代の遺物（I 152～I 230） 総量で整理箱に10箱程度の遺物が、南北方向の溝S D55を中心にまとまって出土している。瓦類については、中世のものとあわせて第6節でまとめて報告するので、ここではそれ以外について述べる。

I 152～I 190はS D55出土遺物。土師器皿類がまとまっており、1/12以上の破片を対象とした口縁部計測法で、「て」字状口縁手法の末期的な形態であるB₄類が39.5個体、2段撫で手法のC₂類が9.1個体ある（表1）。小型の皿B₄類（I 152～I 170）は、外反する口

表1 S D55出土土師器の計測結果（口縁部計測法による）



京都大学総合人間学部構内A R 25区の発掘調査

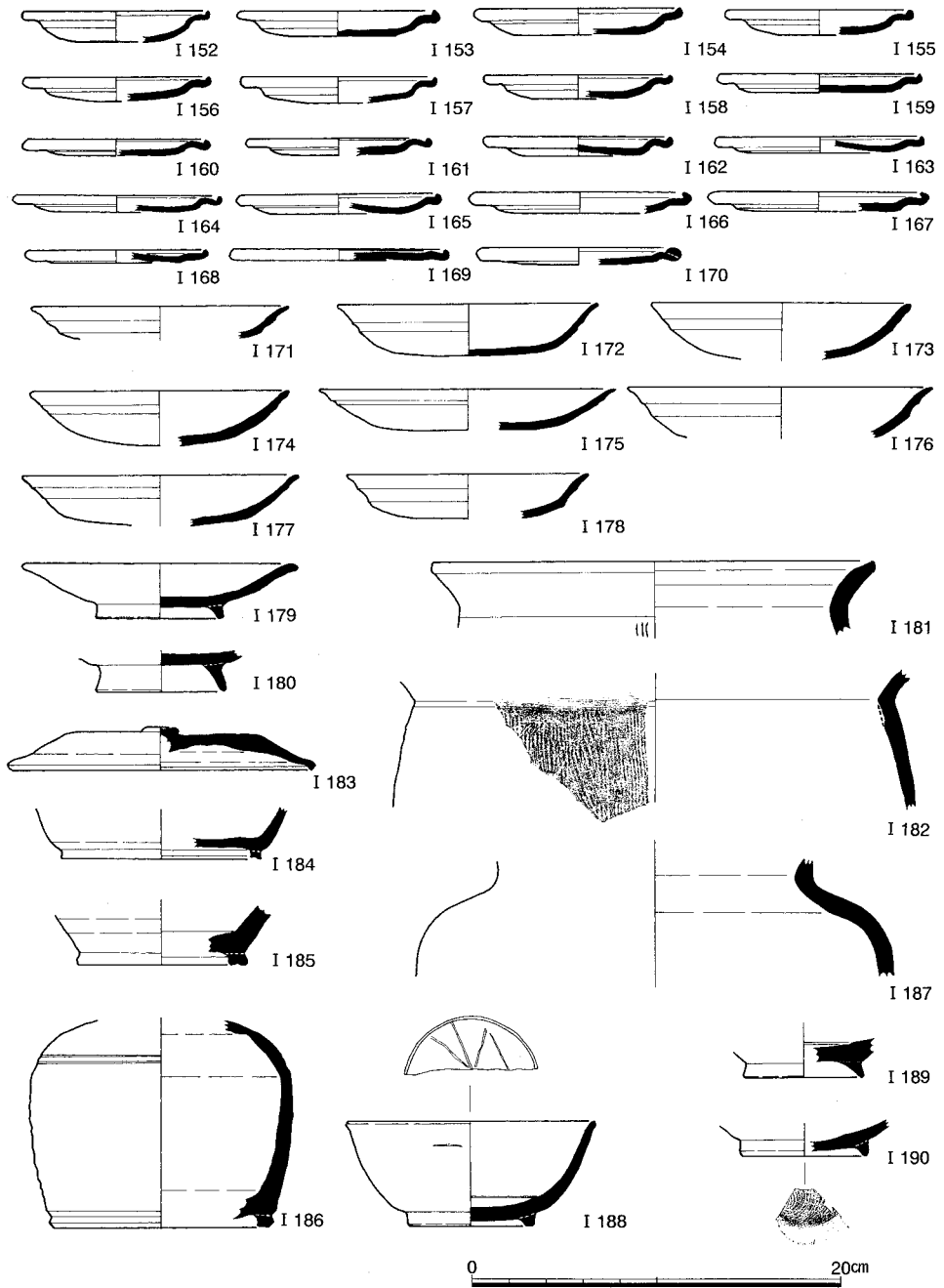


図16 S D55出土遺物 (I 152~ I 182土師器, I 183~ I 187須恵器, I 188・I 189緑釉陶器, I 190灰釉陶器)

古墳時代・古代の遺跡

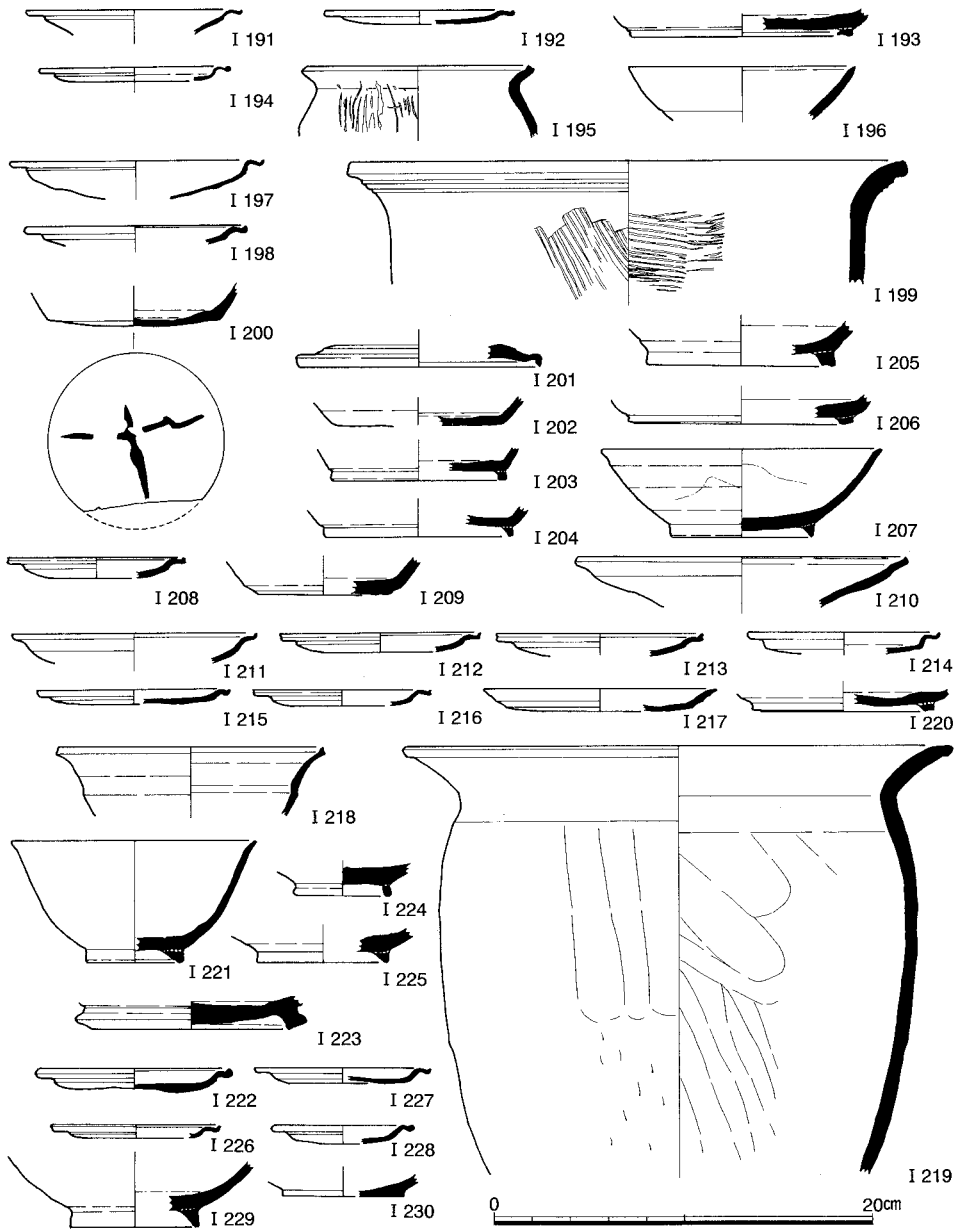


図17 S D12出土遺物 (I 191・I 192土師器, I 193須恵器), S D13出土遺物 (I 194・I 195土師器, I 196灰釉陶器), S D16出土遺物 (I 197～I 199土師器, I 200～I 206須恵器, I 207灰釉陶器), S D24出土遺物 (I 208土師器, I 209須恵器), S D56出土遺物 (I 210～I 219土師器, I 220須恵器, I 221緑釉陶器), S D61出土遺物 (I 222土師器), S K 6出土遺物 (I 223須恵器, I 224・I 225灰釉陶器), S K 8出土遺物 (I 226土師器), 茶褐色土出土遺物 (I 227・I 228土師器, I 229灰釉陶器, I 230緑釉陶器)

緑の端部を上方や内側へ短く肥厚させる器形で、口径10cm前後器高1cm前後を中心とするが、I 168～I 170のように、扁平なコースター状を呈するものも含まれる。大型の皿C₂類（I 171～I 178）では、口径14cmを中心としながらややばらつきがある。I 179は高台付きの皿で、赤褐色を呈し、口縁と底部とも回転撫で調整で仕上げられる。I 180は、黄白色を呈し、やや丈高の高台であるが、皿の底部であろう。ともに搬入品の可能性がある。I 181・I 182は土師器甕。I 183～I 187は須恵器で、I 183は蓋、I 184は杯B、I 185～I 187は壺の底部や胴部。I 186・I 187は、外面に淡緑色の自然釉が付着する。I 188・I 189は近江産の緑釉陶器椀で、黄白色の胎土に濃緑色の釉がかかる。ともに貼付高台で、見込みに1条の圏線をもち、I 188では放射状の沈線文様も認められる。I 190は灰釉陶器椀の底部で、高台の内側には回転糸切り痕が残る。また内面には朱が付着している。以上の土器群は、土師器皿類の内容が京都大学構内遺跡での平安京Ⅲ期古段階に相当し、平安京域での編年ではⅣ期古段階、実年代では11世紀前葉に位置づけられる〔小森・上村96〕。緑釉陶器などの特徴もこうした年代観と矛盾しない。

I 191～I 222は、S D 12・13・16・24・56・61出土遺物。いずれも、土師器皿類では「て」字状口縁手法B₃類が多数を占め、これに若干のB₂類（I 191・I 198・I 211）がともなう構成で、2段撫で手法C₂類は1点のみS D 56から出土している（I 217）。こうした内容から、これら各遺構出土遺物はおおむね10世紀中葉を中心とした時期に比定できよう。以下に説明する土師器皿類以外の特徴的なものも、おおむねこの年代観と矛盾しない。I 200は、焼成が不十分で灰色を呈する須恵器杯Aで、底部に薄く「十」字形の墨書が認められる。I 207は灰釉陶器椀で、漬け掛けにより厚く施釉されている。I 218は黄白色の精良な胎土をもつ土師器で、胴部で稜をもちながら大きく外反する口縁部片。端部は上方に短く肥厚する。器種は不明。I 219は土師器の長胴甕上半部。口縁部は横撫で、胴部の外面は下半を縦位に篋削りした後上半を撫でて仕上げ、内面は斜位や縦位に撫でつけている。なお外面には下半に薄墨状の付着物がみられる。I 221は近江産緑釉陶器の椀で、白色の胎土に光沢のある濃緑色の釉がかかるが、剥落が著しい。

I 223～I 225はS K 6、I 226はS K 8、I 227～I 230は茶褐色土出土遺物。I 223は須恵器で、おおぶりの高台が付くことから壺の底部だろう。I 224・I 225は灰釉陶器の底部で、I 224は内面に淡緑色の釉が刷毛塗りされる。I 226～I 228は土師器皿B₃類。I 229は灰釉陶器椀で、丈高の高台が付き、内外とも淡灰色の釉が刷毛塗りされる。I 230は緑釉陶器底部で、円盤状の平高台をもち、白色の胎土に淡い黄緑色の釉が全面に施される。

5 中世の遺跡

(1) 遺構 (図版2・4・6, 図18・19)

中世の遺構には、おおむね鎌倉時代に相当する12世紀後葉～13世紀前半代のものと、室町時代に相当する14・15世紀代のものとに大別できる。いずれも茶褐色土を埋土とし、黒褐色土や黄褐色砂層の上面で検出した。またこのほかに、詳細な時期は特定できないが、耕作や植栽の痕跡とみられる畝溝群や不定形土坑がみつまっている。

鎌倉時代の遺構 北調査区を中心として、わずかに方位を西へ振る南北および東西方向の溝がみつまっている。

南北溝は、Y=2260付近に大小さまざまな規模のものが集中している。SD19は、このうちの最も規模が大きいもので、検出面での幅1.4m、深さ40cmをはかる。底面では2条にわかれており、掘り直しをされているか、2条の溝が切り合っている可能性もあるが、埋土の断面からは確認できなかった。X=1510以南は後世の段差の造成で大きく破壊され、東西畦付近で検出できなくなる。出土遺物から中世京都I期中段階に比定される。SD17・18・20～22は、これと並行してはしる小溝群。うちSD17は、平安時代の溝SD16の東肩を切っただけで、幅80cm深さ30cmとやや規模が大きい。SD18・20～22は、いずれも幅30cm弱深さ20cm程度の細く浅い溝。それぞれ途中で立ち上がるようで、南や北へ続かない。遺物は微量しか出土していないが、おおむねSD19と同時期とみられる。

東西溝は、X=1508付近をはしるSD33のみ。断面は逆台形を呈し、検出面での幅1.8m深さは80cmをはかるが、中世後半に削平されているため本来はもっと大規模だったはずである。南北溝SD19と直交するような位置でたちあがり、東へは続かない。SD33の底面はSD19の底面よりおよそ80cm低い位置にあること、また、出土遺物から中世京都I期古段階を下らない時期に比定できることから、この東西溝SD33が先行して存在し、その埋没後にSD19など南北溝が掘削された可能性が高い。

SD66は、調査区西壁際でみつかった落ち込みで、遺構の大半が調査区外になり、性格不明。さしあたり溝の東端部として処理したが、土坑の可能性もある。平安京IV期中段階の資料が出土している。

室町時代の遺構 14世紀の石組井戸、15世紀の濠状の大溝、不定形土坑などがある。

井戸SE5は、隅丸方形に石組みした井戸(図19)。およそ3.5m四方の隅丸方形の掘形をもち、残存する深さは3mであるが、上部が攪乱で破壊されていたため本来は4m以上

京都大学総合人間学部構内A R 25区の発掘調査

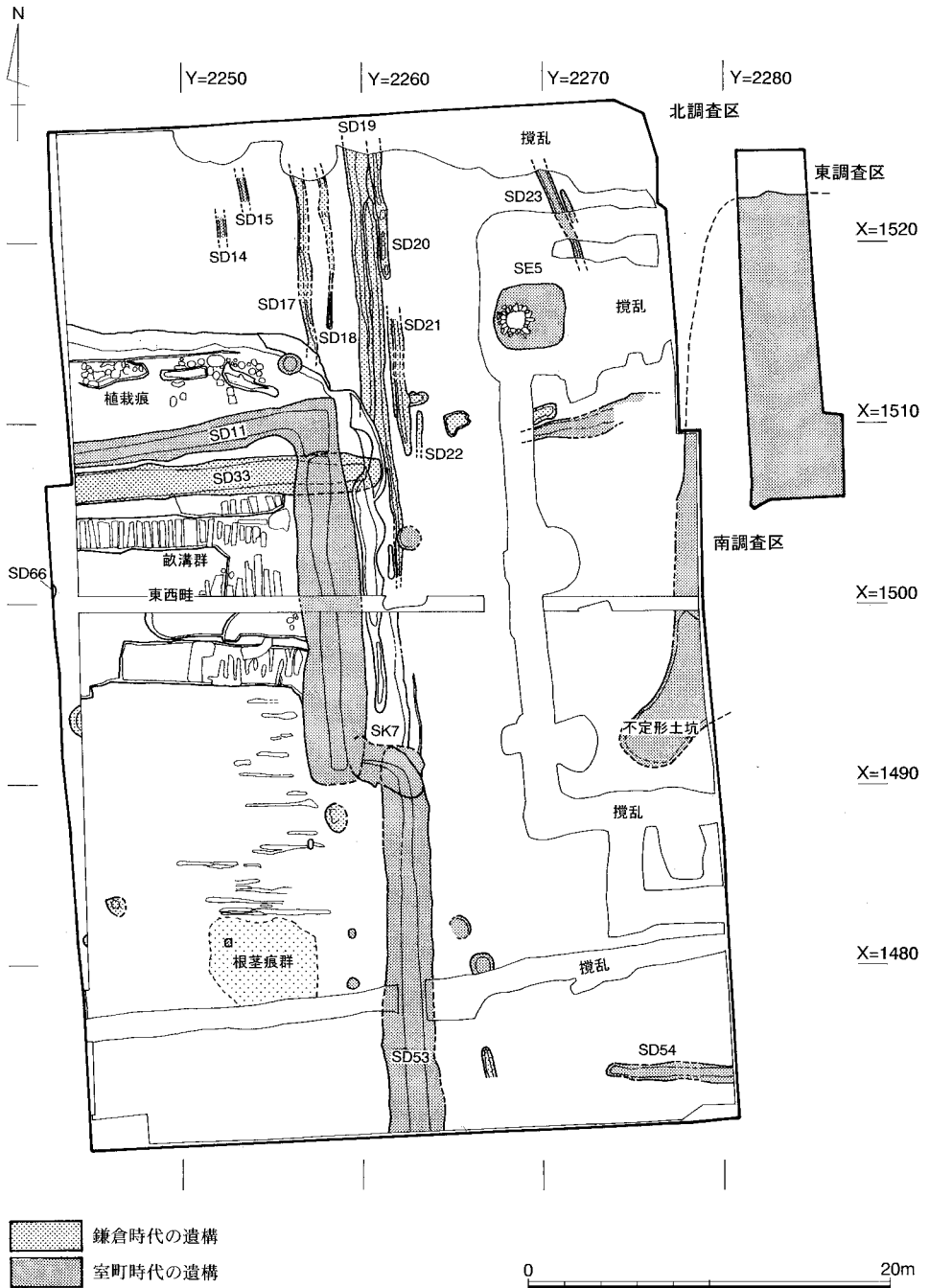


図18 中世の遺構 縮尺1/400

中世の遺跡

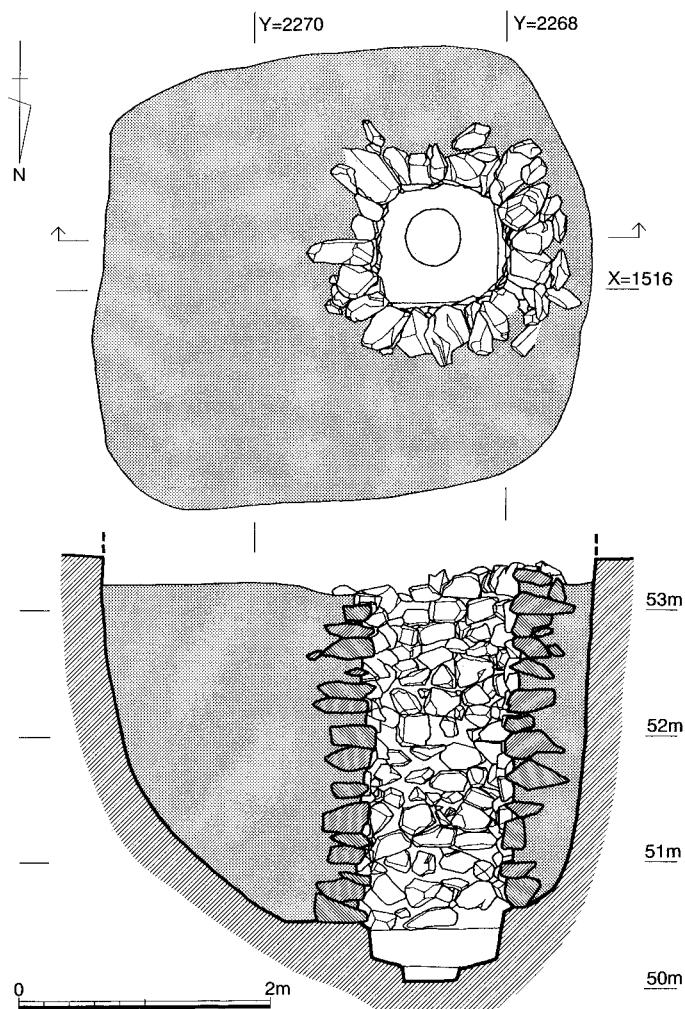


図19 井戸SE 5 縮尺1/60

の深さをもっていたとみられる。石の大きさは不揃いでかなり乱れた積み方がされている。底部の30cmほどは石組みがみられず、さらに底面に径40cm深さ10cmほどの円形の掘り込みがあることから、方形の木枠と木桶の水溜を設けていた可能性が高い。井筒内、掘形埋土ともに出土遺物は非常に少なかったが、底面近くで出土した土師器皿類はE₁類やE₂類であることから、中世京都Ⅱ期、おおむね14世紀代に比定されよう。

濠状の大溝はSD11とSD53がある。うちSD11は、真北から西へ12°振れる方位ではしる東西溝が、80°の角度で南折し、西へ5°振れる南北の溝となってX=1490付近までいたって立ち上る。SD53は、ここから東へおよそ3m離れた地点からはじまり、西へわ

ずかに3°のみ振れる方位で南へとはしる。いずれの溝の断面形状も基本的にV字形で、検出面で幅3.2m深さ1.8m程度をはかるが、SD11の東西方向部分については、断面逆台形を呈して規模がやや小さくなっている。埋土の状態をみる限りでは、これらは一度ではなく徐々に埋まっていったものと想定できる(図2~4)。

SD11南端とSD53北端の間には、これらを連結するかのよう土坑SK7があるが、溝との切り合い関係は最終的に確定できなかった。SK7とSD53の底面の深さはほぼ等しいが、SD11の底面はこれより50cmあまりも深い。したがって、本来的にSD53の北端が西折してSD11にとりつくように一連のものとして掘られていた可能性と、両溝掘削後のある時期に、柵形状に通路となる空間の生じていた部分を閉じるべく土坑が掘られた可能性の、両者を想定しておきたい。なお、溝は黄褐色砂や白色砂に掘り込まれているため透水性が良く、短期間でも滞水状態にあったとは考えにくい。底面のレベルでみると、西→東および北→南へと傾斜するように掘削されている。

SD11・SK7・SD53のいずれも出土遺物の内容に違いはなく、埋土の中位層を中心に大量の陶磁器や瓦類を含むものであって、土師器皿類ではE₄類やF₂類が主体となる。埋没後の上面に堆積している段差内堆積層の土師器皿類がもっぱらF₄類であることを考慮すると、これら濠状の大溝とSK7は、中世京都Ⅲ期古段階ごろ(おおむね15世紀前半代)を中心に機能しており、同新段階(15世紀末)には確実に埋没している、と判断される。

SD54は、調査区東南隅の黒褐色土上面で検出された性格不明の浅い東西溝で、幅1m深さ30cm。出土遺物から、SD11やSD53とほぼ同時期の15世紀前半代に比定される。

不定形土坑は、調査区東壁付近で検出された不整形な落ち込み。埋土は白色砂と茶褐色土や黒褐色土が互層に縞状を成しており、基盤層の白色砂を採取した跡とみられる。出土土師器から中世後半以降に比定される。東調査区の北端でも南へ下る落ち込みの輪郭が確認され、同様な埋土がひろがっていることから、これと一連のものにとらえられる。北東約100mのAT27区西半でもこうした不定形土坑が検出されており〔五十川8I〕、調査区の東方一帯がひろく砂採りの場所にあたっていた状況がうかがわれる。

畝溝群・植栽痕など 大溝SD11・53で囲まれた範囲を中心に各種の痕跡がある。上面を覆う段差内堆積層や斜面堆積層と同質の褐色土や黄褐色砂混じりの褐色土が埋土となっており、大溝の埋土と色調が類似しているためそれ以外の範囲でしか検出できていないが、状況からみて、多くは大溝埋積後に一帯が耕地化した時期、すなわち16・17世紀代の様子を示す遺構の可能性が高い。ただし、植栽痕は大溝と並存していた可能性もある。

畝溝群はX=1495付近から北側に集中してみられるもので、幅2mほどの東西方向に細長い掘り込みと、その内部に幅50cmほどの浅い南北溝が並ぶ遺構。あたかも長方形区画の段々畑の畝を彷彿とさせる(図版2-2)。そして、これより南側のX=1480付近までは、幅20cmほどの東西方向の小溝が群集しており、鋤耕の痕跡とみられる。さらにその南側の一画では、一辺10cm前後深さ15cm程度の不整形のピット群が、縦横に列状を成して密集していた(図版4-5)。形状や配置から、人為的な掘り込みというよりも何らかの植物の根茎痕ではないかと想定している。以上の3つの痕跡およびその直線的な境界は、当時の土地区画にしたがったそれぞれの利用方法の差異を反映しているものと考えられる。

一方、植栽痕は、SD11北側のテラス状の平坦地部分で集中してみつかった。不定形な土坑のまとまりで、底面の凹凸は著しく、掘形の一部が顕著にオーバーハングするほか、埋土も天地返しされたように黄褐色砂質土が貫入している状況がみられた。こうした特徴からみて、これらは何らかの樹木の痕跡である可能性が高く、段差の崖際に生け垣状に植栽されていたと想定される。また、この周囲にも、上記の根茎痕に類似したピット群が規則正しく並んで確認されたが、その密度はやや粗である。SD11との時間的な先後関係を知る手がかりはないが、仮にSD11が居館をとりまく大溝であると想定すると、その外縁の段差際に生け垣を設けることは、防御や崖の崩落防止の双方の観点からも有効であったと思われる、大溝と同時に存在していても不自然ではないだろう。

(2) 遺物(図版12~15, 図20~26)

濠状の大溝SD11・53からははじめとして大量の遺物が出土しており、それぞれ遺構ごとに報告する。なお、土師器以外の分類や編年観については、それぞれ初出の箇所に示した文献に依拠している。

SD19出土遺物(I 231~I 234) I 231~I 233は土師器で、小型の皿AⅡ。I 231・I 233は一段撫で面取り手法のD₄類、I 232は素縁手法のD₃類。I 233は灰白色、それ以外は褐色を呈する。I 234は白磁皿の底部で、内外とも露胎。わずかに突出する形状で、外面は削りにより内側がくぼみ、太宰府におけるVI-1類に相当する〔横田・森田78〕。これらは、土師器の様相から中世京都I期中段階にまとまる資料といえる。

SD33出土遺物(I 235~I 251) I 235~I 246は土師器皿で、すべて赤褐色ないし褐色を呈する。I 235~I 241は大型の皿AⅠで、I 235~I 239が2段撫で素縁手法C₃類、I 240・I 241は1段撫で面取り手法D₅類。I 242~I 245は小型の皿AⅡで、I 242~I 244がD₅類、I 245がD₃類。I 246は受皿で、口径8.2cmをはかる。I 247は須恵器すり

鉢の口縁部。端部はやや下に垂れるように肥厚する。I 248～I 250は灰釉系陶器。I 248は椀の底部で、回転糸切り痕が残り、外側に開くしっかりとした高台が付く。I 249は古瀬戸の皿ないし洗の口縁部とみられ、端部は玉縁状に小さく肥厚し、内外とも黄緑色の釉がかかる。I 250は貼付高台をもつ椀の底部。内面に淡緑色、外面に灰色の釉がかかる。I 251は高台が離脱した陶器の底部で、円盤として再利用した可能性がある。器表面は無釉で淡い茶褐色を呈し、本来の外面側は回転篋削りで平らになる。これらは、2段撫で手法が卓越する土師器の様相から、平安京IV期新段階～中世京都I期古段階の資料といえる。

S D66出土遺物 (I 252～I 254) I 252・I 253は土師器の受皿で、口径はそれぞれ10.8cm・9.4cmとやや大きい。I 254は土師器皿AⅡで、2段撫で素縁手法C₃類。平安京IV期中～新段階に比定される。

S E5出土遺物 (I 255～I 263) いずれも井筒内の出土品で、I 257は水溜上面の木枠部分から出土している。I 255～I 258は土師器皿。I 255はAⅠで、1段撫で素縁手法のE₂類、I 256・I 257はAⅡでE₁類。これらはいずれも赤褐色を呈する。I 258は灰白色を呈する受皿で、口径6.2cm。I 259は東播系須恵器すり鉢の口縁。端部がわずかに上方へ肥厚する。I 260は白磁椀の口縁で、端部が大きく玉縁状に肥厚する。I 261～I 263は青磁。I 261は壺の口縁部で、端部は下方に折り返される。I 262は椀の底部とみられ、径の小さな削り出し高台が付き、高台内側は露胎。I 263は同安窯系青磁の皿。底部付近の外面は露胎。これらの資料は中世京都Ⅱ期のうちに収まる内容といえよう。

S D11出土遺物 (I 264～I 341) I 264～I 271は土師器皿。I 264～I 268はE₄類で、I 264はAⅠ、それ以外はAⅡ。いずれも褐色を呈し、口縁部分のみが肥厚する薄い器壁であるため底部との境で破損して残りが悪い。I 269～I 271はF₂類で、I 269・I 270はAⅠ、I 271はAⅡ。やや厚手の器壁をもち、底部から斜め上方へと直線的に立ち上がる器形で、口縁端部を短くつまむ。色調は口縁付近が淡橙色、それ以外が白色を呈する。

I 272～I 284は瓦器ないし瓦質土器。I 272は鍋。逆L字状に立ち上がる口縁部が水平にとりつく。I 273～I 277は羽釜で、いずれも口縁がほぼまっすぐ立ち上がる形状のもの。I 274～I 277は端部が外傾するように面取りされ、口唇先端が尖る。I 277は端部からかなり下がった位置に幅広の鐙をもつ。I 278～I 281は火鉢ないし風炉の口縁部。I 278・I 279は強く肩の張る器形で、I 278では口縁下の2条の突帯間にスタンプによる入組文がめぐる。I 280・I 281は口縁が直立する器形で、平面形は輪花状にしていた可能性が高い。外面に花文のスタンプを押捺する。I 282は盤の口縁部で、口唇が内側に肥厚する。内面

中世の遺跡

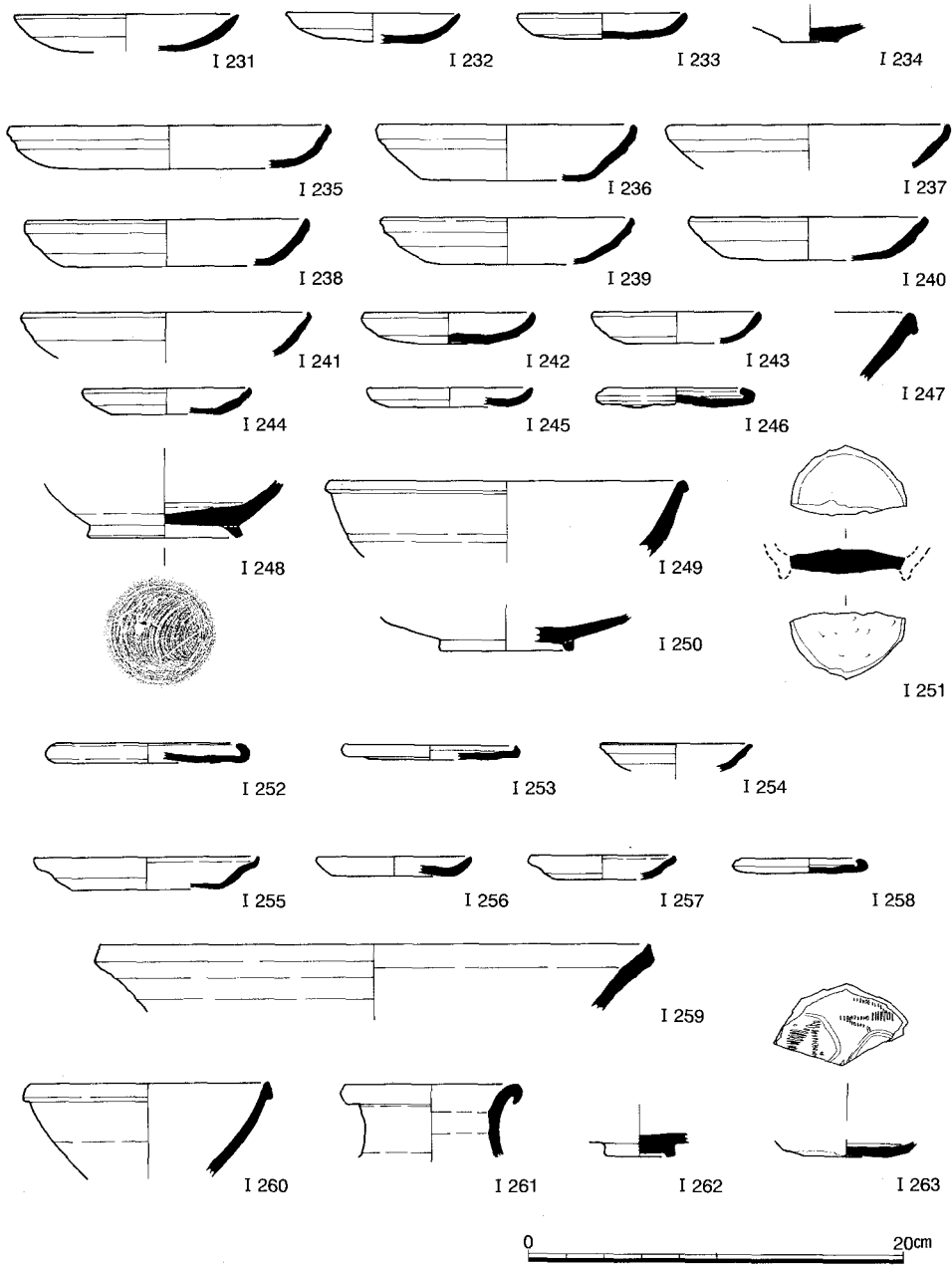


図20 S D19出土遺物 (I 231~ I 233土師器, I 234白磁), S D33出土遺物 (I 235~ I 246土師器, I 247須恵器, I 248~ I 250灰釉系陶器, I 251陶器), S D66出土遺物 (I 252~ I 254土師器), S E 5出土遺物 (I 255~ I 258土師器, I 259須恵器, I 260白磁, I 261~ I 263青磁)

にタール状のものが付着している。I 283は獣脚で、表面は全面研磨して丁寧な作られている。風炉や香炉に付く脚部であろう。I 284は五徳かと想定される土師質の製品で、口縁内側に容器を据えるための瘤状の突起が、その両側に窓状の切り込みが設けられる。また、外面には扁平な突帯が貼り付けられている。

I 285～I 292は甕の口縁部と胴部片。各地の中世窯の製品があるなかで、常滑焼が目立つ。I 285は東播系須恵器で、口縁部は強く折れ曲がり、端部が上方へ肥厚する。頸部には斜方向の叩きが残る。I 286～I 289は常滑焼の各段階の口縁形態。I 286は1型式段階で、須恵器と同様な色調を呈し、口唇の内側に凹線をもつ。I 287～I 289は暗赤褐色の色調を示し、端部がつままれたり上下への肥厚が顕著となるもので、それぞれ4型式、5型式、7型式段階に比定できる〔中野95〕。I 290は、先端が外反する縁帯状を呈し、長石を多量に含む胎土や明るい赤褐色の色調から信楽焼とみられ、KB 2類に相当する〔木戸95〕。I 291・I 292は常滑焼に特徴的な格子状スタンプ文が押捺されている胴部破片で、I 291は帯状に連続し、I 292では単独で施される。

I 293～I 297はすり鉢で、甕と同様各地の製品があるが、産地に顕著な偏りはみられない。I 293・I 295は備前焼で、ともに堅く焼き締まり、内面に9条以上のすり目をもつ。口縁の拡張しないI 293は3期、上下に大きく発達するI 295は4期に、それぞれ比定される〔間壁91〕。I 294・I 296は信楽焼で、ともに胎土中に長石粒を多く含む。I 294は焼成が甘く乳白色の色調を呈し、2条程度の不安定なすり目がみられる。I 296は明るい赤褐色を呈するが、すり目の有無は不明。信楽でのすり目の出現は15世紀代とされることから、これらもおおむねそのころの製品とみられる。I 297は東播系の須恵器で、端部が上方に肥厚して受け口状を呈し、神出窯の末期段階の製品だろう。

I 298～I 315は灰釉系陶器。いわゆる「古瀬戸」であり、I 298～I 310は淡黄緑色の灰釉が施され、I 311～I 315は黒褐色の鉄釉が施される「天目」である。I 298～I 301は折縁深皿で、口縁端部が短く外折し、I 300には注ぎ口がある。またI 298は、内面に施釉前の波状文様が施されているほか、口縁外面に重ね焼きによる融着痕がある。I 302～I 304は平椀で、ゆるやかにふくらみをもってたちあがり、口縁端部は尖る。いずれも底部付近の外表面は露胎で、回転篋削りされる。I 303は削り出し高台の底部が一部残る。I 305は花瓶とみられ、小さく突出する底部に回転糸切り痕が残る。I 306～I 310は各種の底部。いずれも内面にのみ施釉されている。I 306は扁平で径の大きなもので、内面に幅広の凹線が1条めぐる。皿類の底部であろう。I 307・I 308は椀類の底部で、削り出しにより底部

中世の遺跡

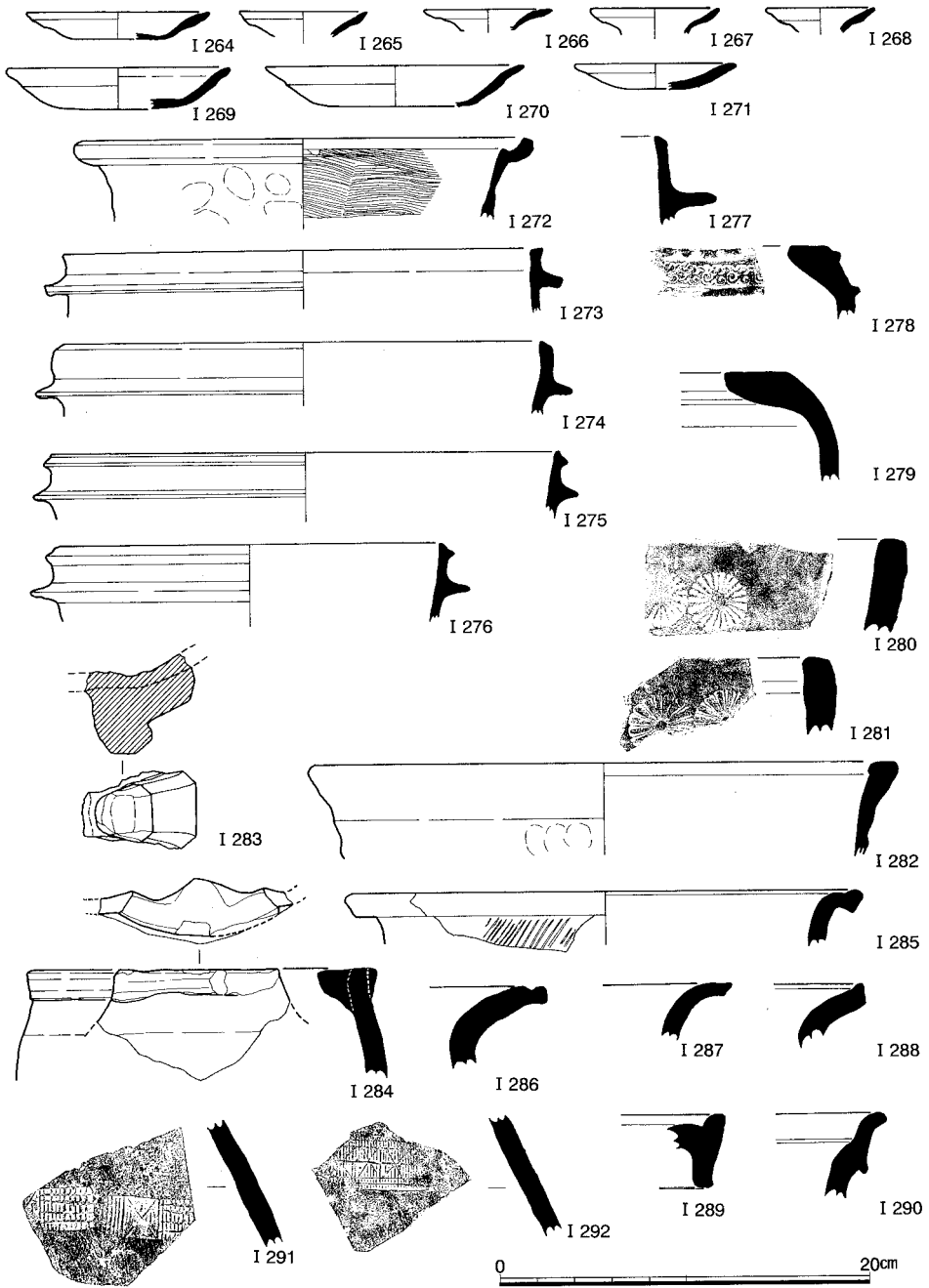


図21 S D11出土遺物(1) (I 264~ I 271土師器, I 272~ I 284瓦器, I 285・I 286須恵器, I 287~ I 292陶器)

京都大学総合人間学部構内A R25区の発掘調査

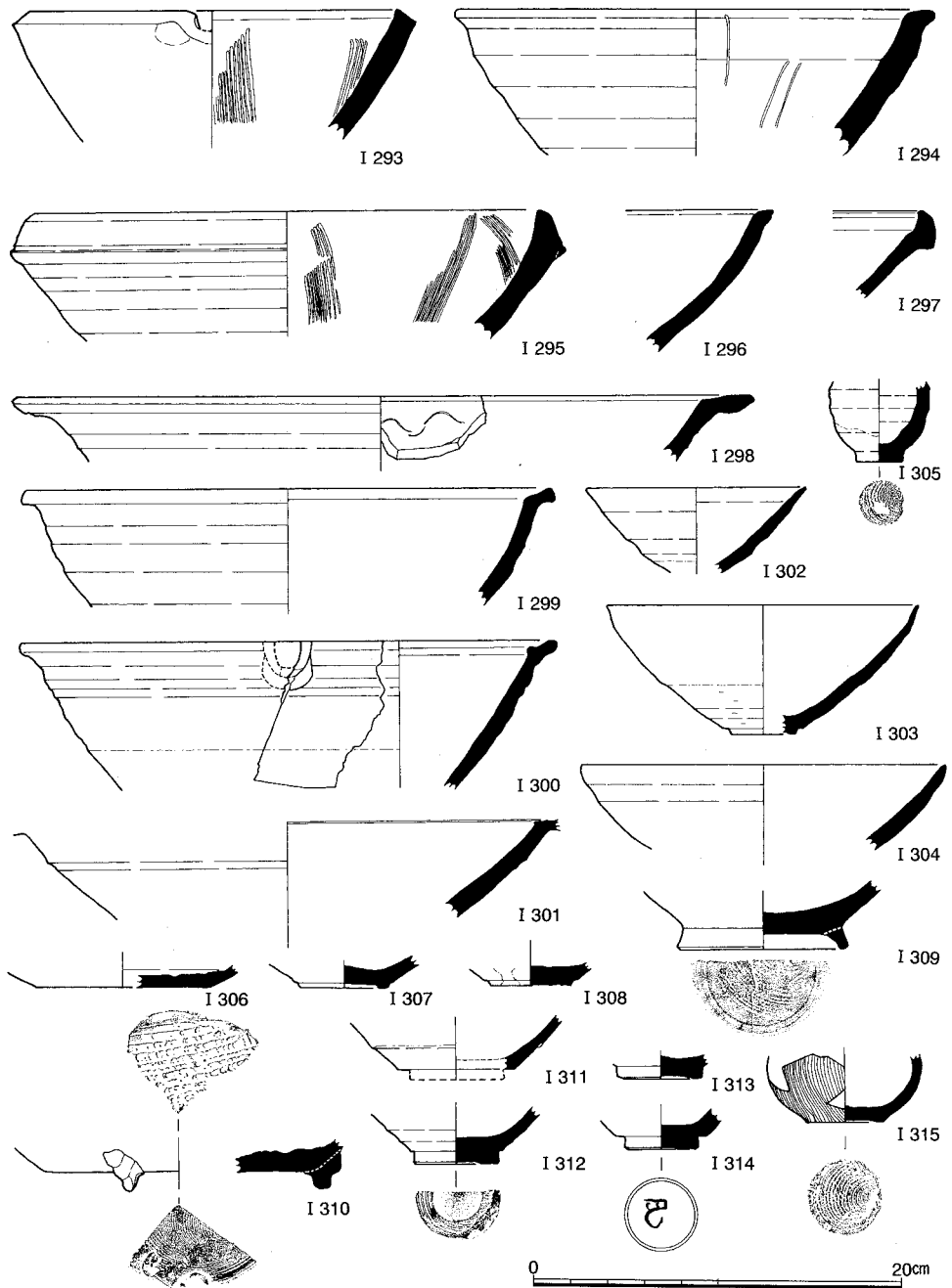


図22 SD11出土遺物(2) (I 293~ I 296陶器, I 297須恵器, I 298~ I 315灰釉系陶器)

中世の遺跡

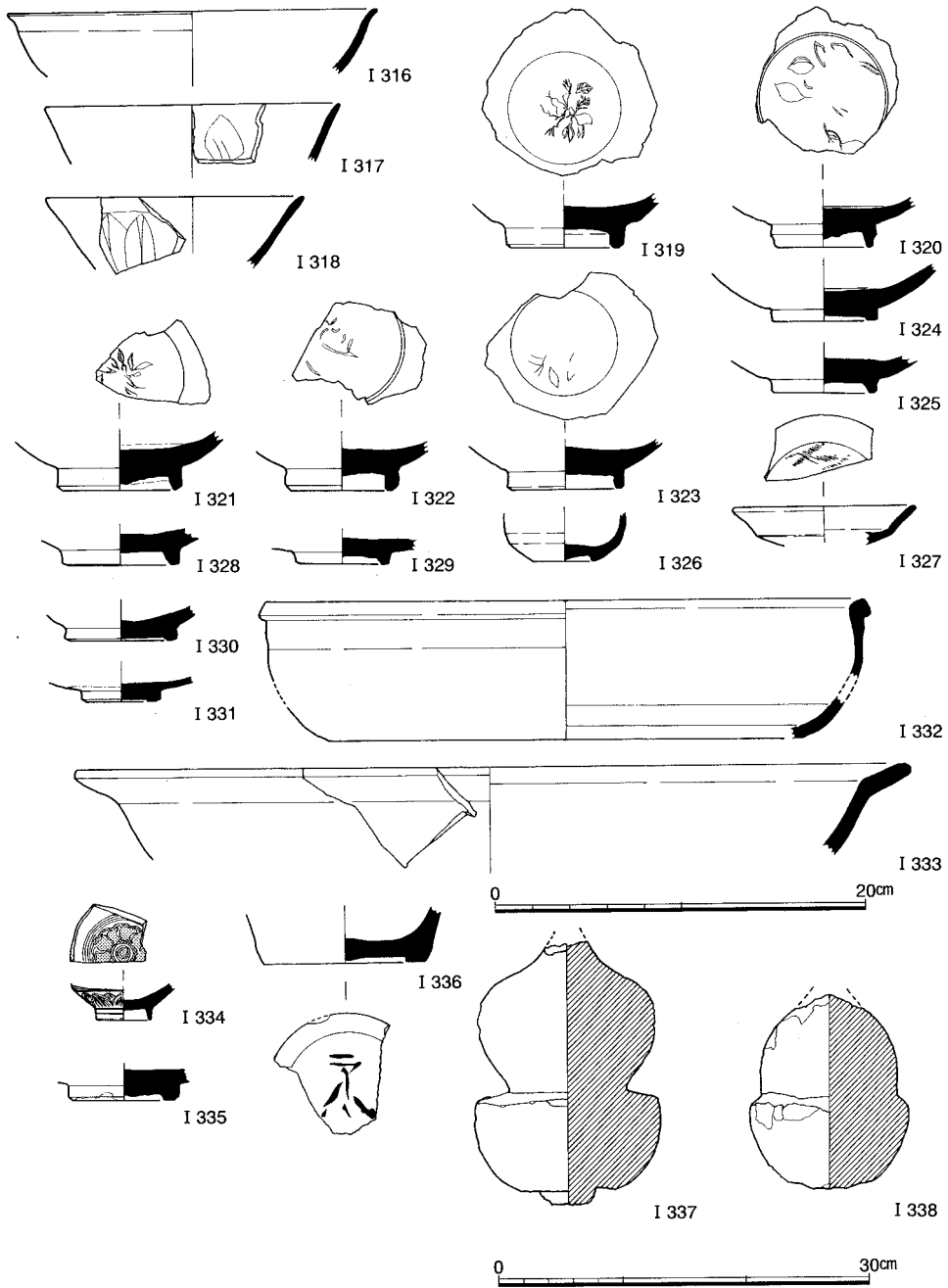


図23 S D11出土遺物(3) (I 316~I 327・I 333青磁, I 328~I 331白磁, I 332緑釉陶器, I 334青花, I 335・I 336陶器, I 337・I 338石製品) I 337・I 338縮尺1/6

の突出と低い高台が成形されており、篋削りの方向は時計回りである。I 307の高台畳付には回転糸切り痕が削られずに残る。I 309は、回転糸切り痕ののこる底部に、おおぶりの断面方形の高台が貼り付けられ、周辺を撫でて丁寧仕上げ。大型の椀ないし鉢類の底部であろう。I 310は卸皿で、内面に卸目があり、外面には胴部への立ち上がり部分に瘤状の脚が貼り付けられる。I 311～I 314は天目茶碗の底部。内面は黒褐色の鉄釉が厚くかかり、外面は露胎。いずれも削り出しにより成形されている。I 312では幅広く低平な高台が削り出されており、畳付けには高台を成形する前の回転糸切り痕がそのまま残される。I 313・I 314は浅い凹み底で、I 314には墨書がある。I 315は小さな壺形の器形の下半部で、内面は黒褐色の厚い鉄釉が施されるが、外面は櫛歯状工具による縦方向の条線が全面を覆っており、底部も含め全面が錆釉による暗茶褐色を呈する。以上の灰釉系陶器の一群は、貼り付け高台をもつI 309が中世前半期に比定される以外は、すべてが削り出し高台であり、椀皿類などの日常雑器が主体を占める内容であることから、おおむね古瀬戸後期様式に帰属するものであろう〔藤澤96〕。

I 316～I 334は貿易陶磁で、I 316～I 327・I 333は青磁。I 316～I 325は椀類で、胴部に鎬蓮弁文、見込みにスタンプによる花文をもつものが目立ち、太宰府でのI-5類あるいは14世紀以降を対象とした分類のB-IV類に比定される〔上田82〕。底部外面の施釉は、全面施釉（I 319～I 321）、高台内側の中心部分を輪状に削り取り（I 322）、高台より内側のみ露胎（I 323）、畳付も含め全面露胎（I 324・I 325）、の各種がみられる。I 326は合子の下半部。底部は削りによる凹み底で露胎。I 327は皿で、櫛目による鋸歯状文様をもち、外面下半が露胎。I 333は洗の口縁部とみられ、全面に厚い釉がかかる。これらは、釉調で明るい青緑色や青灰色系（I 316・I 319・I 321～I 323・I 326・I 333）とそれ以外の暗い黄緑色系とに大別されるが、文様から同安窯系とみられるI 327以外は、ほとんど龍泉窯系だろう。I 328～I 331は白磁の底部。いずれも高台周辺以下の底部は露胎。うち、I 331はやや特異で、削り出しによる小さく不安定な高台をもち、胎土が粗く、釉調もわずかに黄色味を帯びている。I 332は緑釉陶器の盤で、玉縁状の口縁部をもち、内面底部に圈線がめぐる。濃緑色の釉調を呈する。I 334は磁器青花の底部。内面見込みに花文、外面に蓮弁文を描く。高台は畳付のみ露胎。

I 335・I 336は産地不明の陶器。I 335は、胎土は緻密で赤褐色を呈し、器壁は厚く、にぶい黄白色の釉がかかる。低平な高台が削り出しにより成形され、畳付から内側は露胎。I 336は、夾雑物が含まれる粗放な黄褐色の胎土で、外面の上半は自然釉の発色とみられ

中世の遺跡

る灰白色を呈する。底部外面は回転斲削り調整され、「京」かと読める墨書がある。それ以外は回転撫で調整。胴部に向けて斜め上方へ直線的に立ち上がり、壺形の器形になるものと想定される。

I 337・I 338は石製五輪塔の一部で、最上部の空輪・風輪を一石で彫ったもの。花崗岩製でかなり脆く、とくにI 338は原形をとどめないほど風化している。また、表面に刻字の痕跡は認められない。I 337は、頂部を欠くほかは本来の状態をうかがうことができ、風輪には、下側の火輪に据えるための突起が良く残っている。空輪は、上半部の張りりと下半のくびれの発達した宝珠形を呈し、全体として幅よりも高さが勝っている。室町期以降の五輪塔は、全体として狭長化してバランスを崩していくとされるが〔川勝39〕、本例にもそうした傾向がうかがわれる。

I 339～I 342は建築物に使用されていたとみられる金属製装飾品。うちI 339～I 341は、長押の釘隠、懸魚あるいは扉の飾りである六葉など花卉状装飾の、円柱形中心部分を構成する「樽の口金具」ではないかと推測される。出土時に覆われていた厚い錆を落としたところ、多くの情報が得られた。主体部分は鉄製で、I 339の円柱部には、頂面に銀象嵌により蓮華文の蓮弁と蓮子を表現した装飾がみられ、また釘部側下端には細かな波状縁部を

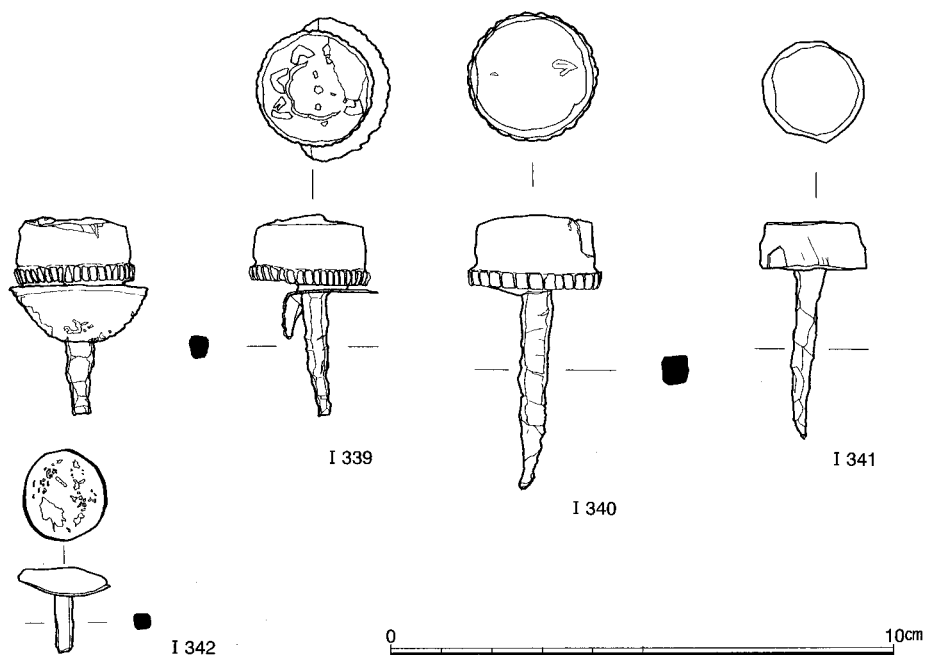


図24 S D11出土遺物(4) (I 339～I 342金属製品) 縮尺2/3

もった金銅製リングがめぐって菊座に相当する装飾を表している。このほか、薄い円形の銅板が釘部の根本まではめ込まれた状態で遺存している。I 340では、波状縁部をもつ菊座風の装飾はみられるものの、円柱部に金銅のリングをめぐらせているのではなく、厚みのある5円玉状の製品を釘部の根本まで差し込んだものであるという、I 339との構造の違いがうかがわれる(図版15参照)。また薄い円形銅板はともなっていない。I 341もこれらと同様な製品とみられるが、鉄製部分以外残っていない。なお、円柱部と釘部とが一体か結合式かを検討するためにX線透過も行ったが、明らかに出来なかった。I 342は青銅製の鋌で、円みを帯びた頂部には金箔が残る。この頂部は中空で、湾曲した2枚の青銅円板を組み合わせるによりボタン状のふくらみが造られている。

以上のほか、動物骨や歯も若干量出土しているが、老齢の馬歯と認定できる1点を除いていずれも小さな断片であり、詳細な鑑別はできなかった。

このように、SD11からは多種多様な資料が出土しており、その年代は、一部中世前半期のものが混じるものの、基本的に中世後半期といえる。なかでも、土師器皿類にはF₂類が目立つこと、瓦器では椀類が全くみられないこと、1点ではあるが舶載の染付が含まれること、などを考慮すると、明らかに15世紀以降が中心であり、中葉ごろまでの資料が含まれているといえる。よって、溝が機能していた年代の中心をおよそ15世紀前葉～中葉に、その終焉を後葉ごろに比定できよう。

SD53出土遺物(I 343～I 374) I 343～I 348は土師器。I 343・I 344は皿A Iで、F₂類。桃白色を呈し、ともに口縁端部は短くつまむが、I 343は外反、I 344は内湾気味に仕上げるといふ微妙な違いがある。I 345・I 346・I 348は皿A II。I 345はE₄類で、褐色を呈する。口縁は強く外反し端部が肥厚する。I 346・I 348はこれと異種の皿で、浅いが厚手でしっかりとしたつくり。I 346は橙褐色、I 348は灰白色を呈する。I 347は凹み底小椀。厚手で桃白色を呈し、口縁端部をつまむなど、F類の皿と共通した特徴を示す。

I 349は瓦器の器台状製品。外面に暗文が1条みられる。内外面とも丁寧な仕上げられている方を受部とみなして仮に器台として扱ったが、天地を逆にした場合は花瓶や仏飯の脚部となる可能性がある。いずれにしる類例はない。

I 350～I 354・I 372～I 374は国内諸窯産の陶器。I 350～I 352・I 372は甕。I 350・I 372は強く外反し端部が上下に肥厚する口縁部で、I 372は器壁が薄手でシャープなつくりだが、I 350は厚手で鋭さに欠ける。いずれも常滑産で、6a型式と7型式に相当する。I 351は、端部の肥厚が進んで縁帯化した口縁部で、弱い受け口状をなす。胎土の特徴か

ら信楽とみられ、KB 2類に比定される。I 352は常滑産の甕の肩部で、格子状のスタン
プ文が連続してめぐり、I 373は信楽産とみられる壺。肩が強く張る器形で、口縁端部が
短く外折し、TA 3類に比定される。I 353～I 355・I 374はすり鉢。I 353は信楽で、口
縁端部は横撫でにより短く外反し、細くすぼまる。条線の有無は不明。I 354・I 374は備
前。I 354は端部が屈曲して真上に立ち上がる口縁部で、屈曲部は下側へ肥厚し、色調は
暗赤褐色。I 374は内面に6条の条線をもち、堅く焼き締められて灰色を呈する。それぞ
れⅣ期とⅢ期に比定される。I 355は東播系須恵器で、口縁端部が受け口状をなす。

I 356～I 362は灰釉系陶器の「古瀬戸」。I 356はラップ状に大きく開く口縁部で、内外
面とも施釉される。後期様式特有の尊式花瓶だろう。I 357は卸皿。口縁部は水平な面を
もち、その部分を中心に施釉される。I 358・I 359は、口縁が水平に近く外反する折縁深
皿。I 358は端部が幅広く上方へ肥厚し、段状を呈する。I 360～I 362は黒褐色の鉄釉が
かかる天目。I 360は椀で、口縁下に低い段をもち、口唇部は外反気味に細くすぼまる。
I 361は合子で、水平に近い肩部から胴部へは直角に近い角度で屈曲する。I 362は椀の底
部で、削り出しにより凹み底を成形している。外面の底部周辺には薄い茶褐色の錆釉がか
かり、外面上半と内面は厚い鉄釉がかかる。

I 363～I 370は貿易陶磁。I 363～I 367は青磁椀の底部で、いずれも龍泉窯系とみられ
る。高台の内側は回転篋削りや撫でで仕上げで露胎、それより外側および内面に青緑色の
釉がかかる。I 364は見込みに飛雲文、I 363・I 365・I 366はスタンプによる花文が認め
られる。I 368～I 370は白磁。I 368は椀の底部で、削り出しによる低く扁平な高台をも
つ。内面のみ施釉がみられる。I 369は椀の口縁から胴部で、器壁は薄く、胴部にふくら
みをもつて立ち上がり、口縁端部が短く外折する。内外全面に、ややくすんだ白色の釉が
かかる。I 370は小型の梅瓶の肩の部分で、沈線区画により輪花状をなす。

I 371は、産地不明の陶器で、壺状の器形の胴部とみられ、外面に指頭で押捺された突
帯がめぐっている。胎土は赤褐色で、外面は茶褐色の釉が薄くかかる。

以上は、SD 11と内容的にほとんど同じであり、同様な年代観でとらえて良からう。

SD 54出土遺物 (I 375～I 380) I 375～I 377は土師器皿でいずれもF₂類。I 378
は瓦器盤の口縁で、端部が内側へ大きく肥厚する。I 379・I 380はすり鉢の口縁。I 379
は、口縁端部の器壁が、厚手になりながら先端が短く外折する器形で、信楽のB 1類。
I 380は、口縁端部が縁带状を呈する器形で、備前のⅣ期に比定される。以上の内容は、
SD 11・53と同様15世紀前葉を中心とする時期のものといえる。なお、図示していないが、

京都大学総合人間学部構内A R25区の発掘調査

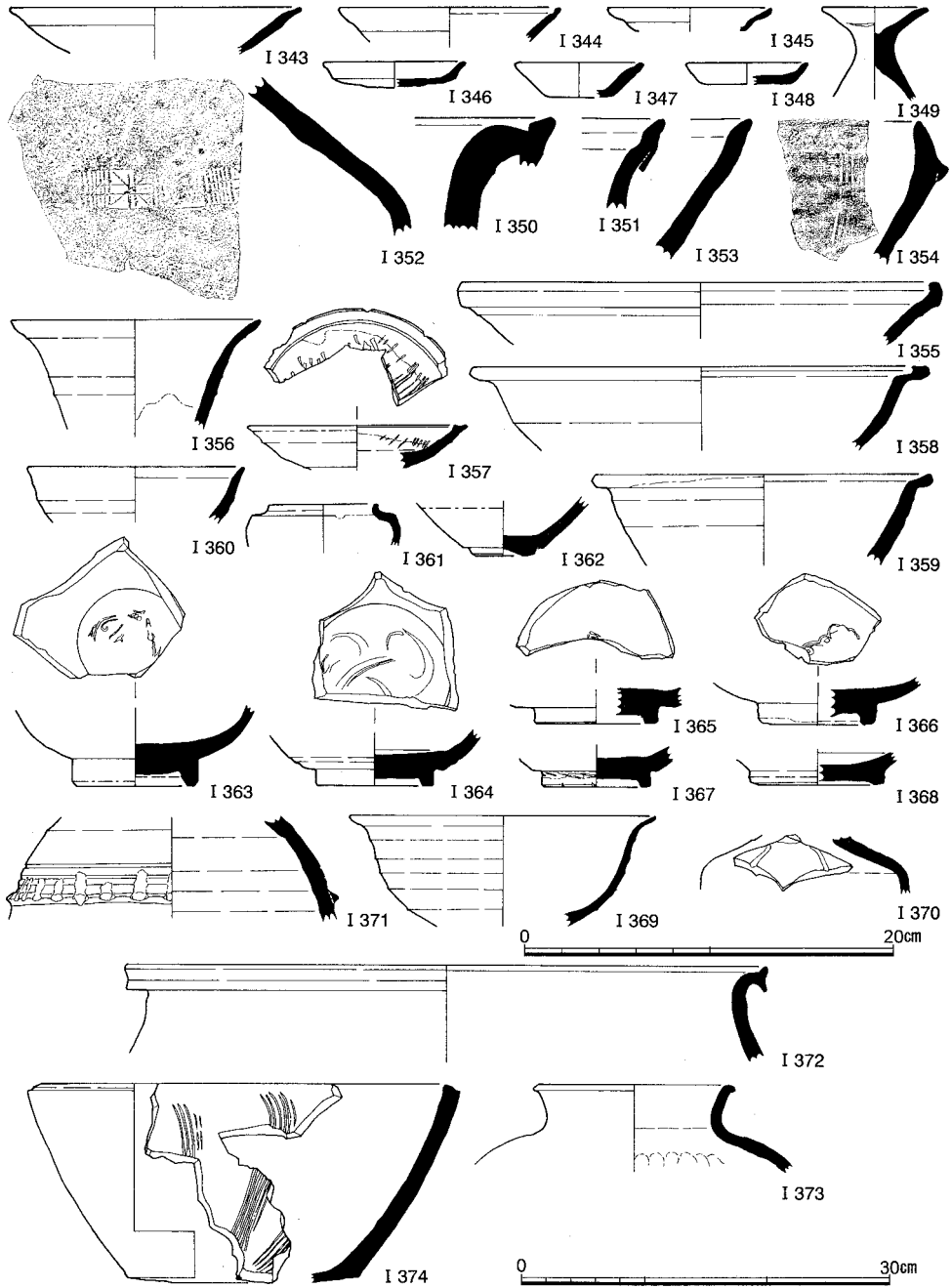


図25 S D53出土遺物 (I 343~ I 348土師器, I 349瓦器, I 350~ I 354・I 371~ I 374陶器, I 355須恵器, I 356~ I 362灰釉系陶器, I 363~ I 367青磁, I 368~ I 370白磁) I 372~ I 374縮尺1/6

中世の遺跡

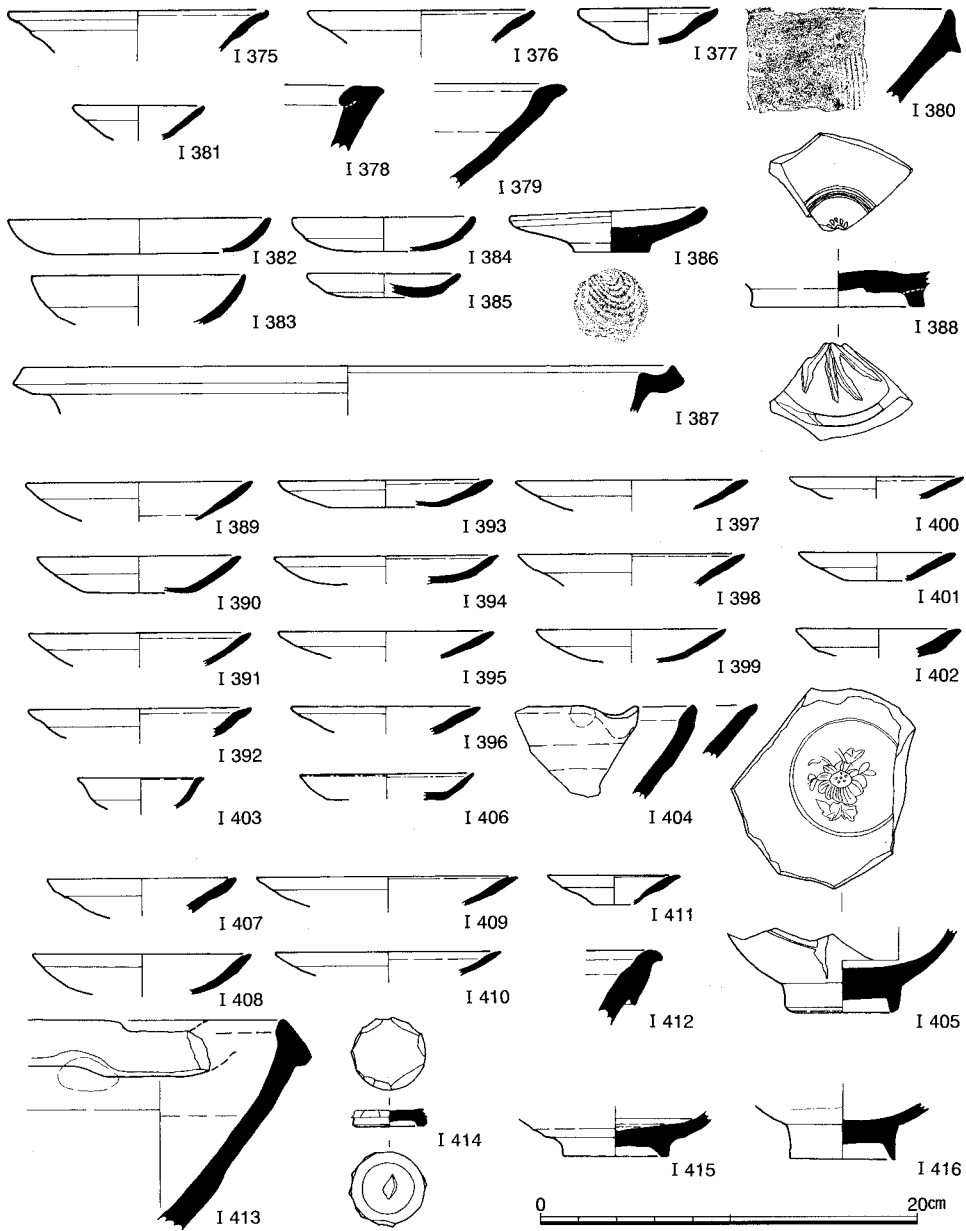


図26 S D 54出土遺物 (I 375~I 377土師器, I 378瓦器, I 379・I 380陶器), 不定形土坑出土遺物 (I 381土師器), 茶褐色土出土遺物 (I 382~I 386土師器, I 387瓦器, I 388灰釉系陶器), 段差内堆積層出土遺物 (I 389~I 402土師器, I 403瓦器, I 404陶器, I 405青磁, I 406白磁), 斜面堆積層出土遺物 (I 407~I 411土師器, I 412・I 413陶器, I 414~I 416白磁)

埋土中より北宋の元祐通寶（1086年初鑄）が出土している。

不定形土坑出土遺物（I 381） 灰白色を呈する凹み底小椀 I 381が1点のみ出土した。砂の採取が中世後半期以降に下るものであることを示している。

茶褐色土出土遺物（I 382～I 388） 同層出土の中世の遺物は前半期を中心とする。I 382～I 386は土師器。I 382・I 383は赤褐色を呈する皿A I，I 384・I 385は同A IIで、いずれもD₃類。I 386は底部に回転糸切り痕を残す皿で、灰白色を呈する。内外全面の仕上げも回転撫でによっている。I 387は瓦器鍋の口縁で、水平に近く外折している。I 388は灰釉系陶器古瀬戸の底部。しっかりとした貼付高台をもち、その内側に太く鋭い放射状の篋描文様を施す。内面は淡緑色に施釉され、圏線と花文がみられる。

段差内堆積層出土遺物（I 389～I 406）・斜面堆積層出土遺物（I 407～I 416）

これらは、中世遺構埋没後の上面に堆積した層から出土した遺物で、遺構の廃絶時期の下限や、一帯が耕地化した時期を知る上で重要である。

I 389～I 402・I 407～I 411は土師器皿。薄手の器壁で、底部から斜め上方へ直線的に立ち上がり、口縁端部がわずかに外折する器形のものが主体となり、F₄類に比定される。色調は淡褐色～橙褐色を呈し、口縁端部に煤が付着したものが目立つ。

I 403は瓦器のミニチュア椀。I 404・I 412・I 413は国内諸窯産のすり鉢や甕の口縁。I 404は信楽産すり鉢で、口縁端部の内側に面をとる。I 413は須恵質の焼成のすり鉢で、口縁端部は大きく上下に肥厚する。備前のIV期とみられる。I 412は甕の口縁で、肥厚して縁帯状を呈し、先端が短く外折する。信楽のKB 5類に比定される。

I 405・I 406・I 414～I 416は貿易陶磁。I 405は青磁椀で、見込みに花文スタンプと圏線をもち、外面におおりの蓮弁状装飾がみられる。施釉は高台の内側まで及び、それより内側は露胎。I 406は白磁で、口縁端部の内側のみ露胎する口禿の皿。I 414は白磁の底部で、小ぶりの高台をもった破片を打ち欠き円盤状に成形する。I 415・I 416は白磁椀底部。I 415は低平な高台をもち、内外全面にややくすんだ白色釉が厚く施される。I 416は細く高い直線的な高台を削り出して成形する椀V類。高台周辺は露胎。

以上の資料は、土師器の様相についてみると、山科寺内町の一括出土資料と形式的に近く〔岡田・浜崎85〕、16世紀代のものを含む内容とみなせる。したがって、これらの下層となる濠状の溝S D 11・53が遅くとも15世紀のうちには埋没し、16世紀代以降に一帯が耕地化していったことが、あらためて確認されるといえよう。

6 古代・中世の瓦類

古代・中世の瓦類は、出土状況には恵まれていないが、軒瓦を中心に量・種類ともにかなりにのぼるため、ここでまとめて報告する。なお説明の便宜のために、軒丸瓦はKCM、軒平瓦はKCHとし、瓦当文様モチーフの違いにもとづいてアラビア数字で区分する型式番号を付した。各型式はさらに、細部の違いを大文字アルファベット記号で、モチーフ以外の細かな違いを小文字アルファベット記号で細分した。ただし、ここでの型式区分の大別と細別は範の異同は考慮していない。よって、同一型式に属するものでも、見かけ上文様が同一というだけで、異範のものも含まれ得る。これは、瓦当残存率が低いため同範関係まで決めかねる個体が多く、型式区分に反映させることが困難だったからである。

(1) 軒丸瓦 (図版16・17, 図27~29, 表2)

文様不明の9点を含め総計91点が出土し、KCM1~23に区分した。KCM20までは蓮華文系統で、多くが1型式1点。主体はKCM22を中心とする巴文瓦である。これらの巴文瓦は、溝SD11・53やその上面の包含層を中心に出土し、13世紀前葉以前に比定されるSD19・33・55・56からは出土していない。調査区一帯での巴文瓦の使用年代を考えるうえで示唆的な結果といえる。以下、型式別に説明する。

KCM1 (I 417) 単弁八葉蓮華文で、一段くぼむだけで圏線を持たない中房の中心に1個の蓮子を置く。おおぶりで肉厚の蓮弁で、外周に界線をもたないため外区は存在せず、範の押しつけにより自然に盛り上がった部分が周縁となる。瓦当内面から筒部にかけて連続する粗い布目痕があり、一本造りであったことがわかる。焼成はやや軟質で灰白色を呈する。六葉の類品は内裏跡にあり(『平安京古瓦図録』の137番, 以下「平古137」のように略記)、平安中期の今熊野池田瓦屋終末期の製品と同範とみられている〔大谷高等学校法住寺殿跡調査会84 NM15〕。なお、未掲載であるが、西南方200mのAO22区で、平安中期の井戸SE29から同範品が1点出土している〔京大埋文研99 p.28〕。

KCM2 (I 418・I 419) 突線で表した蓮弁の中央に稜線をはしらせて複弁とし、弁間にのぞき蓮弁を配した複弁四葉蓮華文。外区圏線2条のうち、内側のものが蓮弁に接するものをA、離れるものをBと区分した。Aは、外区周縁が幅をもち、1+8とみられる蓮子を配した中房が残る。双方とも瓦当裏面に絞りをもち布目痕があり、硬い須恵質の焼成である。類品に内裏蘭林坊跡出土の平古148のほか、平安京左京二条二坊高陽院跡の苑池出土品があり、美作からの搬入瓦の可能性が指摘されている〔前田94 図2-130〕。

KCM3 (I 420) 幅広の蓮弁部分のみ残る。単弁八葉蓮華文である可能性が高い。瓦当面に緑釉が塗布されていた痕跡が残るが、かなり摩滅している。裏面は筒部の剥離した痕跡が残り、撫で調整されている。

KCM4 (I 421) 中央に子葉をもつ複弁蓮華文で、八葉になるものと思われる。蓮弁をふちどるように圏線がはしり、外区はおおぶりの珠文が密にめぐる。裏面は剥離して不明。焼成はやや甘く灰色を呈する。

KCM5 (I 422) 蓮弁を太い突線で表し、弁の中央にも突線を通す。表面がかなり荒れているが、残存部からみて互いに接した単弁八葉蓮華文で、中房は1+4の蓮子、外周に1条の圏線がめぐるモチーフとみられる。裏面には筒部の剥離痕と撫で調整が残り、焼成はやや甘く灰色を呈する。

KCM6 (I 423) 複弁蓮華文で、弁間文として同様な複弁がのぞいた様子を表す。東洞院大路跡出土の平古160に同様なモチーフがある。おそらく六葉で、圏線で区画する中房には蓮子を、外区に珠文をもつのは确实だが、数は不明。筒部は接合式で、瓦当裏面ともに粗い撫で調整。焼成はやや甘く灰色を呈する。

KCM7 (I 424) 大きく突出する中房を圏線で囲み、その周囲に立体感の乏しい小ぶりの蓮弁を配する。蓮弁どうしが融着して個々の輪郭が不鮮明であるが、複弁八葉蓮華文を意図したモチーフとみられる。外区に珠文が推定6個配され、周縁は大きく突出する。裏面は筒部の剥離痕と強い撫で調整があり、硬い須恵質の焼成である。朝堂院跡出土の平古140に類似し、文様と技法から平安後期の丹波系瓦屋の製品と判断される。

KCM8 (I 425) 細い突線で描出された蓮弁内にわずかに盛り上がる2個の蓮弁を配した複弁六葉蓮華文。中房はわずかに突出し、推定1+5ないし1+6の蓮子をもつ。周縁は幅狭く突出し、外周は篋削り。瓦当裏面は撫でて、硬い須恵質の焼成。内裏跡出土の平古204や尊勝寺跡出土品に同文が知られ〔奈文研編61 PL.35-45A〕、文様と技法から播磨系瓦屋の製品とみられる。

KCM9 (I 426) 中房に1+5ないし1+6の蓮子を配し、中央の蓮子は圏線で囲む。瓦当面はやや荒れているが、蓮弁が太い輪郭線で表される単弁八葉蓮華文で、外区に珠文推定10個を配する。外周は縦位に、裏面は不定方向にそれぞれ撫で調整。砂粒を多く含む胎土で、焼成は硬く青灰色を呈する。内裏跡出土の平古96のほか、右京区森ヶ東瓦窯に同文品がみられる〔平田88 図2-1〕。

KCM10 (I 427) 小片で全体は不明だが、残存する蓮弁の輪郭線が中途までしか

古代・中世の瓦類

表2 軒丸瓦の遺構別出土点数

型式	遺構		SD 19	SD 33	SD11		SD53		その他 中世遺構	茶褐色土	段差内 堆積層	斜面 堆積層	上層混入	計
	SD 55	SD 56			(上層)	(下層)	(上層)	(下層)						
KCM 1								1						1
KCM2A	1													1
KCM2B	1													1
KCM 3					1									1
KCM 4						1								1
KCM 5	1													1
KCM 6	1													1
KCM 7								1						1
KCM 8							1							1
KCM 9			1											1
KCM10					1									1
KCM11				1										1
KCM12							1							1
KCM13					1									1
KCM14								1						1
KCM15								1						1
KCM16	2			1									1	4
KCM17A				1	1									2
KCM17B													1	1
KCM18				2					1		1			4
KCM19												1		1
KCM20					1		1	1				3		6
KCM21										1				1
KCM22Aa							1							1
KCM22Ab								1					1	2
KCM22Ba					2		1	1		3				7
KCM22Bb					1				1	1				3
KCM22Ca					1									1
KCM22Cb										1	1		1	3
KCM22Cc					1	1	3	6			2			13
KCM22Da							1							1
KCM22Db									1					1
KCM22Dc					1	1								2
KCM22Dd								2					2	4
KCM22X					1			1			1			4
KCM23										1	1		3	5
*KCMX	2				1				1	4	1		1	9
計	8	0	1	5	13	3	11	13	3	3	11	10	10	91

*KCMX：瓦当文様不明の軒丸瓦

切れ込まないので、複弁蓮華文だろう。この輪郭線は圏線も兼ね、外区には珠文をもつ。裏面は撫で調整で、焼成はやや甘く黒色を呈する。朝堂院跡出土の平古170と類似する。

KCM11 (I 428) 窪んだ中房におおりの蓮子1+6を置き、圏線・蓮弁・子葉のすべてを幅広い突線で描出する単弁六葉蓮華文。蓮弁外縁のふくらみはほとんど表現されておらず、わずかに屈曲するのみである。一段窪む外区をもつが、残存部位には珠文はみ

られない。範面には木目痕があり、瓦当の外周は縦位の篋削り、裏面には筒部の剥離痕と撫で調整がみられる。焼成はややあまく灰白色を呈する。

KCM12 (I 429) KCM11と同様に蓮弁が太い突線で表されるが、しっかりとした外区との圏線をもつため、中房周囲に放射状に蓮弁が連なるモチーフになる。外区に突起状の珠文を配し、幅広でやや高い周縁部をもつ。焼成はやや甘く暗灰色を呈する。三条西殿跡出土の平古225が同文になるものと見られる。

KCM13 (I 430) 篋が浅く不鮮明だが、圏線で区切られた中房に1+4の蓮子を置き、蓮弁や子葉を突線で表す単弁八葉蓮華文だろう。蓮弁外側の輪郭線が圏線を兼ね、外区に珠文をもつ。周縁は幅広く高い。焼成はややあまく黒灰色を呈する。尊勝寺跡出土品と同文だろう〔奈文研編61 PL.36-64〕。

KCM14 (I 431) 細い突線で蓮弁を表し、子葉と弁間文は先の尖った縦線となる複弁推定六葉蓮華文。外区は2条圏線に挟まれた珠文帯で、幅広く低い周縁の輪郭は楕円形になるものとみられる。外周、裏面とも撫で調整で、焼成はやや甘く灰色を呈する。同文には栗栖野瓦窯〔吉村93 図24-21〕、民部省跡の平古218があり、この系統は、平安後期の栗栖野瓦屋系軒丸瓦として、伝統的モチーフを踏襲した最後の一群とされている。

KCM15 (I 432) 突線による子葉をもった陰刻による蓮弁が連なり、その内側に珠文帯と圏線をもつ。東福寺出土の完存品によれば〔大本山東福寺90 図22-2〕、中房に相当する圏線の内側には、右巻きに頭部を巻き込む右巴文が配される（以下、巴文は頭部が巻き込まれる方向により表記する）。また外区はなく、全体の輪郭は楕円形を呈する。裏面は撫で調整で、焼成はやや甘く黒色を呈する。同文品の出土から栗栖野瓦窯産である可能性が高い〔京都市埋文研86 図版11-7〕。

KCM16 (I 433) 単弁十葉蓮華文。蓮弁外縁の輪郭ははっきりした陰刻になるが、突線によるそれ以外の表現は浅い。KCM13とモチーフとしては類似するが、中房径が小さく蓮子を持たない点、周縁が低く幅広いもので輪郭が楕円形である点が異なる。外周下半は篋削りされ、裏面は筒部剥離痕と指頭圧痕による著しい凹凸がみられる。焼成はやや甘く暗灰色を呈する。この種の楕円形軒丸瓦は、中央官衛系瓦屋第Ⅲ期～Ⅳ期（12世紀中葉）に位置づけられる〔上原78〕。

KCM17 (I 434・I 435) KCM13や16とモチーフは類似するが、蓮弁は太い突線のみで描かれる単弁蓮華文で、外区との圏線を兼ねる弁端のふくらみはほとんど表現されない。この点ではKCM12に近い。弁の中央に突線で表す子葉が明確に認められるAと無

古代・中世の瓦類

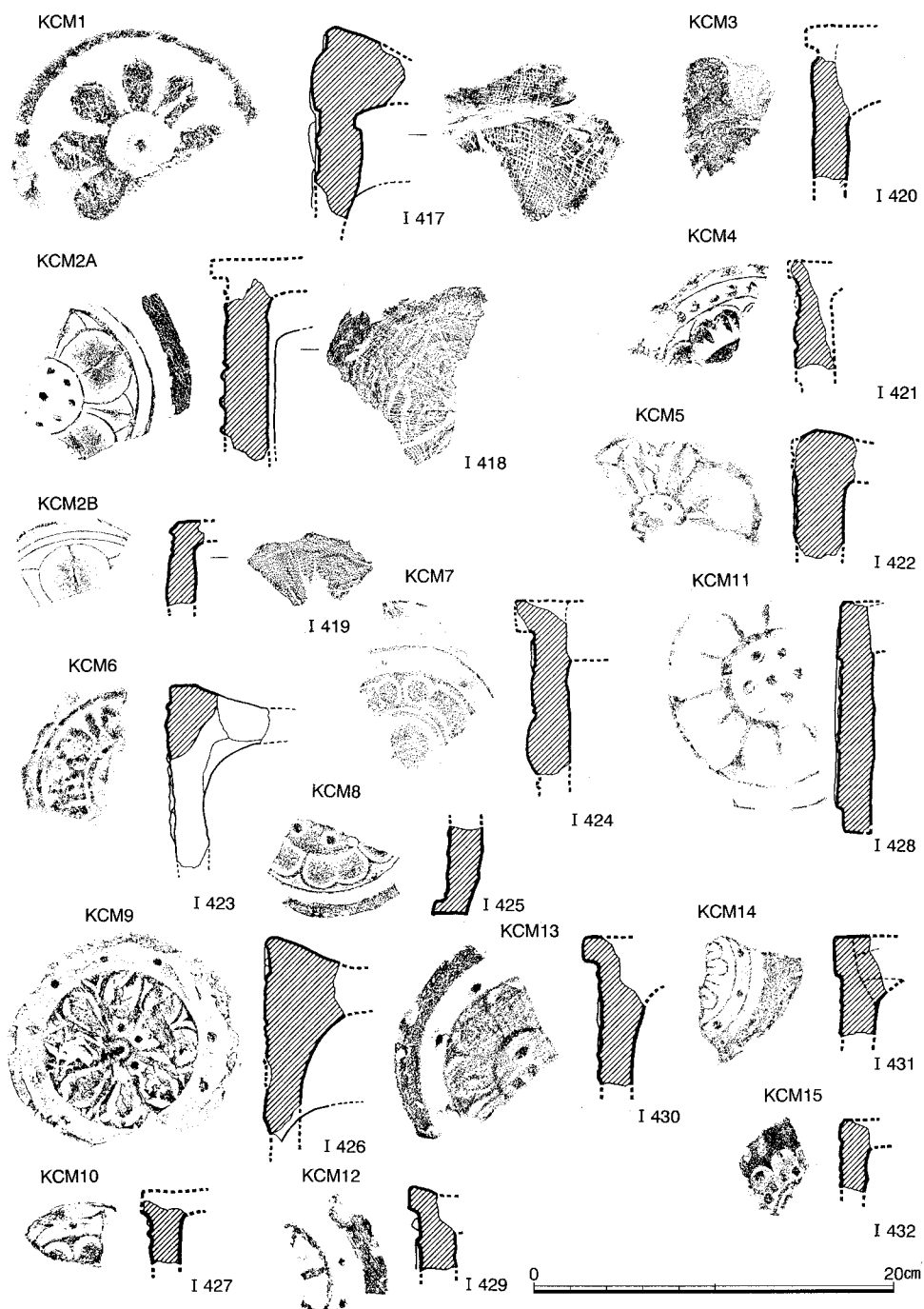


図27 軒丸瓦(1) (KCM1~15)

いBに区分する。いずれも範の打ち込みは浅く、瓦当外周下半は篋削り、裏面は撫で調整、焼成はやや甘く灰色～灰白色を呈する。K C M16と同様、楕円形瓦当面をもつ12世紀代の中央官衛系瓦屋の製品だろう。栗栖野瓦窯〔京都市埋文研86 図版11-3〕や、医学部構内A P 19区に同文品がある〔清水・吉野81 I 51〕。

K C M18 (I 436) 細長く先端が尖り気味の蓮弁と子葉を突線で表して連ねたモチーフで、単弁推定十八葉蓮華文。範の打ち込みは浅く、中房は無文、外区に圏線を1条もつ。瓦当外周は篋削り、裏面は撫で調整、焼成はややあまく灰色～灰白色を呈する。同文は仁和寺境内〔京都市埋文研90 図版15-46〕や下鴨神社〔京都市埋文研80 p.39〕の出土品にみられる。K C M16や17と同様な系譜や年代観でとらえられよう。

K C M19 (I 437) 内区に内向きT字形花卉を配して弧状の圏線で囲み、外区に瘤状の珠文を密に並べる宝相華文。瓦当は側面・裏面とも撫で調整で、焼成はややあまく灰白色を呈する。本部構内A W 25区で、13世紀前葉の井戸S E 1から同文品2点が出土している〔千葉ほか97 Ⅲ232・Ⅲ233〕。

K C M20 (I 438) 一段高い中房に卍文を陽刻し、内区にこぶりの蓮弁を、外区に珠文と圏線をもつ複弁推定八葉蓮華文。周縁もやや幅広で高い。瓦当側面・裏面とも撫で調整で、焼成はややあまく暗灰色を呈する。広隆寺跡出土の平古230、右京区常磐仲ノ町遺跡S X - 8〔京都市埋文研78 PL.18-1〕をはじめ平安京周辺で同文例は多く出土しており、13世紀前半に隆盛するものとされる〔上原95〕。

K C M21 (I 439) 圏線で画した内区に左巴文、外区に唐草文をめぐらす。瓦当外周を縄叩き、裏面は指頭圧痕が著しい。焼成はあまく黄褐色を呈する。同文例は総合人間学部構内A N 23区T P 2溝S D 1で出土している〔宇野・岡田79 V 18〕。

K C M22 (I 440～I 452・I 455) 巴文瓦のほとんどをこの型式にまとめ、以下のように巻き方向や外区珠文帯の特徴で5大別し、それを圏線や巴の形状などで細別する。

A：左巴文・外区珠文帯有り (Aa：圏線有り／Ab：圏線無し)。

B：右巴文・外区珠文帯有り (Ba：圏線有り／Bb：圏線無し)。

C：左巴文・外区珠文帯無し (いずれも圏線は無く、Ca：範浅く巴文幅広／Cb：範深く巴文の彫り深い／Cc：丸み帯び尾の長い巴文)。

D：右巴文・外区珠文帯無し (Da：圏線有り／Db：圏線無し、おおぶりの陰刻巴文／Dc：圏線無し、範深く巴文の彫り深い／Dd：圏線無し、丸み帯び尾の長い巴文)。

X：巴文であることはわかるが、残りが少なく詳細不明。

古代・中世の瓦類

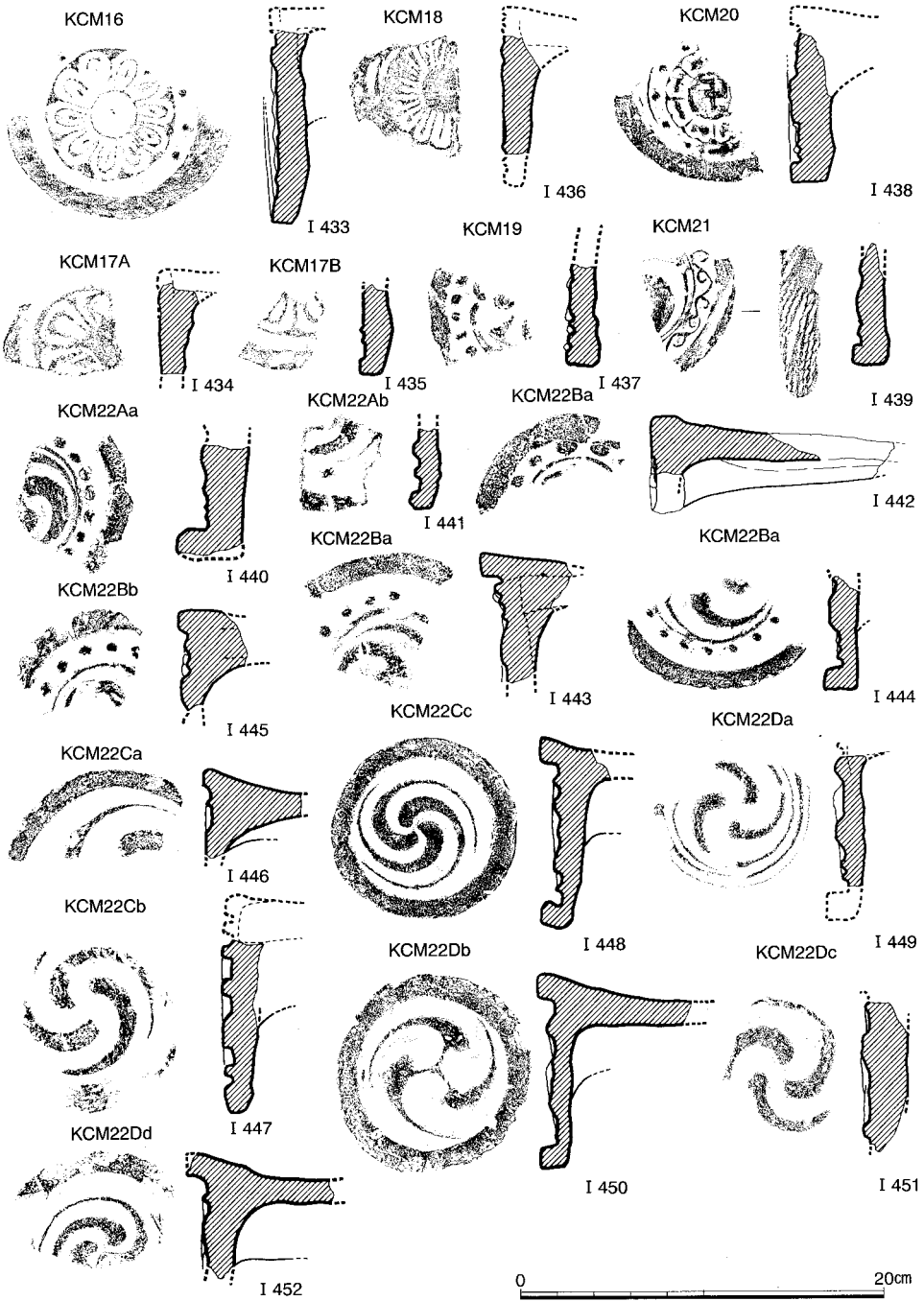


図28 軒丸瓦(2) (KCM16~22Dd)

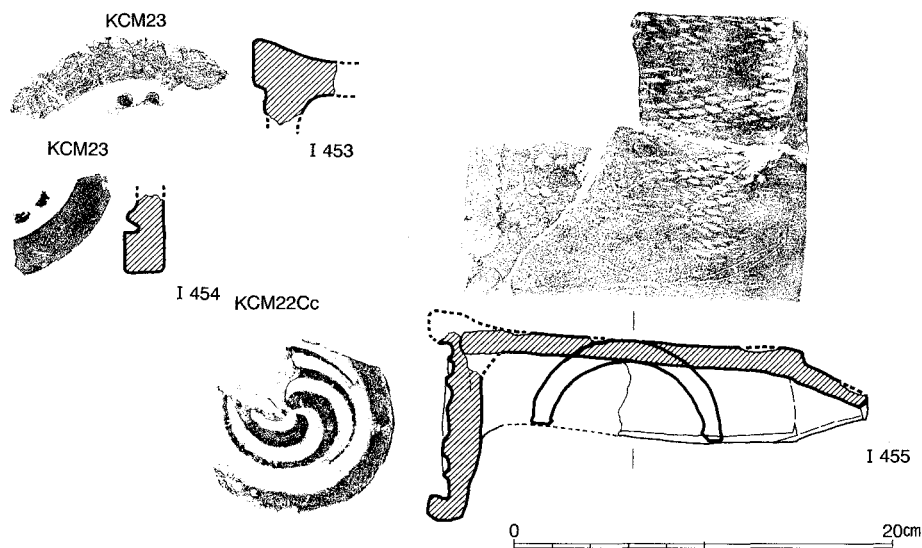


図29 軒丸瓦(3) (KCM22Cc・23)

以上のうち、CbとDc、CcとDdは巻きの方向が逆転するだけでその他の特徴はほぼ等しい。焼成はややあまめで黒灰色を呈するものが最も多いが、量的に主体を占めるCcには、硬質で青灰色を呈して銀色の光沢を有するものがみられる。また、このCcが最も残りがよく、瓦当径のわかる4個体は10.5～10.8cmの幅におさまり、筒部と接合して唯一全長のわかるI 455によれば全長23.9cm、筒部外面は縄叩き磨り消しで玉縁寄りの隅に篋記号、内面は細かな布目で側面は篋削り、瓦当の裏面は撫で調整である。なお、点数的には多いが、型式内での同范がはっきりと確認できるものはなかった。

この種の巴文モチーフの瓦は、京都大学構内遺跡の各地点をはじめ多くの出土例がある。上原真人氏による詳細な分析が行われた大覚寺御所跡では、13世紀後半～14世紀初頭に年代づけられる第Ⅱ期瓦群の軒丸瓦の主体をなしている〔上原97〕。ただし、上原氏に本調査区出土品を検討していただいたところ、大覚寺との間で同范関係にあるものは確認できなかった。また、主体となる細別型式にもずれがあり、大覚寺で量的に多いのは左巴で巴の頭部が離れるDKM12Aで、本調査区では3点しか出土していないCbにあたるほか、大覚寺で少ない左巴の頭部がほぼ接するDKM12B・Cは、本調査区では量的に最も多いCcに相当している。同様に、大覚寺では右巴となるDKM13A・Bや外区珠文帯を有する左巴のDKM14も一定量出土しているが、本調査区でそれらに相当するKCM22DおよびAは少量で、むしろ右巴で外区珠文帯をもつKCM22B（大覚寺では1点しか出土して

いないDKM15)が多く出土している。

KCM23 (I 453・I 454) 瓦当径が15cmを越え、周縁も幅2cmあまりとなる大型品で、外区に大粒の珠文を配するものをこの型式にまとめる。内区の残りは少ないが、いずれも巴文になると思われる。基本的に全体が丁寧な撫で調整で、硬い焼成で黄褐色や灰白色を呈する。特徴からみて、おそらく中世後半以降近世にかけての巴文瓦であり、出土層位もそれを支持する。

(2) 軒平瓦 (図版17~19, 表3, 図30~33)

総量、種類とも軒丸瓦より圧倒的に多く、文様不明の18点を含め総計154点。KCH1~30に区分した。25までは唐草文系統のモチーフが中心となり、27・28は巴文系統となる。軒丸瓦と異なり複数点出土しているものも多い。多数を占めるのはKCH30とした剣頭文モチーフで、多くのバリエーションがあり、SD11・53から多く出土している。これらは、巴文軒丸瓦と同様に13世紀前葉以前の遺構からは出土せず、調査区一帯での剣頭文軒平瓦の使用年代を考えるうえで示唆的である。以下、型式別に説明する。

KCH1 (I 456) 肉厚の唐草文と界線を持ち、脇区や外区に小粒の珠文を配する均整唐草文。凹面は粗い布目、曲線顎の凸面は縦位に篋削りし、顎下端は横に削って面をとる。顎には粘土を貼り付けた痕跡が明瞭にわかる。砂粒を多く含む胎土で、焼成はややあまく灰褐色を呈する。内裏跡出土の平古383と類似モチーフで、平安中期だろう。

KCH2 (I 457) 中心飾りとして置かれた立位の蓮華文しかわからないが、均整唐草文とみられる。界線の外側には扁平で大粒な珠文をもつ。凹面には瓦当面から4cmのところ布端が段をなしており、瓦当上縁部は1cm幅で篋削りされて斜めに面をなす。砂粒を多く含む胎土で、焼成はやや甘く灰褐色を呈する。

KCH3 (I 458) 扁平でおおぶりの主葉が強く巻いて展開する唐草文。太い界線を持ち外区に大粒の珠文を配するが、脇区はない。篋の打ち込みは浅い。瓦当上縁は斜めに篋削りして面取りし、凹面には粗い布目がある。粘土貼り付けによる曲線顎で、内裏跡出土の平古429や右京区森ヶ東窯に同文品がある〔平田・加納91 図3-7〕。

KCH4 (I 459) 「く」字及びその逆転したものを並列するモチーフを基本とする幾何学文。中心を境に文様は反転するようだが、右半分のモチーフはかなり混乱しており、全体的に篋が浅く不鮮明である。瓦当上縁部や側面は篋削り、凹面にはかなり粗い布目痕が残る。焼成は甘く黄褐色を呈する。

KCH5 (I 460) 斜格子文モチーフを基本とする幾何学文。横に長い長方形を割

付の基本単位とし、その内部に対角線をひいているようである。凹面には細かな布目がみられる。焼成はあまく黄褐色を呈する。

KCH6 (I 461) 細めの界線で囲まれた幅の狭い内区に、単葉の蕨手文三葉が反転しながら展開するモチーフで、中心飾りは不明だが均整唐草文だろう。上下の外区と脇区に小粒の珠文を配する。抉りの弱い曲線顎で、顎下端は横撫で、凸面は粗く撫でつけ、側面は篋削り、凹面は粗い布目が残る。焼成は硬く青灰色を呈する。

KCH7 (I 462) 薄肉彫の雲盤状花文が右向きに配される。右側面付近の小片のため全容は不明だが、民部省跡出土の平古546を参考にすると、つり下げた花文を中央に置き、左右に花文を連ねる宝相華唐草文とみられる。瓦当面に成形時の篋切り痕が筋状に残り、凹面に細かな布目がある。焼成はややあまく灰白色を呈する。10世紀中葉に比定される平安宮内裏からも類品が出土している〔網・鈴木89 図版24-26〕。

KCH8 (I 463) 枝葉が密に分岐し大きく強く巻く唐草文が互いに向き合う意匠の均整唐草文で、細い突線で彫り深く描出される。屈曲のきつい曲線顎で頸部に指頭圧痕が顕著に残り、幅のある顎下端は篋削り、凹面には成形時の糸切痕と浅く細かな布目が残る。焼成は硬く青灰色を呈する。一般に右京区森ヶ東瓦窯の製品に比定されており、11世紀後半の中央官衛系瓦屋第Ⅱ期に特徴的なものに分類される〔上原78〕。

KCH9 (I 464) 意匠としてはKCH8に類似するものとみられるが、瓦当面が大きく、唐草文もより太い線で大きく描かれる。顎の屈曲もいっそうきつくなり、下端は篋削りするが頸部は丁寧に横撫でしている。凹面には糸切り痕と細かな布目が残り、硬い焼成で灰色を呈する。年代や系譜はKCH8と同様に考えられようが、技法的により新しい時期の傾向が認められるといえる。

KCH10 (I 465) 左から右に向かって枝葉を配しながら展開する偏向唐草文。右端に界線状のものがある。篋は浅く木目痕が残る。凹面には糸切痕と布目痕が残り、瓦当面から1cmほどのところに布端の痕跡がある。凸面は丁寧に撫でつけられ顎下端面は軽く削っている。凸面の瓦当寄りの左隅に並行2本線のヘラ記号があるが、撫でにより消され気味である。ややあまい焼成で黒灰色を呈する。内裏跡出土の平古464・465のほか、栗栖野瓦窯にも同文品が存在し、12世紀前半の中央官衛系瓦屋第Ⅲ期に属する〔上原78〕。

KCH11 (I 466) 瓦当面はかなり荒れているが、下からのぞく花菱風半截宝相華文であることがわかる。瓦当面および顎の表面には緑釉とみられるような付着物がある。ほかには表面が荒れて調整技法はうかがいがいにくいが、平古第3図呈示例のような、法成寺

古代・中世の瓦類

表3 軒平瓦の遺構別出土点数

型式	遺構		SD 19	SD 33	SD11		SD53		その他 中世遺構	茶褐色土	段差内 堆積層	斜面 堆積層	上層混入	計
	SD 55	SD 56			(上層)	(下層)	(上層)	(下層)						
KCH 1	1													1
KCH 2													1	1
KCH 3					1	1								2
KCH 4	1	1									1			3
KCH 5								1						1
KCH 6									1			1		2
KCH 7					1									1
KCH 8				1							2			3
KCH 9									1					1
KCH10								1						1
KCH11												1		1
KCH12						1	1				1			3
KCH13				2	1		1	1	1		3		1	9
KCH14										1	1			2
KCH15				1										1
KCH16							1							1
KCH17						1								1
KCH18												1		1
KCH19								1						1
KCH20				1									1	2
KCH21									1		1			2
KCH22												1		1
KCH23								1	1					2
KCH24						1								1
KCH25					3	1	3					1	1	9
KCH26											1			1
KCH27				1										1
KCH28			2	6						1			2	11
KCH29				1										1
KCH30Aa										1				1
KCH30Ab												1		1
KCH30B								1						1
KCH30C					1							1	1	3
KCH30D							1	1					1	3
KCH30E							2				1			3
KCH30Fa							1							1
KCH30Fb						1	2							3
KCH30Fc				1				1						2
KCH30Ga				1			1							2
KCH30Gb				1			1							2
KCH30Gc						2	1				1			4
KCH30Gd							3				1			4
KCH30H					6		13	4	1	2	4	2	4	36
KCH30I					1		1				1			3
*KCHX	1		1	2	2	2	5	1	1		1	1	1	18
計	3	1	3	15	19	10	41	10	5	5	19	10	13	154

*KCHX：瓦当文様不明の軒平瓦

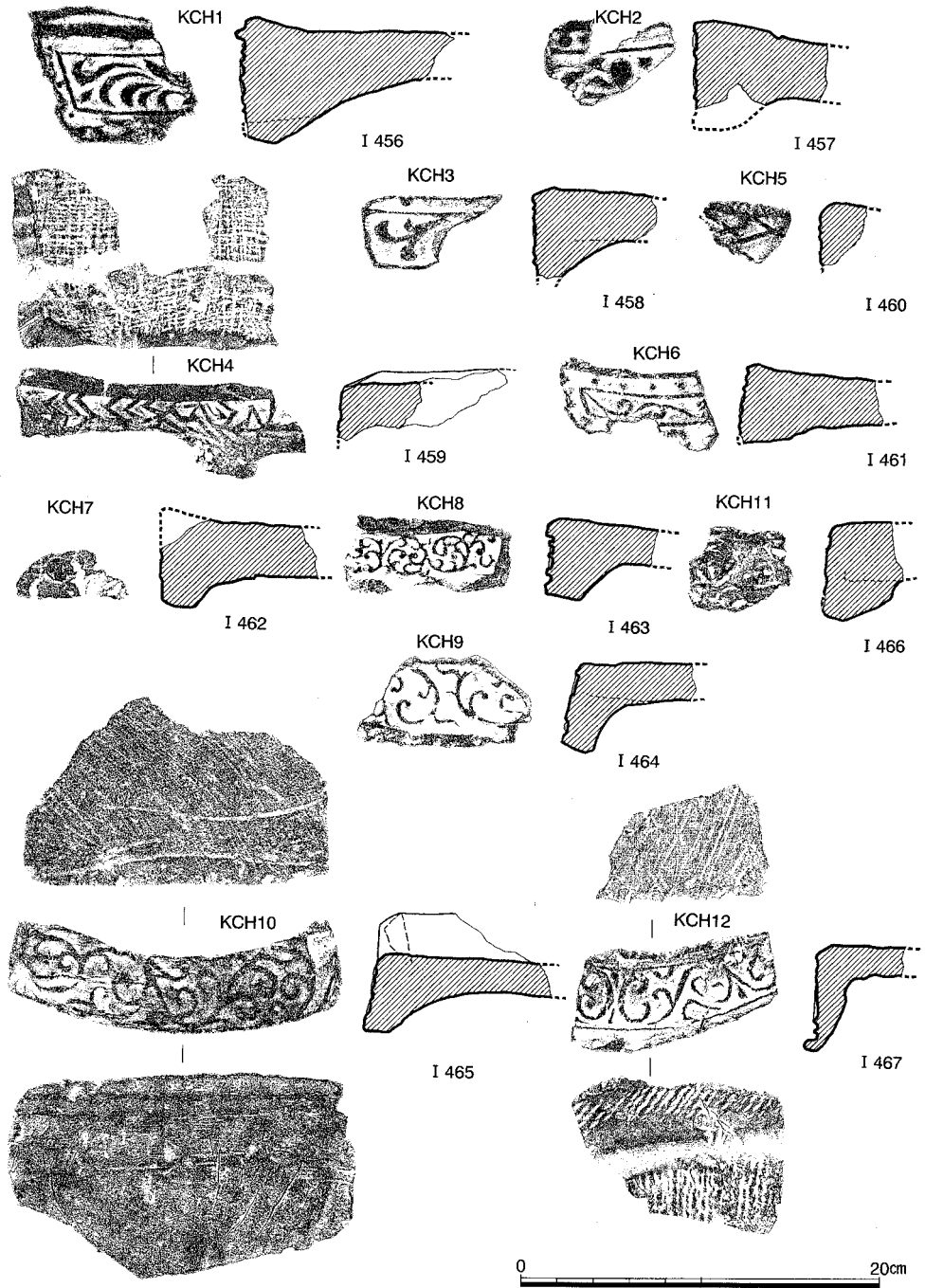


図30 軒平瓦(1) (KCH1~12)

古代・中世の瓦類

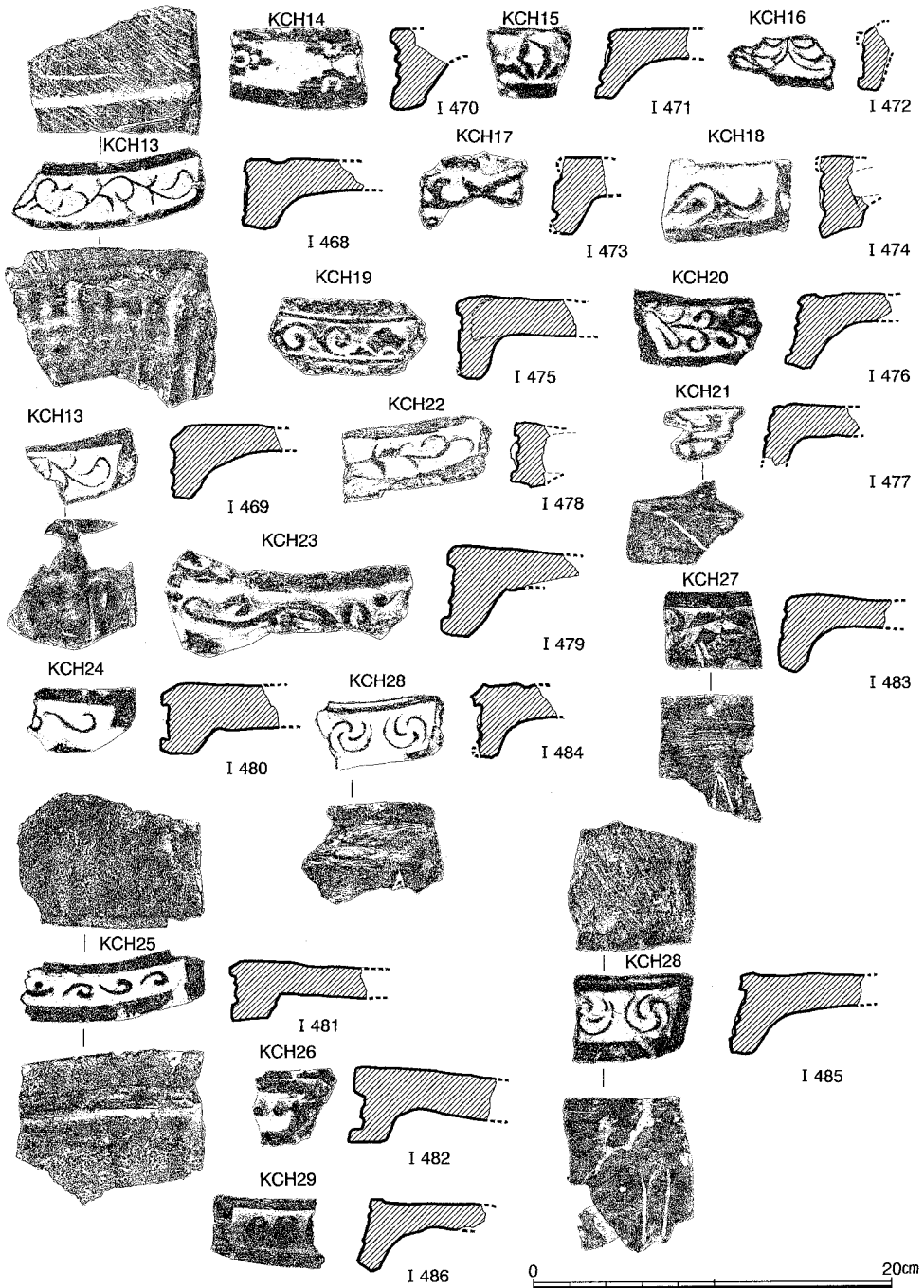


図31 軒平瓦(2) (KCH13~29)

出土の丹波王子瓦窯産の半截宝相華文軒平瓦と同文とみられる。

KCH12 (I 467) 中央に互いに背向するC字文を置く均整唐草文。廠手文は途切れながら展開し、隙間を小葉で埋める。上下には細い界線をもつが珠文は無い。平瓦部と瓦当部ともに同じ厚さでほぼ直角をなし、凸面と瓦当部の先端付近に縄叩目が残る、頸部は強く横撫でされている。凹面は細かな布目痕が瓦当部付近までおよぶ。硬い焼成で青灰色を呈する。以上の特徴は、12世紀前葉ころの丹波系瓦屋の製品であることを示す。

KCH13 (I 468・I 469) 先の尖った細線による偏向唐草文。唐草文系の中では最も多く出土している。頸は横位の軽い削り、瓦当裏面から頸部にかけては粘土を充足したことともなう指頭圧痕が顕著に残り、凸面は縦位方向の強い撫で、凹面には糸切痕と細かな布目が残る。焼成は比較的硬いものが多く、灰白色あるいは黒灰色を呈する。太い刻線による籠記号をもつものがある (I 469)。この型式は12世紀中葉の中央官衛系瓦屋第Ⅳ期に比定され、栗栖野瓦窯をはじめ多数の同範・同文品が知られる。

KCH14 (I 470) 花卉の小さな宝相華文と、上下からのぞくその半截花文を交互に配する。頸は横位の籠削り、瓦当裏面は指頭圧痕が横撫でにより消される。焼成はやや軟質で灰色を呈する。瓦当の成形は、折り曲げ後に上下に粘土を貼り付けるなどKCH13と同様な技法に拠っている。同文品は南ノ庄田瓦窯でMSH13とされるもの〔京都市埋文研98 図版5-23〕、栢杜遺跡八角円堂跡のJ種〔鳥羽離宮跡調査研究所75 p.34〕がある。

KCH15 (I 471) 互いに向き合う「く」字状文を用いた半截花文が置かれる瓦当面の左隅が残る。鈍角に曲がる頸や瓦当裏面は撫で調整で、凹面には細かな布目が残る。やや軟質焼成で黒色を呈する。KCH14と同様、栢杜遺跡八角円堂跡に同文品があり、中央官衛系瓦屋第Ⅳ期に比定されている。

KCH16 (I 472) 細く短い唐草文が上部から左右に開くモチーフ。かなり退化した均整唐草文といえ、残りが悪いため調整技法は定かではないが、瓦当部分は薄く、軟質焼成で黄褐色を呈する。同文は、平古522のほか、本部構内A X 25区などから出土しており〔古賀99 II 344〕、KCH13～15と同様な年代観でとらえられよう。

KCH17 (I 473) 退化した唐草文の一部になるとみられる太い隆線による眼鏡状モチーフ。類例が無く全体像は不明。瓦当裏面は細い縄叩き痕と曲げ皺がそのまま残り、凹面には細かな布目がみられる。砂粒を多量に含む胎土で、軟質の焼成であり、灰褐色を呈する。技法的な面からは古代末期の京周辺の製品と推定される。

KCH18 (I 474) 大きくゆったりと巻く唐草文の一部で、範の木目が鮮明に残る。

瓦当上端付近の凹面は粗く撫でつけられ、顎には成形時の糸切痕が横位の筋状にはしる。裏面には平瓦部の離脱痕が明瞭に残り、やや軟質の焼成で灰白色を呈する。瓦当部が接合技法によることや文様モチーフから、12世紀代の播磨系瓦屋の製品とみられる。

KCH19 (I 475) 中央に半截花文を置き、強く巻く唐草文が左右に展開するモチーフ。上下に太い界線をもつ。顎の調整は摩滅して不明だが、瓦当裏面から頸部にかけては強く横撫でされており、凹面も瓦当付近は幅広く撫で調整されている。断面で見ると、弱く折り曲げられた平瓦部先端に粘土を補って瓦当を成形しているように見える。やや軟質の焼成で灰色を呈する。12世紀代の中央官衙系瓦屋の製品の可能性が高いが、モチーフと技法は讃岐系の瓦屋にも存在し得るもので、讃岐産の可能性も残す。

KCH20 (I 476) 蕨手状の主葉が中心へ向かって展開するモチーフ。鈍角をなす顎は軽く篋削り、瓦当裏面から頸部にかけては丁寧に撫で調整される。凹面は風化して不明。やや軟質の焼成で黒灰色を呈する。南ノ庄田瓦窯でMSH04とされるものが同文品であり〔京都市埋文研98 図版5-4〕、12世紀代の中央官衙系瓦屋の製品とみてよからう。

KCH21 (I 477) 直線的な茎の上下に扁平に変形した葉が配される唐草文。顎は軽く篋削り、瓦当裏面から頸部にかけては丁寧に横撫です。凹面は細かな布目痕のほか、瓦当上端付近2cm幅ほどは撫で調整で指頭圧痕が残る。凸面側瓦当寄り左隅に、鋭い刻線による篋記号をもつものがある。やや軟質の焼成で黒灰色を呈する。12世紀代の中央官衙系瓦屋の製作技法に従うもので、系譜と年代もその範疇で考えられる。

KCH22 (I 478) 中央に肉厚な花文が横向きに置かれ、そこから細く鋭い主葉がのびる宝相華唐草文。顎は横撫で、瓦当裏面に平瓦部の離脱した接合痕が残る。硬い焼成で灰色を呈する。モチーフや瓦当部接合技法からみて、KCH18と同様12世紀代の播磨系瓦屋の製品である可能性が高い。

KCH23 (I 479) 中心飾りとして2弁の省略化された花文を置き、そこから肉厚な線による主葉が緩やかに波打って伸びる推定均整唐草文。顎は軽く篋削り、瓦当裏面は横撫で、頸部から平瓦部にかけては縦位方向に板撫でされ、屈曲部に板状工具の木口圧痕が顕著に残る。凹面は瓦当面から2cm幅のところに粗めの布端がくる。軟質の焼成で、黒灰色を呈する。周辺に類例を知らないモチーフであるが、製作技法は平安時代末期の中央官衙系瓦屋の範疇に入るものである。

KCH24 (I 480) 細い線により強く巻く蕨手文が描かれる。おそらくこれらが中心飾りを挟んで向き合うモチーフの均整唐草文であろう。瓦当の成形は顎貼り付け式の可

能性がある。顎は幅広く面をもち、瓦当裏面ともども横撫でされる。平瓦部はかなり厚みがあり、凸面凹面とも丁寧撫で調整されて表面を平滑にしているが、離れ砂が付着してざらつきがみられる。特徴からみて13世紀代に下るものだろう。

KCH25 (I 481) 唐草文系のモチーフのなかではKCH13とともに多い。中心飾りに「山」字状に退化した蓮華文を置き、3反転する蕨手を左右に配する均整唐草文。瓦当面における内区の幅は狭く、周縁の占める比率が高い。成形は瓦当貼り付け式とみられる。顎および瓦当裏面から頸部にかけてを横撫で、凸面は縦位に撫で、凹面は細かな布目をほとんどすり消すのが基本であるが、一部の個体は頸部に成形台や工具の先端の痕跡が残る。焼成は堅緻で青灰色を呈し、銀色の光沢をもつものもある。瓦当貼り付け式の成形は13世紀中頃に南都で採用されたとされ〔佐川95〕、本例は少なくともそれ以降、14世紀代に下る可能性が高い。今回出土の中世瓦のうち時期的に最も新しい一群だろう。類品は中京区の押小路殿跡第2次調査で多く出土している〔古代学協会84 第24図〕。

KCH26 (I 482) 内区におおぶりの珠文を一列連ねたいわゆる連珠文で、周縁の幅は広い。顎は丁寧撫で、瓦当裏面から頸部を経て平瓦部まで、板状工具により縦位方向にひとつづきの撫で調整。凹面は布目がすり消されている。瓦当の接合は顎貼り付け式の可能性がある。硬い焼成で灰色を呈する。13世紀代以降のものであろう。

KCH27 (I 483) トンボ形に変容した中心飾りしか残っていないが、左右に巴文を配するモチーフと想定される。範は浅い。顎の先端は丸みを帯び、頸部にかけての部分とともに横撫で調整される。凸面に篋記号があり、凹面は糸切り痕と細かな布目が残る。KCH14・15などとともに栢杜遺跡八角円堂跡から出土しており、12世紀中葉の中央官衛系瓦屋の製品とみられる。

KCH28 (I 484・I 485) 左巴と右巴を交互に配するいわゆる連巴文。剣頭文以外では最も多く出土している。ただし残存率が悪いので、KCH27のように中心飾りを置くモチーフと区別できていない可能性もある。鈍角につく顎は軽く篋削りし、瓦当裏面から頸部にかけては撫で調整で、指頭圧痕を残す。凹面は糸切り痕と細かな布目のほか、一部の個体に成形台端部の痕跡も残る。図示した2点は凸面に篋記号が確認できたものだが、部位は同じでもモチーフがそれぞれ異なる。また瓦当の成形も、折り曲げと充填によるもののほか、明らかに顎を貼り付けているかのように見えるものもあり、一定していない。いずれにしる12世紀中葉の中央官衛系瓦屋第IV期を代表する軒平瓦である。

KCH29 (I 486) 「0」字状の単位文を連ねるモチーフで、範は浅い。同文例に

よると、中心に崩れた唐草文を配するようである。顎は軽く篋削りし、頸部付近は横撫で、指頭圧痕が残る。凹面には細かな布目がそのまま残され、硬い焼成で灰色を呈する。栗栖野瓦窯には類似モチーフがあり〔京都市埋文研86 図版13-9〕、技法的な特徴からみて、12世紀中葉の中央官衛系瓦屋第Ⅳ期ころの製品とみてよからう。

KCH30 (I 487～I 503) 本調査区出土軒平瓦の中心をなす剣頭文をこの型式にまとめた。以下に示すように、主として剣頭の特徴によりA～Iに大別し、形の細部や調整技法の違いから、それをさらに細別した。

- A：中心飾りに巴文を置き、左右に剣頭文 (Aa：中心飾り左巴／Ab：中心飾り右巴)。
- B：剣頭内部の子葉が3本になる特殊なもの。
- C：彫りの深いおおぶりの剣頭で、縦に長く、子葉も太く長いもの。
- D：おおぶりの剣頭で、横に幅広いもの。
- E：ややおおぶりの剣頭で、顎や瓦当裏面に縄叩き痕を顕著に残すもの。
- F：こぶりで縦に細長い剣頭で、篋がやや浅い (Fa：子葉が幅広く扁平／Fb：子葉が幅広く肉厚／Fc：子葉が細く鋭利)。
- G：やや縦に長い剣頭で、篋が浅い (Ga：凹面の布目が粗い／Gb：凹面の布目が細かく瓦当裏面にも頸部から連続する布目残る／Gc：凹面の布目が細かい／Gd：凹面の布目細かいが、ほとんど磨り消されている)
- H：縦と横の長さのバランスのとれた剣頭で、彫りが深い。本調査区の剣頭文の主流となるもので、完存品では剣頭の数6個、顎と瓦当裏面から頸部にかけてを横撫で、平瓦部凸面は縦位方向に撫で、凹面は細かな布目を1/2以上すり消している。瓦当面を上にした場合の凸面右上隅に、篋描きの弧線と直線を組み合わせた記号文をもつものがある。なお、ほとんど特徴を共有するが、子葉の先端が尖り気味のものも含まれる (I 502)。
- I：上下幅の狭い瓦当面に、こぶりの剣頭文を配するもの

以上のうち、AからGまでは、剣頭の数や大きさもばらつきがあるほか、概して凹面に布目をそのまま残すもので、頸部に曲げ皺や指頭圧痕や布目などのさまざまな痕跡も残している。また焼成も軟質から硬質まで多様である。一方、主体を占めるHは、瓦当文様のみならず、凹面の布目すり消し、顎や頸部の強い横撫で仕上げ、凸面の縦位の撫で、焼成堅緻で灰色を呈するといった技術的特徴もセットで定型化しており、かなり限られた数の瓦工の手になるものと想定される。

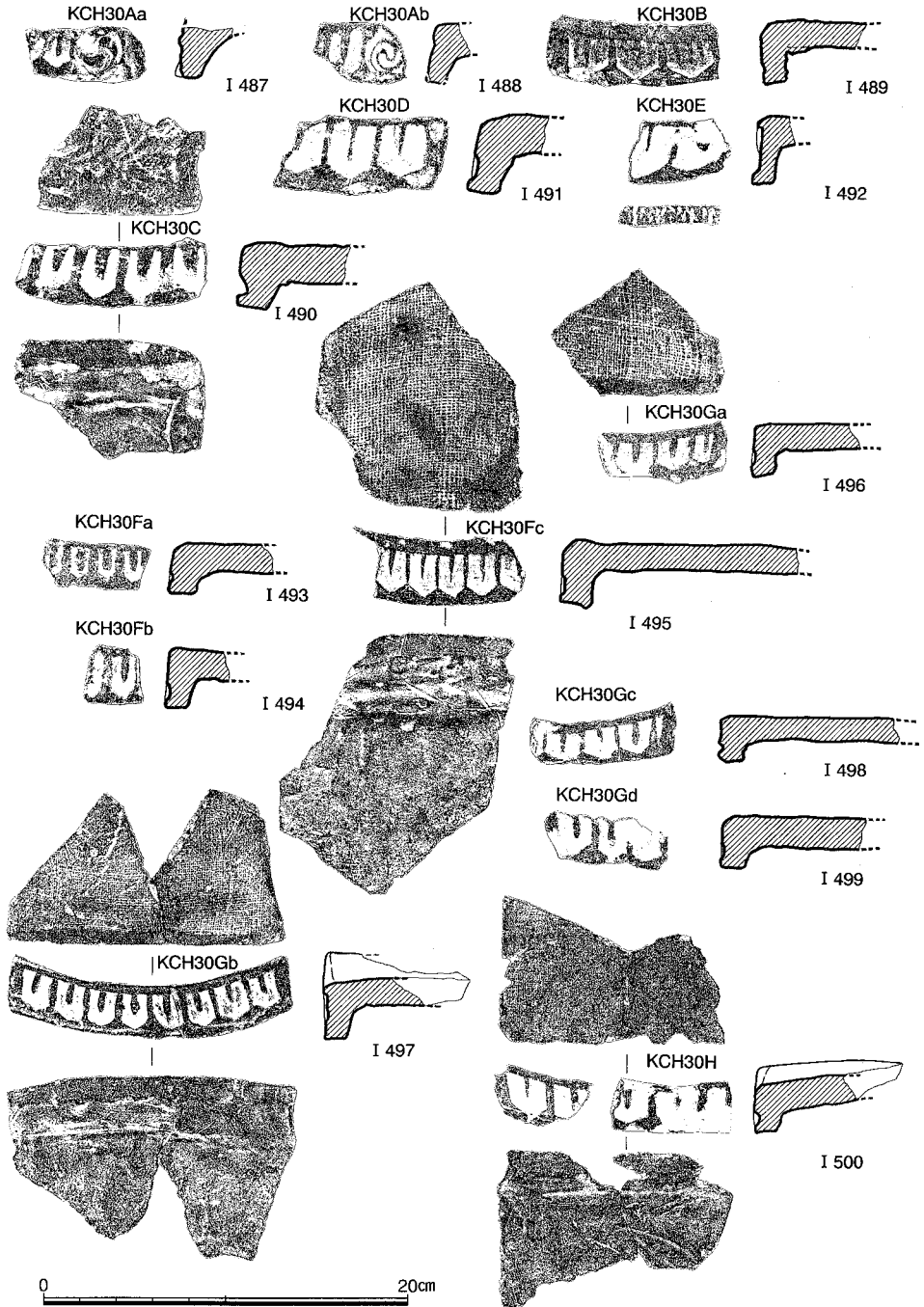


図32 軒平瓦(3) (KCH30Aa~H)

古代・中世の瓦類

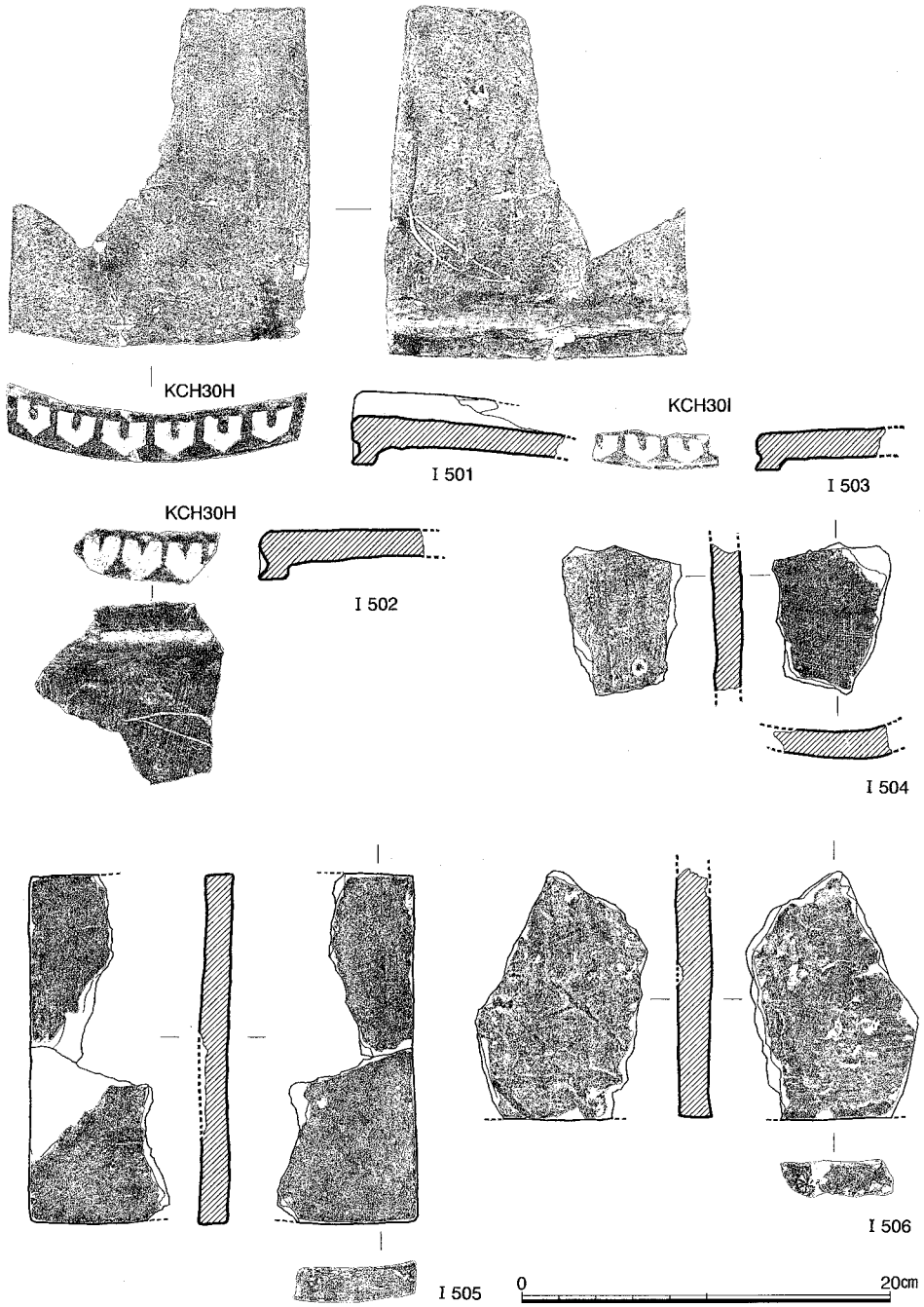


図33 軒平瓦(4) (KCH30H・I), 平瓦(1) (I 504~I 506)

また、大覚寺御所跡第Ⅱ期瓦群との比較では、DKH14Eと同範の可能性のあるものが13点確認されたほか、凸面側に凹型成形台の痕跡が明瞭に残るといった特徴が共通していた。ただし、凸面側調整手法では、DKH14Eは指押えであり、KCH30Hとは異なっている。そして、大覚寺出土品で、Hと同じ凸面縦位撫で仕上げのものにはDKH14Gがあり、後述するように、この型式に対応する篋記号もHと同じであるが、大覚寺での総破片182点中の3点しか出土していない。

(3) 篋記号・刻印・緑釉瓦 (図版19, 図33~35, 表4)

軒丸瓦・丸瓦の篋記号 細い篋描直線をまず描きそれに弧線を組み合わせるモチーフのⅠ類と、それ以外のモチーフのⅡ類に大別した。

Ⅰ類は、玉縁側を下にして弧線が左側にくる逆D字形のⅠA類が圧倒的多数を占め、右側に来るⅠB類は少ない。唯一の軒丸瓦の完存品であるI455によれば、ⅠA類は巴文軒丸瓦KCM22Ccの玉縁寄り左隅に描かれている。ⅠB類は、瓦当の有無は不明だが玉縁寄り右隅に描かれたことが明らかなものが1点ある。

Ⅱ類は、個体差が大きい。X字形を単位とするモチーフをA類、1本の直線や平行線モチーフをB類、玉縁に施された横位の平行直線をC類とする。ⅡA類は、いずれも丸瓦凸面玉縁寄りに描かれ、おおぶりのX文を連ねるもの(I511)、X文と直線を組み合わせるもの(I512)、こぶりのX文を単独で施すもの(図35-e)などがある。ⅡB類には、2条の平行直線を玉縁寄り右隅に施すもの(g)、1条の斜線のみを同位置に施すもの(h)、中央付近右端に2条の横位の単線を施すもの(f)などがある。玉縁に施されるⅡC類には、右下がりや左下がりの平行する斜線がある(i・j)。いずれも瓦当との対応のわかる個体はないので、軒丸瓦か丸瓦かは不明である。

以上のうちⅠ類は、後述する軒平瓦の篋記号Ⅰ類と同一のモチーフであり、13世紀以前の遺構からは出土せず、巴文軒丸瓦ないしそれとともに用いられる丸瓦に特徴的な篋記号である可能性が高い。また、多数を占めるⅠA類は、大覚寺御所跡第二期瓦群の丸瓦篋記号でのⅢ類、とくにDKM13Aに施されるⅢb類と同一のものとみられる。ただし、本調査区では、この型式と同文と認定できる巴文軒丸瓦は無い。また、Ⅱ類の一部は、大覚寺での篋記号の中心となっているⅠ類やⅡ類に類似するが、施文部位や線の太さなどが異なり、同一のものではないとみられる。

軒平瓦・平瓦の篋記号 軒平瓦の凹面や凸面にみられるもののうち、篋描きの直線と弧線を組み合わせるモチーフをⅠ類、それ以外のモチーフをⅡ類とする。さらに、軒瓦に

古代・中世の瓦類

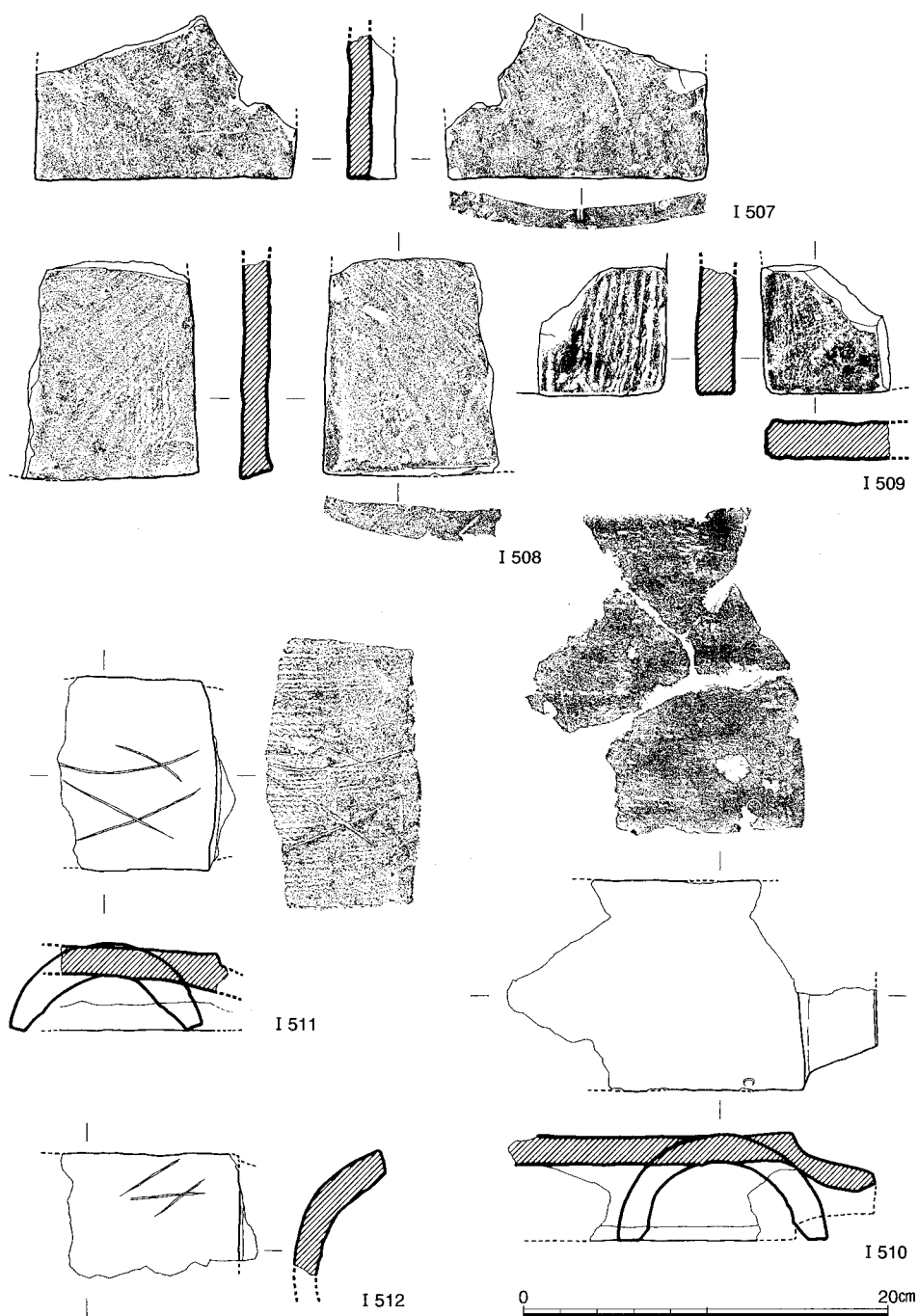


図34 平瓦(2) (I 507~ I 509), 丸瓦 (I 510~ I 512)

表4 籠記号・刻印の遺構別出土点数

種類	遺構	SD	SD	SD	SD	SD11		SD53		その他 中世遺構	茶褐色土	段差内 堆積層	斜面 堆積層	上層混入	計
		55	56	19	33	(上層)	(下層)	(上層)	(下層)						
〔丸瓦籠記号〕	I A					2	7	6				1	2		18
	I B					1						1			2
	II A				1					1	1	1			4
	II B	1			2	1	1			1	1	1	1		9
	II C				2	1									3
	計	1	0	0	5	1	4	8	6	2	2	4	3	0	36
〔平瓦籠記号〕	I					3	1	4	1	1		1	1	1	13
	II A							1							1
	II B				2			2		2		2		1	9
	II C			1	2	1									4
	III A						1	2							3
	III B				1	1	2				1	2			7
	計	0	0	1	5	5	4	9	1	3	1	5	1	2	37
〔刻印〕	A類(□)					1		4	1				1		7
	B類(*)											1			1
	C類(○)					1	1	1							3
	計	0	0	0	0	2	1	5	1	0	0	1	1	0	11

なるかどうかは不明だが、平瓦部の端面に施されている籠記号をⅢ類とする。

I類は、やや太めの籠描直線→弧線の順に描いてD字状の記号を作る(図35-k)。軒丸瓦の籠記号I類とモチーフは等しいが、施文具は異なる。KCH30Hの平瓦部凸面瓦当寄りの部位にのみみられ(たとえばI501)、同型式にはこの記号のみが組み合う。ただし、籠記号を持たないものは確実に存在し、施文率は1/2以下になるとみられる。

II類は、丸瓦と同様X字形を単位とするモチーフをA類、1本の直線や平行線モチーフをB類とし、それ以外をC類として一括する。II A類と明確に指摘できるのは1点のみで、KCH30Fcの凹面中央に、細線による2個のX字文と平行線を並べたものがある(I495, 図35-1)。II B類は、ほとんどが凸面の瓦当に近い位置の施文で、KCH10にみられる横位方向の短い平行線(I465)、13にみられる1条の鋭い縦位直線(I469, 図35-m)、28にみられる2条の鋭い縦位平行直線(I485, 同n)が、明瞭なものとして注意される。II C類は、弧線など直線以外の線状モチーフの単独ないし組み合わせになるもので、単独のものはKCH30Cの凸面(I490)、組み合わせるものは27の凸面(I483, 同o)のほか、28にも同類の籠記号が認められる。

III類は、端面に施されるもので、おおむね凸面に縄叩き痕や糸切り痕、凹面に糸切り痕を残すような平瓦に特徴的に認められる。籠先の刺突による斜線モチーフをIII A類とする

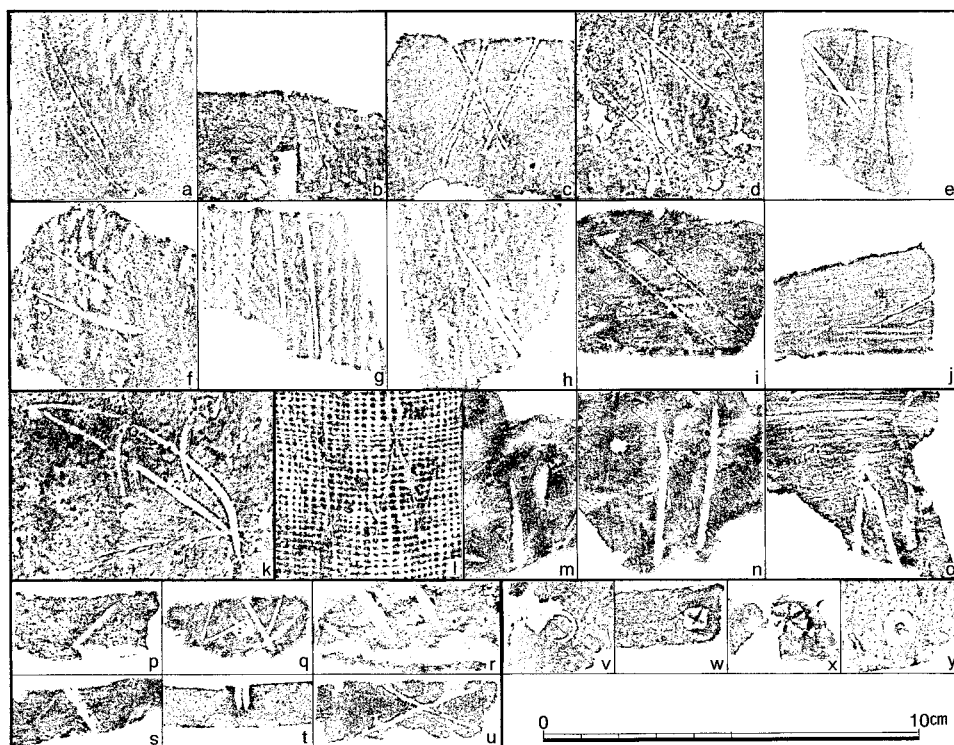


図35 篋記号・刻印 (a:丸ⅠA類, b:丸ⅠB類, c~e:丸ⅡA類, f~h:丸ⅡB類, i・j:丸Ⅱc類, k:平Ⅰ類, l:平ⅡA類, m・n:平ⅡB類, o:平Ⅱc類, p:平ⅢA類, q~u:平ⅢB類, v:丸瓦刻印, w:刻印A類, x:刻印B類, y:刻印C類) 縮尺1/2

(I 508, 同 p)。一方Ⅲ B類は、それ以外の多様なものを一括した。篋描きによるものが多いが、I 507は、中軸線上の凹面寄りの角に篋先刺突を2個並列させる(図35-t)。

以上は、Ⅰ類とKCH30Hとの組み合わせが、先述したように大覚寺御所跡第二期瓦群での篋記号Ⅲ b類とDKH14Gとの組み合わせに一致している。ただし、大覚寺ではさわめて少数で、同范関係もない。Ⅱ類については、Ⅱ A類が大覚寺でのⅡ類に、Ⅱ B類の一部が同Ⅰ類に、Ⅱ C類の一部が同Ⅲ a類に見かけ上類似する。しかし、本調査区出土例がほとんど凸面側施文であるのに対して、大覚寺ではⅢ b類以外凹面側施文となっている。

刻 印 丸瓦にともなうものは1点で、縄叩きを丁寧にすり消した凸面の玉縁寄り右隅に、管状工具で浅く刺突している(I 510, 図35-v)。それ以外は大別して3種で、対角線をもつ5~6mm四方の正方形スタンプによるものをA類(I 505, 同w)、*印スタンプをB類(I 506, 同x)、円形の管状工具による刺突をC類(I 504, 同y)とする。

量的に最も多いのはA類で、凹・凸面側ともに離れ砂の痕跡ののこる平瓦ないし鬘斗瓦の端面に施されている。1点のみ出土のB類は、凸面に格子目叩きが残る平瓦端面である。C類は、縦位に撫で調整されている平瓦部凸面の中央付近に施される。凹面側に細かな布目とそのすり消しがみられることと、凸面側の調整などの特徴からみて、KCH30Hの軒平瓦である可能性が高い。刻印が37点ある大覚寺御所跡第二期瓦群の平瓦・鬘斗瓦では、本調査区で1点しかないA類の刻印が18点あり、逆に本調査区で目立つB類は1点のみしかみられない。また大覚寺では、格子目叩きの製品の出土は報告されていない。

緑 釉 瓦 濃緑色の釉のかかる平瓦ないし鬘斗瓦が2点ある。いずれも凹面はやや粗めの布目、凸面に縄叩き痕を残し、軟質の焼成で黄白色を呈する。I 509は、側面周辺部のみに施釉しており、鬘斗瓦の可能性が高い。平安後期以前のものであろう。このほかに、軒丸瓦ではKCM3 (I 420)、軒平瓦のKCH11 (I 466)に施釉痕跡が認められる。微量ではあるがこのような施釉瓦が含まれている理由として、平安京およびその周辺で用いられたものを再利用したものと想定されよう。

(4) ま と め

これまでみてきたように、今回出土の瓦群の年代は、おおむね10世紀代から14世紀代の長期間にわたるが、およその年代毎のまとまりは以下ようになる。

まず、少量だが平安中期にさかのぼる一群がある (KCM1・2, KCH1・2・4など)。ついで、平安後期の中央官衙系瓦屋の製品がある。ただしI・II期のものは少なく (KCM9, KCH6など)、12世紀代に下るIII・IV期の製品が複数点まとまっている (KCM16・18, KCH13・28など)。最後は中世の製品で、巴文軒丸瓦と剣頭文軒平瓦の組み合わせ、特にKCM22CcとKCH30Hを中心とし、KCM20やKCH25などが加わる状況であった。これらは14・15世紀代にかけて使用され、最終的にSD11・53の放棄に際し、他の陶磁器類などとともにまとめて廃棄されたのだろう。

なお、大覚寺御所跡第二期瓦群とは、主体となる剣頭文軒平瓦どうしに若干の同範関係が確認されたが、製作技術、篋記号、刻印といった属性で共通する製品はかなり少ないことが判明した。少なくとも同一製作者の手になる製品はほとんど存在せず、供給元の工房も異なっていた可能性が高いといえよう。一方で、医学部構内A O 18区の瓦溜SK12出土品は大覚寺と酷似する一括資料と評価され〔上原95〕、今回の出土資料とは性格を異にする。このほかにも中世の瓦類は構内遺跡で数多く出土しており、今後は、これらとも比較検討を進め、それぞれの地点別に建物の性格づけを試みていくことが課題といえよう。

7 近世の遺跡

(1) 遺 構 (図版3・4, 図36)

近世の遺構には、多数の柵列と野壺、溝のほか、胞衣壺の埋納遺構などがある。また、 $X=1510 \cdot Y=2260$ ライン付近には、北から南および東から西へ下る比高差60cm程度の段差が中世から継続して存在し、灰褐色土を掘り上げると、段々畑状の景観があらわれる。柵列はこの段差内に、野壺の多くは段差上の高地に列をなしている。これらの遺構は、出土遺物からみてほとんどが江戸時代でも後半期以降に比定され、段差内の灰褐色土中からは、最も時期が下るもので明治17年の紀年をもつ半銭硬貨が出土している。したがって、明治22(1889)年の三高の本部構内への設置、あるいは明治30(1897)年の京都帝国大学創立にともなう三高の現総合人間学部構内への移転を契機とする地均しが実施されるまで、島地として利用されつづけていた可能性が高い。以下、主要な遺構について説明する。

SX1は、段差の北東コーナー付近の斜面にある。攪乱によりかなり破壊され本来の状態を保っていなかったが、楕円形の土坑内に、内面に墨書した蓋I513を土師器の壺I514にかぶせた状態で、正位に埋置していたとみられる。壺の内容物は不明。同様な壺の埋納土坑がAT27区で見つかっており〔五十川81〕、胞衣壺の埋納遺構とみられる。

SX2は、完形の土師器皿I515・I516が互いに口縁を向かい合わせた状態で水平に埋置されており、その横で染付の小瓶が横倒しの状態で出土したものとを、関連をもつひとつの埋納遺構として取り扱った。灰褐色土下層中で検出され、掘り込みは不明。

野壺SE1～4・6～30は、 $Y=2260$ ライン付近で南北方向に列をなし、なかでも $X=1490 \sim 1505$ 付近の段差上に集中しており、多数が互いに切り合って存在する。ほとんどは円形で径1m深さ50cm内外の規模で、垂直に落ちる外壁とすり鉢状の底部を厚い漆喰で固めた構造のものである。一部漆喰のみられないものもあるが、ブロック状に漆喰の痕跡が存在しており、作り直しにともない取り除かれた可能性が高い。なお、木桶の痕跡が確認できたものはない。出土遺物から、ほとんどが18世紀後半以降のものと思われる。

溝SD8・26・27・31は、段差の斜面際にめぐらされている溝で、耕作地の排水や湿気抜きのためのものだろう。基本的に幅30cm深さ10cm程度の規模だが、SD8は不定形でひとまわり大きく、18世紀代の遺物や礫がややまとまって出土した。一方SD1は、段差上面の $Y=2260$ 付近を南北にはしる浅い溝で、粒子の粗い砂層を埋土としており、幅1m深さ30cm程度をはかる。溝というよりも畦道であった可能性もある。表土直下で検出され、

漆喰の野壺を切っていること、方位がほぼ真南北で他の近世遺構と異なること、出土遺物にも新しい様相がみられることから、明治期以降の遺構であろう。

柵列は、段差内で無数に検出された一辺20cm強の方形のピット群から東西方向の並びを復原した。わずかに真北から東に振る方位で柱間約2mをはかるものが最も多い。なお、X=1515付近の段差際には、灰褐色土の下層でまず畝状の土堤が検出され、それを除去するとピットが列を成していた。崖際に杭を用いた土留めをしていたものとみられる。

(2) 遺物 (図版20, 図37~40)

S X 1 出土遺物 (I 513・I 514) I 513は土師器蓋。口縁部から内面にかけては回転による撫で調整、頂部外面は撫でにより平らにする。内面に墨書文字があるが、残存部が少なく判読不能。I 514は、これと組み合う土師器壺で、弱く張る胴部の器壁は厚く、そこから口縁部が短く上方へ立ち上がる。内面は回転撫で調整にともない器面がゆるやかに波打っており、外面下半は軽く削られる。I 513・I 514ともに淡褐色を呈し、精良な胎土を用いた丁寧なつくりで、埋納容器として専用に作られたものとみられる。

S X 2 出土遺物 (I 515~I 517) I 515・I 516は土師器皿。ともに淡赤褐色を呈し、口縁部周辺を強く横撫でする。I 515は見込みに鋭い圏線をもつが、I 516はこれよりこぶりで丸底を呈する。灰褐色土出土の土師器皿と較べて径が大きく厚手でしっかりしたつくりであり、18世紀代でも前半にさかのぼるものだろう。I 517は磁器染付の小瓶。底面も含め全面施釉で、胴部にX字状文と花文が手書きされている。

灰褐色土出土遺物 (I 518~I 571・I 587~I 591) I 518~I 529は土師器皿類。色調は基本的に明るい灰白色系。I 518~I 522は見込みに圏線をもつタイプで、径の大きいI 521・I 522はその圏線の部位で破損している。I 518・I 519は外面に細かな布目痕が残る。I 522は口縁部周辺から内面にかけて薄い淡緑色の釉がかかる。I 523~I 526は内面全体をひといきに撫で上げて仕上げるタイプ。I 525の内面も薄く施釉される。I 527は内面に粗い布目圧痕が残るタイプで、凸型に粘土を押し付けて成形したものとみられる。平面は不整形円形で、外面に指頭圧痕が残る。I 528も型づくりだが、凹型成形とみられ、正円形で器表面は平滑。胎土中に離型材の雲母が多量に混じり、やや赤みを帯びた色調を呈する。I 529は内面に墨書をもつ皿で、「困難…」と読め、その内側は塗りつぶされている。

I 530は土師器炮烙。口縁端部が帯状に肥厚する。型づくりとみられ、外面には離脱剤の雲母片が多くみられる。内面の底部と外面全面に煤が付着している。

I 531~I 543は陶製の灯火具。I 531~I 537は灯明皿で、口縁端部から内面側が施釉さ

近世の遺跡

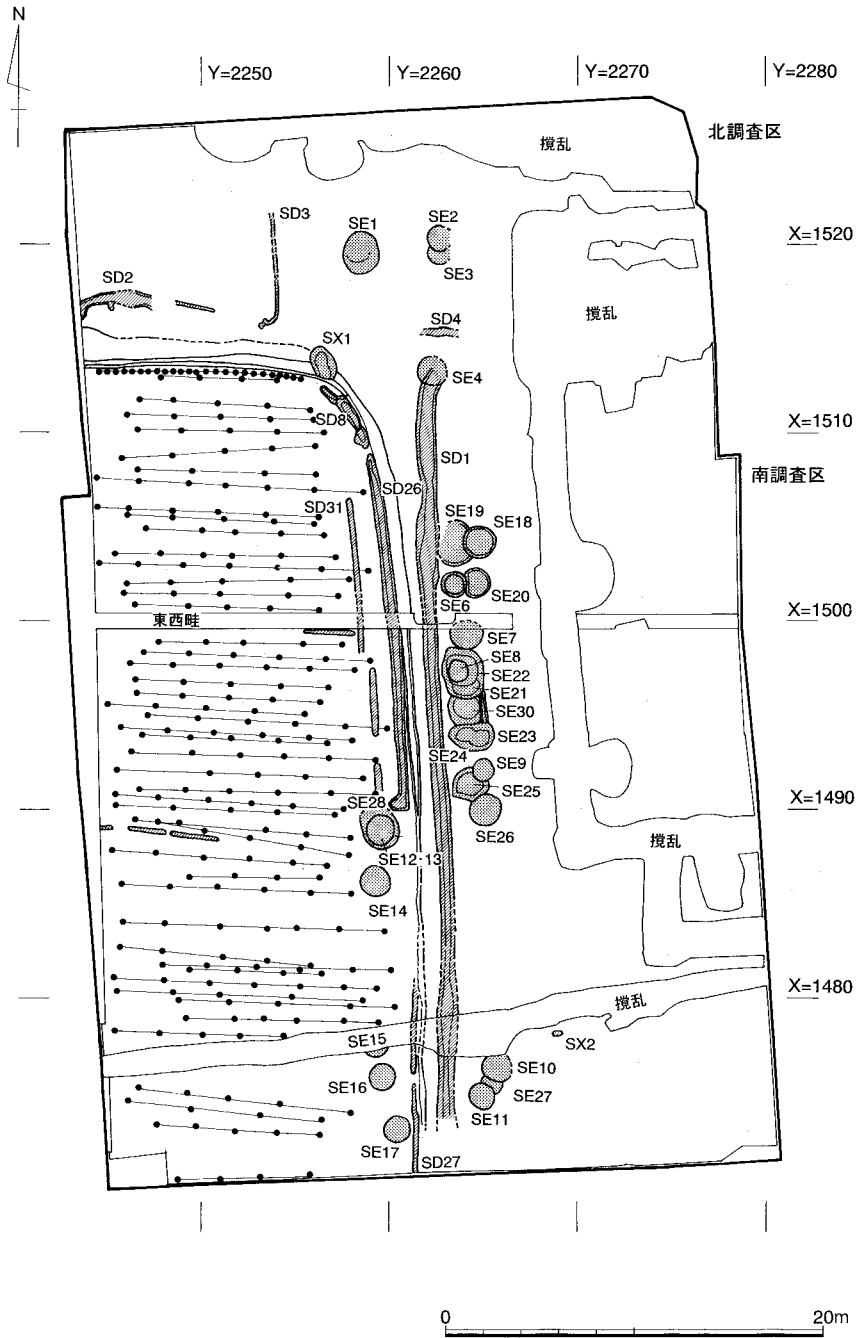


図36 近世の遺構 縮尺1/400

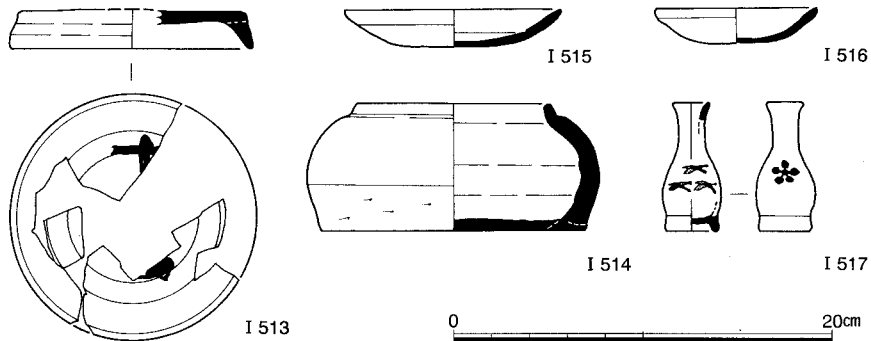


図37 S X 1 出土遺物 (I 513・I 514土師器),
S X 2 出土遺物 (I 515・I 516土師器, I 517染付)

れる。I 536が灰色の胎土と釉であるほかは、いずれも黄白色系の胎土と釉である。外面の調整は横撫でを基調にしなが、底部周辺の回転篋削りのおよぶ範囲によって、器体中位にまでおよぶ (I 531～I 533)、底面のみ (I 534・I 535)、削り調整無しで回転糸切り痕残る (I 536・I 537)、の3者がある。また、I 532・I 534～I 536は、内面に重ね焼きのための小さな粘土粒が2～3点残る。I 531・I 532は口縁の外周に煤の付着が著しい。I 538～I 541はいわゆる灯明受皿。いずれも内面は全面施釉で、黄白色の胎土と釉である。外面は、底部周辺が回転篋削り、それ以外を横撫で。受け部には浅いU字形の切り込みが入る。I 542は脚付の灯明受皿。底面以外は全面施釉で、胎土や色調は灯明受皿に同じ。I 543・I 544は乗燭。I 543は中実の短脚付きで、灯明皿と胎土や色調を同じくする。I 544は灰色の胎土に茶褐色の釉がかかるもので、底部には回転糸切り痕が残る。以上の灯火具類のうち、灯明皿・灯明受皿類については口径6～7cmまでに収まる小型品しか認められず、19世紀代以降の製品が中心となるものと判断される。

I 545～I 550は陶器各種。I 545の小皿は、胎土や釉調が灯明皿と同じ黄白色系で、内面に黒色の錆絵で草木文を描く。底部露胎で回転篋削り調整する点、内面見込みに粘土粒三点の重ね焼き痕がある点なども灯明皿と共通し、同一産地とみられる。I 546・I 547は刷毛目文の椀。I 546は、底部周辺が露胎で、器壁も薄く文様も粗雑である。一方I 547は暗赤褐色の胎土に全面施釉されている。I 548は椀の底部。白色の精良な胎土で、内面は淡黄白色の施釉で錆絵による楼閣山水文が描かれる。底面中央に円形の浅い凹みがあり、その脇に「十吉」の刻印がある。こうした特徴は肥前産の京焼風陶器と共通し [角谷92]、本例も該当する可能性がある。I 549は御神酒徳利、I 550は仏飯。ともに底面以外に暗緑

近世の遺跡

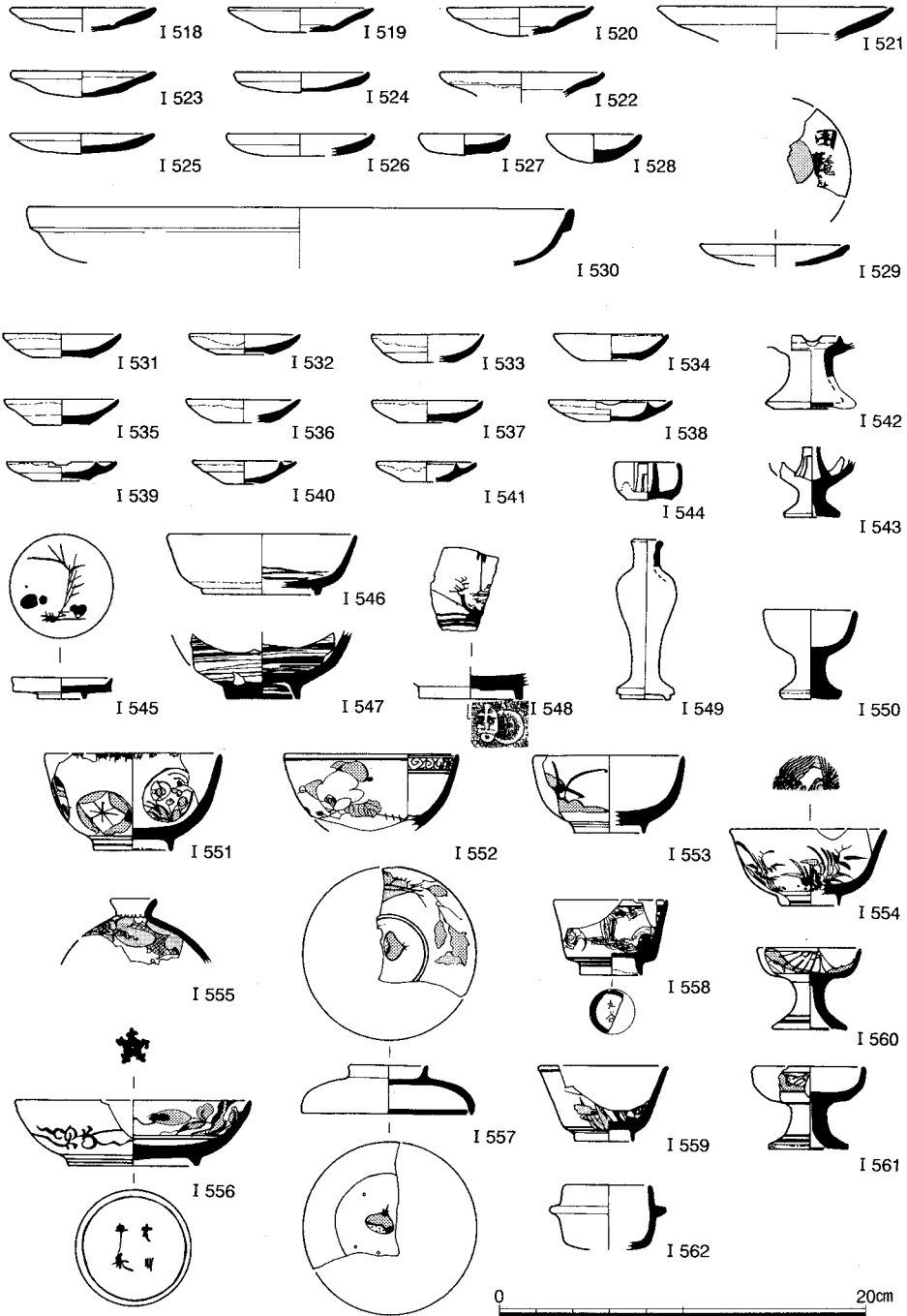


図38 灰褐色土出土遺物(1) (I 518~ I 529土師器, I 531~ I 550陶器, I 551~562染付)

色の厚い釉がかかる。胎土は黄白色で灯明皿などと共通し、在地産だろう。

I 551～I 562は磁器染付。18・19世紀代の各種のものがみられるが、残りは良くない。I 555・I 558・I 560は色絵で、朱色に絵付けされる。I 562は羽釜で、磁胎に透明釉がかかるのみで文様をもたない。実用品ではないだろう。

I 563～I 566は、外面に鋭い金釘状のもので刻書する陶器。これまで病院構内では、幕末の歌人大田垣蓮月が自作の和歌を刻書した陶器である「蓮月焼」がまとまって出土しているが〔浜崎・宮本87, および本年報第3章〕, これらもそれに該当する可能性が高い。とくにI 563の猪口は、内面に厚い淡緑色の釉, 外面を葉脈状の突線で装飾し, 「いふ月よ／蓮月」の刻書が読みとれる。I 564は, 外面に淡茶褐色の錆釉がかかる急須の口縁部, I 565は内外両面に淡黄白色の釉がかかる小皿, I 566は内外面とも透明釉がかかる器種不明の陶片で, これら3点の刻書は判読できないが, 特徴は蓮月焼と共通している。

I 567・I 568は, それぞれ磁器の散り蓮華と煙管吸口。構内遺跡での出土例は少ない。

I 569・I 570は, 素焼の土製の型で, いずれも原型を粘土板や粘土塊に押し付け転写したものとみられる。I 569はおおぶりの葉を描くモチーフで, 背面は削って平らにされているが, 何に用いた型か不明。I 570には魚が表現されており, その面が平らに整えられていることから, 2つを向かい合わせに用いて魚形の土製品を製作したものとみられる。

I 571は青銅製の煙管雁首。ラウに用いられていた竹管が残る。火皿部は厚さ1mm強と厚手だが, それ以外は薄い青銅板を曲げて製作している。

I 587～I 591は軒瓦。I 587～I 590は軒棧瓦の瓦当部分で, I 591はいわゆる菊丸瓦。図40-a～eは近世瓦の木口面に押捺された刻印。出土した近世の瓦は少量であり, 瓦当部分がある程度残っているものや, 刻印をもつものは図示したこれらの例のみにとどまる。

S D 8 出土遺物 (I 572・I 578) I 572は土師器皿。見込みに圏線をもち, 灰白色を呈する。灰褐色土のものとからべるとやや厚手といえる。I 578は陶器の刷毛目文碗。淡黄褐色の胎土で, 内外全面が褐色と乳白色の縞状に施文される。

S E 16 出土遺物 (I 573・I 574・I 577・I 580) I 573・I 574は土師器の皿と蓋。I 573は浅い丸底で, 灰白色を呈する。I 574は落とし蓋状の栓で, つまみには紐穴が穿孔されている。I 577は灯明受皿。口縁端部から内側は全面淡黄緑色に施釉。I 580は磁器染付の椀で, 外面に二重線による網目文を描く。

S E 20 出土遺物 (I 575・I 579) I 575は灯明皿。黄白色の胎土と釉調をもつもので, 外面の口縁周辺には煤が付着し, 内面に小さな粘土粒2点が残る。底面には回転糸切

近世の遺跡

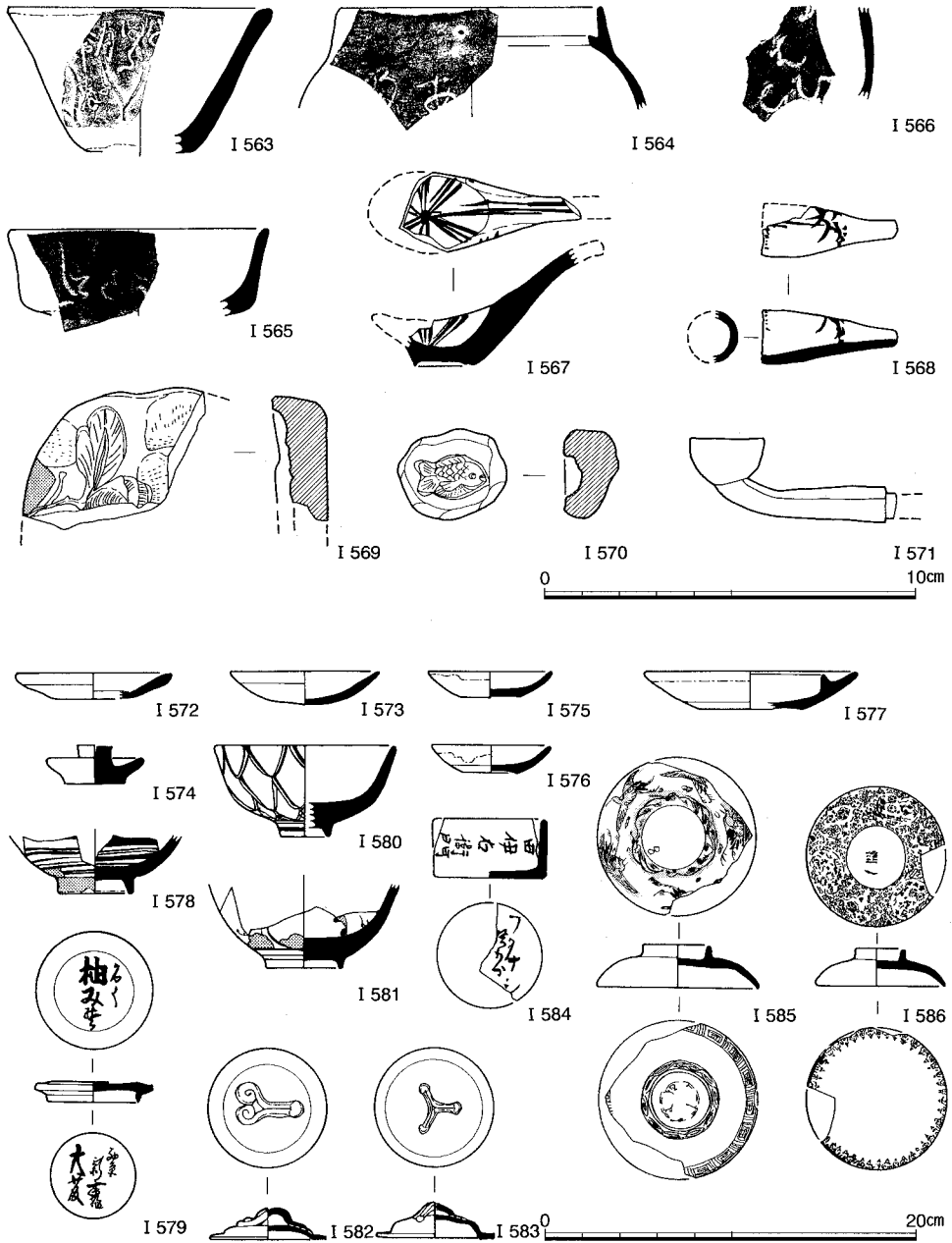


図39 灰褐色土出土遺物(2) (I 563~ I 566陶器, I 567・I 568染付, I 569・I 570土製品, I 571青銅製品), S D 8 出土遺物 (I 572土師器, I 578陶器), S E 16 出土遺物 (I 573・I 574土師器, I 577陶器, I 580染付), S E 20 出土遺物 (I 575・579陶器), S D 1 出土遺物 (I 576・I 582・I 583陶器, I 584~ I 586染付) I 563~ I 571縮尺1/2

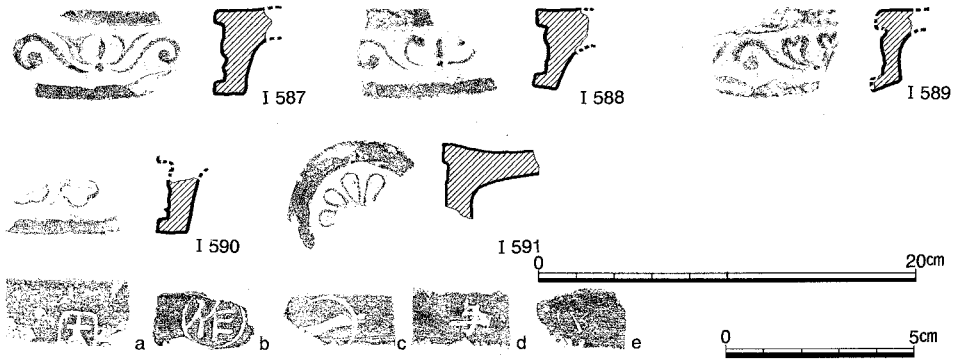


図40 近世瓦と刻印（いずれも灰褐色土出土），I 587～I 591縮尺1/4，a～e縮尺1/2

り痕が残る。I 579は蓋で、外面のみ施釉。朱書で外面に「名代／柚みそ」、内面に「仲京／新京極／大菱」とあることから、販売用の柚味噌容器の蓋であったとわかる。

斜面堆積層出土遺物（I 581） I 581は磁器染付で、いわゆる「くらわんか手」の椀。斜面堆積層からこうした遺物が出土することより、それを埋積させている灰褐色土が18世紀後葉以降の堆積であることが示唆されよう。

SD 1 出土遺物（I 576・I 582～I 586） I 576は陶器灯明皿。I 582・I 583は素焼きの蓋で、薄い粘土円盤を凹型で成形したものとみられ、布目や指頭の圧痕が著しく残る。I 584～I 586は磁器染付。I 584は小型の段重とみられ、側面に「…田伊右衛門…」と釉書きされる。底部は露胎で墨書があるが、判読不能。I 585・I 586は蓋。I 586は外面に型紙刷りの鹿子文様が濃い藍色で絵付けされ、明治期以降に下る製品とみられる。

8 小 結

(1) 遺構の変遷について（図41・表5）

遺構出土遺物の年代的なまとまりからみると、一帯での土地の改変をとまなうような活動には強弱の波があり、いくつかの画期が想定される。ここで遺構の変遷を簡潔にまとめ、文献記事から想定される活動者達や出来事との関連についても考えておきたい。

弥生時代前期 量的にまとまる最古段階の出土資料は弥生前期末の土器であり、この時期を第一の画期とみなす。今回は土器棺墓のみの発見だが、近接して居住地があったことは間違いない。西南方150mのA O 22区に検出面の比高差3.5mで水田遺構があり、生業活動の管理に適した居住地選択が、水稻農耕開始とともに本格化した状況がうかがえる。

奈良時代（8世紀） 次いで8世紀中葉を中心とした奈良時代の資料がまとまり、第

小 結

表5 調査地関連年表

	主要な遺構・遺物	包含層	関連事項
弥生時代	SK9・13~15	黒褐色土	
古墳時代	須恵器・埴輪		
(前) 8世紀(中) (後)	SK5・10~12・16・17,SD25・60・62・63	↓	
(前) 9世紀(中) (後)			吉田社・吉田寺創始
(前) 10世紀(中) (後)	SK6・8,SD12・13・16・24・56・61		↑
(前) 11世紀(中) (後)	SD55	↓	1077法勝寺建立 (以後六勝寺造営)
(前) 12世紀(中) (後)			1118~白河北殿造営 1151福勝院建立 1156保元の乱 1199浄蓮華院建立
(前) 13世紀(中) (後)	SD33 SD19		茶褐色土
(前) 14世紀(中) (後)	SE5	↑	1337吉田定房吉野退転
(前) 15世紀(中) (後)	SD11・53・54, 不定形土坑		1468吉田郷焼き討ち 1492吉田社殿再興
(前) 16世紀(中) (後)			斜面堆積層 段差内堆積層 このころ「吉田構」 1533浄蓮華院退転
(前) 17世紀(中) (後)		↓	
(前) 18世紀(中) (後)	SX1・2,SD8	↓	
(前) 19世紀(中) (後)	SE1~4・6~30 SD1		灰褐色土

2の画期となる。方位を大きく西に振る小規模な南北・東西溝は互いに直交するような位置関係にあり、それに囲まれた調査区東南部で遺構がまとまることから、何らかの土地区画を示す遺構の可能性もある。周辺では、北東100mのA T 27区で竪穴住居2棟、西南方のA P 22区やA O 22区で掘立柱建物や井戸がみついているが、いずれも遺構密度は薄く、この時期の遺構は広域にわたり散漫に分布する傾向が強い。したがって、郡衙や駅家などの計画的施設ではなく、「里」「郷」ないしそれ以下の単位にかかわる集落と想定されよう。

平安時代（10・11世紀） 10世紀中葉～11世紀前葉に南北・東西方向の大小溝群が掘削され、第3の画期となる。とくにY=2250～2260の範囲に南北溝が集中し、重要度の高い境界の存在が想定される。なおこの境界は、南方100mのA P 25区においてもその延長とみるべきものが検出され〔難波89a〕、中世以後も位置は継承されている。調査地付近に「古狭海道」を想定する主張もあるが〔足利83〕、路面や側溝は確認できなかった。一帯に関しては、吉田社をはじめ、神楽岡周辺での葬送や吉田寺の存在が文献記事で知られ、9世紀後葉以降継続的に開発の手が及んでいた。とくに吉田社は、元来藤原北家支流の山陰一族の氏社として創始されたものが、一条朝（986～1011）以降急速に発展し、藤原氏の氏社として藤氏長者の管領下に置かれるようになったとされる〔並木82〕。ここでの溝群も、そうした展開を反映した開発と土地区画の発生を示すものであろう。

鎌倉時代（13世紀） 12世紀後葉～13世紀代に再び南北・東西方向の溝が掘削され、第4の画期となる。南北溝は、S D 19をはじめ規模的に大きくないが、幾度かの掘り直しを想定させるように複数条にわたることが特徴となる。また東西溝S D 33は、それまでにない大規模なものであった。この時期は、藤原北家勸修寺流の吉田経房が正治元（1199）年に菩提寺となる浄蓮華院を建立するほか、「吉田南亭」「吉田園領」「吉田角家地」など勸修寺流吉田氏の邸宅や所有地の存在が所領処分状に見え〔中村直41〕、一帯の活動者の主体が知られている。しかし、本部構内の一部や医学部・病院構内を中心に13世紀代の大量廃棄遺構が頻繁にみついているのに対し、本調査区では遺構や包含層中からの出土遺物が量的に乏しく、活動の中心地とは距離の隔たりを感じさせる。

室町時代（14・15世紀） 14世紀後半以降15世紀前半代を中心に、濠状溝の掘削や段差の造成など調査地の歴史上最大の土地改変が実施され、第5の画期となる。遺物の量や種類も豊富で、溝で囲まれた内側での活発な活動が想定できる。構内遺跡全体では、14世紀後葉以降は遺構・遺物の検出量がむしろ減少傾向にあり、建武4（1337）年における勸修寺流吉田氏の氏長者吉田定房の吉野退転など、南北朝内乱に帰因する荒廃を反映する状

小 結

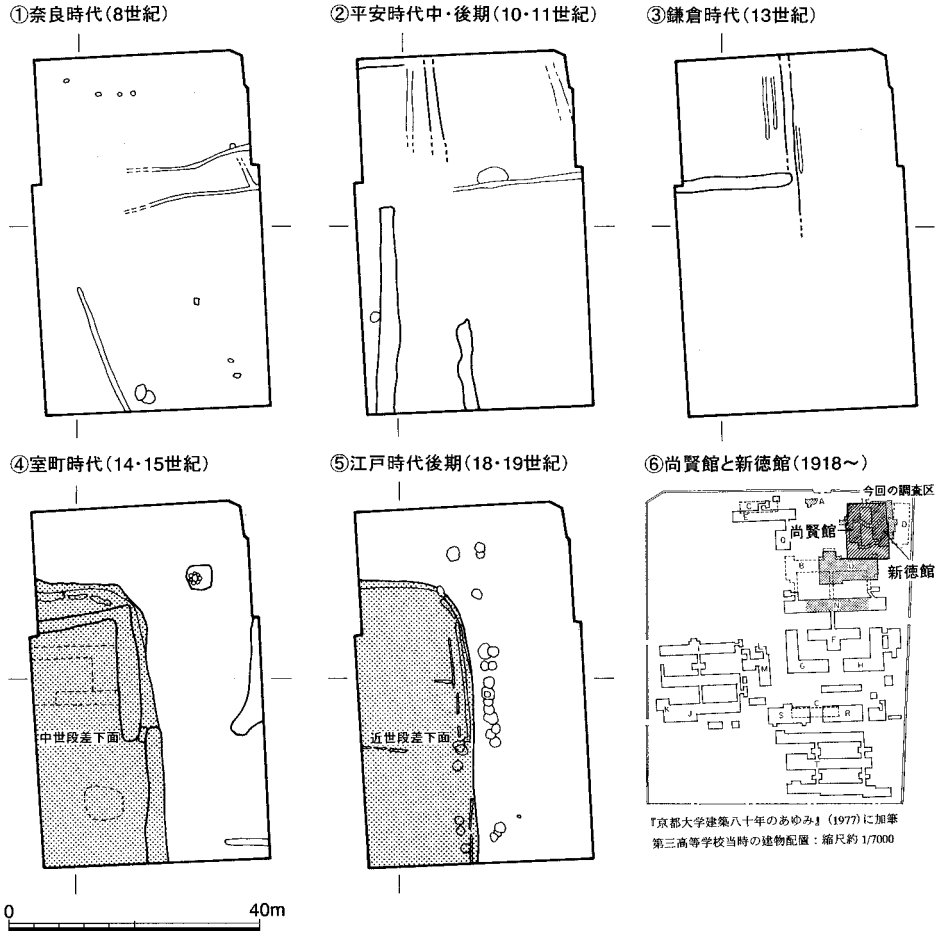


図41 調査区主要遺構の変遷 ①～⑤縮尺1/1200, ⑥縮尺約1/7000

況にある。それに対して今回の成果は年代的にずれ、むしろ南北朝期以降にピークを迎え、応仁の乱を契機とした廃絶がうかがえる。よってここでは以下の2つを想定しておきたい。

第一は、浄蓮華院の衰亡との関連である。『山城名勝志』『京都坊目誌』では、調査地の約300m西方の医学部構内北半に位置を比定しており、その一帯での遺構・遺物の検出状況は、14世紀中葉までであれば、それを支持している。しかしながら、浄蓮華院の領地そのものは、蚕食され耕地化しながらも、16世紀前葉に最終的に吉田社に押領されるまで存続している。こうした歴史的背景と、遺物の示す年代観、蓮華文を象嵌した金具の存在などを考慮すると、今回の調査地についても、余命を保っていた浄蓮華院の東北隅の一画に相当している可能性が指摘できよう。内部にパッチワーク状にみられる畝や植栽の区画は、

あたかも吉田社や郷民により蚕食され荒廃していった状況を示すかのようである。

一方で、第二に、応仁の兵火による焼失後に山上へ遷座する前の吉田社については、旧社地を現総合人間学部構内南半に比定する説がある〔福山77〕。位置的にややずれているけれども、今回の濠状遺構はこうした出来事と年代的に対応し、山上遷座以前の吉田社に關係する施設であった可能性も十分であろう。ただし、出土遺物にはそれを裏付けるものがみられない。むしろ、総合人間学部構内西半から医学部構内東半にかけての一带で、特異なオオヤツカサ土器の一括廃棄など、それにふさわしい出土状況を認めることができる。

江戸時代後期（18・19世紀） 中世後半期の土地区画をそのまま継承しながら、確実に18世紀以降には、パッチワーク状の不統一な畑地の単位は解消され、全域が野壺と柵列で構成される農地へと変化する。大根やかぶらなど商品作物の生産地となる近郊農村の景観が確立したこの時期を第6の画期とする。18世紀前葉の吉田村の状況をあらわす「吉田社周辺絵図」からの復原によると〔浜崎83b〕、今回の調査地に相当する場所には南北に境界線がはしり、西半が畝地、東半が地下屋敷とされる。Y=2260付近に段差と野壺列が存在してそれ以西に柵列が密集している発掘調査の結果と良く対応するといえよう。

尚賢館と新徳館（1918～） 上述の都市近郊農村の景観は、調査地北側の現本部構内に、幕末の文久2（1862）年から明治3（1870）年にかけて尾張藩邸が設置されたことにより、大きく変貌したものと推測される。ただし今回の調査地については、段差を埋積させている灰褐色土中に含まれた銭貨の紀年が最新で明治17（1884）年であることから、明治維新後もしくは畝地が存続した可能性が高い。最終的には、明治30（1897）年の京都帝国大学設立と現総合人間学部構内への三高の移転、という出来事を契機に地均しされたのだろう。西側の医学部構内においても、明治29年に医科大学用地として買収されるまでは、中世以来の柵田が残存していたものと想定されている〔五十川ほか95〕。

『京都大学建築八十年のあゆみ』（1977年）によれば、調査地には、まず1897年に木造平屋建ての生徒控所が建てられたが、その後取り壊され、大正7（1918）年に尚賢館と新徳館が設けられた。これらは三高創立五十周年記念の建物で、尚賢館は大正天皇即位御大典用第二朝集所の建物が下賜移築された本格的な和風建物、新徳館は武田五一設計による木造とコンクリート併用の瀟洒な2階建て建物であった。発掘調査では、表土直下でこれらにとまう1m四方の坪基礎が規則正しく並んで検出されたほか、尚賢館の屋根に吹かれていたスレート材、学生や教官の所持品とみられるインク壺や硯などが多数出土し、学校用地へ変貌した調査地のありようを出土資料からもうかがうことができた。

(2) 出土遺物について

弥生前期の土器 弥生土器は、古代以降の遺物と混在していたため純粋な出土状況とは言えないけれども、特徴からみて前期新段階にほぼまとまるものと判断できる。なかでも、多条の篋描沈線文が文様の中心となるだけでなく、それが複数帯化しているものがみられる点、刻目をもつ貼付突帯文も多条化している点は、前期新段階のなかでもより新相の特徴であるといえる。新段階のまとまったものである北部構内のB A 30区（追分地藏地点）出土資料にこうした特徴は認められないことから、今回の資料は構内遺跡出土の前期土器のうちでも最新段階の一群ととらえられよう〔伊藤99〕。なお、伊勢湾地方東岸部を中心に特徴的にみられる「内傾口縁土器」が、西方100mのA Q 23区に続いて今回も2点出土した。このような条痕文土器の特定器種が近接した地点から相次いで出土する点は、地域間交流のみならず一帯の活動集団を検討するうえでも、注目すべき結果といえよう。

古墳時代の須恵器と埴輪 古墳時代の包含層や遺構は存在しないが、5・6世紀代に比定される須恵器片や家形埴輪片が出土している点に注意される。総合人間学部構内では、西南方約200mのA P 22区で方形墳、その南側のA O 22区では形象埴輪の出土も確認され、「吉田二本松古墳群」の存在が推定されている〔五十川・飛野84, 伊藤99〕。今回の調査成果は、吉田山西麓一帯にひろく古墳が分布し、そのなかに埴輪をとまなうものが少なからず存在する可能性をあらためて示したといえよう。

奈良時代の土器 出土量は多くないが、8世紀中葉ごろの各器種が揃っており、調査地一帯が日常生活の場であったことがうかがえる。ただし、都城を中心に出土がみられる製塩土器が一定量含まれていることは注目され、この遺跡の性格の特異性を表すものかどうか、他の集落遺跡での実態と比較検討していくことが、今後の課題といえる。

平安時代の土器 南北溝S D 55から出土した11世紀前葉に比定される一括資料が注目される。これまで、京都大学構内遺跡の平安時代資料は10世紀代を中心としており、とくに本部構内以南では、この時期のまとまった資料はほとんど出土していない。今回は、土器器皿類を中心とする内容であったものの、編年的に貴重な情報を得ることができた。

古代・中世の瓦 濠状の溝S D 11・53からを中心に、平安中期から室町時代にかけての総計245点におよぶ軒瓦が出土した。これらの溝で囲まれた内側に瓦を用いた建物が存在した可能性を強く示唆する結果といえる。軒先以外の瓦については量的に多くないため、総瓦葺きの建物ではなかったとみられるが、今後周辺での調査に際しては十分に注意を払う必要がある。軒瓦については、瓦当文モチーフだけでも軒丸瓦が23、軒平瓦が30に大

別され、種類の多さがまず注目される。また、巴文軒丸瓦（K C M22）と剣頭文軒平瓦（K C H30）が量的に主体となるが、このうちにもかなりの種類があり、ほかに楕円形瓦当の蓮華文軒丸瓦の一群（K C M16・18）と、偏向唐草文（K C H13）や連巴文軒平瓦（K C H28）も一定量存在し、もうひとつのピークをなす。少なくとも12世紀以降細々ながら建築物が存在し、14世紀以降に大規模化した様相がうかがえる。しかし、瓦については統一的に発注されたものというより、中古品も含めかき集め賄われたという印象が強い。

なお、巴文軒丸瓦と剣頭文軒平瓦については、詳細に分析されている大覚寺御所跡第二期瓦群と比較検討した結果、同範関係は非常に少ないと判明した。窺記号や刻印でも共通するものは稀であり、少なくとも工人レベルでは大覚寺所用瓦との接点を求め難いといえる。よって、大覚寺所用瓦と共通点の多い医学部構内の出土品とも接点をもたないことになり、同構内の建物とは造営母体が異なる可能性が、遺物から示唆されたことになる。この場合、勸修寺流吉田氏とト部氏を中心とする吉田社関連の集団との相違がまず想定されようが、今後地点別出土品の詳細な比較検討を待って、結論を下すことにしたい。

中世の建築金物 S D11から出土した建築用装飾品である「樽の口金具」については、発掘調査での出土報告は無く、中世後半期の金工品の貴重な事例を提供した。同様な装飾品は、中世の絵画資料中に描かれた建築物や現存寺社建築を中心に使用を認めることができ、今回それらとの類似から用途を判断した。とくに、吉田社境内に現存する「行事所」「直会殿」など、幕末期に建築された二×五間の木造建築にみられる長押の釘隠は、波状縁部をもつ青銅製リングと樽の口金具とを組み合わせたもので、頂部に装飾こそ残っていないものの、今回の出土品と構造的にきわめて類似しており興味深い。蓮華文状の銀象嵌をもつような装飾品が一般住宅に使用されるとは考えにくく、寺院や神社など特殊な性格を帯びた建築物の存在を視野に入れる必要があり、その解明は今後の課題としたい。

以上記してきたように、本調査区の発掘調査成果はきわめて多岐にわたり、多くの方々にさまざまなご助力をいただいた。とくに「樽の口金具」の材質は本学環境保全センターに分析していただき、X線撮影について文学研究科の森下章司氏の手を煩わせた。また、大覚寺出土品との比較を中心とした瓦類の検討については文学研究科の上原真人氏に多くの御教示をいただいた。末筆ながら厚く御礼申し上げます。

（補記）1997年度には、西側に隣接するA R24区の発掘調査（図版1-249）や、一帯での広域立合調査によって、掘立柱建物や瓦溜が確認されている。中世に濠状の大溝で囲まれる本調査区の西方一帯が、きわめて重要度の高い空間であることがあらためて裏付けられたといえよう。

第3章 京都大学病院構内AG20・AF20区の発掘調査

千葉 豊

1 調査の概要

調査地点は、吉田山西南麓、京都大学医学部附属病院構内の東南部にあたる。ここに中央診療棟の取り壊し工事等が計画されたため、隣接地点における従来の調査結果および既存建物の位置などを勘案して、2箇所の調査区（AG20区東調査区・西調査区）を設定して発掘調査を実施した。さらに調査期間中に、本調査区の南に隣接する地点（AF20区）に、MRI-CT装置棟の新営が計画されたため、AG20区の調査と併行して発掘調査をおこなった（図版1-239・240，図42）。現地調査は1995年12月1日に開始し、1996年5月31日に終了した。調査面積は、総計2540m²である。

本調査区一帯は、現在の鴨川東縁部にあたり、先史時代には高野川系旧流路、白川系旧流路が流入する低地部を形成していた。本格的な開発は古代末以降で、六勝寺を中心に展開した白川街区の北辺にあたり、康和5（1103）年に僧増誉が創始した聖護院とその鎮守社熊野社の所領に含まれていた。室町時代には聖護院村が成立し、近世後半には蔬菜類を主産品とする都市近郊農村として栄えた場所である。周辺の既往の調査では、近世の池や幕末の蓮月焼を多量に出土した土坑（141地点）、縄文時代の旧流路、古代の土坑、中世の井戸・溝、近世の土取穴（154・155・191地点）などがみつかり、今回の調査でもこうした時代の資料が得られるものと予想された。

発掘調査の結果、縄文・弥生時代の旧流路、中世の井戸・土坑、近世の池・溝・旧流路などを検出した。出土遺物は、縄文時代から江戸時代に及び整理箱で214箱を数える。これらは、この地における土地利用の変遷を明らかにする基礎資料として活用できよう。とりわけ近世の溝から多量に出土した17世紀の土器・陶磁器は、京都大学構内遺跡では従来ほとんどみられなかった資料として重要である。また今回の調査でも多量に出土した蓮月焼は、その実態を知るうえで、貴重な資料となるであろう。

なお現地調査は、千葉豊と吉田広が担当し、磯谷敦子・柴垣理恵子・下坂澄子・曾根茂・松村知也・下垣仁志・稲増崇・吉田崇・飛知和東子・尾上忍が測量などの作業にあたった。また出土資料の整理は千葉が担当し、磯谷・下坂・曾根・松村・下垣・稲増・飛知和・尾上・木村圭祐・梅川須恵が実測・復元などの作業をおこなった。

京都大学病院構内AG20・AF20区の発掘調査

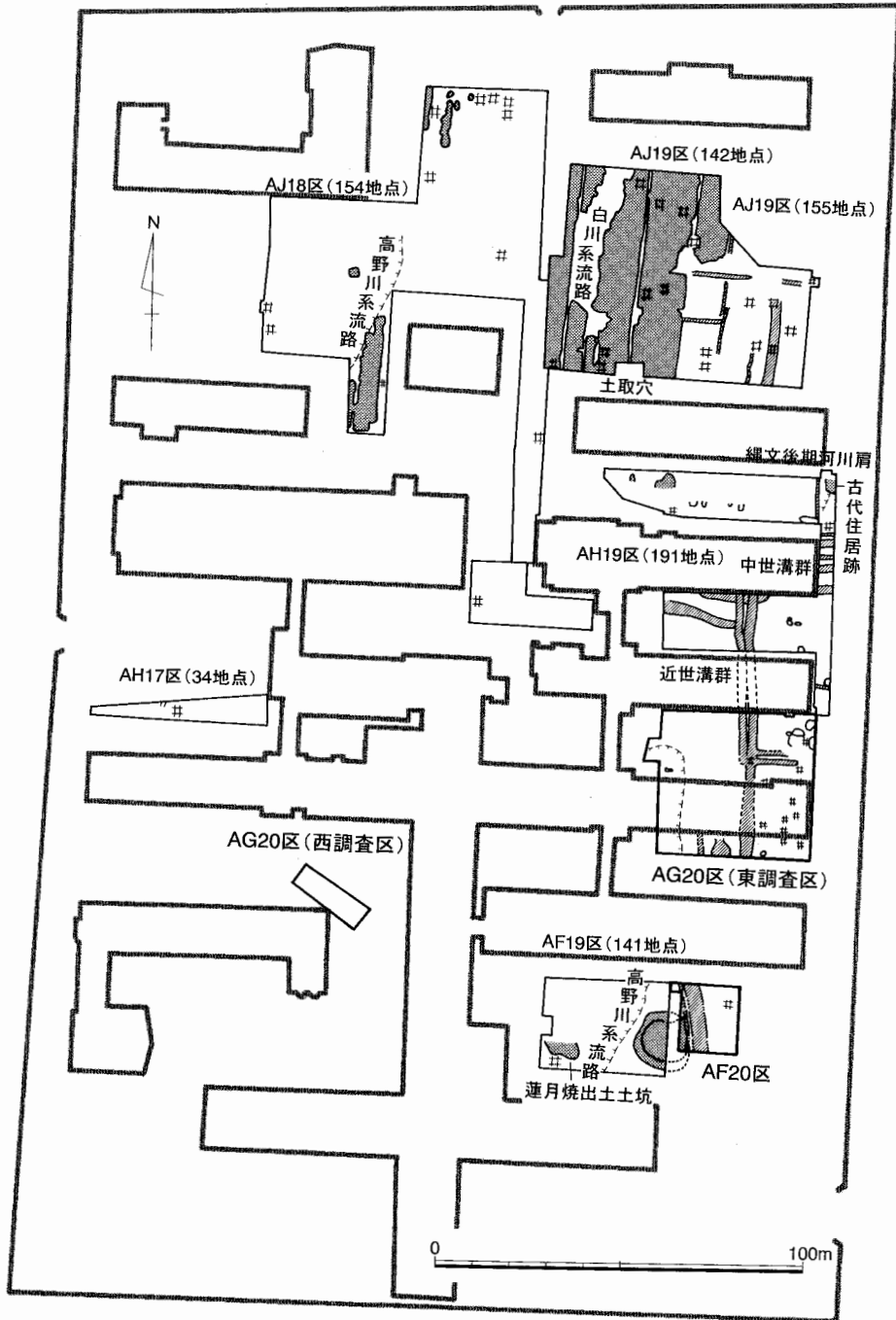


図42 本調査区の位置と病院東構内の遺跡 縮尺1/2000

2 A G 20区の遺構と遺物

A G 20区の調査では、東調査区と西調査区の2箇所の調査区を設定して調査を進めた。西調査区は近現代の管路により、遺跡のほとんどが破壊されており、中世の遺物包含層をごく一部検出したにとどまった。ここでは、おもに東調査区の成果について詳述する。

(1) 層位 (図43)

現地表の標高は、50.0m前後で平坦である。基本的な堆積は、上から順に表土(第1層)、灰褐色土(第2層)、茶褐色砂質土(第3層)、黄褐色粗砂(第4層)、黄灰色粘土(第5層)、黒色土(第6層)、淡褐色砂質土(第7層)、黄灰色シルト(第8層)、赤褐色砂礫(第9層)である。

灰褐色土は近世の遺物を包含するが、近代以降の大規模な削平により、ほとんど残存していなかった。茶褐色砂質土は中世の遺物包含層で、その上面で、近世の土取穴を検出した。黄褐色粗砂および黄灰色粘土は、無遺物層であるため、堆積時期の特定は困難であるが、上下の堆積層の時期から弥生以降古代までと判断できる。黄灰色粘土は、Y=2000より東でのみ確認された。

黒色土は、東へゆくに従って粘性が強くなる。少量ながら、縄文晩期の土器が出土した。調査区西半では、この黒色土上面で弥生時代の自然流路SR2~6を検出した。いずれも北から南へ流れた白川系流路である。黄灰色シルトは、調査区一帯に堆積しており、中世・近世の土取りの対象となった土層である。井戸側面の観察により、1.6m前後の厚みを持ち、その下層には赤褐色砂礫が堆積していることを確認している。調査区西辺では、この黄灰色シルトを切り込んで形成された自然流路SR7を検出した。淡褐色砂質土は、このSR7の肩部から黄灰色シルトを覆って堆積しており、SR7の溢流堆積物と理解できる。SR7および淡褐色砂質土からは、縄文後期の遺物が出土した。

一方、西調査区の基本的な堆積は、上から順に表土、灰褐色土、茶褐色砂質土、赤褐色砂礫であった。東調査区で認められた黄褐色粗砂以下黄灰色シルトまでの堆積土は存在せず、赤褐色砂礫が茶褐色砂質土の下に堆積していた。

(2) 遺構 (図版21~22, 図44~47)

旧病棟基礎などによって遺跡は大きく破壊されていたが、流路・溝・井戸・土取穴など、土地利用の変遷にともなって異なる性格の遺構を検出した。

先史時代の遺構 縄文・弥生時代の遺構は自然流路のみで、人為的に形成されたもの

京都大学病院構内A G 20・A F 20区の発掘調査

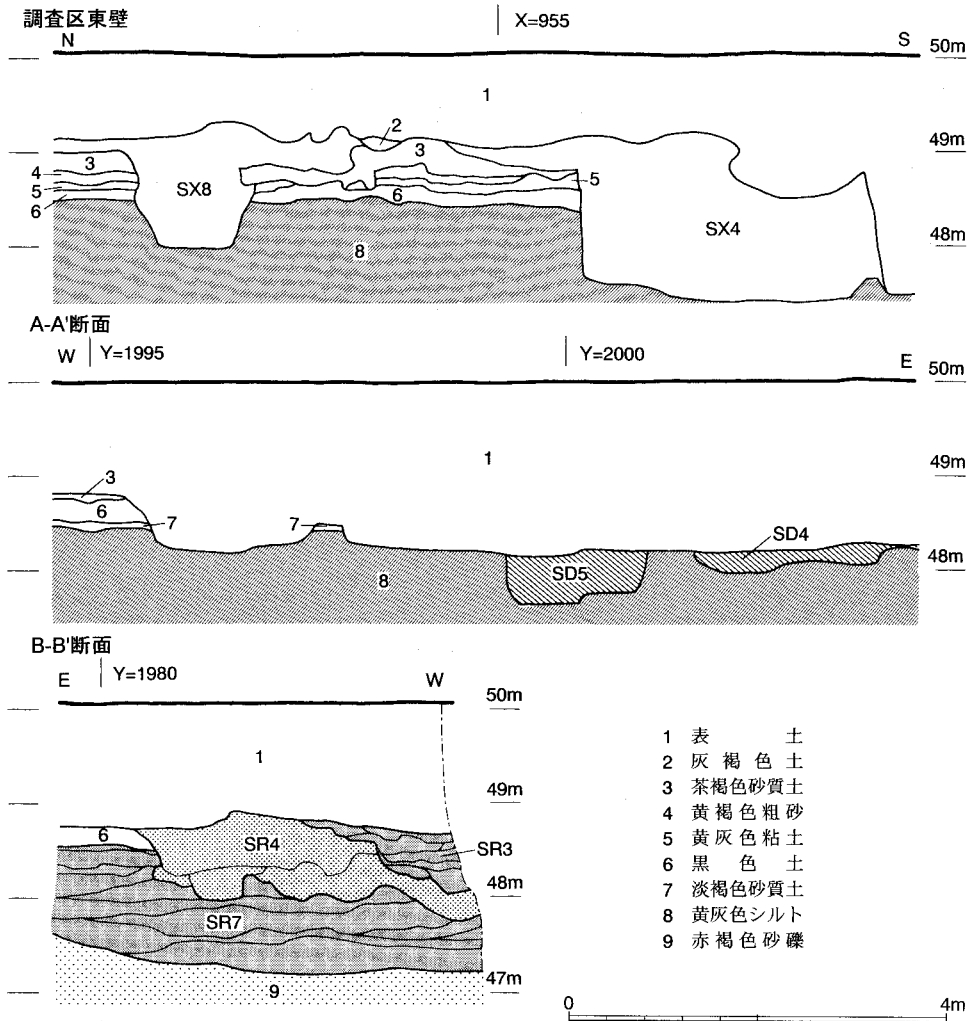


図43 東調査区の層位 縮尺1/80

はない。縄文時代の流路SR7は調査区西辺でみつき、流路の東端は検出できたが、西端は調査区外である。縄文後期の遺物を多く含み、またこの溢流である淡褐色砂質土からは保存状態のよい縄文土器が出土していることから、141地点でも想定されたように、縄文人の活動が調査区一帯にまで及んでいたことを物語る〔千葉91〕。

弥生時代の流路のうち、SR3とSR4は調査区西端で検出された。SR4はSR3に西端を切られており、いずれも一部を検出したにとどまった。SR4は埋土に前期の土器、SR3は中期の土器を含んでおり、それぞれその時期に埋積が進んだものと判断しうる。

A G 20区の遺構と遺物

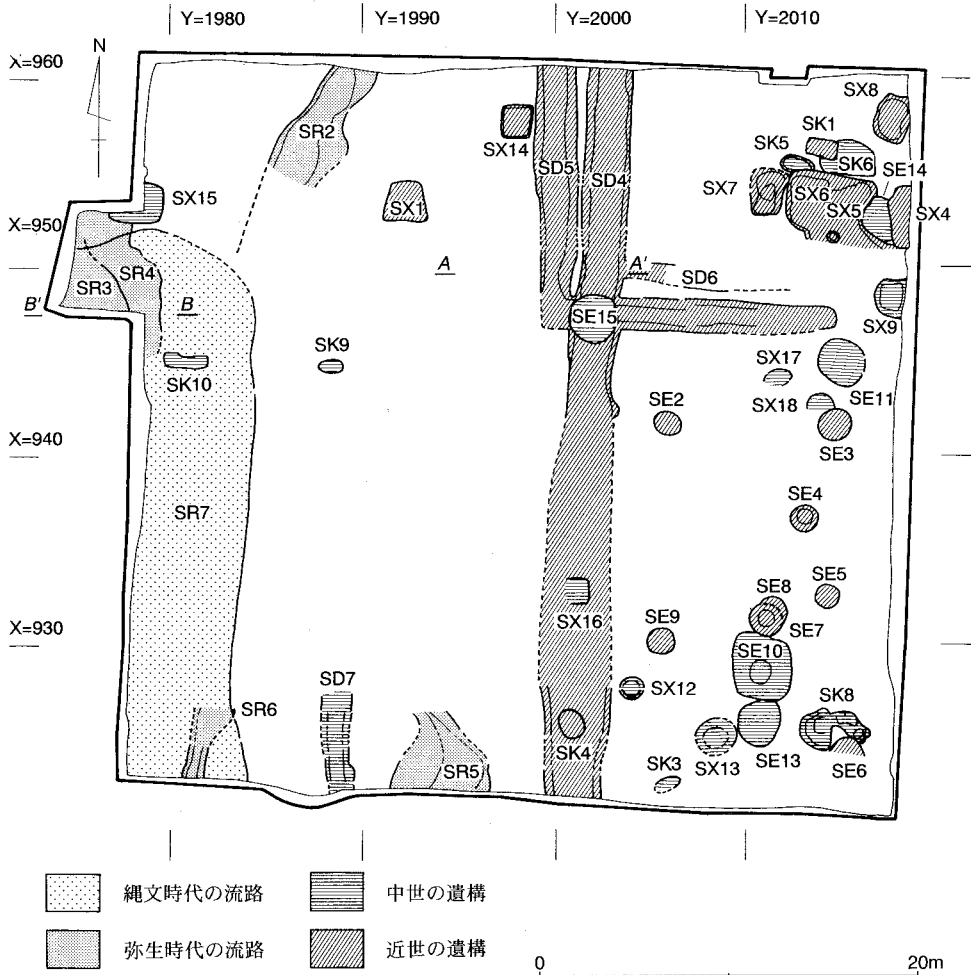


図44 東調査区検出の遺構 縮尺1/400

SR 2は調査区西辺の北端，SR 5とSR 6は南端で検出した流路で，弥生後期～終末の土器を含んでいることから，一連のものである可能性が高い。これらの流路から出土した弥生土器はほとんど摩滅していないことから，医学部・病院構内に想定されている弥生遺跡から流れ込んだものと理解できる〔伊藤95〕。

中世の遺構 中世の遺構は，12世紀後葉～13世紀前葉を中心とする中世前半と，14世紀後半～15世紀の中世後半の2時期に大別できる。

中世前半の遺構には，井戸・溝・土坑などがある。SE 10・13・14，SX 9・15・16～18がこの時期の井戸である。SE 10・13は石組の井戸側をもち，SE 10は石組の下に，さ

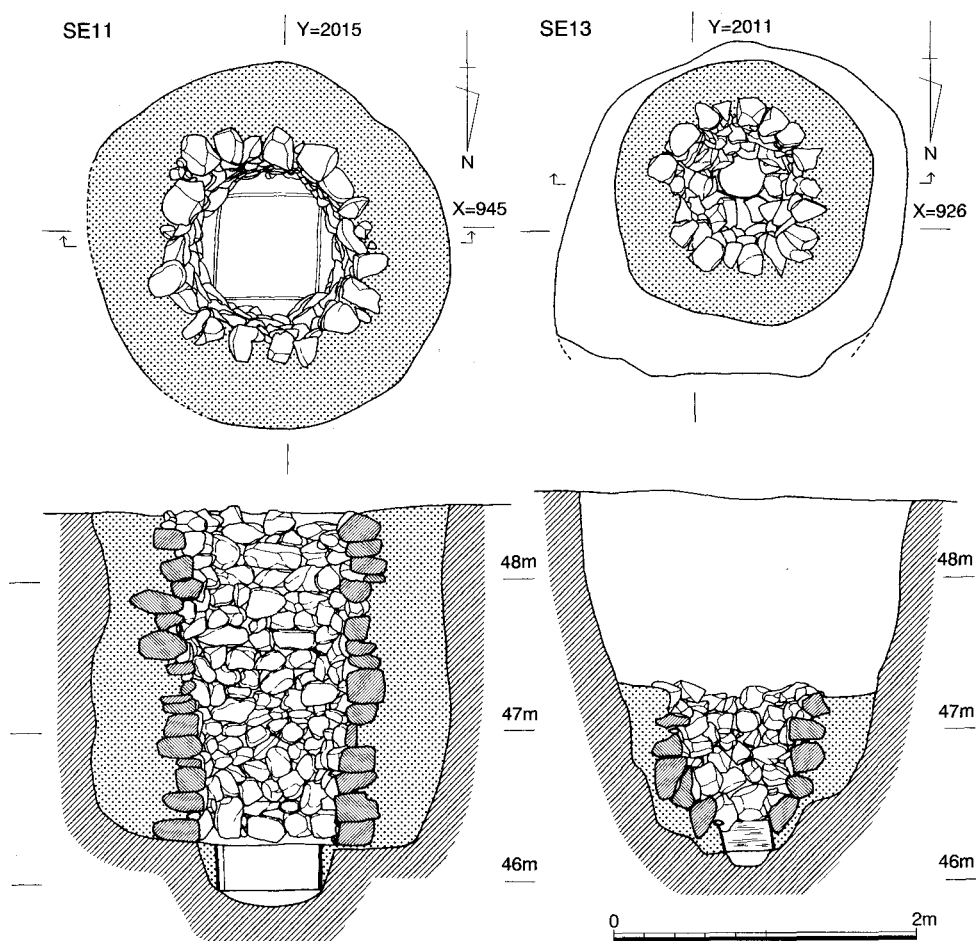


図45 井戸SE11・SE13 縮尺1/50

らに横板で木枠を構成している。ともに水溜に曲物を設置していた。SE14は、上部を近世の土取穴で大きく破壊されていた井戸で、横板による長方形木枠と水溜の曲物が残存していた。SX9・15は方形の掘形をもつ。木枠・石組などの痕跡がまったくみられなかったため、発掘当初、土取穴の可能性も考えたが、平面、断面の形態と砂礫層まで掘り込んでいることから、素掘ないしは木枠を用いた井戸と判断する。SX16～18は近代以降に大半を破壊されており、下底面がかろうじて残存していた。砂礫層まで掘り込んでいるため、井戸の可能性が高い。これらの井戸底の標高は、45.7～46.4mである。

調査区南西部で検出した溝SD7は断面逆台形で、幅1.5m深さ60cm前後をはかる。この時期の遺構は調査区東半に多く、SD7が土地利用の区画をなしていた可能性がある。

AG20区の遺構と遺物

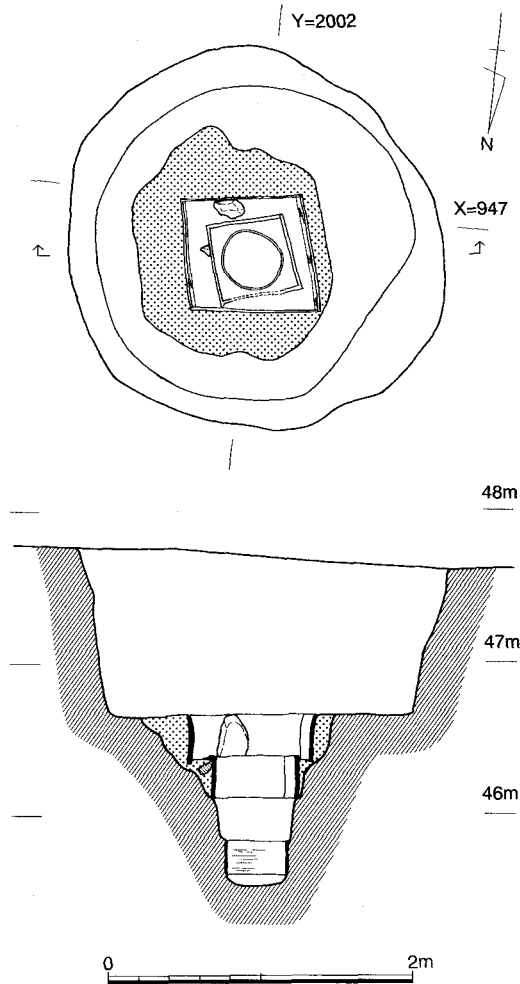


図46 井戸SE15 縮尺1/50

出土遺物が少ないため、時期の特定は困難であるが、13世紀代には埋積している。

中世前半の土坑はS X 12とS K 9で、S X 12は平面円形を呈し、直径1.2m深さ20cmをはかる。小児頭大の礫が中央に集められていた。S K 9は長さ1.3m幅75cm深さ40cmをはかる隅丸長方形の土坑。

中世後半の遺構には、井戸・土坑などがある。中世前半同様、遺構は東半に多い。

SE 11・15がこの時期の井戸。SE 11は石組の井戸側をもち、水溜に方形木枠を設置する。井戸底の標高、45.8m。SE 15は井戸側上半の構造は不明で、下半は方形木枠2段で構成される。木枠の残りは非常に悪かったが、木製の釘を用いて固定しているのが観察さ

れた。水溜には曲物を設置する。井戸底の標高、45.5m。

中世後半の土坑には、S K 3・5・6・8・10、S X 13がある。S K 3・10は、多量の土師器・瓦器類が出土した土器溜。S K 10は後世に上部を削平されており、下部のみ検出した。S K 5は長さ1.8m幅90cm深さ20cmをはかる隅丸長方形の土坑で、埋土から完形の土師器皿が出土した。墓ないしは祭祀に関わる遺構であろう。S K 6・S X 13は集石をとまう土坑。S K 6は長さ3m幅1.8m深さ30cm、S X 13は直径2.1m深さ30cmをはかり、拳大から人頭大の礫が集中していた。

近世の遺構 井戸・溝・土取穴などがある。S E 2～9がこの時期の井戸であり、溝S D 4より東側でかつ南半に集中する。井戸側は石組で構築しているものが多く、さらに石組の下にS E 2・6は桶、S E 7は横板木枠を設置している。S E 3は最下部に丸太を井桁に組んだ後、石を組み上げており、裏込めには拳大を中心とした礫を充填している。S E 5は井戸瓦を用いて井戸側を構築しており、その下部に桶を設置している。S E 9は井戸側上半の構造は不明で、下半は桶を上下2段に組んだ痕跡のみが確認できた。S E 7に切られるS E 8の井戸側は不明。S E 7～9の水溜には、曲物が設置してあった。これらの井戸の底の標高は、45.4～46.0mのあいだに分布する。

近世に属する溝は、S D 4～6である。S D 4は調査区ほぼ中央を南北にはしる溝で北端、南端ともに調査区外へと続く。断面逆台形で、幅2.4m前後、深さは30～60cmをはかる。S D 5はS D 4の西側を平行して南北にはしり、X=948付近で東に直角に折れ曲がり、Y=2015付近で立ち上がる。断面逆台形で、幅1.8～2.2m、深さ60cm前後をはかる。S D 6は、X=950付近でS D 4の東側肩から東へ伸びる。後世の削平・攪乱により、形状・規模は明確ではないが、Y=2017付近で立ち上がるようである。これらの溝の下底部には、粘質土が堆積しており、滞水する状況があったことを示している。出土遺物からみてS D 5の埋没が遅れるようであるが、明瞭な切り合い関係は観察されなかった。これらの溝は、17世紀から18世紀にかけて埋積が進んでいったと理解する。

土取穴は調査区北東で集中して発見され（S X 4～8）、西辺にもみられた（S X 1）。いずれも平面が不定形で黄灰色シルトを掘りきったところで掘削を止めている。

S K 1は長さ1.6m幅90cm深さ30cmをはかる長方形の土坑で、拳大から人頭大の礫で充填されていた。土師器の小片が少量出土したのみで時期の特定は困難であるが、S K 6を切って構築されていることから、近世に下る遺構と判断した。S K 4は直径1.5m前後の不整形の土坑で、幕末の蓮月焼を含む陶磁器が出土した。

A G 20区の遺構と遺物

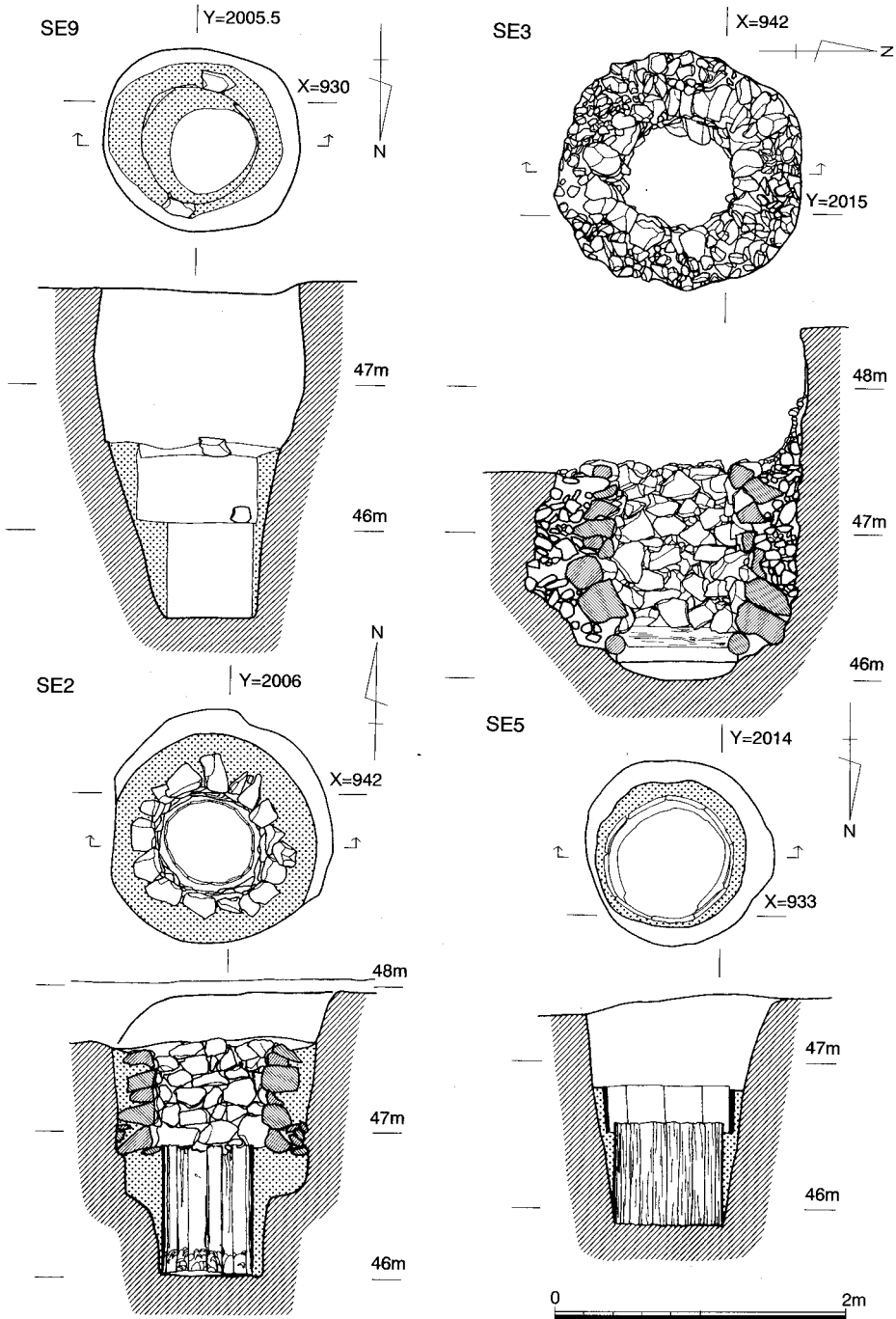


図47 井戸SE9・SE3・SE2・SE5 縮尺1/50

(3) 出土遺物 (図版24~34, 図48~66, 表6)

縄文時代の遺物 II 1~II 8は、淡褐色砂質土出土の縄文土器。II 1・II 5は有文深鉢。II 1は口頸部が外反し、口縁端部を短く内側へ折り曲げる。口縁端部直下に刻目隆帯を横走させ、8字状浮文を貼り付ける。口頸部には沈線で三角文と逆三角文を描き、2段左撚縄文を充填する。内外面とも磨いて仕上げる。口径25cm, 器高16.2cm。II 5は縁帯文土器の口縁部で、く字形に屈曲する。沈線で長方形区画文を描いた後、2段左撚縄文を施文する。II 2・II 6は縄文地深鉢。II 2は前面が肥厚する口縁部と胴部に2段左撚縄文を施文する。II 6は肥厚する口縁内面に2段左撚縄文を施し、外面は二枚貝条痕で仕上げる。II 3は深鉢の胴部で、櫛状施文具による条線文を斜格子に施す。II 4はボウル形の有文浅鉢。文様意匠は上下2段で構成される。上段は三角文と逆三角文からなり、逆三角文の底辺中央にJ字文がとりつくともみられる。下段は長方形文とJ字渦巻文が描かれる。2段左撚縄文を充填し、内外面とも磨いて仕上げる。口径30.4cm, 器高12.7cm。II 7は無文深鉢の口縁部。口縁外側端部が丸く肥厚する。II 8は底部資料。底部直上で垂直気味に立ち上がった後、外傾する。

II 9~II 39はSR 7出土の縄文土器。II 9~II 13は有文深鉢の口縁部。II 9は口縁端部を内外に肥厚させ、上面に沈線を1条巡らせる。II 10・II 11は前面がわずかに肥厚し、弧線文・同心円文を施す。II 12は口縁内面直下に刺突をともなう横走沈線をめぐらし、口縁

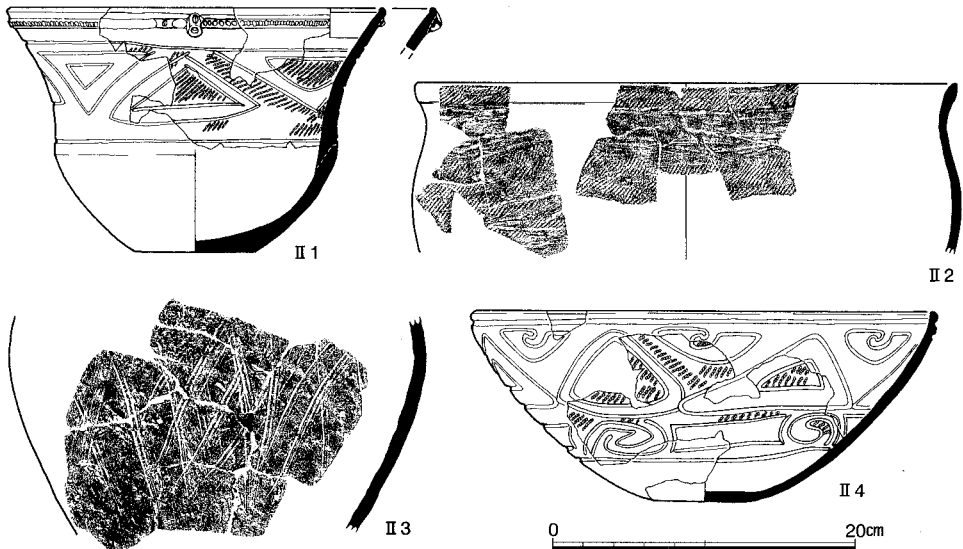


図48 淡褐色砂質土出土土器 (II 1~II 4 縄文後期) 縮尺1/5

A G 20区の遺構と遺物

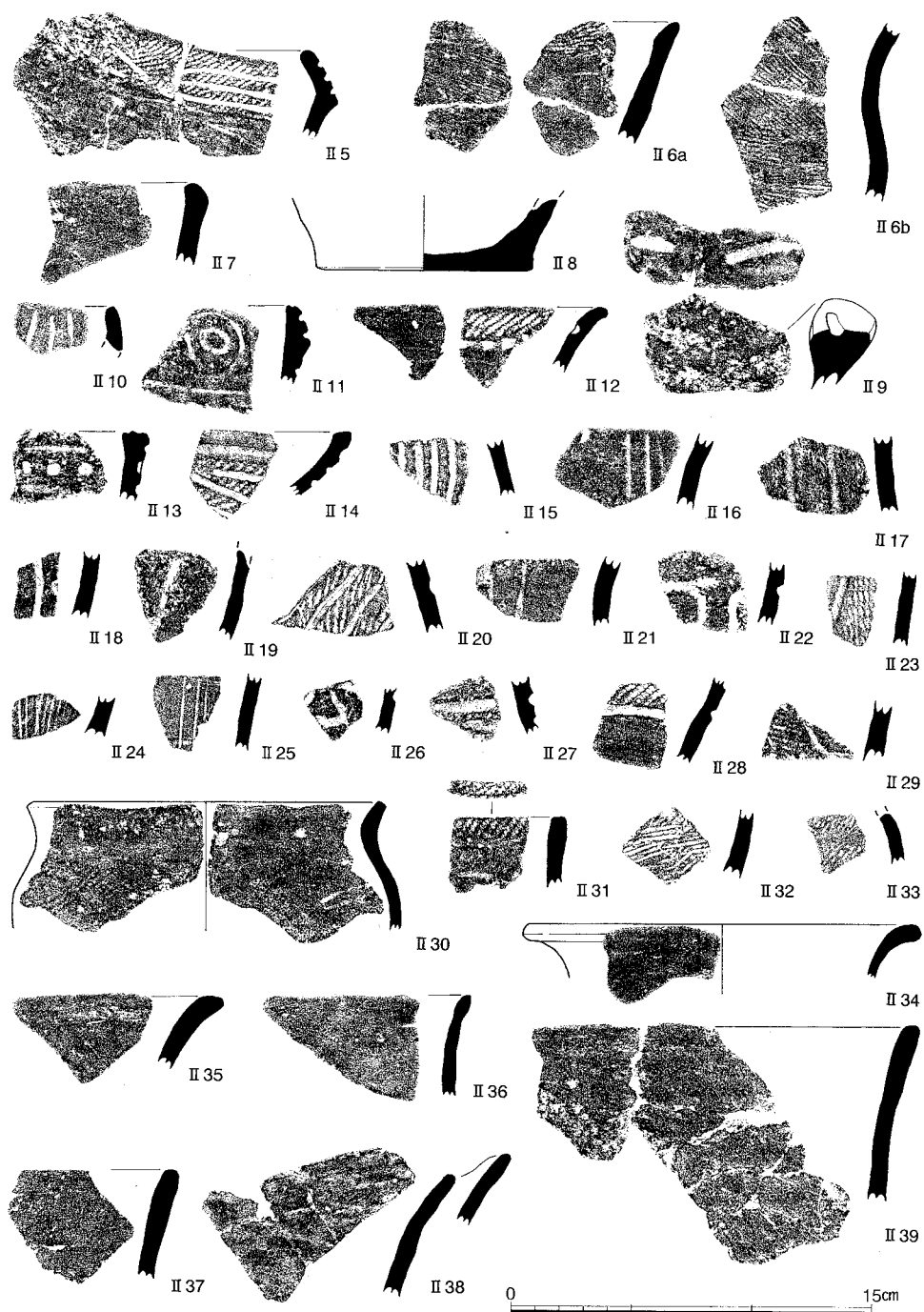


図49 淡褐色砂質土出土土器 (II 5 ~ II 8 縄文後期), SR 7 出土土器 (II 9 ~ II 39 縄文後期)
縮尺1/3

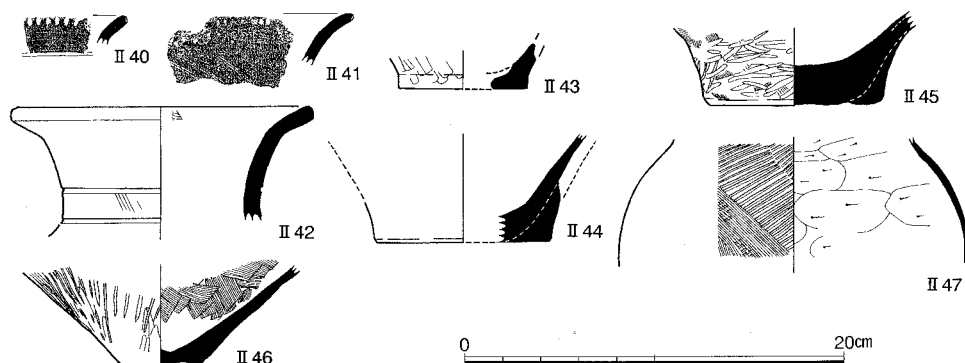


図50 S R 4 出土土器 (II 40~II 45弥生前期), S R 5 出土土器 (II 46弥生後期・II 47庄内式)

端部との間に2段左撚縄文を充填する。II 13は口縁部前面に沈線を2条横走させ、その間に円形刺突列を配する。II 14はボウル形の有文浅鉢。三角文を基調とする文様意匠に2段左撚縄文を充填している。II 15~II 29は有文深鉢の胴部資料。多条沈線文あるいは条線文を用いた縦位の文様が多いが、帯縄文による横位の文様も認められる。縄文を用いている資料はII 20・II 23・II 28・II 29で、原体はいずれも2段左撚である。II 30~II 34は縄文地の深鉢ないしは鉢。II 30は口径14.4cmをはかる鉢で、胴部に2段左撚縄文を施文する。II 31は口縁外面に加えて口縁上面にも2段左撚縄文を施す。II 32・II 33は胴部資料で、縄文原体は、II 32が1段左撚、II 33が2段左撚である。II 35~II 39は無文深鉢の口縁部。

淡褐色砂質土およびS R 7から出土した縄文土器はいずれも縄文後期前葉に属し、II 9が縁帯文成立期であるほかは北白川上層式2期に比定できるものが主体を占める。

弥生時代の遺物 II 40~II 45はS R 4出土の弥生土器。II 40・II 41は甕。口縁部が外反し、口縁端部に刻みを施す。II 40は頸部に巡らした篋描沈線文の一部が残存する。II 42は壺。口縁部が外反し、頸部に2条以上の篋描沈線文を施す。外面は縦方向、内面は横方向の刷毛目で整形した後、磨いて仕上げる。II 43~II 45は底部資料。これらは、弥生前期新段階を中心とするものであろう。

II 46・II 47はS R 5出土土器。II 46は甕の底部。外面は叩きを施すが、胴部下端までは及ばない。内面は刷毛目調整で仕上げる。輪台技法で成形されており、底部外面が凹む。II 47は外面叩き成形の後、一部に刷毛目、内面は削りで仕上げている。器厚が3mmと薄い。暗褐色で角閃石を多量に含み、生駒西麓産の胎土の特徴を示す、庄内式の甕である。これらは弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけてのものである。

中世の遺物 II 48~II 96はS E 14出土遺物。II 48~II 73は土師器皿。II 48~II 59は皿

A I, II 60～II 73は皿A II。II 48は2段撫で面取り手法C₃類, II 49・II 50・II 60～II 63は1段撫で素縁手法D₃類, II 51・II 52・II 64～II 68は1段撫で面取り手法D₄類, II 53～II 58・II 69～II 73は1段撫で面取り手法D₅類, II 59は1段撫で面取り手法D₆類である。II 65は口縁端部に煤が厚く付着し, 灯明皿として使用されている。皿A Iは口径14～15cm, 皿A IIは口径9cmにピークがあり, 口縁形態は, 皿A IではD₅類が多く, D₄類, D₃類が続き, 皿A IIではD₃類が過半数を占め, D₄類, D₅類が一定量を占める(表6 p.102)。II 74・II 75は土師器受皿。口径は7.6cmをはかる。

II 76～II 79は楠葉型瓦器椀。II 76・II 77は口縁内面に浅い沈線を1条めぐらす。口縁部の残存するII 76～II 78は, いずれも内面にのみ篋磨きを施している。II 79は見込みにジグザグになると思われる暗文を施す。II 80は口径8.0cmをはかる瓦器の小型皿。内面にのみ粗い篋磨きを施す。これらは, 橋本久和の編年によるⅢ-1期にあたるものであろう〔橋本80〕。II 81～II 84は白磁椀。II 81～II 83は口縁部が玉縁状を呈し, II 84は口縁部が端反りになる。II 85は白磁皿。底部外面を露胎とし, 見込みに文様を描く。II 86は白磁の合子蓋。II 87は砥石。最大幅3.0cm, 現存最大長6.4cmをはかる。使用面は1面のみである。

II 88は土師器土釜。菅原正明の分類による摂津C2型であり〔菅原83〕, 10世紀ごろの古い資料の混入である。II 89は一般に「塩壺」と呼ばれている土師器鉢。口径19.2cm, 高さ16.2cmをはかり, 内面と口縁部外面は撫でて仕上げ, 外面は粘土紐の巻き上げ痕をそのまま残す。口縁部内面にのみ3.5cm前後の幅で炭化物の付着が観察される。中世の木製置き炉には金属製や土製の火容が仕掛けられており〔梅川94〕, 置き炉の火容として利用されたことを示す痕跡の可能性はある。京都大学構内では, 110・143・241地点の調査で類例が報告されている〔五十川83, 五十川・宮本88, 古賀99〕。

II 90～II 93は東播系須恵器。II 90は甕, II 91～II 93はすり鉢。II 94・II 95は瓦器羽釜。口径は, II 94が16.0cm, II 95が20.2cmで, いずれも体部は丸みを帯びる。II 96は瓦器盤。体部は丸みを帯び, 三脚がつく。内外面とも剥落が著しい。

以上のSE14から出土した遺物は, 12世紀末13世紀初頭ごろのものであろう。

II 97～II 105はSX17出土遺物。II 97～II 104は土師器皿。II 97～II 99は2段撫で手法で, それぞれC₃類, C₄類, C₅類に比定でき, 口径15cm前後である。II 100～II 104は1段撫で面取り手法D₄類で, II 100・II 101は口径15cm前後のA I, II 102～II 104は口径9cm前後のA IIである。II 105は灰釉陶器皿。見込みに圈線を1条めぐらす。口縁部を輪花に作る。これらは12世紀後葉ごろの資料である。

京都大学病院構内A G 20・A F 20区の発掘調査

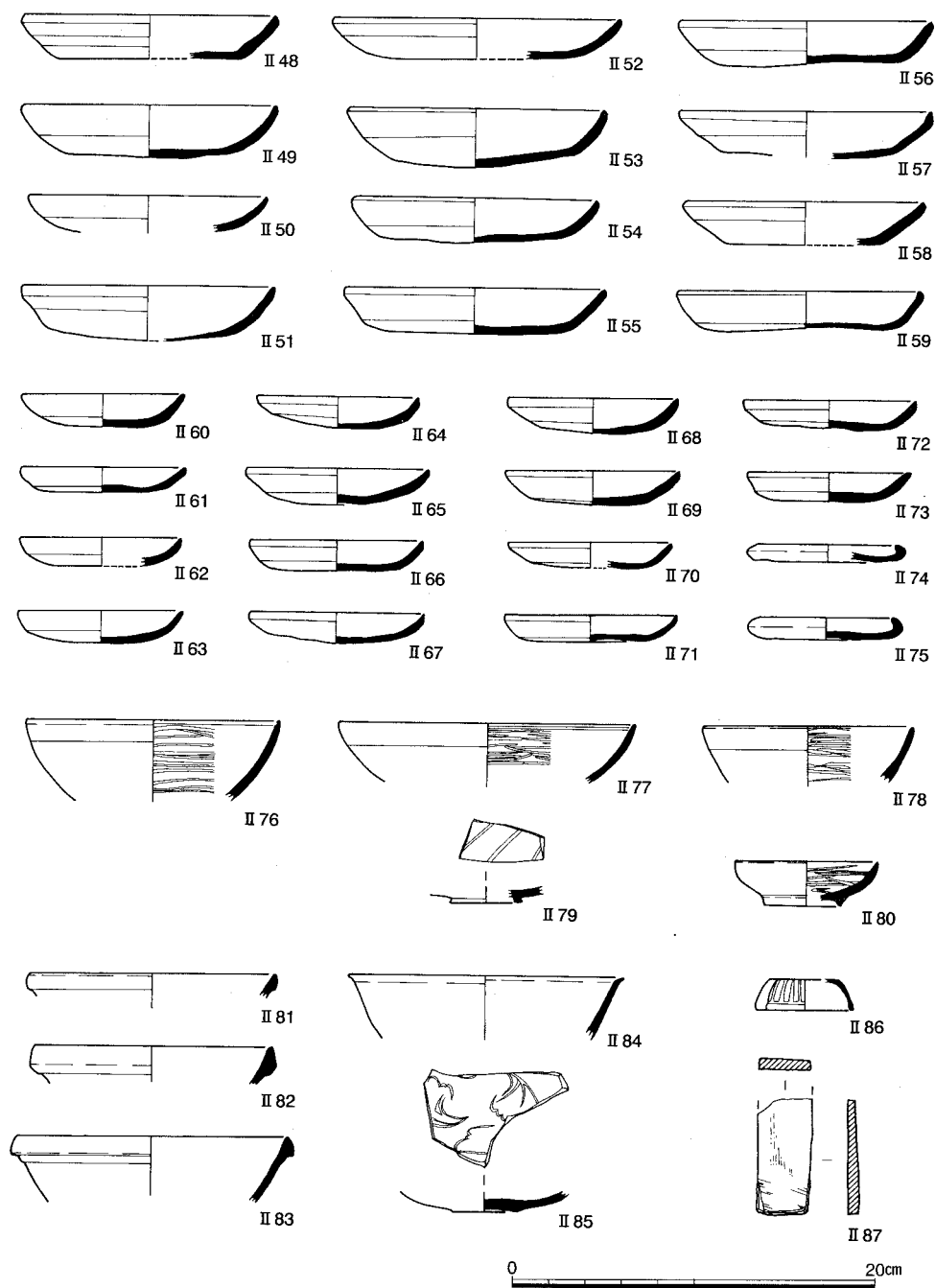


図51 SE14出土遺物(1) (II 48~II 75土師器, II 76~II 80瓦器, II 81~II 85白磁, II 87石製品)

A G 20区の遺構と遺物

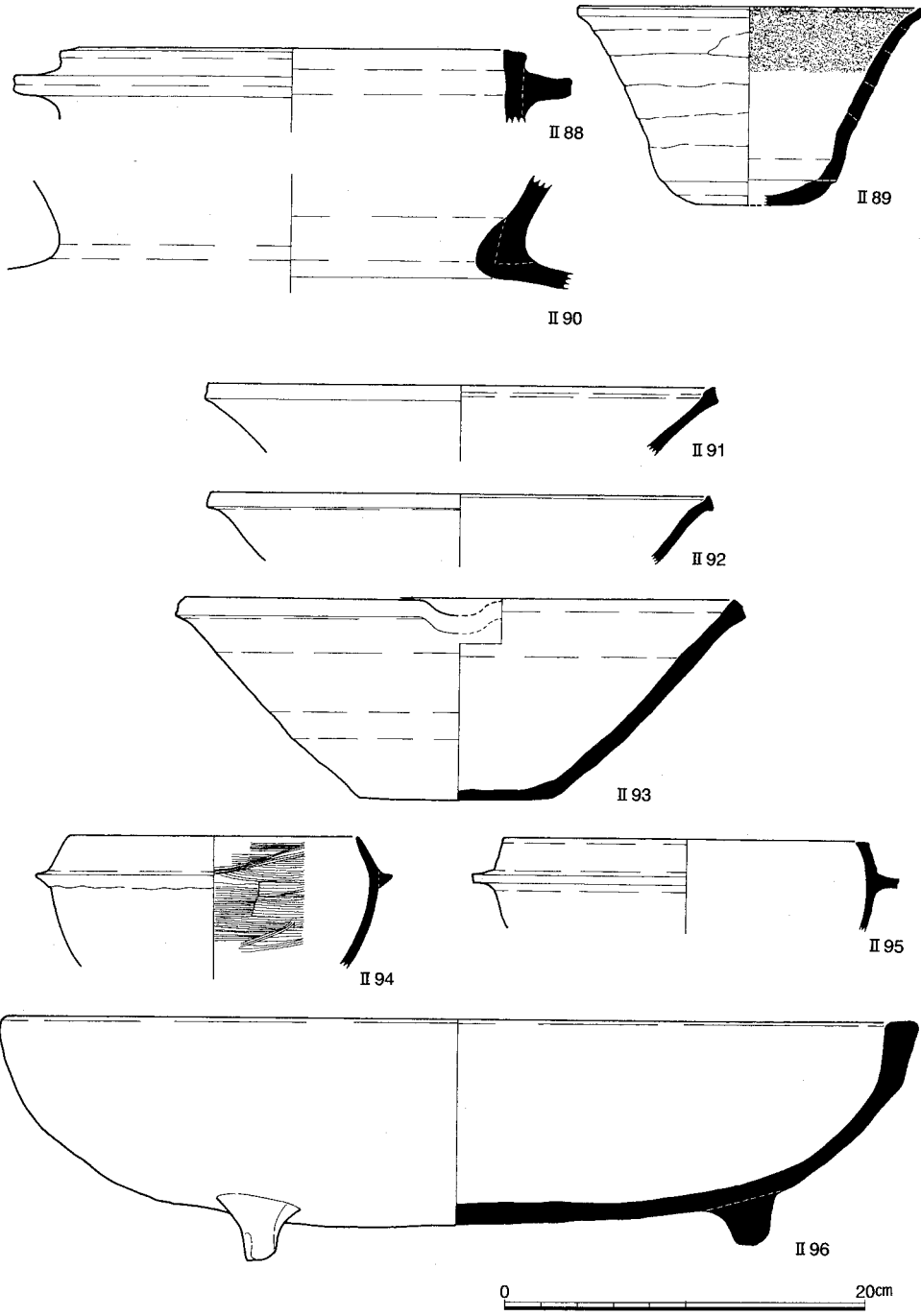


図52 S E14出土遺物(2) (II 88・II 89土師器, II 90~II 93須恵器, II 94~II 96瓦器)

Ⅱ106～Ⅱ113はS X 9出土遺物。Ⅱ106・Ⅱ107は口径16cm前後の皿A Iで、C₃類およびD₂類。Ⅱ108～Ⅱ112は口径9～10cmの皿A IIで、Ⅱ108・Ⅱ109はC₃類、Ⅱ110・Ⅱ111はD₃類、Ⅱ112はD₄類である。Ⅱ113は白磁で、口縁が玉縁状に肥厚する椀である。これらは12世紀後葉ごろの資料である。

Ⅱ114～Ⅱ120はS E 10裏込め出土遺物。Ⅱ114～Ⅱ116は口径13～17cmの土師器皿A I。いずれも1段撫で手法で、Ⅱ114はD₃類、Ⅱ115はD₅類、Ⅱ116はD₂類である。Ⅱ117・Ⅱ118は口径7～8cmの土師器皿A IIで、ともに1段撫で素縁手法D₃類。Ⅱ119は、底部外面に回転による糸切り痕を残す皿。内外面すべて回転撫でによって仕上げる。Ⅱ120は瓦器羽釜。鏝は上方へ傾き、体部は直線的である。

Ⅱ121～Ⅱ124はS X 12出土の土師器皿で、1段撫で素縁手法D₂類。口径は、Ⅱ121～Ⅱ123が11cm前後、Ⅱ124が7.7cmである。

Ⅱ125・Ⅱ126はS K 9出土の土師器皿。ともに口径10cm前後で、1段撫で面取り手法D₄類である。

Ⅱ127～Ⅱ138はS X 16出土土師器。Ⅱ127～Ⅱ137は皿で、口径はⅡ127が13cm、Ⅱ128～Ⅱ130が10～11cm、Ⅱ131～Ⅱ137が8cm前後である。口縁部形態は、D₃類が多く（Ⅱ127・Ⅱ128・Ⅱ132～Ⅱ135）、C₄類（Ⅱ130）、D₄類（Ⅱ136・Ⅱ137）、D₅類（Ⅱ129）も認められる。Ⅱ138は受皿。

S K 9・S E 10裏込め・S X 12・S X 16出土遺物は13世紀前葉ごろの資料であろう。

Ⅱ139～Ⅱ176はS K 3出土遺物。Ⅱ139～Ⅱ150は赤褐色を呈する土師器皿、Ⅱ151～Ⅱ174は灰白色を呈する土師器椀。土師器の皿と椀での、こうした明瞭な色調の違いは、後述するS K 5・S K 10・S E 15でも同様である。Ⅱ139～Ⅱ144は皿A I、Ⅱ145～Ⅱ150は皿A IIで、A Iは11cm、A IIは8cmに口径のピークがある（表6）。口縁形態は、皿A Iでは1段撫で素縁手法E₁類が多く、E₃類、E₄類がこれに続き、皿A IIではE₁類が過半数を占め、E₃類がそれに次ぐ。Ⅱ151～Ⅱ162は椀A I、Ⅱ163～Ⅱ174は椀A IIで、A Iは12cm、A IIは7cmに口径のピークがある。椀A IIの底部は、凹み底となる。口縁形態は、椀A IではE₁類が6割以上を占め、E₂類がそれに次ぎ、A IIではE₁類が多く、E₂類、E₃類がそれに続く。Ⅱ175は土師器の羽釜。断面三角形の鏝がつく。口径14cm。Ⅱ176は瓦器鍋。口縁部は屈曲があまく外方へ立ち上がる。

Ⅱ177～Ⅱ189はS K 5出土の土師器皿および椀。Ⅱ177～Ⅱ182は赤褐色を呈する皿で、口径10～12cm。Ⅱ177・Ⅱ178はE₃類、Ⅱ179～Ⅱ181はE₄類、Ⅱ182はE₁類。Ⅱ183～Ⅱ

A G 20区の遺構と遺物

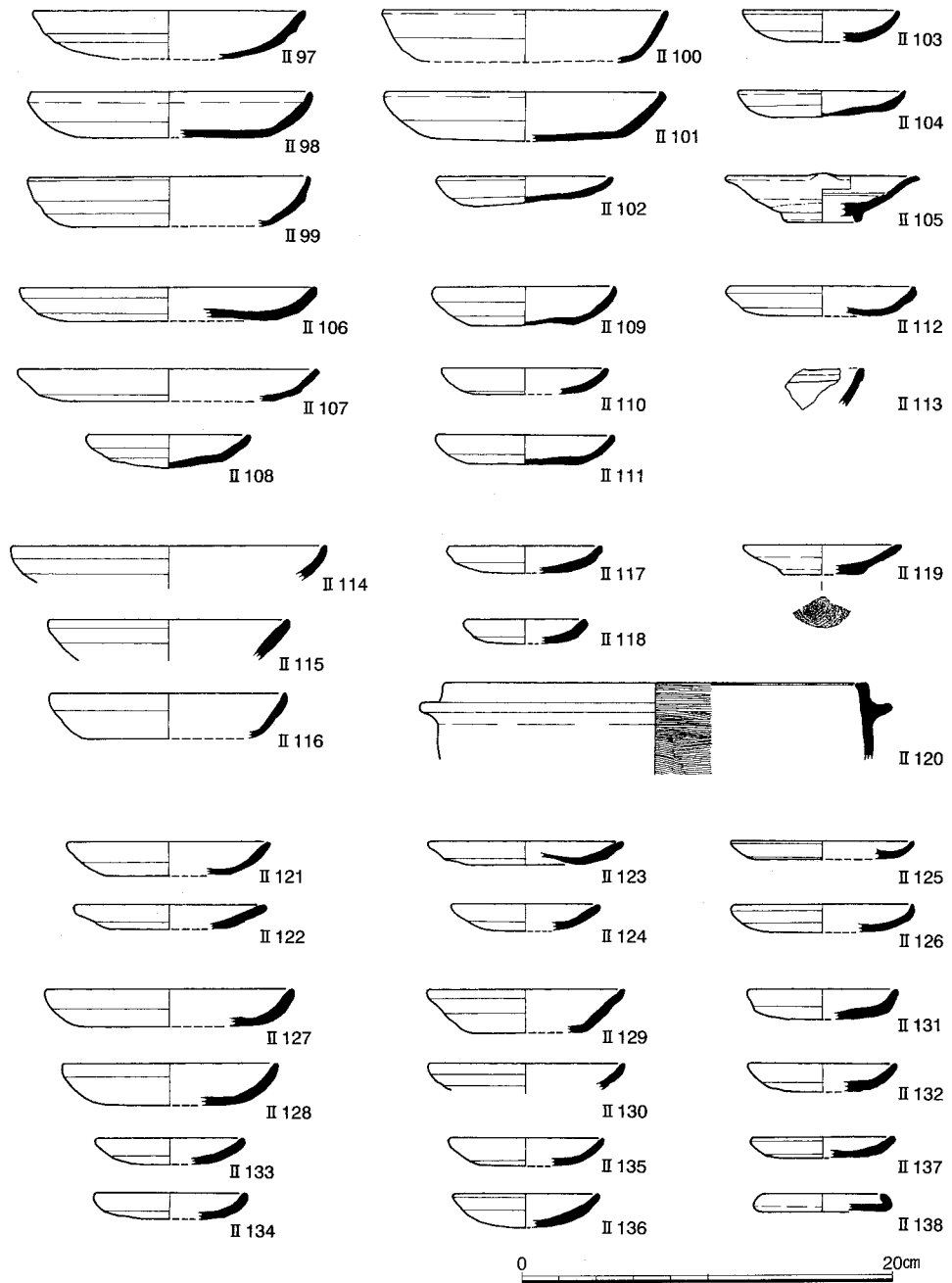


図53 S X 17出土遺物 (II 97~ II 104土師器, II 105灰釉陶器), S X 9 出土遺物 (II 106~ II 112土師器, II 113白磁), S E 10出土遺物 (II 114~ II 119土師器, II 120瓦器), S X 12出土遺物 (II 121~ II 124土師器), S K 9出土遺物 (II 125・II 126土師器), S X 16出土遺物 (II 127~ II 138土師器)

京都大学病院構内A G 20・A F 20区の発掘調査

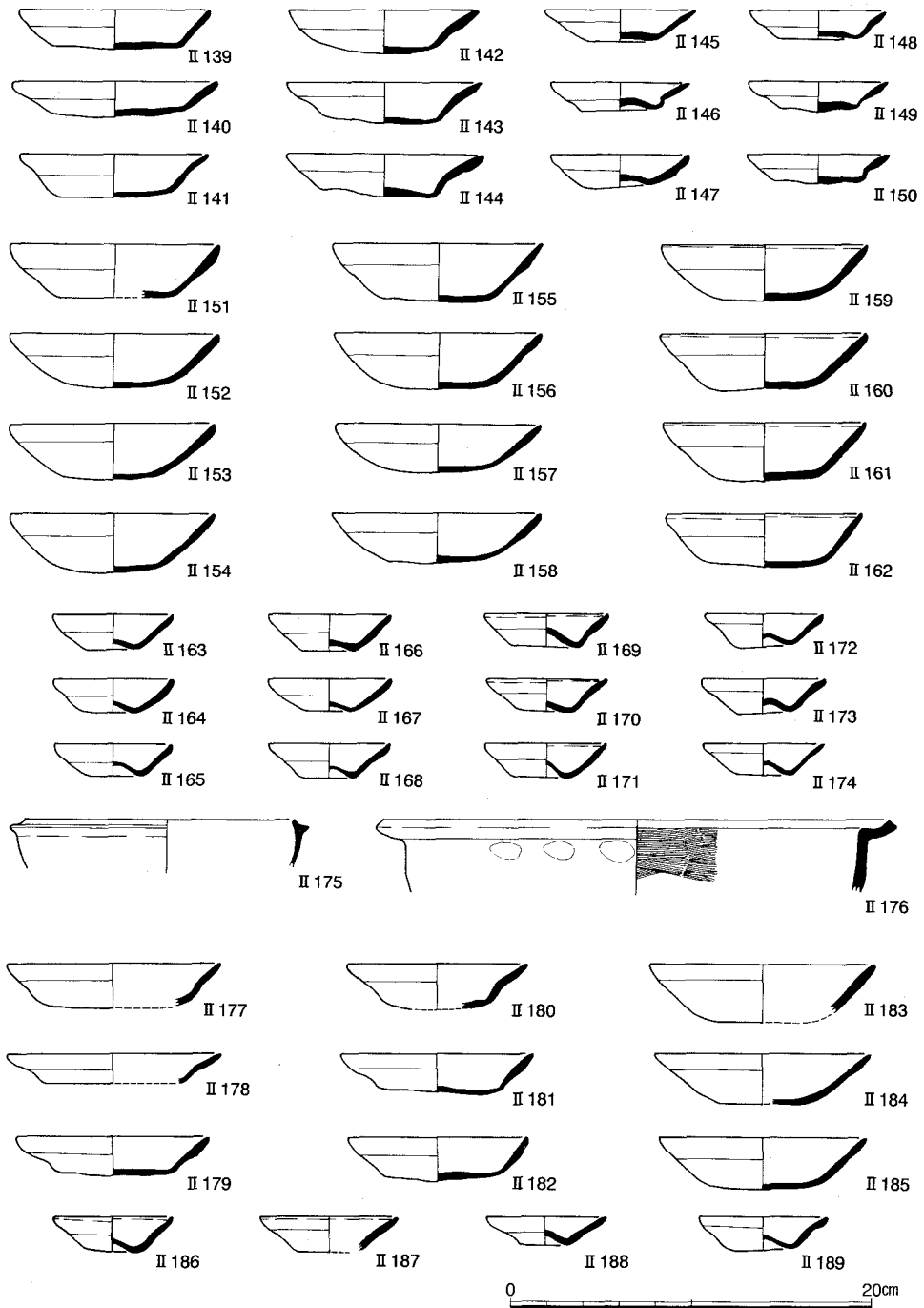


図54 SK 3出土遺物 (II 139~II 175土師器, II 176瓦器), SK 5出土遺物 (II 177~II 189土師器)

A G 20区の遺構と遺物

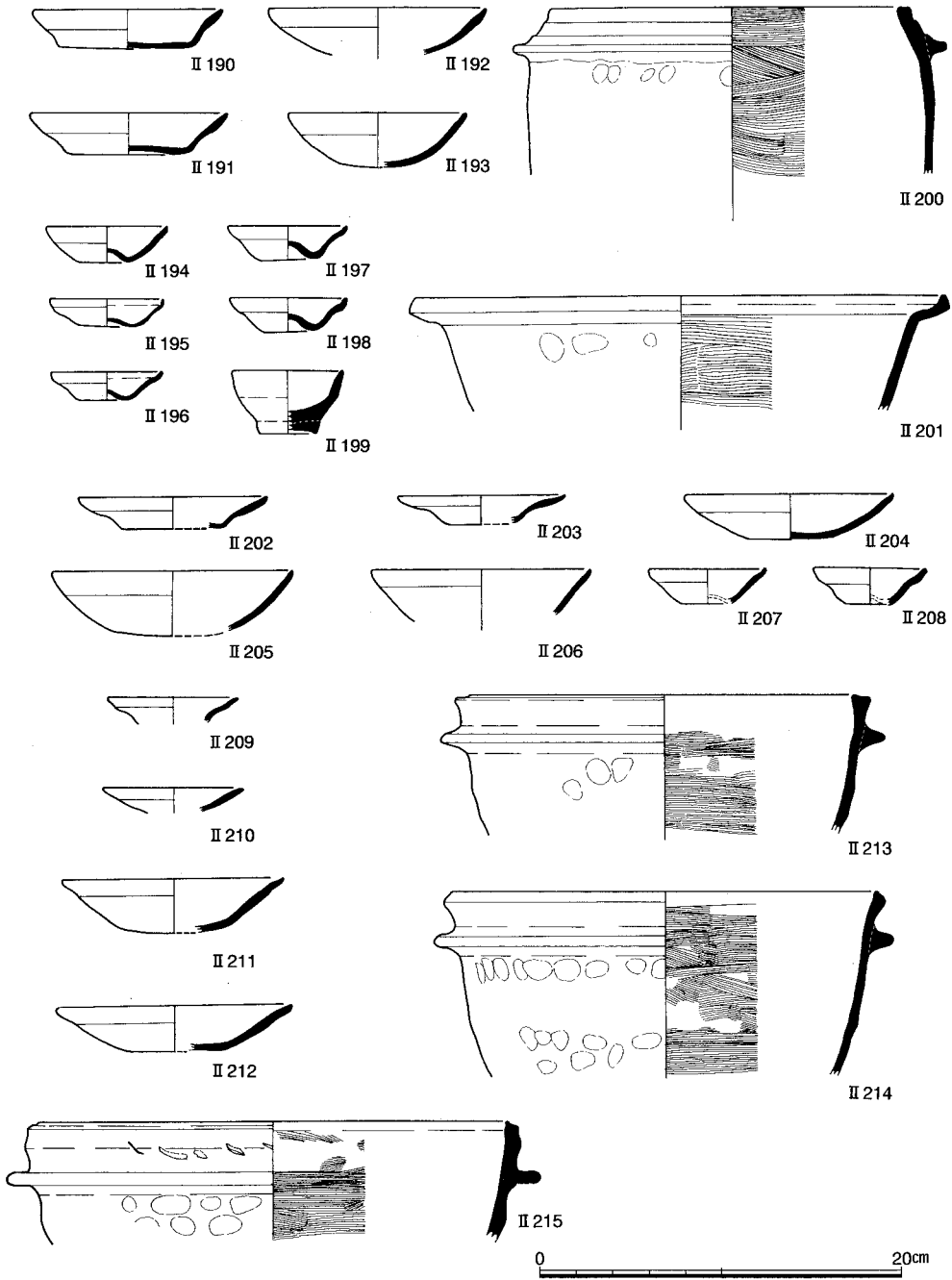


図55 S K 10出土遺物 (II 190~II 198土師器, II 199灰釉系陶器, II 200・II 201瓦器), S E 15出土遺物 (II 202~II 208土師器), S X 13出土遺物 (II 209~212土師器, II 213~II 215瓦器)

189は灰白色を呈する椀で、Ⅱ183～Ⅱ185は口径12cm前後の椀AⅠ、Ⅱ186～Ⅱ189は口径7cm前後の椀AⅡで凹み底となる。口縁形態は、AⅠではE₁類が多く、AⅡではE₂・E₃・E₄類が認められる。

Ⅱ190～Ⅱ201はS K 10出土遺物。Ⅱ190・Ⅱ191は赤褐色の土師器皿、Ⅱ192～Ⅱ198は灰白色の土師器椀。皿は口径11cmにピークがくるAⅠと7cmにピークがあるAⅡがあり、口縁形態はAⅠではE₃類が主体を占め、AⅡではE₁・E₂・E₃類が認められる(表6)。椀は口径10～11cmにピークがあるAⅠと7cmにピークがあり凹み底となるAⅡがある。口縁形態はAⅠではE₁類が圧倒的に多く、AⅡではE₂類、E₃類、E₁類の順に一定量を占める。Ⅱ199は灰釉系陶器の小杯。断面三角形の低い高台がつく。Ⅱ200は瓦器羽釜。口縁部と鏝の間を断面「レ」状の段が2条めぐる。Ⅱ201は瓦器鍋。口縁部の屈曲は立ち上がりがあまく、体部は直線的である。

Ⅱ202～Ⅱ208はS E 15出土土師器。Ⅱ202・Ⅱ203は赤褐色の土師器皿で、E₄類とE₃類。Ⅱ204～Ⅱ208は灰白色の土師器椀。

S K 3・S K 5・S K 10・S E 10から出土した遺物は、14世紀後半のものであろう。

Ⅱ209～Ⅱ215はS X 13出土遺物。Ⅱ209～Ⅱ212は土師器皿。14世紀の段階で認められた皿と椀の違いは、椀の器高の低下と褐色化にともない不明瞭になる。Ⅱ209はE₂類、Ⅱ210～Ⅱ212はF₂類。Ⅱ213～Ⅱ215は瓦器羽釜。外面は指押さえ、内面は刷毛目調整で仕上げる。

Ⅱ216～Ⅱ235はS K 6出土遺物。Ⅱ216～Ⅱ229は土師器皿。口径は15cm前後、10～12cm、6～8cmの3法量を認めることができる。口縁形態は、Ⅱ222・Ⅱ227がE₁類、Ⅱ223・Ⅱ224がE₂類、Ⅱ225・Ⅱ226がE₃類、Ⅱ228がE₄類、Ⅱ216・Ⅱ229がF₁類、Ⅱ217はF₂類、Ⅱ218～Ⅱ220がF₃類、Ⅱ221がF₄類である。

Ⅱ230は鉄釉陶器、Ⅱ231・Ⅱ232は灰釉系陶器である。Ⅱ231は卸皿で、口縁端部を内側に折り返している。Ⅱ233は青磁椀。高台および底部外面を露胎とする。外面は櫛歯文を垂下させ、内面は2条1単位の沈線で曲線文を描き、そのあいだを櫛歯による刺突で埋めている。13世紀の遺物の混入であろう。Ⅱ235は信楽すり鉢。口縁部に面取りを施し、外側端部がやや張り出す。外面は撫で仕上げ、内面は剥落が著しく、仕上げ方および、すり目の有無は不明である。黄白色を呈し、焼成は軟質である。山田猛の分類によるⅡb型式にあたる〔山田90〕。

Ⅱ236～Ⅱ238はS E 11裏込め、Ⅱ239～Ⅱ249はS E 11埋土出土遺物。Ⅱ236～Ⅱ244は土

A G 20区の遺構と遺物

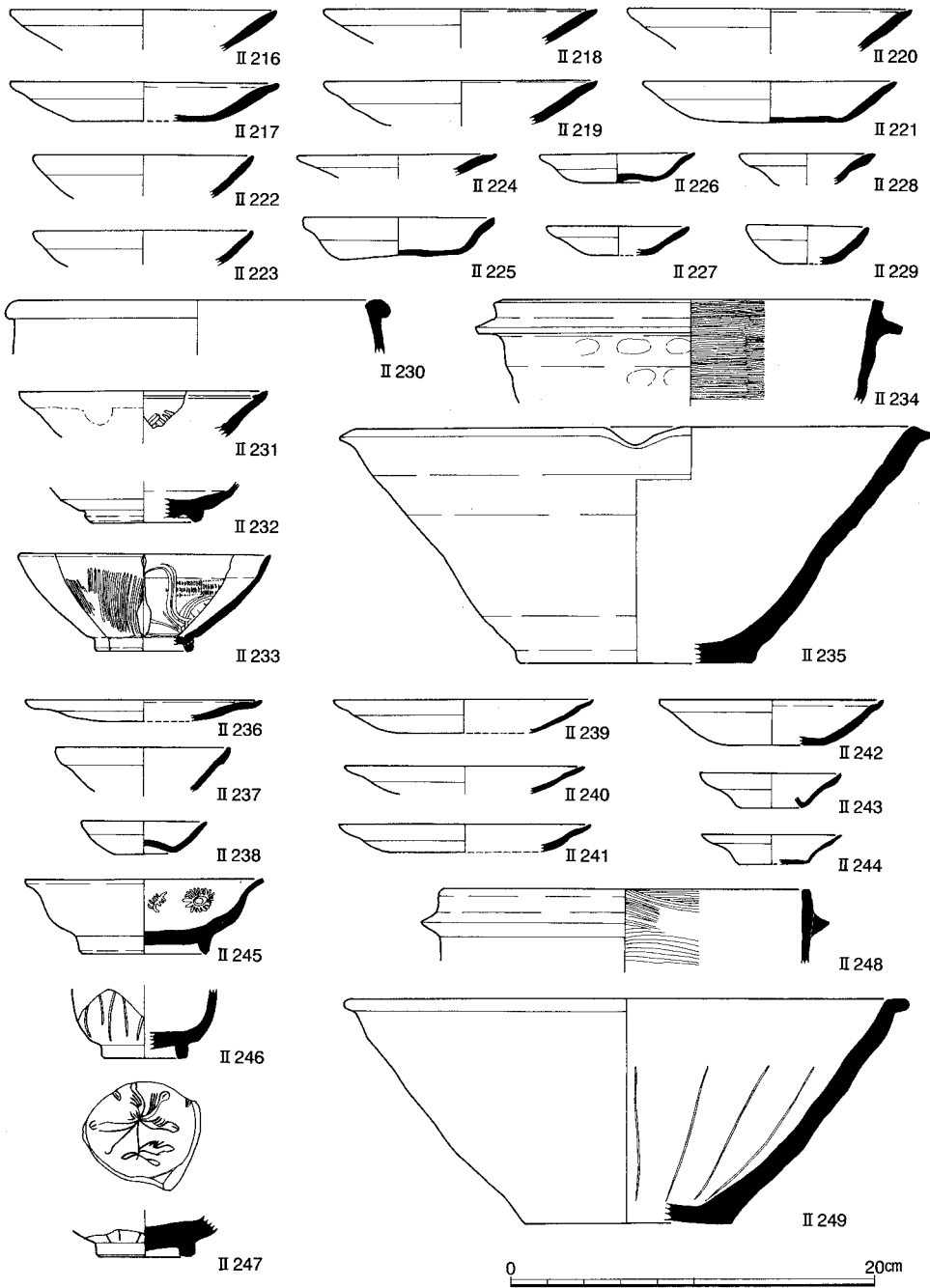


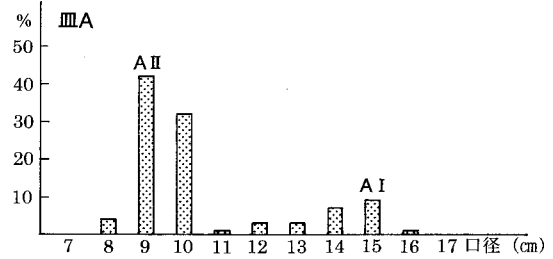
図56 S K 6 出土遺物 (II 216~II 229土師器, II 230鉄釉陶器, II 231・II 232灰系系陶器, II 233青磁, II 234瓦器, II 235信樂), S E 11出土遺物 (II 236~II 244土師器, II 245白磁, II 246・II 247青磁, II 248瓦器, II 249信樂)

京大大学病院構内AG20・AF20区の発掘調査

表6 SE14・SK3・SK10出土土師器計測結果

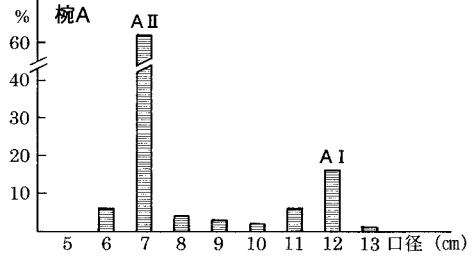
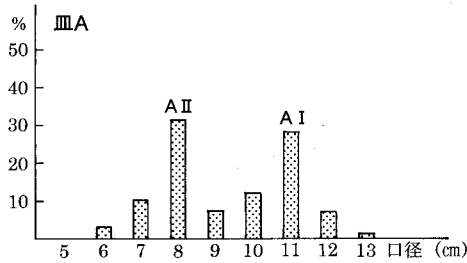
SE14

	皿A II	皿A I
口縁形態	80.6個体	23.4個体
C ₃ 類	1.6%	4.6%
D ₃ 類	53.8%	26.6%
D ₄ 類	22.7%	27.0%
D ₅ 類	21.9%	35.0%
D ₆ 類		6.8%
合計	100.0%	100.0%



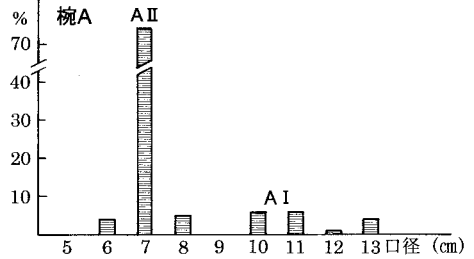
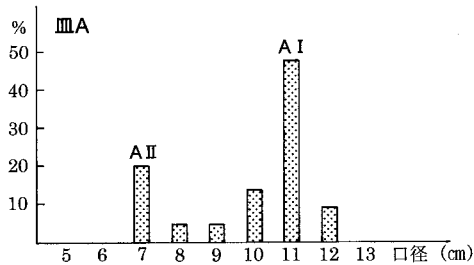
SK3

	皿A II	皿A I	椀A II	椀A I
口縁形態	26.9個体	24.6個体	7.6個体	23.0個体
E ₁ 類	52.0%	41.3%	40.8%	66.3%
E ₂ 類	3.1%	1.7%	33.7%	31.9%
E ₃ 類	26.3%	29.2%	23.0%	1.4%
E ₄ 類	18.6%	27.8%	2.5%	0.4%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%



SK10

	皿A II	皿A I	椀A II	椀A I
口縁形態	1.1個体	2.6個体	14.7個体	3.0個体
E ₁ 類	30.9%	28.8%	18.1%	88.9%
E ₂ 類	30.9%	6.4%	35.7%	8.3%
E ₃ 類	38.2%	60.9%	32.9%	2.8%
E ₄ 類		3.9%	13.3%	
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%



師器皿。口縁形態はⅡ238がE₁類、Ⅱ243がE₂類、Ⅱ244がE₃類、Ⅱ236・Ⅱ242がF₃類、Ⅱ239～Ⅱ241がF₄類。

Ⅱ245は白磁皿。口縁部内面にスタンプによる花文をもつ。Ⅱ246・Ⅱ247は青磁椀。外面に蓮弁文を施し、Ⅱ247は見込みに花文を描いている。Ⅱ248は瓦器羽釜。直線的な体部に、断面三角の鏝がつく。Ⅱ249は信楽すり鉢。口縁端部がつよく外側に張り出す。内面には、篋による1条1単位のすり目をもつ。褐色を呈し、焼成は硬質である。山田分類のⅡb型式、木戸雅寿の分類のB1a類にあたる〔山田90、木戸95〕。

SX13、SK6、SE11出土遺物は、15世紀後半ごろのものであろう。

近世の遺物 Ⅱ250～Ⅱ302は、SD4出土遺物。これらの遺物は、X=955付近を中心にまとまって発見され、用をなさなくなった器物が一括廃棄されたものであろう。

Ⅱ250～Ⅱ271は土師器皿。見込みに圏線をもつⅡ250～Ⅱ264と圏線をもたないⅡ265～Ⅱ271に大別される。口径は、圏線をもつものは12～13cmにピークをもち、Ⅱ250のように口径17cm前後の大型品もみられる。圏線は断面形がU字状を呈し、外側端部は体部との境が不明瞭である。圏線をもつ皿は、口縁端部を中心に煤が付着するものが多い。圏線をもたない皿は、口径10cm前後と7cm前後にピークをもつ。

Ⅱ272は焼塩壺。筒形で口縁端部に蓋受けの段をもつ。体部は型作りで、底部は小粘土塊を充填して成形する。口径5.5cm、最大径7.1cm、器高7.4cm。渡辺誠の分類によるB類〔渡辺85〕で刻印をもつが、外面は剥落がひどく「泉」を除いて判読できない。

Ⅱ273～Ⅱ276は天目椀。Ⅱ277・Ⅱ278は志野焼の皿。底部外面に、Ⅱ277は1個以上、Ⅱ278は3個の目跡が残る。Ⅱ279は黒織部の椀。内面全体と外側面の一部を残して鉄釉を施す。鉄釉をかけない部分に鉄絵で二重四角文を描き、長石釉を掛けている。Ⅱ280～Ⅱ283は唐津焼の椀・皿。Ⅱ280・Ⅱ281は椀で、Ⅱ280は高台に5個の砂目が残る。Ⅱ282・Ⅱ283は皿で、Ⅱ282は見込みに3個の砂目残り、Ⅱ283は内面に鉄絵を描いている。Ⅱ284は、内外面とも灰緑色の釉のかかる京焼系の陶器椀。Ⅱ285は陶器皿。内面から口縁部外面にかけて白色釉の下地に淡緑色の釉が施される。Ⅱ286は陶器花生。内外面とも濃緑色の釉がかかり、内面には叩きの痕跡である青海波文がわずかに残る。高取焼あるいは上野焼とみられる。Ⅱ287は伊万里系の青磁椀。Ⅱ288～Ⅱ290は染付。Ⅱ288は天目形椀、Ⅱ289は筒形椀で、初期伊万里である。Ⅱ290は竹笹文を描く小杯。Ⅱ291・Ⅱ292は輸入磁器青花で、Ⅱ291は椀、Ⅱ292は皿である。Ⅱ291・Ⅱ292ともに畳付の釉は掻き取られているが、Ⅱ291は畳付周辺に砂が付着している。

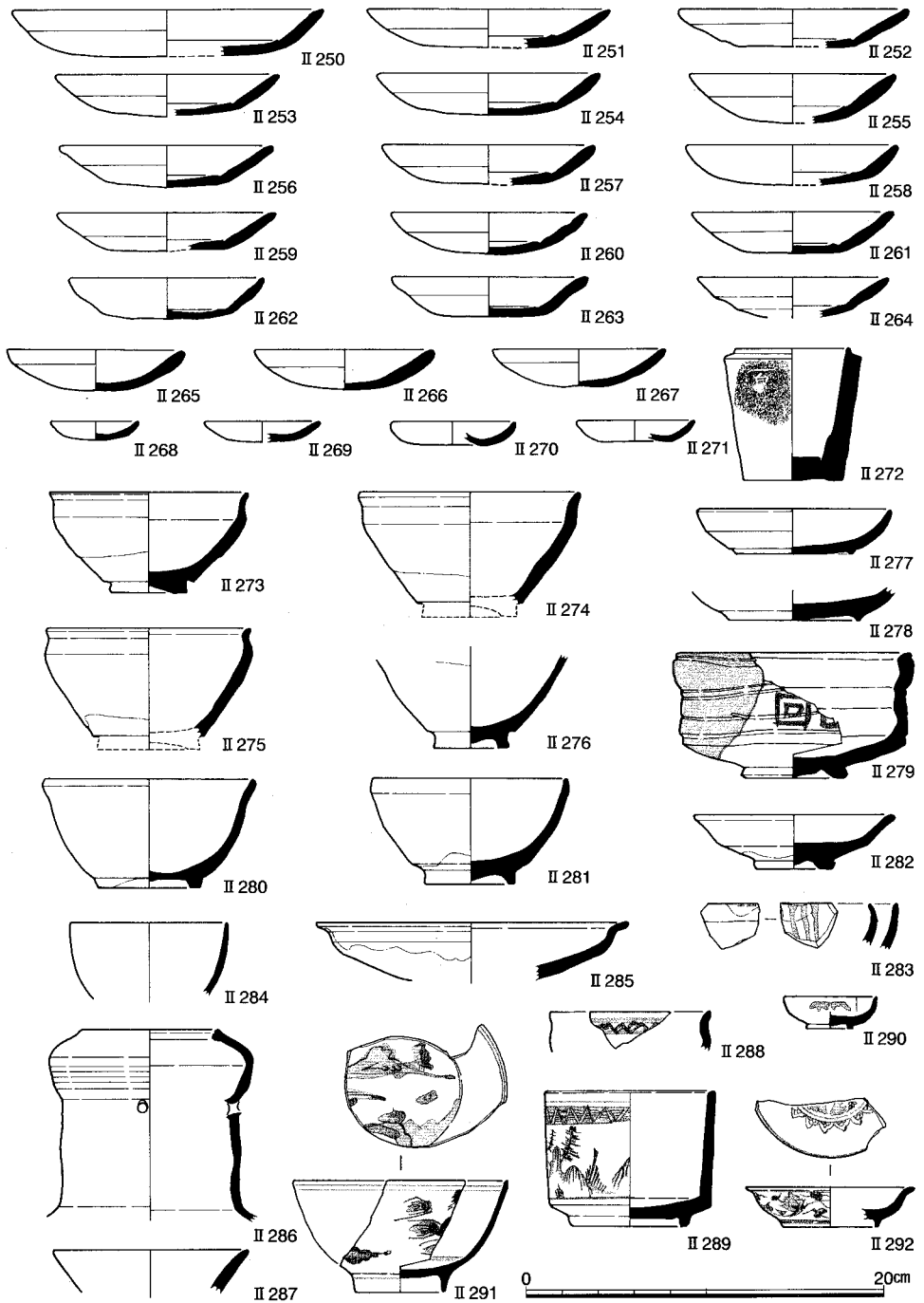


図57 S D 4 出土遺物(1) (II 250～II 272土師器, II 273～II 286陶器, II 287青磁, II 288～II 290染付, II 291・II 292青花)

A G 20区の遺構と遺物

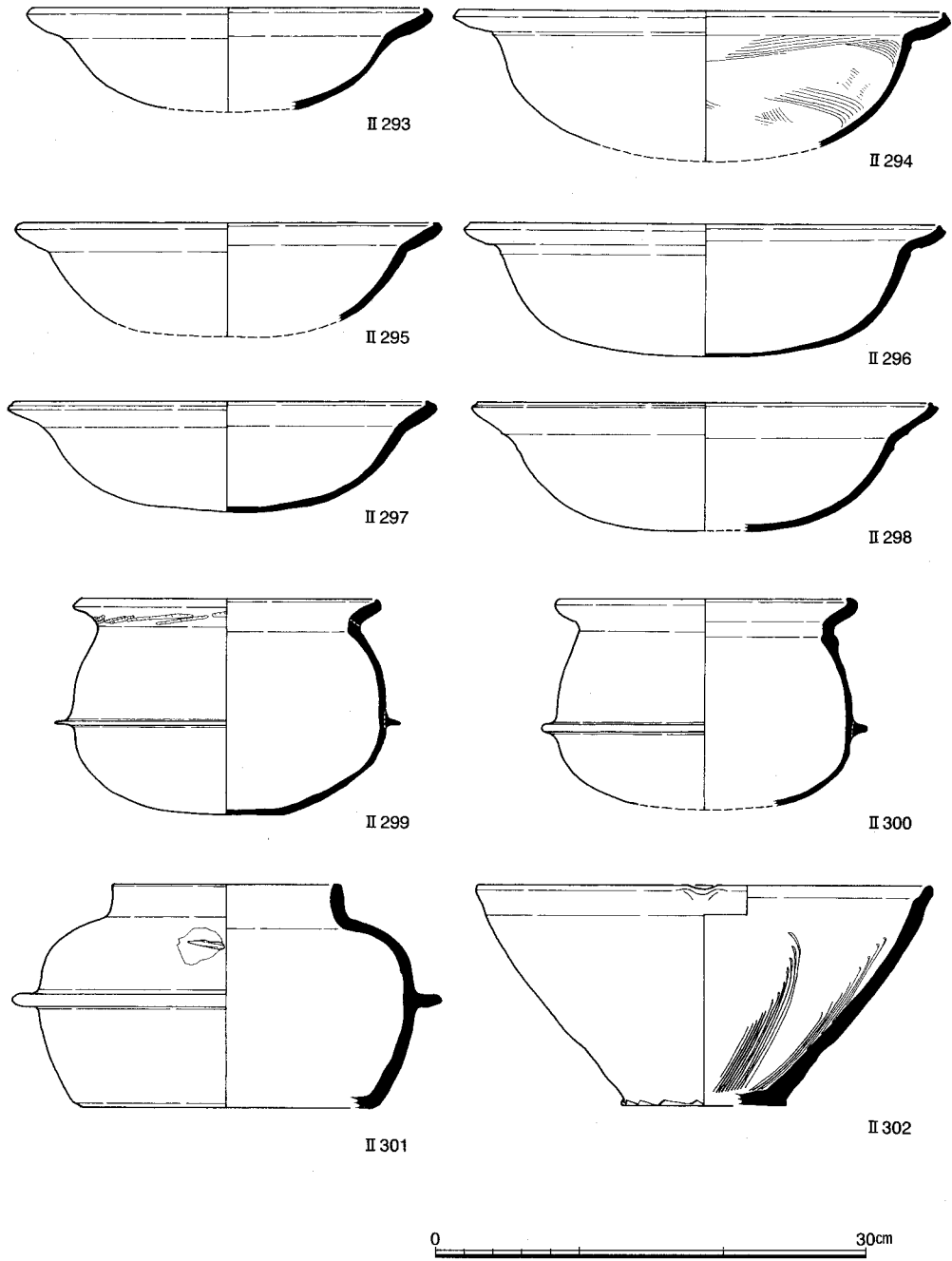


図58 S D 4 出土遺物(2) (II 293~II 300土師器, II 301・II 302瓦器) 縮尺1/5

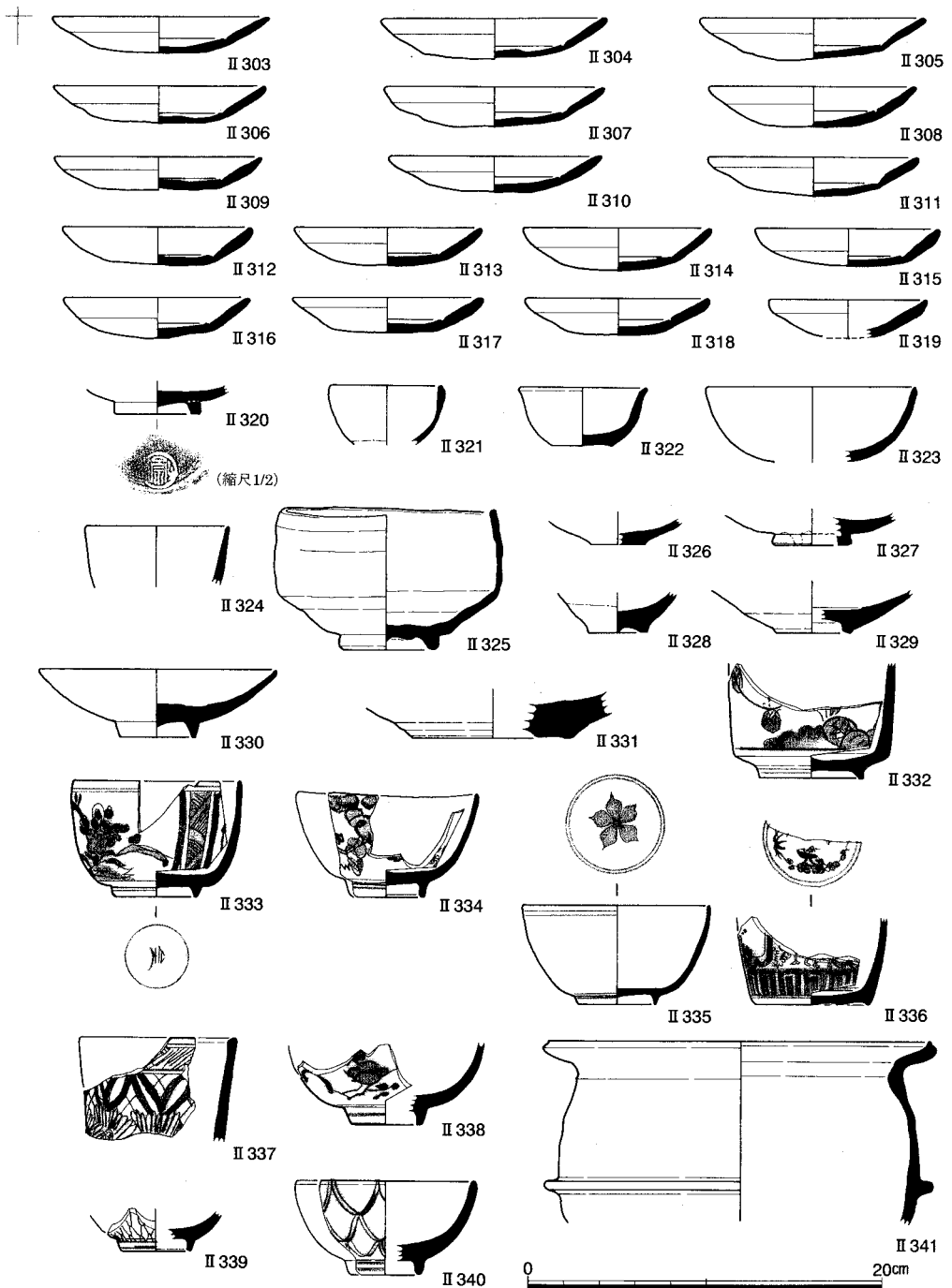


図59 S D 5 出土遺物 (II 303~II 320・II 341土師器, II 321~II 329陶器, II 330・II 331青磁, II 332~II 340染付)

A G 20区の遺構と遺物

Ⅱ 293～Ⅱ 300は土師器煮炊具。Ⅱ 293～Ⅱ 298は、いわゆる土鍋である。半球形の体部から口縁部が外へ開く形態で、口縁端部は内側へ突出させる。口径27～29cm、器高8cm前後と口径32～34cm、器高9cm前後の2つの法量が認められる。内外面とも丁寧に撫でて仕上げているが、Ⅱ 294は内面に刷毛目調整の痕跡が残り、Ⅱ 295の外面には叩きかと思われる痕跡がかすかに残る。口縁部外面および底部内面を中心に、炭化物の付着が著しい。Ⅱ 299・Ⅱ 300は、いわゆる土釜である。やや下ぶくれの球形の体部に外傾する口縁部がつき、体部中央に鑿をめぐらしている。口縁端部は内側へ突出させる。内面外面ともに撫でて仕上げられており、Ⅱ 299の口縁部外面には棒状整形具による左下がりの圧痕がみられる。菅原正明の分類による大和Ⅰ2型である〔菅原83〕。Ⅱ 301は瓦器羽釜で、茶釜を模したとみられる形態を呈する。体上部に、水平方向に貫通孔をもつ把手の剥落痕跡がみられる。Ⅱ 302は瓦器すり鉢。口縁部内面やや下がった位置に段がつく。12条1単位のすり目をもつ。

S D 4 出土遺物は、17世紀前半の所産とみられるものが主体を占める。ただし、Ⅱ 272・Ⅱ 290のように、17世紀後半以降に下る遺物も少量ではあるが出土している。

Ⅱ 303～Ⅱ 341はS D 5 出土遺物。Ⅱ 303～Ⅱ 319は土師器皿。ほとんどが見込みに圏線をもつ皿で、Ⅱ 319のように圏線をもたないものはわずかである。圏線をもつ皿の口径は、11～12cmにピークをもち、圏線は断面レ字状を呈する。Ⅱ 320は轆轤成形の土師質碗ないし皿である。付け高台で、底部外面に銘をもつ。Ⅱ 321～Ⅱ 329は陶器の碗・皿類。Ⅱ 325は体部が屈曲する碗。口縁部は緩やかな波状を呈し、内面底部には、径8.5cmの茶溜まりをもつ。胎土は乳白色を呈し、鉄化粧を施した後、全面に黄緑色に発色する灰釉を掛けている。Ⅱ 328は唐津碗の底部。Ⅱ 330・Ⅱ 331は伊万里青磁の皿。Ⅱ 330は見込みを蛇の目軸はぎし、Ⅱ 331は蛇の目高台で畳付に鉄錆を施す。Ⅱ 332～Ⅱ 340は染付碗。Ⅱ 336は色絵染付の筒形碗で、蛇の目凹形高台である。Ⅱ 338は見込みを蛇の目軸はぎとする。花文の発色は悪く、濃褐色を呈する。Ⅱ 339は一重網目文、Ⅱ 340は二重網目文を描く。Ⅱ 341は土釜。外面に煤が薄く付着する。口径21.6cm。

S D 5 出土の土師器皿は、S D 4 出土遺物と比較して、口径の縮小や圏線の形状の変化などから、新しい様相を示している。また染付もⅡ 338～Ⅱ 340のように、18世紀に下るとみられるものも含んでおり、S D 4 よりは新しく、17世紀後半～18世紀前半の遺物を中心にするものと理解する。

Ⅱ 342～Ⅱ 348はS E 9 出土遺物。Ⅱ 342・Ⅱ 343は土師器皿。Ⅱ 342は口縁端部に煤が付着する。Ⅱ 344は土鍋。口径30cm前後で、口縁端部から内面にかけて、回転撫でて仕上げ

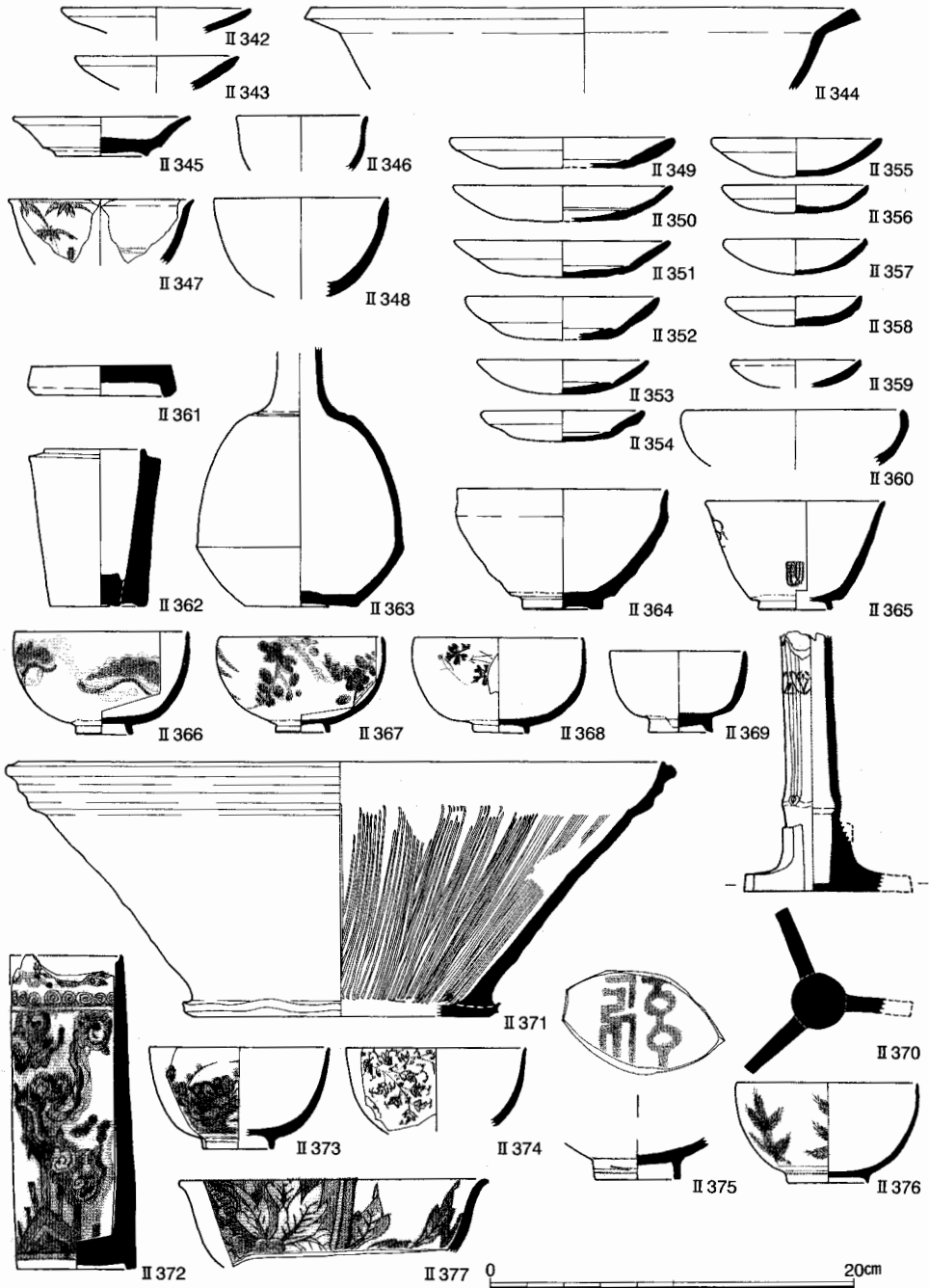


図60 S E 9 出土遺物 (II 342~II 344土師器, II 345・II 346陶器, II 347染付, II 348青磁),
S E 7・8 出土遺物 (II 349~II 362土師器, II 363~II 371陶器, II 372~II 377染付)

ている。Ⅱ345は瀬戸・美濃系の皿。淡緑色の釉を全面に施す。Ⅱ346は鉄釉を全面に施した小椀。Ⅱ347は竹笹文を描く染付椀。Ⅱ348は伊万里青磁の椀。

Ⅱ349～Ⅱ377はSE7・8出土遺物。Ⅱ349～Ⅱ359は土師器皿。Ⅱ349～Ⅱ354は見込みに圈線をもつ。Ⅱ360は、回転台整形の土師器椀。Ⅱ361は焼塩壺の蓋。内面には布目痕を残す。Ⅱ362は焼塩壺の身。筒形で口縁端部に蓋受けの段をもつ。体部内面は型作りによる布の圧痕を残し、底部は小粘土塊を充填して作っている。刻印銘はみられない。口径5.2cm前後、最大径7.8cm、器高8.5cm。身、蓋ともに渡辺誠の分類によるB類である〔渡辺85〕。Ⅱ363は陶器壺。Ⅱ364は天目椀。Ⅱ365～Ⅱ368は京焼系陶器の椀。Ⅱ365は体下部に赤絵で銘をもつ。Ⅱ369は瀬戸・美濃系の小椀で、底部を除いて灰緑色の釉を施す。Ⅱ370

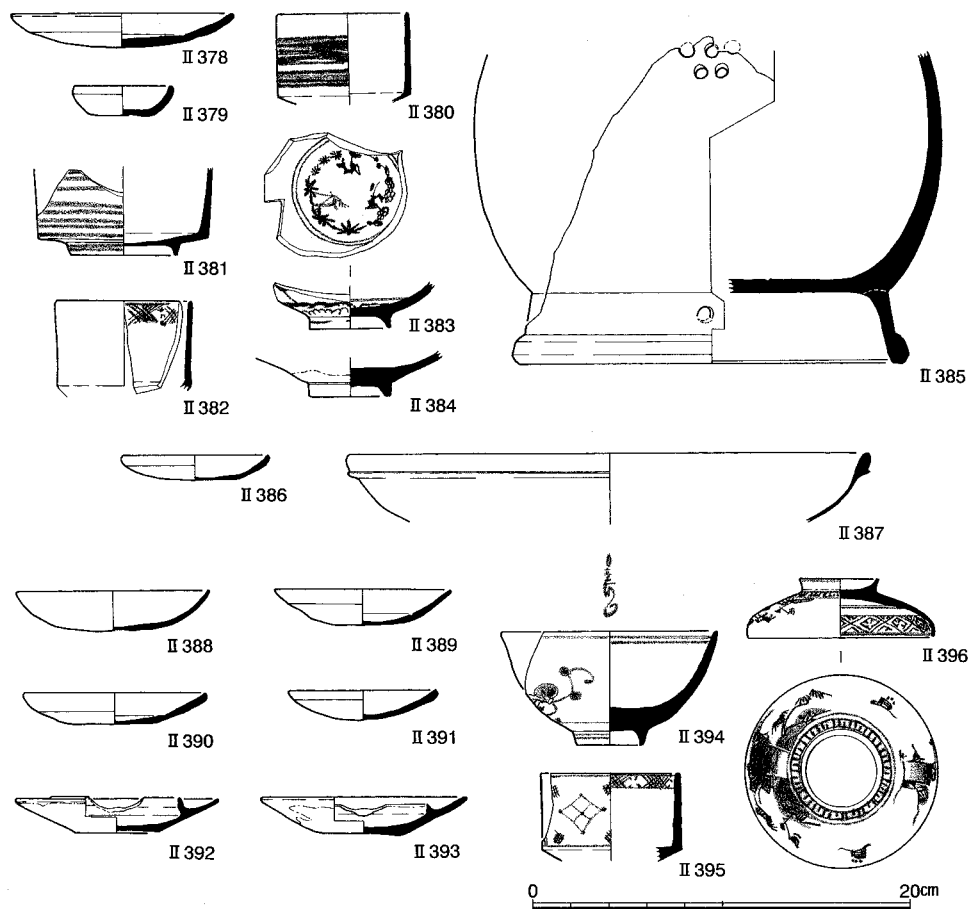


図61 SE2出土遺物（Ⅱ378・Ⅱ379・Ⅱ385土師器，Ⅱ380陶器，Ⅱ381～Ⅱ383染付，Ⅱ384白磁），
SE5出土遺物（Ⅱ386・Ⅱ387土師器），
SX1出土遺物（Ⅱ388～Ⅱ391土師器，Ⅱ392・Ⅱ393陶器，Ⅱ394～Ⅱ396染付）

は細長い円筒の瓶の形態を呈する線香筒。竹を模しており、三足がつく。底面を除いて淡黄緑色の釉を施し、鉄絵で文様を描く。Ⅱ371は信楽のすり鉢。長石粒を多く含む黄褐色の胎土に、鉄泥を全面に施す。口縁部外面に2条の凹線を横走させて縁帯状に作り、端面には1条の沈線を巡らしている。すり目は8条1単位で、見込みにも斜格子状に施している。

Ⅱ372は染付の花生。筒形の形態で、畳付のみ無釉とする。器高17.2cmをはかる。Ⅱ373～Ⅱ375は染付椀。Ⅱ373はコンニャク印判と手描きの文様を組み合わせ草花文で飾る。Ⅱ375は見込みに「福」の字をデザイン化して施す。Ⅱ376は底裏に「太明年製」の銘をもつ。Ⅱ377は青磁染付の鉢。外面には青磁釉を施し、内面は草木文で飾る。

S E 9 および S E 7・8 出土遺物は、18世紀前葉～中葉ごろのものであろう。

Ⅱ378～Ⅱ385はS E 2 出土遺物。Ⅱ378・Ⅱ379は土師器皿。Ⅱ380は陶器椀。Ⅱ381～Ⅱ383は染付。Ⅱ382は外面青磁釉をかけている。Ⅱ384は白磁で、見込みを蛇の目釉はぎとする。Ⅱ385は土師質の焜炉。外側端部が丸く肥厚する脚台がつき、胴部は内彎する。胴中央付近に、5穴以上からなる通風口をもつ。胴部上半には煤が付着する。

Ⅱ386・Ⅱ387はS E 5 出土遺物。Ⅱ386は土師器皿。Ⅱ387は土師器焙烙。口径28cmをはかる。Ⅱ388～Ⅱ396はS X 1 出土遺物。Ⅱ388～Ⅱ391は土師器皿。Ⅱ388は灰白色を呈し、回転台を用いて内面は撫で、外面は磨いて仕上げる。見込みとそれに対応する外面底部に、一辺約5cmの三角形形状に黒斑をもつ。Ⅱ392・Ⅱ393は陶器灯明受皿。Ⅱ394・Ⅱ395は染付椀、Ⅱ396は染付蓋。

S E 2・S E 5・S X 1 出土遺物は、19世紀前葉ごろのものであろう。

蓮月焼 幕末の歌人、大田垣蓮月が製作した、いわゆる蓮月焼がS K 4 およびその周辺の包含層からまとまって出土したので、一括して解説する。隣接するA F 19区の調査で、土坑から蓮月焼がまとまって出土しており〔浜崎・宮本87〕、また前章で報告したようにA R 25区で発見例があり、京都大学構内では3例目となる。

出土量は実測図として掲げた29個体のほかに、急須・煎茶椀・鉢・涼炉などの破片資料があり、全体で40個体前後になろう。資料の中には、破損した断面に釉が流れているもの(Ⅱ424)、ひび割れにより施釉していない面に釉が流れ出たもの(Ⅱ406)、焼成時に生じたと考えられるひび割れをもつもの(Ⅱ400・Ⅱ407)などがあり、完形品はない。これらの出土資料は、焼き損ない品を捨てたものと考えられる。胎土は陶土を用い、無釉で焼き締めるものと施釉して仕上げるものがある。成形は手づくねによるものであり、釘彫りあるいは筆を用いて、自詠の和歌を書き込んでいる。

AG20区の遺構と遺物

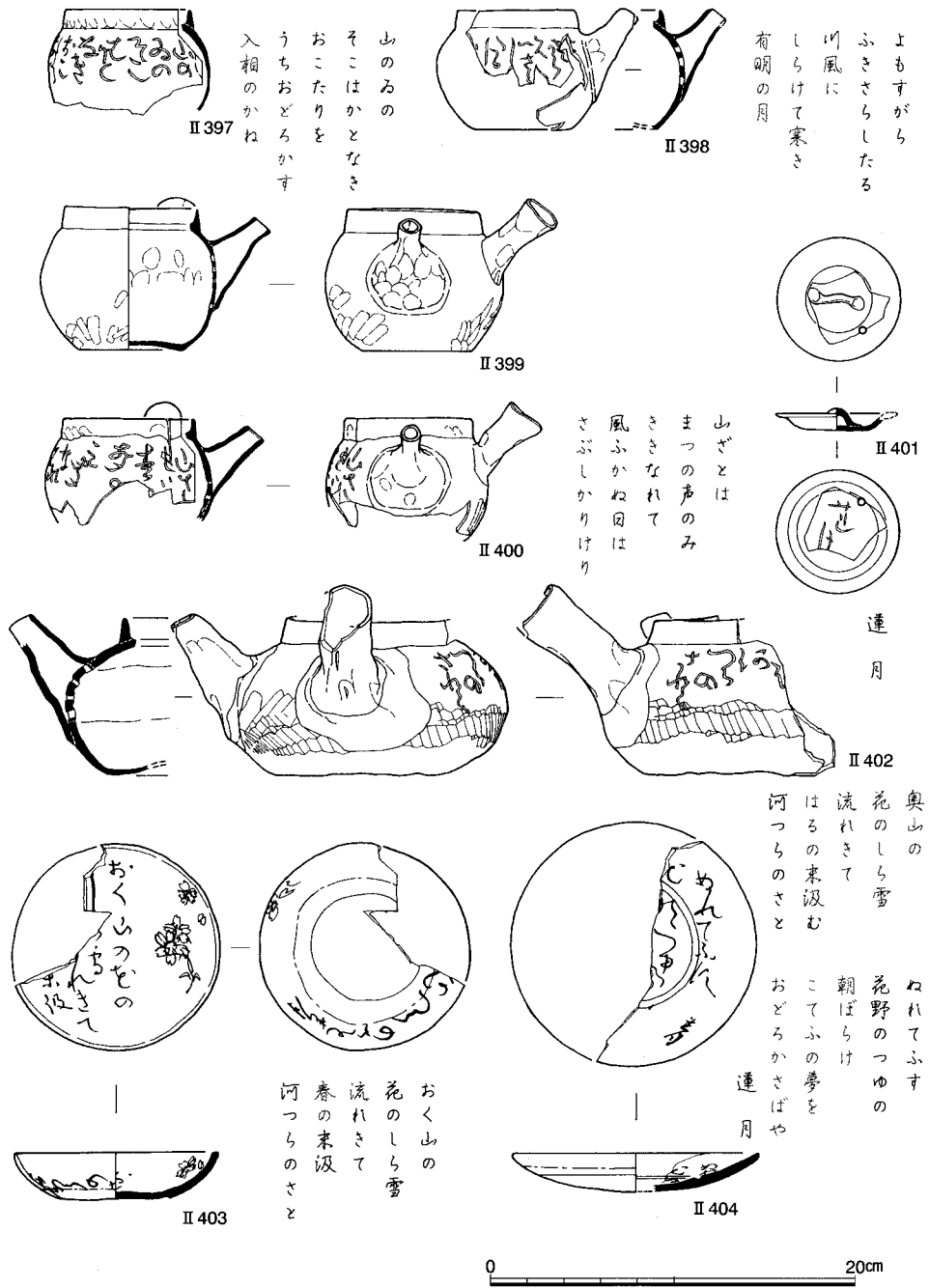


図62 蓮月焼(1) (II 397~II 400急須, II 401急須蓋, II 402湯瓶, II 403・II 404皿)

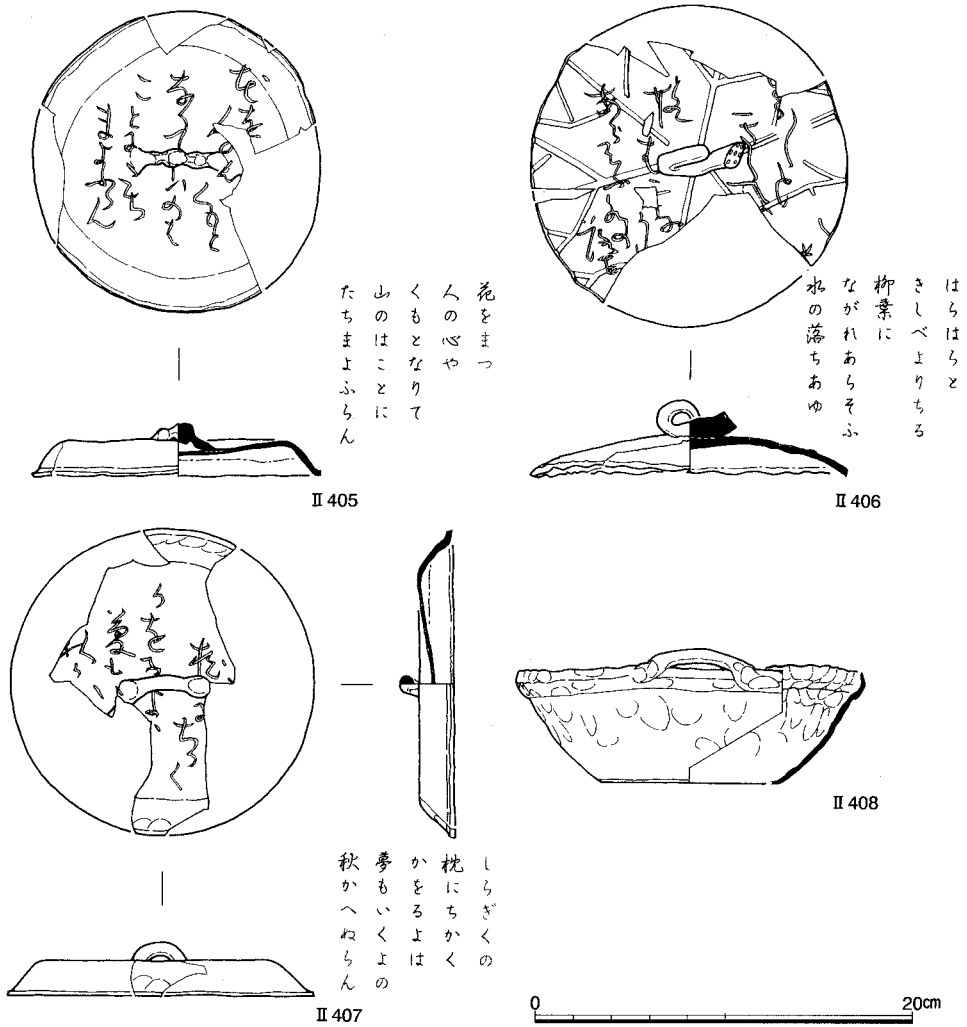


図63 蓮月焼(2) (II 405～II 408蓋物)

なお、蓮月焼最大の特徴である和歌全文が残存している資料は1点もみられなかった。そこで、書き込まれた歌を復元するために、現在に伝えられている蓮月の和歌979首をもとにデータベースを作成し、出土資料から判読できる歌の一部と一致する配列をもつものを検索して和歌の復元をおこなった。濃度を落としてある箇所が推定部分である。

出土した資料は、煎茶における茶席の道具が主体を占めている。II 397～II 400は急須、II 401はその蓋である。II 397・II 398・II 400は、焼き締めによる焼成で、釘彫りで歌を刻む。II 400は外面全体に自然釉がかかる。II 399・II 401は灰白色を呈し、焼きがあまい。

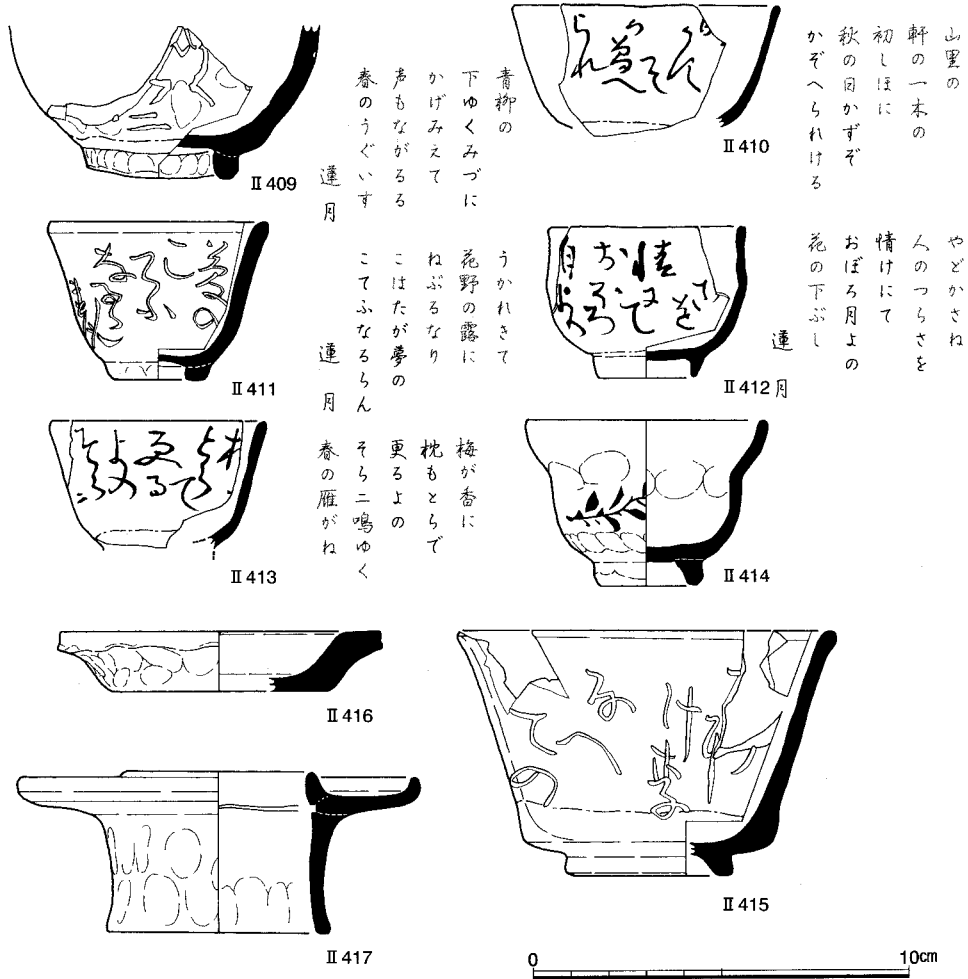


図64 蓮月焼(3) (II 409~II 414碗, II 415鉢, II 416・II 417茶托) 縮尺1/2

II 401は、裏面に「蓮月」の銘を釘彫りする。II 399は和歌を筆書きし、施釉して仕上げるための素焼きの段階の可能性もある。

II 402は焼き締めによる湯瓶で、釘彫りで歌を刻む。急須・湯瓶に刻まれた和歌は、注ぎ口の向かって左側からはじまり、把手の向かって右側で収まるように配列されている。これは客席に対する正面を意識した結果であろう。

II 403・II 404は皿。II 403は、筆書きで桜花の図と賛をつける。和歌は見込みから始まって体部外面でおわり、「蓮月」の銘をもつ。底部外面を除いて施釉する。II 404は、見込みに圏線がめぐり、同時代の土師器皿の形態を模倣している。筆書きによる和歌を見込み

に配し、口縁部外面から見込みにかけて施釉する。

Ⅱ405～Ⅱ408は蓋物の類で、Ⅱ405～Ⅱ407は蓋、Ⅱ408は身である。Ⅱ408は2箇所に橋状把手のつく鉢で、内外面に指押さえによる整形の痕跡が顕著に残る。淡橙色を呈し、焼きがあまりことから、施釉するための素焼きの可能性もある。Ⅱ405～Ⅱ407は上面に釘彫りで和歌を刻み、内面にⅡ405・Ⅱ407は透明釉、Ⅱ406は白色の釉を施す。Ⅱ406は蓮の葉と地下茎をかたどっている。

Ⅱ409～Ⅱ414は椀。口径5～7cm、器高4～4.5cmのⅡ410～Ⅱ414は煎茶椀である。Ⅱ411のみ無釉で、それ以外は底部外面を除いて施釉する。Ⅱ409は、釘彫りで和歌と「蓮月」の銘を刻んでいる。Ⅱ410・Ⅱ412・Ⅱ413は筆書きで和歌をしるす。Ⅱ414も筆書きで草文を描く。口縁部から体部は、12分の1程度しか残存していないので、この資料にも和歌を詠んだ可能性が残る。Ⅱ411は釘彫りで和歌と「蓮月」の銘を刻む。灰白色から灰色を呈し、焼きがあまりため、施釉のための素焼きかもしれない。

Ⅱ415は、上面観が方形になる鉢で、底部外面を除いて施釉する。この例のみ、和歌を判読できなかった。蓮月焼ではないかもしれない。Ⅱ416・Ⅱ417は茶托であろう。いずれも無釉で、Ⅱ416は淡橙色、Ⅱ417は灰白色を呈し焼きがあまりなので、施釉前の素焼きの可能性が高い。Ⅱ416は底面は磨いて平滑な面としている。

Ⅱ418～Ⅱ421は、蓋（Ⅱ418・Ⅱ419）と身（Ⅱ420・Ⅱ421）がセットをなす焼き締め香合。蓋は亀をかたどっている。身の底部には、釘彫りで「蓮月」の銘を刻む。蓋、身ともに側縁を3～4箇所刻んでいる。紐かけの工夫であろうか。蓮月尼65歳ごろの作とされる伝世品に酷似する〔京都府立総合資料館編84, p.8〕。

Ⅱ422は焼き締めによる壺形の容器。外面には部分的に自然釉がかかる。釘彫りによる歌をもつ。口径8.5cm前後、胴部最大径12.8cm、器高10.6cmをはかる。Ⅱ425も同様の形状の胴下半から底部の資料。無釉で釘彫りによる歌をもつ。淡橙色を呈し焼成はあまり。茶席の道具であるとすれば、水指あるいは建水などに使用されるものであろうか。

Ⅱ423は涼炉。円筒形の胴部とさなの部分は、別々に製作して接合している。口縁部内面には瓶掛けが3箇所つき、胴部下半に長方形の窓があいて舌状の灰出しがとりつく。素焼きで淡橙色を呈する。釘彫りで、和歌と「蓮月」の銘を刻む。

Ⅱ424は口径23cm前後、器高22.4cmをはかる。三足になる脚のうち、1個を欠損する。脚部には小孔をもつ。底部を除く外面に淡青色の釉をかける。「蓮月」の銘をもつが、欠損により和歌は残存しない。内部に五徳を置いて用いた火炉と思われる。

A G 20区の遺構と遺物

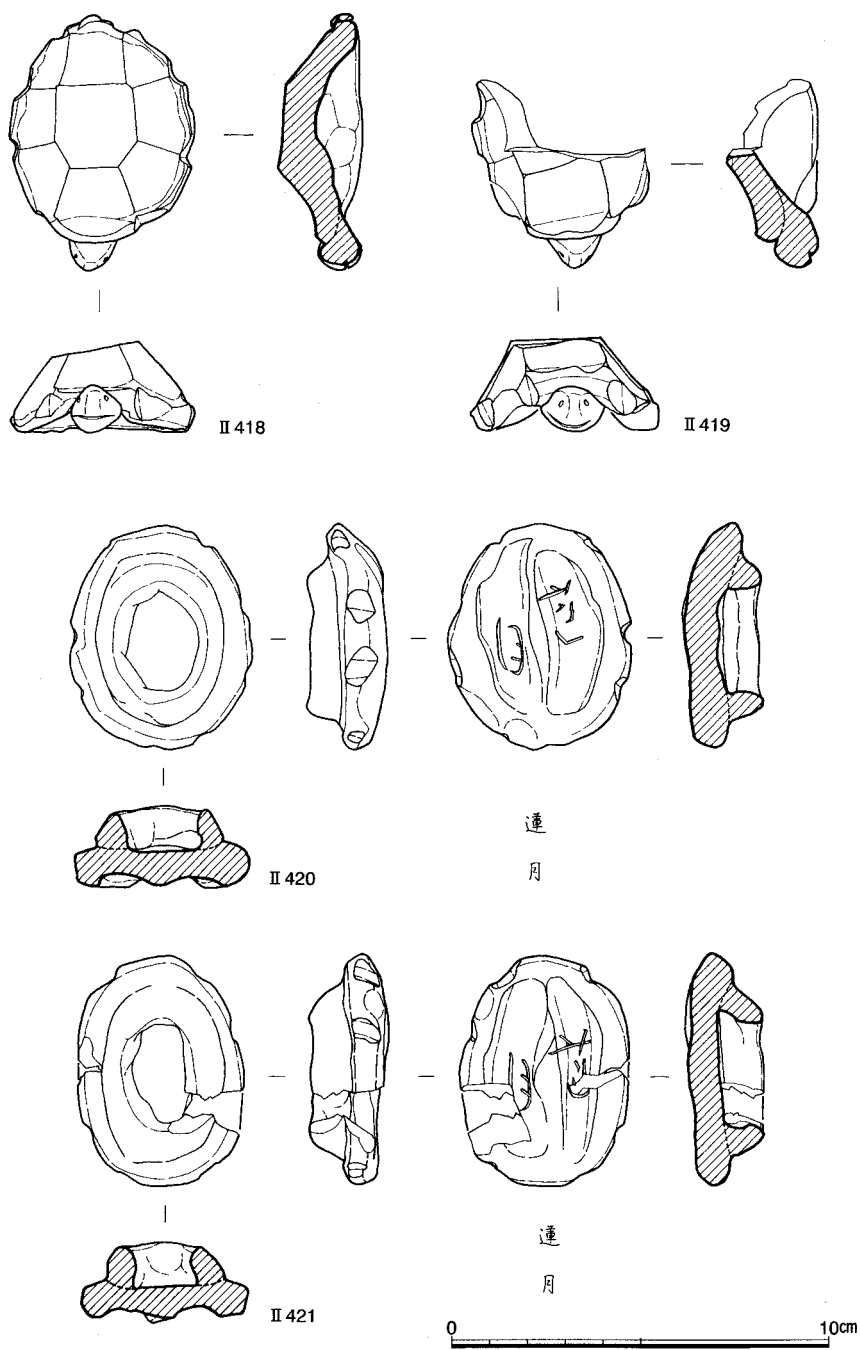


図65 蓮月焼(4) (II 418~II 421香合) 縮尺1/2

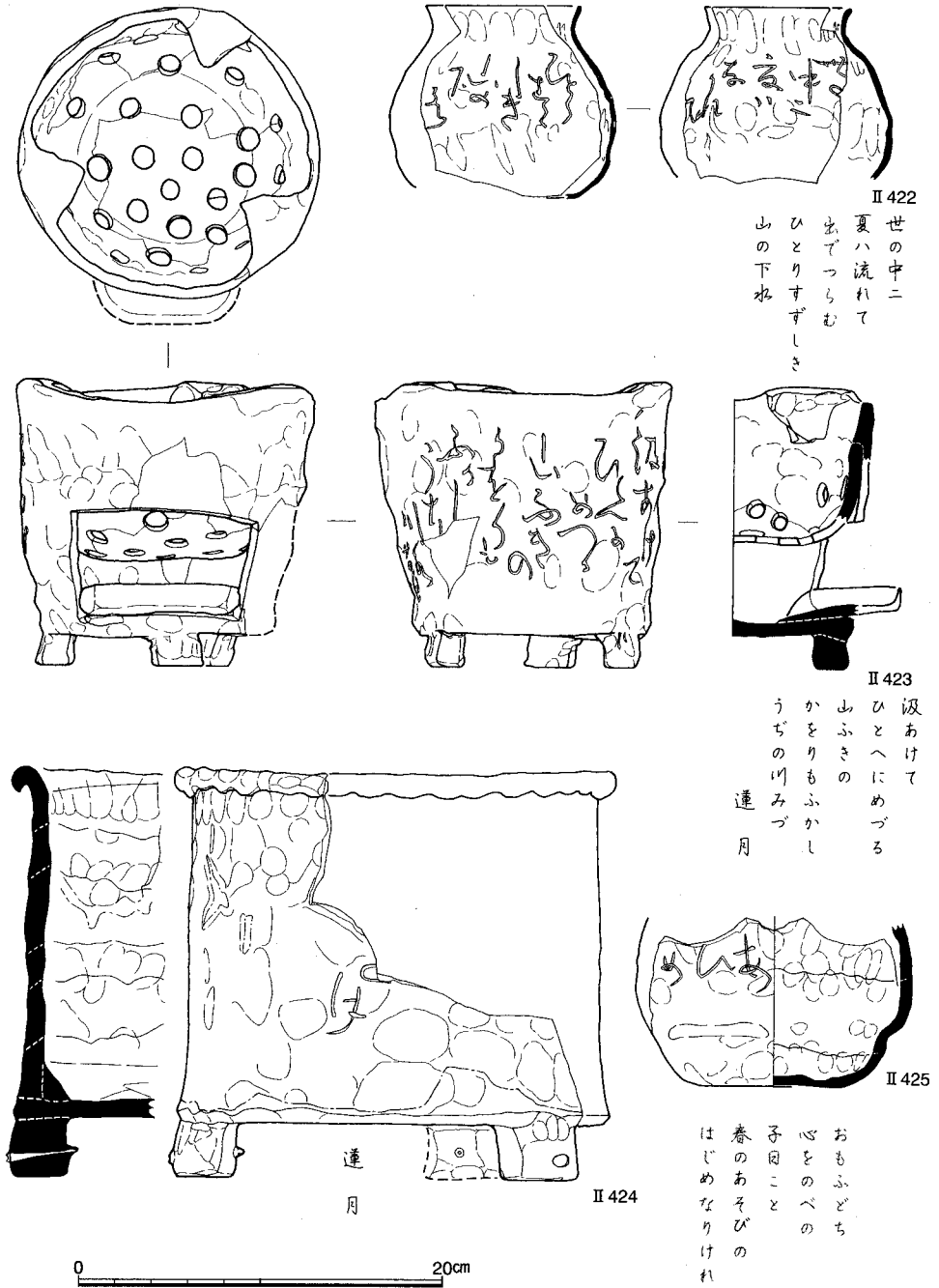


図66 蓮月焼(5) (II 422・II 425壺形, II 423涼炉, II 424火炉)

3 A F 20区の遺構と遺物

(1) 層位 (図67)

地表面の標高は、調査区東北端で48.7m、南西端で48.1mをはかり、南西に向かって緩やかに傾斜する。調査区の基本層位は、上から表土(第1層)、暗灰褐色土(第2層)、明褐色土(第3層)、灰茶褐色土(第4層)、淡褐色土(第5層)、礫混じり灰褐色土(第6層)、瓦混じり灰褐色土(第7層)、青灰色粘土(第8層)、灰褐色土(第9層)、瓦混じり灰褐色粘質土(第10層)、黄灰色シルト(第11層)、赤褐色砂礫(第12層)である。

第2層と第3層は近代の造成土である。第4層から第10層までは江戸時代の堆積物で、18世紀の遺物を多量に含む。このうち第6～8層は流路SR1の埋土であり、底に堆積する第8層は自然堆積層、拳大から人頭大の礫や多量の瓦を含む第6層と第7層は人為的な堆積層である。また、SR1に切られる第10層は、Y=1997付近で土取穴を切って立ち上がっている。SR1以前の流路堆積物とみられるが、肩部を一部検出するにとどまった。

第11層および第12層は、前節AG20区の第8層、第9層にそれぞれ対応する堆積物である。黄灰色シルトは土取りの対象となった土層であり、本調査区ではほとんど残存していなかった。

(2) 遺構 (図版23, 図68)

中世の遺構 本調査区で検出した中世の遺構として、井戸SE1がある。後世の土取りによって上部は破壊されていたが、井戸側の最下部と水溜は比較的良好に残存していた。掘形は円形、井戸側は縦板を横棧で押える構造で、水溜に曲物を設置している。裏込めには、小児頭大の礫を充填していた。井戸底の標高45.8mをはかる。井戸底の埋土からD₂・D₄類の土師器皿が少量出土した。13世紀前葉ごろのものであろう。

調査区の東半を中心に黄灰色シルトを掘り込んだ不整形の土坑が多数検出された。シルトの下層に堆積している赤褐色砂礫に達すると掘削をやめていることから、シルトの採取を目的とした土取穴と理解できる。遺物がほとんど出土していないため、年代の特定は難しいが、中世前半(13世紀)のSE1を破壊し、近世後半(18世紀)の遺構に切られていることから、中世後半～近世前半の時間幅にはおさまらさう。

近世の遺構 池・溝・流路・杭列などを検出した。池SG1は、西に隣接するAF19区で見つかったSG1と一連のものであり、今回の調査によって、南北約16m、東西約15mの規模をもつ不整形の池で、東北の隅にSG1に流れ込む溝SD1がとりつくこ

京都大学病院構内A G 20・A F 20区の発掘調査

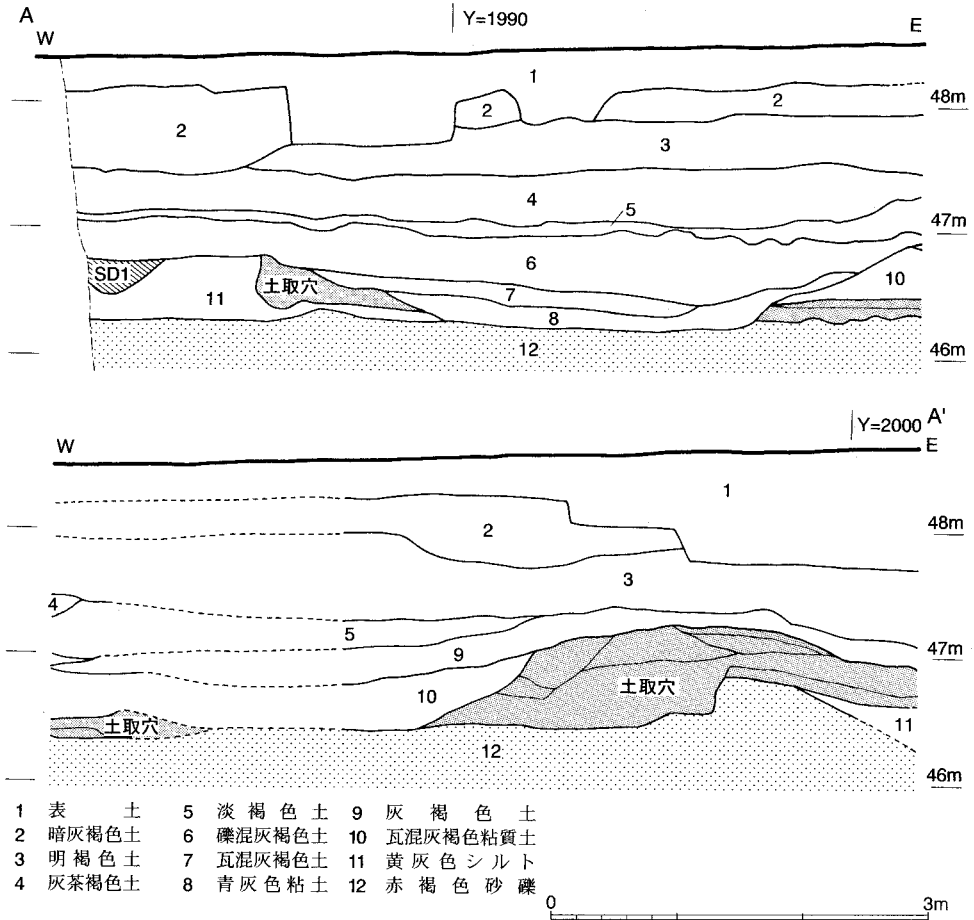


図67 A F 20区の層位 縮尺1/60

とが判明した。A F 19区では、護岸として厚さ1 mにおよぶ石組みがみられたが、今回検出した東岸部分には、そうした施設はみられなかった。ただし、直径7 cm前後の杭が30 cm～50 cmの間隔で、4本打ち込まれている箇所があり（S A 3）、護岸にかかわる何らかの施設があった可能性はある。また、北端の取水口部分からは、口径5～6 cmの小型の土師器皿が完形でまとまって出土した。

溝S D 1は、幅80 cm、検出面からの深さ30 cm前後をはかり、北端は調査区外へと続いている。東に接する流路S R 1との位置関係からみて、調査区の北方部分でS R 1にとりついていたと推定できる。S R 1から取水し、S G 1へと配水したのであろう。

S R 1は北から南へ流れる流路で、幅約4 m、検出面からの深さ約60 cmをはかる。調査

A F 20区の遺構と遺物

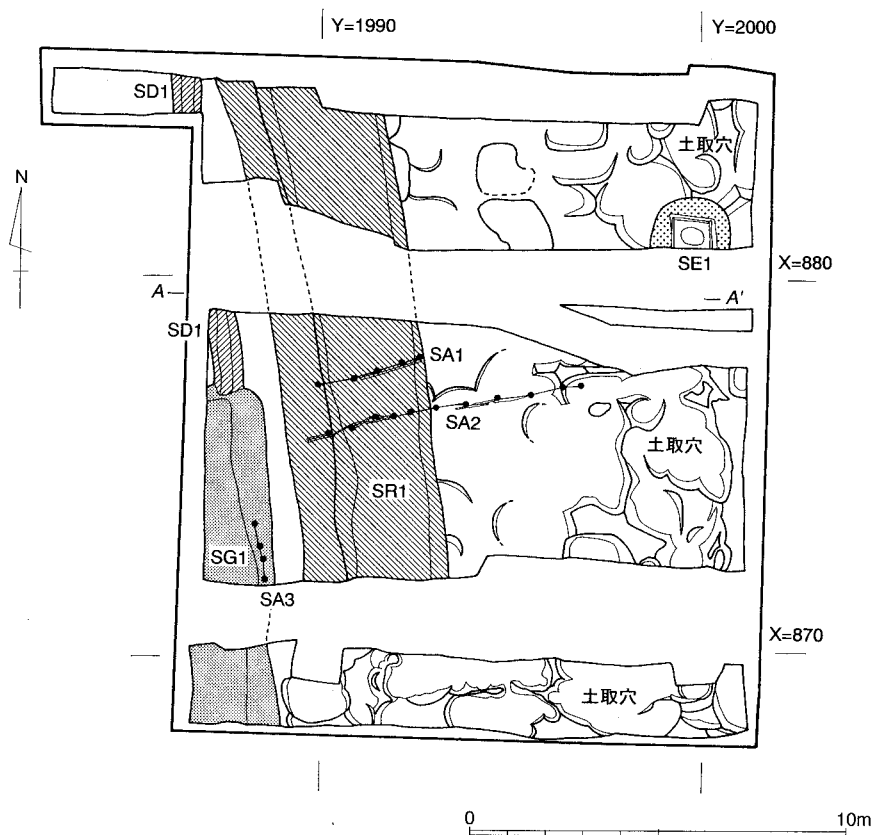


図68 A F 20区検出の遺構 縮尺1/200

区南辺では、後世の攪乱のために検出できなかったが、南北ともに調査区外へと続いている。前述したように、多量の瓦礫によって埋積している。

杭列は3基検出した。SA1・2はSR1を横断する形で設置されていた。SA1は、直径6cm前後の杭5本からなり、SR1東側肩から西側の立ち上がりにかけて、40~80cmの間隔で打ち込まれていた。SA2は、直径6~10cmの杭11本からなり、SR1西側立ち上がりからSR1の東側4mの地点まで、40~80cmの間隔で打ち込まれていた。SA1には横木が置かれており、SA2には竹材を8字状に横に渡してあった。構造的にみて、SA1・2はしがらみ状を呈するが、1.2m前後の間隔で併行していることから、簡単な構造の橋であった可能性もあろう。SA3は、前述のように、SG1の東岸に設けられており、護岸にかかわる施設であったと思われる。

(3) 遺物 (図版35～37, 図69～71)

SG 1 出土遺物 II 426～II 453は土師器皿。見込みに圈線をもつII 426～II 435と圈線をもたないII 436～II 453に大別できる。圈線をもつ皿は、II 428～II 435の口径10cm前後のものが主体を占め、II 427の口径12cm前後のもの、II 426の16cmをこえる大型のものがわずかにみられる。圈線の断面はレ字状を呈するものが多い。圈線をもたない皿は、II 436～II 443の口径8cm前後のものとII 444～II 453の口径5～6cmのものに分けられる。圈線をもつ皿と圈線をもたない口径8cm前後の皿には、口縁端部を中心に煤が付着するものが見られる。

II 454は土師器碗。回転台を用いて、外面は磨き、内面は横撫でによって整形されている。灰白色を呈し、底部外面は黒変している。II 455は、回転台整形の土師器皿。灰白色を呈する。見込みに型押しで、鶴・亀・松・竹・梅からなる蓬莱文様をもつ。和鏡の型を転用している可能性がある。II 456は土師器焙烙。口径28.2cm, 器高6.3cmをはかる。底部を外型で成形しており、口頸部との接合の痕跡が外面に明瞭に残る。内面と口縁部外面を回転撫でで仕上げている。難波洋三による分類のG類である〔難波89b〕。

II 457は土師器で、胎土に雲母が目立つ。口径12.4cm, 器高3.8cm。体部からいったん内側に屈曲した後、短い口縁部が外へ開く。底部は丸底となる。II 456と同様に底部は外型作りで、口頸部を接合した後、内面から口頸部にかけて回転撫でで仕上げている。底部外面が変色し、薄く煤が付着していることから、焙烙の一種とみてよいと思われる。

II 458・II 459は焼塩壺。口径3cm前後, 器高は6cm前後である。口縁部が内傾してすばまる形態で、口縁部内外面を、横撫でで仕上げている。渡辺誠による分類のF類である〔渡辺85〕。

II 460～II 471は陶器。II 460は灯明皿。見込みから口縁端部にかけて施釉する。口縁部内面に、ボタン状の貼り付けをもつ。II 461は仏飯。底面を除いて、灰緑色の釉をかける。II 462は口縁部が端反りになる瓶。櫛描きによる横線で器面を3分割し、上下方向の櫛描文を充填している。外面には自然釉がかかる。II 463は唐津系碗。外面は白泥、内面は白泥と鉄釉を刷毛塗りしている。II 464は半筒形の碗。口縁端部と底部外面を除いて、灰緑色の釉を施す。II 465は輪層形の碗。胎土は赤褐色を呈し、砂粒を多く含む。内面と口縁部外面に白泥を塗り透明釉を施し、草花文をあしらう。

II 466～II 469は京焼系の碗と鉢。II 466とII 467は半球形の碗で、II 466は鉄釉で文様を施す。II 467は色絵で、菖蒲文を描く。II 468とII 469は器高の低い丸形の鉢。見込みに色

A F 20区の遺構と遺物

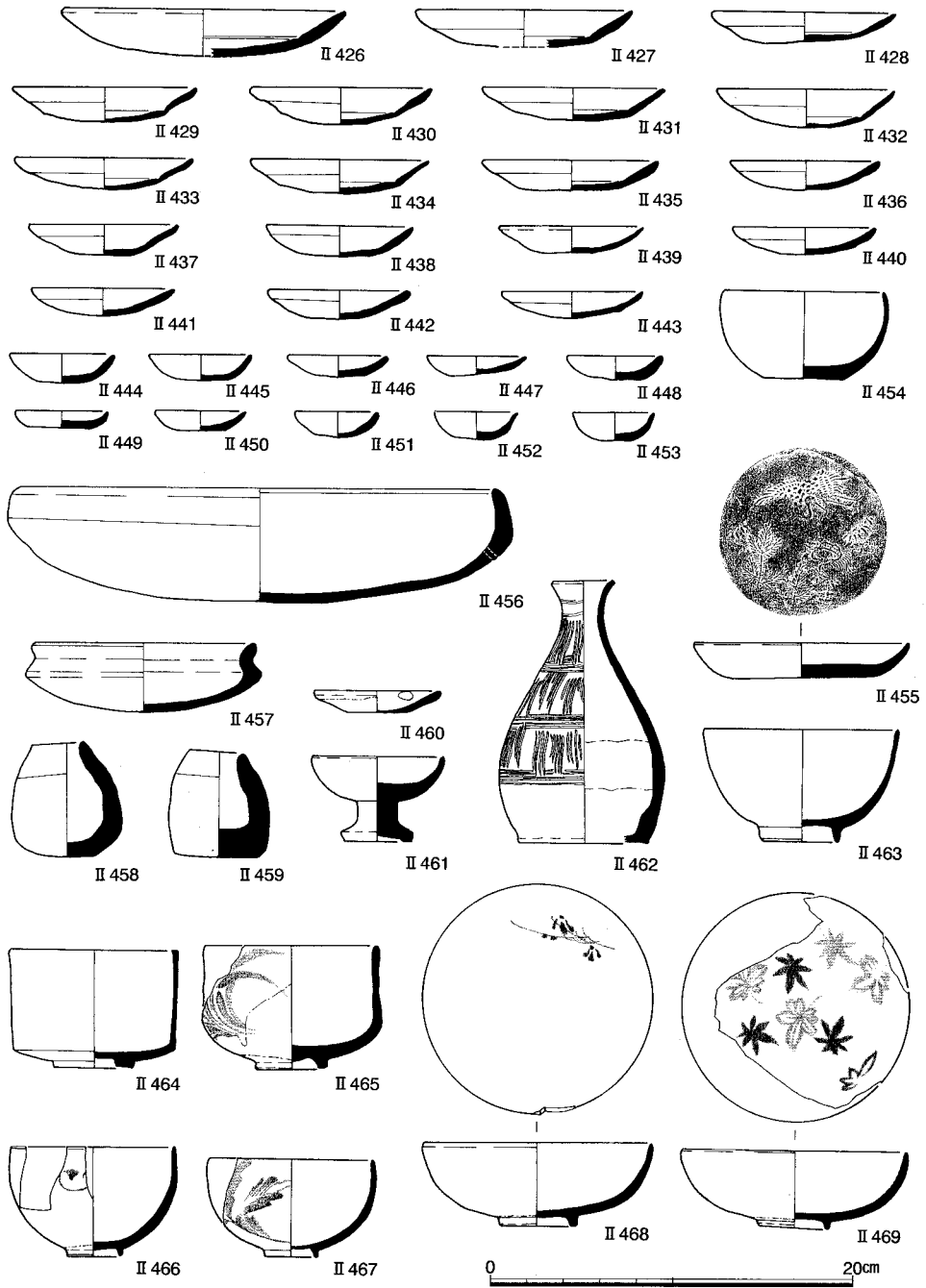


図69 S G 1 出土遺物(1) (II 426~ II 459土師器, II 460~ II 469陶器)

絵で文様を描く。Ⅱ470は片口。胎土は乳白色を呈し、底部外面を除いて灰釉を施す。Ⅱ471は鉄釉土鍋。口縁部の2箇所に紐状の把手があり、その一方には注ぎ口が口縁下にとりつく。底部には三足がつき、底部外面には煤が厚く付着する。

Ⅱ472～Ⅱ484は磁器染付。Ⅱ472～Ⅱ475は丸形碗、Ⅱ476は半筒形碗である。Ⅱ474は「太明成化年製」、Ⅱ475は二重方形枠内に「渦福」の底裏銘をもつ。Ⅱ477は半筒形の鉢。口縁部内面を無釉にする蓋物である。Ⅱ478～Ⅱ481は皿。Ⅱ479は口銹を施し、内面は墨弾きの技法で波文を描く。Ⅱ481は見込みにコンニャク判で龍文を描く。Ⅱ482・Ⅱ483は碗蓋、Ⅱ484は蓋物の蓋である。Ⅱ482はコンニャク判で文様を描く。Ⅱ483は見込みに五弁花文をもつ。

これらSG1から出土した遺物は、18世紀中頃を中心とする時期のものであろう。

SR1 出土遺物 Ⅱ485・Ⅱ486は土師器皿。口径9.5cm前後で、見込みに圏線をもつ。Ⅱ487・Ⅱ488は焼塩壺。Ⅱ487は、筒形で口縁端部に蓋受けの段をもつが、痕跡的である。胴部を板作りし、底部に粘土塊を充填している。刻印はみられない。器高8.1cm、最大径6.8cm。Ⅱ488は筒形で、回転台を用いた撫で仕上げ。刻印はみられない。器高6.4cm、最大径7.1cm。Ⅱ487はC類、Ⅱ488はJ類に比定できよう〔渡辺85〕。Ⅱ489は広口の陶器壺。胎土は黄白色を呈し、外面に鉄泥を施す。

Ⅱ490～Ⅱ492は磁器染付。Ⅱ490・Ⅱ491は碗。Ⅱ490は外面を暦字文で飾り、見込みにくずした「壽」の文字をもつ。Ⅱ491は半筒形の碗で、口縁部内面に四方櫛文を描いている。Ⅱ492は皿。見込みに五弁花、「渦福」の底裏銘をもつ。

SR1から出土した土師器皿は、SG1と比較して、法量がわずかに小さく後出的である。染付の年代観ともあわせると、このSR1出土遺物は、18世紀後葉のものが中心と理解する。

埴 塼 本調査区東北隅の第9層から集中的に出土し、SG1からも少量出土した埴塼について、代表的なものの実測図を掲げて解説を加えておきたい。底部で個体識別をすると、20個体前後の出土点数となる。法量や注口の有無で、大きく2つに分類することができる。

A類(Ⅱ493・Ⅱ495)は、筒形で高さが30cmをこえ、注口のつくもの。「梅干壺」と呼ばれる大型の埴塼である〔葉賀90〕。上面観は楕円形で、上方にゆくに従って偏平の度合いが強くなる。注口部は、中央やや上よりの位置につき、注口の反対側の外面は、径3～4cm、深さ2cm前後凹んでいる。

A F 20区の遺構と遺物

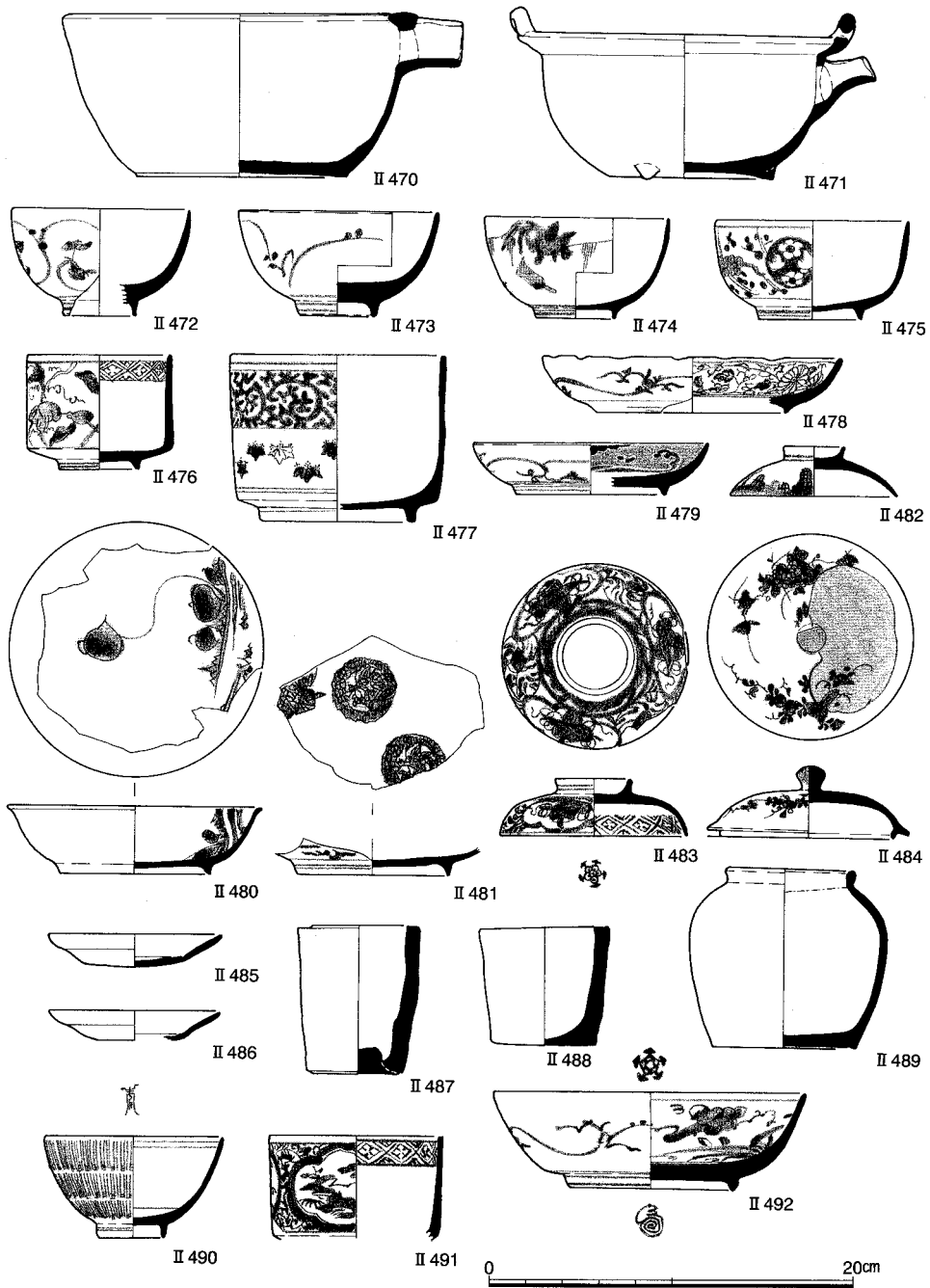


図70 SG 1 出土遺物(2) (II 470・II 471陶器, II 472～II 484染付)

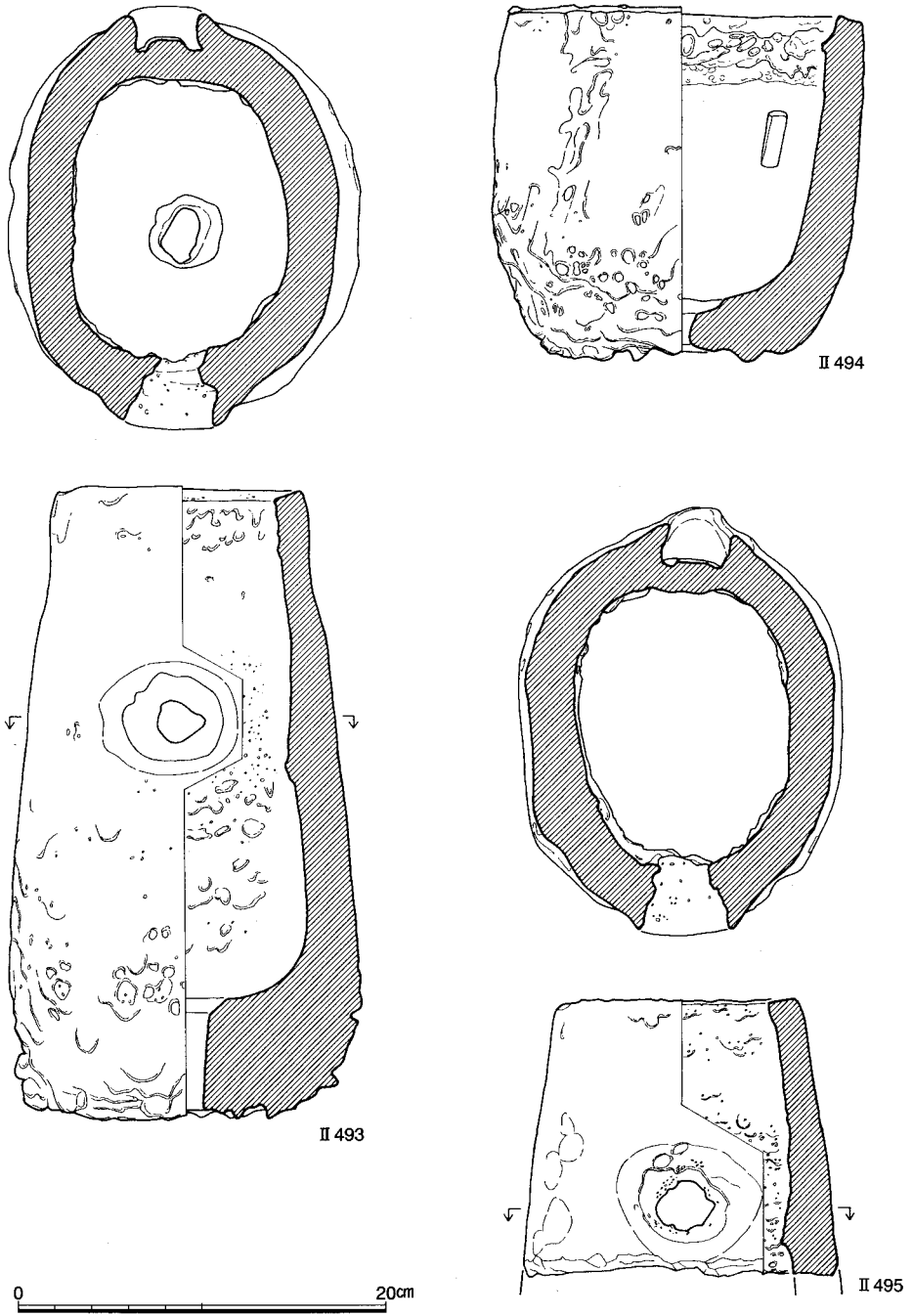


図71 埴 塙 (II 493・II 494灰褐色土出土, II 495 S G 1 出土)

江戸時代の銅精錬の案内書である『鼓銅図録』〔増田・丹羽1801〕には、職人が坩堝を「ユトリハシ」で銕んで、溶銅を流し出している様子が描かれた図が見られる(図72)。外面にある凹みは、「ユトリハシ」を引っかけて固定するためのものと考えることができる。

A類の大部分は、Ⅱ495のように注口部直下の部分で切断されており、全形のはっきりした資料はⅡ493のみである。

B類(Ⅱ494)は、半筒形で高さ20cm以下で注口をもたないもの。Ⅱ494の1例のみ。上面観は楕円形を呈し、口縁部内面に、長方形の凹みが2箇所みられる。この凹みも、「ユトリハシ」を引っかけるためのものかもしれない。

A類、B類ともに内面から口縁端部にかけて溶融し、付着物がみられる。外面は二次的な熱のために、赤紫色や黒褐色に変色し、下半部を中心にガラス質化している。底面には木炭が噛んでいた痕跡が認められるので、据え置いて用いたのであろう。緑青が観察できる個体があることから、銅の精錬に用いた坩堝であることがわかる。また、底部には直径1.5~3cmの穴があくが、断面は溶融しておらず二次的な穿孔である。

こうした大型の坩堝は、花生けとして華道の世界では珍重されてきたらしい〔葉賀90〕。今回発見された坩堝の底部には、すべて穴があげられており、またA類は注口直下で切断されたものがほとんどであった。また、注口直下で切断するために、外面に鑿で筋彫りを施した破片もSG1から出土している。SG1からは、切断され不要になった上部のみ出土し底部の残る資料が出土しておらず、集中して発見された調査区東北隅からは、逆に切断された上部や切断途上の資料は出土していない。

こうした出土状況を勘案すると、これらは植木鉢として転用するために、調査区付近で切断、穿孔がなされた後、不要な上半部はSG1へ捨てられ、下半部が調査区東北隅に集められた後、遺棄されたものであると考える。SG1出土遺物の年代から判断して、18世紀中頃のものであろう。



図72 坩堝の使用状況
〔鼓銅図録〕江戸科学古典叢書1より〕

4 小 結

病院構内でおこなわれた既往の調査成果にも目を配りつつ、今回の発掘調査の成果をまとめ、結びとしたい。

先史時代の遺跡と遺物 従来の調査成果から、病院構内一帯は現在の鴨川東縁部にあたり、先史時代には、高野川系や白川系の河川が北から南へ流れる低地部を形成していたことが明らかになっている。今回の調査でも、A G 20区東調査区で縄文・弥生時代の旧流路（S R 2～7）が見つかった。また調査区一帯の基盤は、高野川系とみられる赤褐色砂礫からなり、A G 20区東調査区とA F 20区では、この砂礫の上に黄灰色シルトが堆積していたが、A G 20区西調査区にはみられなかった。シルト層は、医学部構内から病院構内東辺に分布し、土取りの対象となった堆積物であり、高野川系流路がつくった凹地が滞水域となって形成されたものと考えられている〔清水91〕。

旧流路やその溢流堆積物からは、縄文後期、弥生前～後期の土器が総計約400点出土した。大半は小破片で流路内から出土しているので、遺物の存在がただちにこの地での活動の痕跡を示すとは言えないものの、全体的に摩滅の少ないものが多いので、遠方からの流れ込みとは考えにくい。とくに縄文後期の土器はまとまっており、溢流堆積から出土しているⅡ1～Ⅱ4のように、器形が復元できる良好な資料も得ている。

病院構内の複数の調査地点から縄文土器が出土すること、本調査区の北に隣接する191地点で白川系流路の肩部に遺棄された縄文後期土器が見つかったこと、本調査区の東200mにある聖護院遺跡では、後期土器・石器など遺物とともに土坑が見つまっていることなどから、白川扇状地の西南端にあたる聖護院付近を中心に後期前葉の集落が営まれ、病院構内にあたる低地部でも、自然堤防や微高地上には縄文人の活動が及んでいたと想定してきた〔千葉91〕。今回の出土状況も、それを補強する成果といえる。

縄文後期土器の大半は、北白川上層式2期に比定できる。このうち、文様構成と器形が復元しうるⅡ1とⅡ4は、型式学的に重要な資料となろう。Ⅱ1は、口縁部に刻目隆帯が横走し、胴部上半に三角形文を描いており、関東地方の堀之内2式の文様に類似する。胴部が屈曲する器形も、堀之内2式前半に特徴的なものであり、系統論的には「関東系」と理解できる。ボウル形の浅鉢であるⅡ4は、上下2段の文様構成で、上段は三角文とJ字文、下段は長方形区画文とJ字渦巻文からなる。単純な器形の浅鉢で、文様構成が2段になる例はきわめて珍しい。上段の三角形文は、Ⅱ1の文様意匠に類似するものの、三角形

の底辺にこぶりなJ字文がつくのは、東の文様構成ではないだろう。下段の長方形区画文、渦巻文とともに、近畿以西の文様構成ではないかと想定している。滋賀県小川原遺跡や島根県佐太講武具塚などにみられる三角形とJ字文の構図をもつ土器は、文様・器形ともに、九州地方の鐘崎式との関係を想起させる〔中村編95 図版63, 赤澤98 図4〕。今は結論を急ぐことは差し控えるが、東西の型式をひろく参照・比較しつつ、文様の系統について、詳細な検討を加えることを今後の課題としておきたい。

古代・中世の土地利用 病院構内一帯では、現在のところ古墳時代の遺跡は発見されておらず、奈良時代から平安時代中期までの遺構も、154地点の7世紀後半8世紀初頭の土坑〔五十川ほか89〕, 191地点の8世紀末の竪穴住居の可能性のある土坑, 10世紀の土坑〔浜崎ほか93〕, 155地点の10世紀ごろの井戸や土坑〔五十川ほか89〕, 39地点の平安中期の護岸〔京大埋文研81a〕が見つまっている程度であり、活動の痕跡は希薄である。今回の調査では、この時期の遺構はみつかっていない。平安中期に高野川系流路に対して築かれた護岸が示すように、病院構内の西半は依然として高野川の氾濫原に含まれており、東半も後背低地として不安定な土地柄であったことが、この時期の開発が活発でないことの大きな理由であろう。

さて、病院構内も含めてこの地周辺の開発が本格的に開始されるのは、平安時代後期、法勝寺の建立(1077年)に始まる六勝寺の造営以降のことである。六勝寺の造営とともに、白河南殿・北殿といった院の御所や公家の邸宅、諸寺院の建立が相次ぎ、現在の左京区岡崎から吉田にかけて、「京白河」と洛中と並び称される白河街区が展開した〔浜崎91〕。こうした街区の整備にともなって、病院構内でも人々が本格的な活動を始めていることは、12世紀以降の遺構や遺物が病院構内一帯で急激に増加するという既往の調査結果から明らかである〔京大埋文研81a, 浜崎84, 五十川ほか89, 浜崎ほか93〕。

白河街区の条坊地割については、いくつかの復原案があるが〔岡田79, 浜崎91など〕, 調査区付近は東西を今朱雀と仏所小路, 南北を中御門大路末と勘解由小路末に画された場所で、白河北殿の北東隣接地にあたるようである。今回の調査でみつかった中世の遺構には井戸や土器溜, 土坑, 溝などがあり, それらは出土遺物の年代からみて, 12世紀後葉～13世紀前葉, 14世紀後半, 15世紀後半の3期に分けることができる。調査区のかなりの部分が旧病棟基礎などによって破壊されており, 井戸のように地中深く設けられた遺構が破壊をかわらうじて免れて検出されているという状況を考慮する必要はあるけれども, 12世紀前半, 14世紀前半, 15世紀前半, 16世紀の遺構はなく, これらの時期の遺物もほとんど出

土していない。存続期間が比較的短く、連続しない3時期の遺構群として理解できるのが本調査区検出の遺構群の特色であろう。また、瓦がほとんど出土していないこと、いずれの時期も井戸を中心とした遺構のありようから判断して、邸宅や寺社の中心部からは、はずれた地点であると理解する。

このような遺構群のうち、12世紀後葉～13世紀前葉は、白河街区の展開と関連づけておきたい。北に隣接する154・155・191地点で検出されたこうした時期の遺構群は、仁平元(1151)年創建の福勝院との関連で理解されている〔五十川ほか89、浜崎ほか93〕。ただし、これらは勘解由小路末の北側に展開する遺構群であり、本調査区に残された該期の遺構群が福勝院に直接関連する可能性は少ないと考えている。白河北殿の北隣接地にあたる39地点では、この時期が遺構の形成のもっとも活発な時期となっており、それは院政を支えた勢力の拡大として解釈されている〔京大埋文研81a〕。白河北殿の北東隣接地にあたる本調査区の遺構群もこうした動向のなかで理解できるだろう。

14世紀後半、15世紀後半の遺構群の性格についてはどのようにみるべきであろうか。14世紀は院政を支えた旧勢力にかわって、吉田社や聖護院といった新興勢力によって鴨東白川の地が再編されてゆく時代である。聖護院の鎮守社である熊野社は、14世紀後半には、その四至を崇徳院と大吉祥院敷地とを除く「近衛以南、大炊御門以北、今辻子以西、至于河原」とされており〔福山77〕、この頃、伸長著しかった吉田社と近衛大路を境に社領を接していた。調査区一帯は、熊野社の社領に含まれることになる。中世後半の遺構は、熊野社との関連をひとまず想定しておき、周辺地域の調査の進展を待って再検討したい。

近世の土地利用 病院構内では、15世紀中頃を境に遺物量が急激に減少し、16世紀から17世紀にかけての遺構・遺物は、ほとんど皆無に等しい状況となる。ひろく京都大学吉田キャンパス一帯をみても同様の傾向にあり、この地一帯が貴族の邸宅や寺社地から耕作地へと変転していった状況を示すものとみられる。

こうした土地利用の変遷と対比したとき、17世紀の遺物を大量に含んで埋積している大溝(SD4～6)がAG20区東調査区で検出されたことは注目に値しよう。南北に併行してはしるSD4とSD5は、北に隣接する191地点で検出されていたSD22・23と一連の大溝である(図42)。今回の調査によって、SD4は70m以上の長さをもつこと、SD5は南北が50m前後で、南端で東に折れることが判明した。東に折れたSD5は、15mほど伸びて立ち上がっている。SD4から派生して東へ伸びるSD6もほぼ同じ地点で切れており、ここに入出口を想定することもできる。なお、SD4の南端は調査区外へと続い

ているが、A F 20区では検出されなかった。ここまでは大溝が伸びていないと想定できるが、調査区の位置関係から、A F 20区の東側をはしる可能性もあるので、周辺地区の調査結果を待って判断したい。

191地点でこれらの溝を検出したさいには、18世紀後半の遺物を大量に含んでいたことから、18世紀代と判断した。そして、現在は東大路を隔てて東の聖護院西町に所在する照臨院という浄土宗寺院が明治30年以前はA G 20区東調査区付近にあり、京都帝国大学附属病院の開設にともない現在地に移転していること、その開基が享保5（1720）年であることから、これらの大溝が照臨院に関連する可能性を考えた〔浜崎ほか93〕。

今回検出した部分では、18世紀代の遺物は少なく17世紀の遺物が中心となって埋積していた。とくにS D 4の北半は、17世紀前半の遺物を多量に含んでいた。これらの溝は、ある時期にいきなり埋まったとみるよりも、溝としての機能を失なったのち、廃棄場などとして利用されながら、17～18世紀という長い期間をかけて埋まっていったと理解するのが自然であるように思われる。溝の掘削の時期を特定することは難しいが、17世紀前半の遺物を含んで埋積しているので、それ以前ではあるだろう。16世紀代の遺物は、溝中よりも、調査区全体からもほとんど出土していないので、16世紀に遡るとは考えにくく、17世紀の早い段階と考えているが、検討課題としておきたい。

このように考えると、これらの溝を照臨院と直接関係させるのは、年代的に無理が生じる。照臨院の開基は上述したように18世紀前葉のことであり、この段階では溝は機能を失なっているからである。照臨院は、僧靈潭が荒廃していた今日庵なる寺院に移り住んで1720年に再興させたという由緒をもっている〔碓井編15〕。今日庵の実態については不明であるが、これらの溝は照臨院の前身である今日庵に関連すると考え、寺院や邸宅を圍繞する溝と想定しておく。

また、東調査区の南東部では、近世の多数の井戸がみついている。これらは、18世紀前半までの遺物で埋まっているもの（S E 3・7～9）と19世紀の遺物を含んでいるもの（S E 2・5・6）にわけることができる。前者は今日庵、後者は照臨院に関連する井戸と考えることが可能であろう。

一方、A F 20区では、18世紀に埋め立てられた池や流路が検出され、18～19世紀の大量の遺物がみついている。池は、西に隣接する141地点で検出した池の東端の部分にあたるものである〔浜崎・宮本87〕。陸地測量部によって明治20（1887）年に作成された仮製二万分一地形図を見ると、熊野社の北方は春日上通の北側、今回の調査区を含む病院構内

東南部あたりまで、聖護院村の集落が近代初頭には展開していたことがわかる。上述した照臨院以外に、現在、小路をはさんで照臨院の北に所在する梅瑞庵という曹洞寺院、現在は退転している有門院という天台寺院も、明治30年京都大学の敷地になるにあたって、東側の地に移転している〔碓井編15〕。近世後半から大学が病院敷地として買収する明治30年まで、調査区付近は聖護院村の町並みの北のはずれにあたり、寺院や住宅が散在する景観を呈していたのであろう。

蓮月焼 大田垣蓮月は、寛政3（1791）年に生まれ、明治8（1875）年85歳で没した幕末の歌人である。幼名を誠（のぶ）といい、33歳で出家して尼となり蓮月という法名を授けられた。生活の糧とするために、自詠の和歌を釘彫りした手づくねの茶器を製作したところ、当時、文人墨客のあいだに流行していた煎茶趣味に一致し、蓮月焼として名声を博した〔杉本76、徳田ほか82、京都府立総合資料館編84〕。

この蓮月焼が、京都大学構内では141地点の調査で出土して注目されたが〔浜崎・宮本87〕、今回の調査でもA G 20区東調査区の南辺で多量に出土した。141地点では急須・湯瓶・徳利・鉢がみられた。今回は急須・湯瓶・煎茶椀・皿・蓋物・鉢・茶托・香合・壺形・涼炉・火炉がみられ、施釉陶器、焼き締め陶器があるなど、多種多彩である。これらはすべて、焼き損ない品とみてよいものであった。蓮月は、栗田や清水の窯元に依頼して焼成をおこなっているため、焼き上がった作品をすべて持ち帰って選別をおこなったのであろう。そして、選に漏れた失敗作が調査区付近に廃棄されたものと考えられる。

蓮月が聖護院村の北辺、現在の病院構内東南あたりに居住したのは安政～文久年間で、蓮月60歳代の後半から70歳代前半のころのことである。II 418～II 421の香合は、安政2（1855）年、蓮月65歳ごろの作品として伝わる亀香合に酷似し、これには富岡鉄斎による、聖護院村で製作したという箱書がある〔京都府立総合資料館編84 p.8〕。

蓮月が陶器作りを始めるのは40歳代のことである。以来、85歳で没する直前まで作陶しており、多数の作品が後世に伝わっている。今回の出土資料は、焼き損ない品ではあるものの、聖護院村居住時代に限定できる一括資料であり、作風の変遷などを明らかにするうえで、重要な資料になるものと理解する。

なお、中・近世の遺物については難波洋三氏（京都国立博物館）、梅川光隆氏、蓮月焼については、守屋雅史氏（大阪市立美術館）、徳田光圓氏（西賀茂神光院）、埜堀に関しては、内田俊秀氏（京都造形芸術大学）、五十川伸矢氏（京都橘女子大学）から、有益なご教示をいただきました。末尾ながら、感謝申し上げます。

第4章 京都大学医学部構内A N20区の発掘調査

五十川伸矢 *伊東隆夫

1 調査の経過

今回発掘調査を実施したA N20区は、京都市左京区吉田近衛町所在の京都大学医学部構内の東部に位置し、吉田山の北端から続く旧白川が形成した扇状地の末端部にあたる。西約600mには鴨川が流れ、その氾濫原にもほど近い(図版1-248)。この地に放射性同位元素総合センター教育訓練棟の新営が計画されたため、新営予定地の510m²を全面発掘することとなった。現地調査は1996年5月20日に開始し、8月14日に終了した。

A N20区内については、1981年度に試掘調査を実施し〔浜崎83a pp.43-45〕、本調査区の南に隣接する134地点で1983年に発掘調査をおこなっている〔五十川86〕。その結果、中世の井戸や不定形土坑などの遺構を検出し、井戸からは祭祀にかかわるとみられる遺物が大量に出土した。今回の調査では、134地点と同様に井戸、中世の土取りに関する遺構などを検出したが、さらにその下層において、先史時代の遺物包含層と流路を発見した。流路に埋積していた粘質土からは、木材や種子などの大量の自然遺物を採集し、河畔に繁茂していた植物相の一端をうかがうことができた。

なお、発掘調査は五十川と古賀秀策が担当し、中田敬子、曾根茂、菅野類、長尾玲が現地作業と出土遺物の整理を補助した。本章は、出土木材の樹種同定を伊東隆夫が、それ以外を五十川が執筆した。

2 層位

周辺地域は、東から西へ、南から北へむかって緩やかに傾斜しているが、調査地点の東端から西端にいたる地表面は、近代以降の大規模な造成のためにほぼ平坦となっており、海拔51.6mをはかる。調査範囲のうち西北部に大きな攪乱があり、ここでは井戸のような掘形の深い遺構を除けば、遺構はほとんど残っていなかった。

まず、図73に示した先史時代から歴史時代にいたる全体の層位を上から順に説明する。最上層には厚さ約1mにもおよぶ表土(第1層)がある。その下には、近世～近代の水田の耕作土とみられる黒灰色土が部分的に残っていた。床土とみられるものがないため、当

*木質科学研究所

京都大学医学部構内A N20区の発掘調査

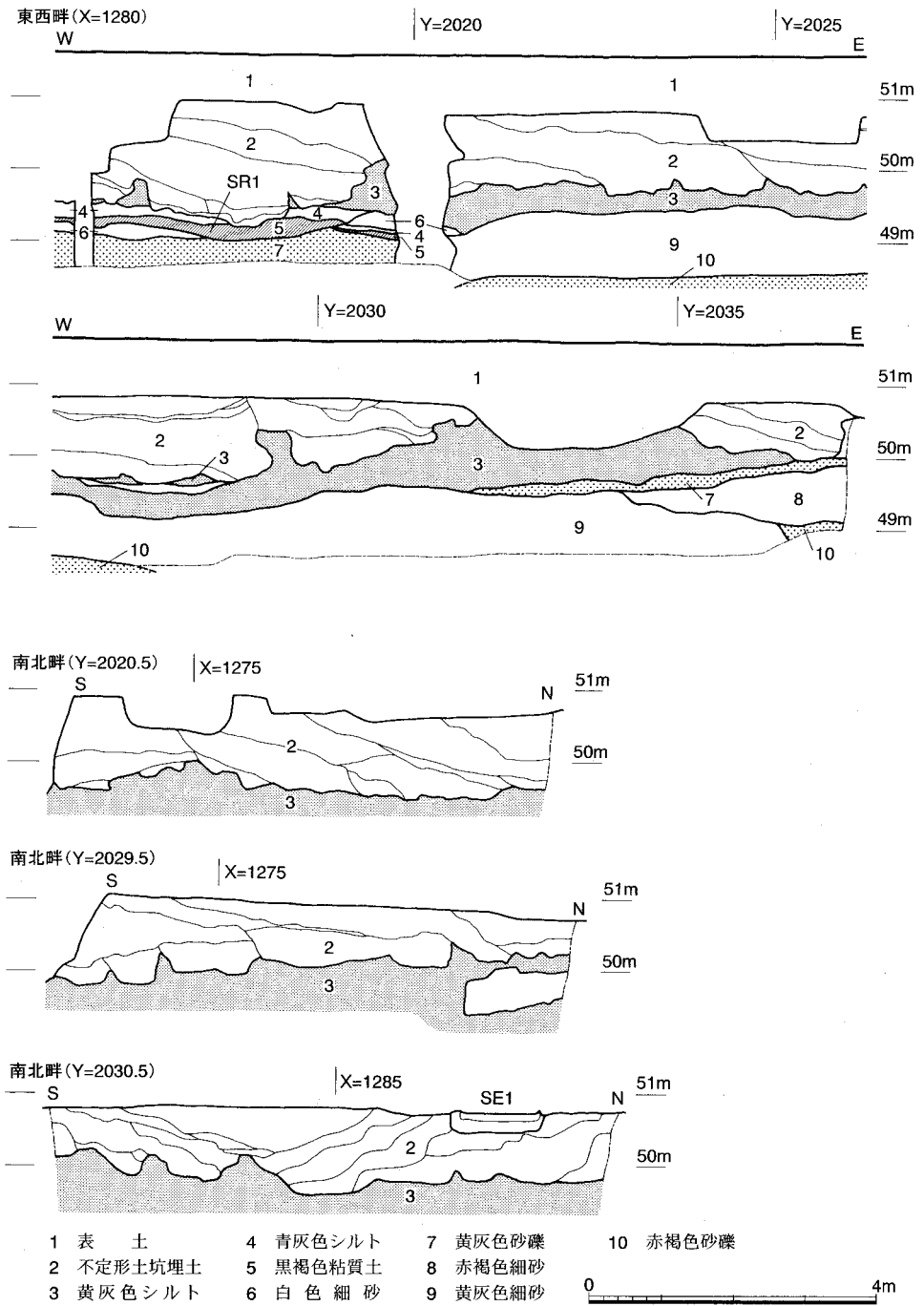


図73 調査区の層位 縮尺1/100

層 位

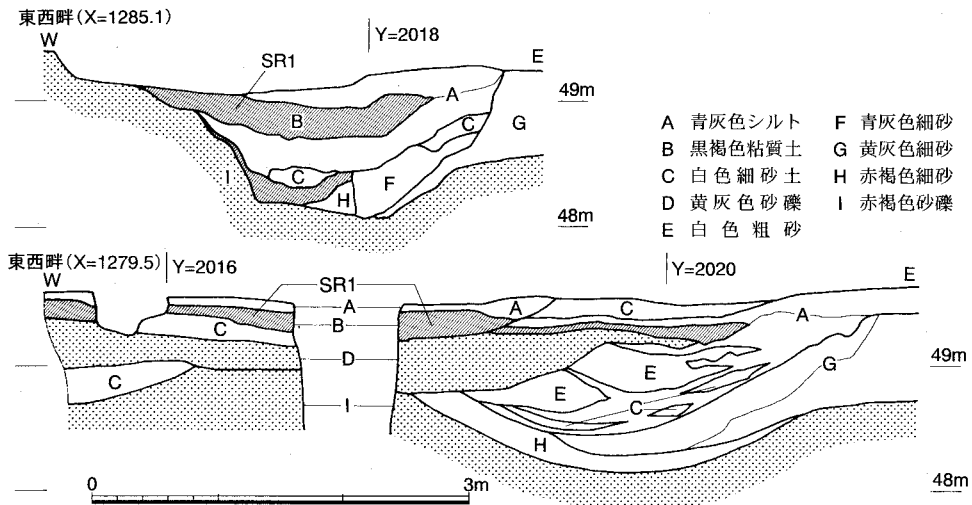


図74 先史時代の層位 縮尺1/60

時、調査区周辺は畑地がひろがっていたと推定できる。近世の黒灰色土の下には、茶褐色土、黒褐色土、黄色砂などが、モザイク状に堆積している。これらは、かつてほぼ水平に堆積していた各層が土取りのために掘削された後に、埋め戻された結果と考えられる。その掘削の単位は、形態が一定ではないため、これらの土坑を不定形土坑と呼び、その埋土を第2層として一括した。土取りの対象となったのは、黄灰色シルト（第3層）あるいは青灰色シルト（第4層・図74-A層）である。その下に、西域では黒褐色粘質土（第5層・同B層）、白色細砂（第6層）、黄灰色砂礫（第7層・同D層）、東域では赤褐色細砂（第8層）、黄灰色細砂（第9層）などを介して、赤褐色砂礫（第10層・同I層）が厚く堆積している。黒褐色粘質土の埋積する沢状の流路をSR1とする。これらのシルトや砂礫は、旧白川の氾濫によって形成された堆積物と推定される。

次に西域の先史時代の層位を図74に示して詳しく説明する。黄灰色シルトの下には、青灰色シルト（A層）、黒褐色粘質土（B層）のほかに、白色細砂土（C層）、黄灰色砂礫（D層）、白色粗砂（E層）、青灰色細砂（F層）、黄灰色細砂（G層）、赤褐色細砂（H層）などが薄い層をなして複雑に堆積している。流路SR1の段階以前から、ここに浅い沢状の凹部があり、そこへ様々な堆積物が流れ込んで沢を埋めていったとみられる。その下には厚い赤褐色砂礫（I層）が堆積しており、大規模な洪水を物語っている。青灰色シルトからは縄文前期の土器、黄灰色シルトからは縄文中期の土器が出土しており、その下に堆積する黒褐色粘質土は、縄文前期以前に堆積したものとみられる。

3 縄文・弥生時代の遺跡

(1) 先史時代の地形 (図版38, 図75)

前節で述べたように、黄灰色シルトより下位の先史時代の土層は、基本的に赤褐色砂礫という基盤の上に黄灰色細砂が厚く堆積しているのであるが、調査区の西域では、赤褐色砂礫が大きく落ち込んで、そこに青灰色シルト、黒褐色粘質土、白色細砂土、黄灰色砂礫などが薄く層状に重なりあっている。これは、浅い谷状の凹部が次第に埋積した過程を示している。凹地は南から北に傾斜しており、北流する小河川によって埋積がおこなわれたことがわかる。そして、黄灰色シルト、さらに弥生時代前期末～中期初頭ごろに黄色砂が堆積して、現在のような北東から南西に緩やかに傾斜する地形の基盤が形成され、縄文時代にみられた凹凸は、ほぼその姿を消してしまったのである。

調査区西域の黒褐色粘質土を除去した段階の地形測量図を図75に示した。流路SR1はX=1280付近で幅約4m、北にゆくにつれて広がり、緩やかな段をなして低くなってゆく。調査範囲内で南端は北端よりは約60cm程度高く、約3°傾斜があったことがわかる。周辺地域の調査で検出している流れは、ほぼ北東から南西にむかうものが多いため、SR1の

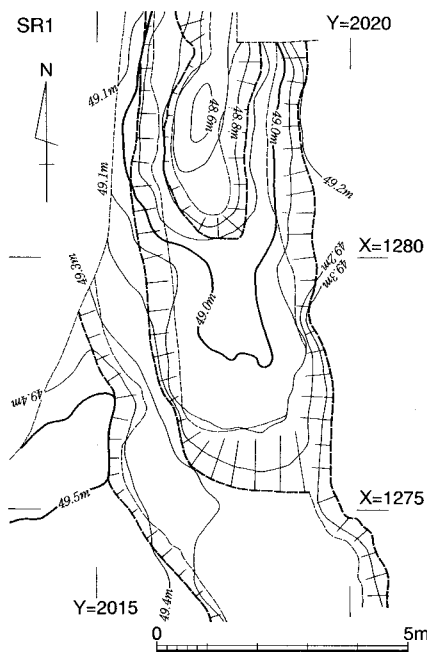


図75 先史時代の地形 縮尺1/150

周辺には、局地的ながらかなり複雑な凹凸があったとみるべきであろう。

また、X=1280以北の地域では、SR1に埋積している黒褐色粘質土のなかから大量の木質物が折り重なって出土した。これは流路の両側に繁茂していた木本草本が埋没したものであり、湿気と養分に富んだ河畔に形成された林の化石といってよい。ここには、木材のみならず樹木から落下したとみられる種実類も含まれていた。この黒褐色粘質土には、まったく遺物が含まれていなかったが、その上層の青灰色シルトから縄文前期の土器が出土しているため、それ以前のものと推定される。

(2) 縄文・弥生時代の遺物 (図76・77)

この時期の遺物は調査区の全域から発見されている。出土層位は第2層の不定形土坑埋土、第3層の黄灰色シルト、ならびに第4層の青灰色シルトの3層であり、その大半は第2層に集中している。この第2層は中世の土取りのため徹底的に掘り返されているため、遺物は原位置を保っていないが、遺物の出土地点は調査区を北東から南西へかけて斜めにはしる帯状に集中する傾向がうかがわれる。この分布状況とSR1の存在、土器片の摩滅の激しさ、さらに周辺地域に北東から南西へかけてのこの時期の流路が確認されていることなどを考え合わせると、第1層と第3層間のあるレベルに北東から南西へと流れる流路が存在し、遺物はこの河床に堆積していたものと考えられる。遺物は縄文後期のものと弥生前期のものが主体を占める。また第3層からは縄文中期の土器2点、第4層からは縄文前期の土器6点と石器(剥片)1点が層位的に出土している。出土遺物は総数263点であり、内訳は縄文土器と弥生土器がほぼ同数ずつと、縄文時代の石器1点である。これらのうち時期などを判定することのできる土器片を52点取り上げ、以下に説明を加える。

縄文前期の土器 (Ⅲ1～Ⅲ6・Ⅲ9～Ⅲ11) Ⅲ1～Ⅲ6は青灰色シルト、Ⅲ9～Ⅲ11は不定形土坑埋土からの出土である。Ⅲ1・Ⅲ2は縄文(LR)地に特殊突帯文を施す。北白川下層Ⅲ式。Ⅲ3～Ⅲ6・Ⅲ9・Ⅲ10はいずれも縄文(LR)を施す胴部の破片。Ⅲ9・Ⅲ10はⅢ3～Ⅲ6が発見された地点の直上に位置する不定形土坑の埋土からの出土である。この土坑の底面は青灰色シルト層まで至っており、その埋土にも青灰色シルト塊が含まれていた。それゆえ、胎土・縄文・調整などの共通点をも考慮に入れると、Ⅲ9・Ⅲ10は青灰色シルト出土のⅢ3～Ⅲ6と同一個体である可能性がある。

縄文中期の土器 (Ⅲ7・Ⅲ8・Ⅲ12・Ⅲ13) Ⅲ7・Ⅲ8は黄灰色シルト、Ⅲ12・Ⅲ13は不定形土坑埋土の出土。Ⅲ7・Ⅲ8は北白川C式の深鉢C類〔泉85〕の突起状山形口縁の一部。Ⅲ12は口縁部の破片。外面には長大な爪形文を施文後、口縁に平行して円形刺突を施す。内面には船元式に特徴的な右撚りの縄文を施す。船元I式。Ⅲ13は太い沈線文を施す北白川C式の土器片と考えられる。

以上で触れた遺物のうち、Ⅲ1～Ⅲ8ならびに石器1点は、すべてシルトからの出土である。しかし当調査区周辺のシルトからは遺物が発見されたことはなかった〔清水91〕。このシルトに関しては、当調査区の南に位置する154地点で火山ガラスを利用した堆積年代の測定がおこなわれており、シルト層最上部の堆積年代を約6300年前(縄文前期初頭)とする結果が出されている〔竹村・檀原88〕。今回シルトから出土した遺物は縄文前期末

京都大学医学部構内A N20区の発掘調査

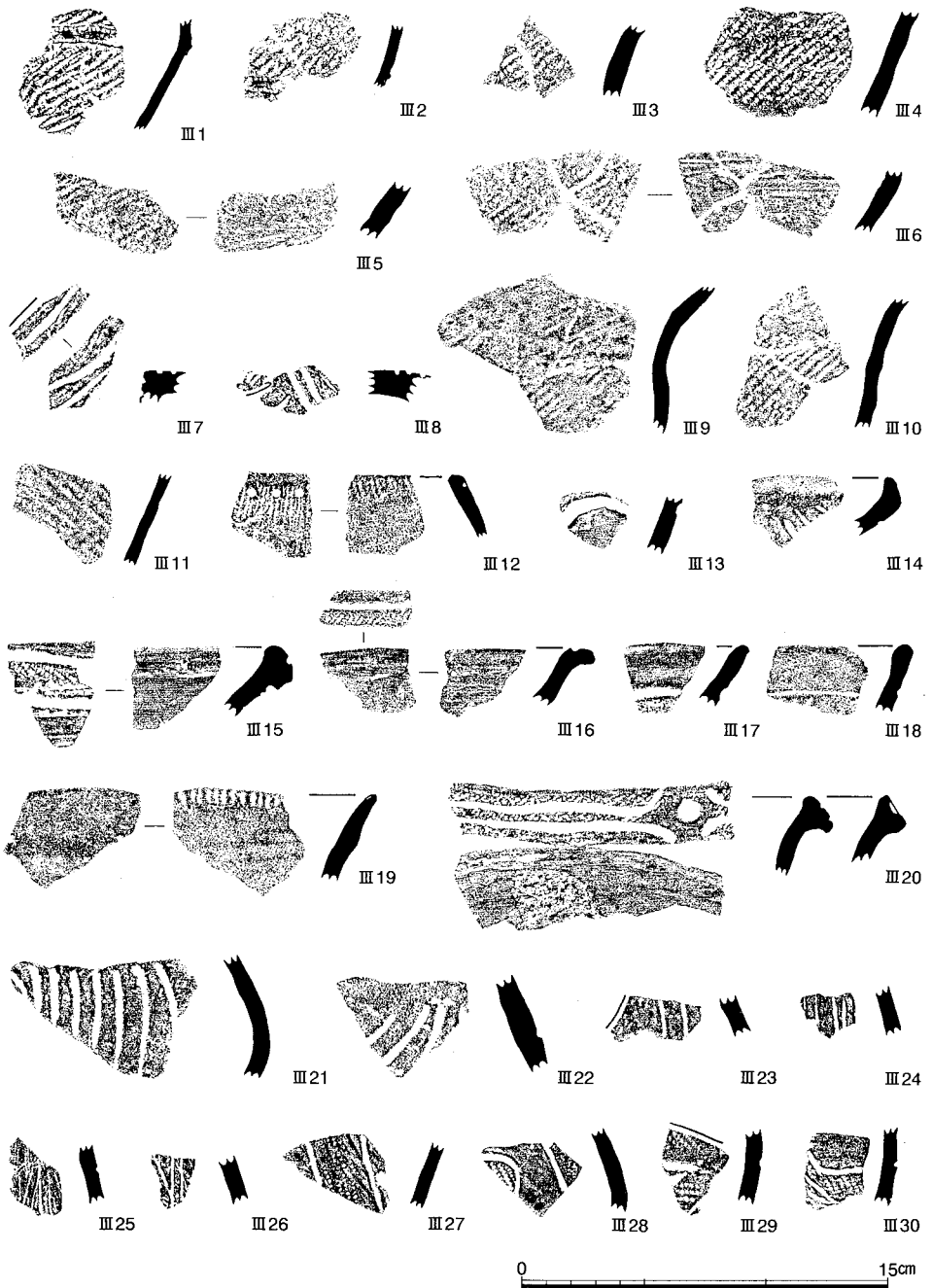


図76 青灰色シルト出土土器（Ⅲ1～Ⅲ6縄文前期），黄灰色シルト出土土器（Ⅲ7・Ⅲ8縄文中期），不定形土坑出土土器（Ⅲ9～Ⅲ11縄文前期，Ⅲ12・Ⅲ13縄文中期，Ⅲ14～Ⅲ30縄文後期）縮尺1/3

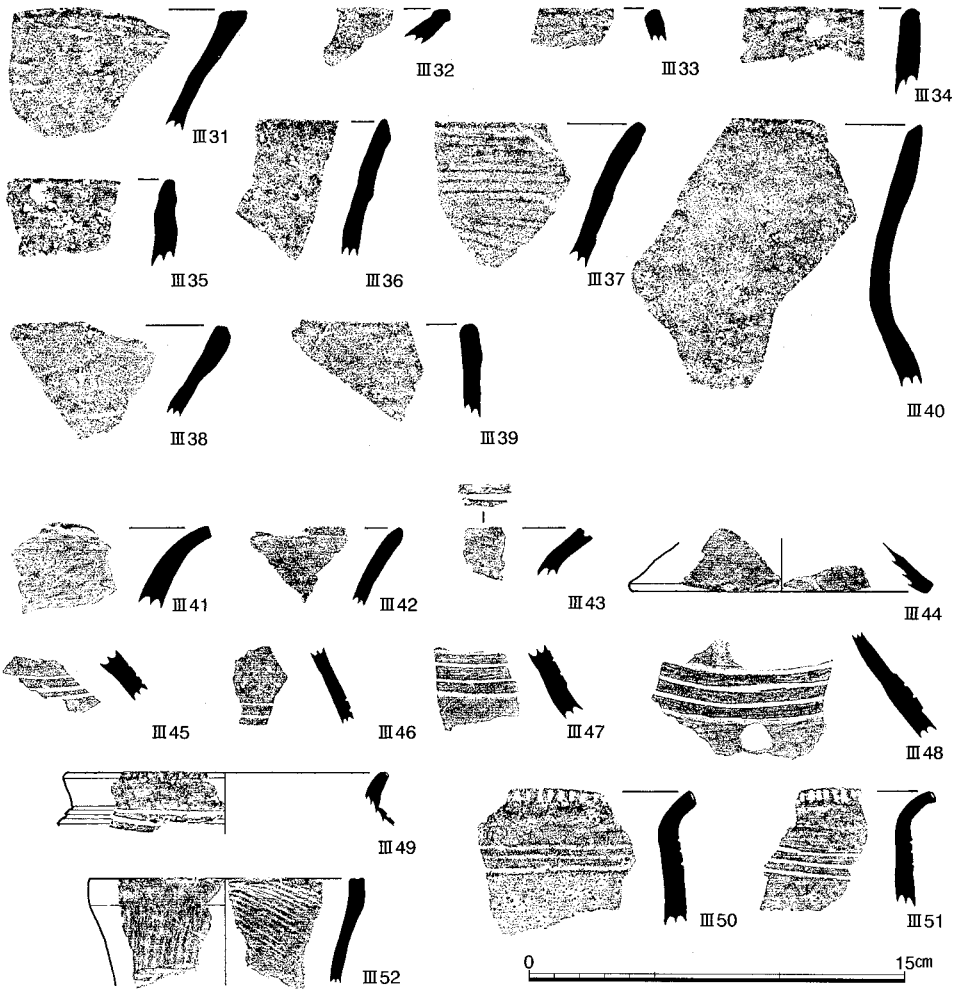


図77 不定形土坑出土土器（Ⅲ31～Ⅲ40縄文後期，Ⅲ41～Ⅲ51弥生前期，Ⅲ52弥生中期） 縮尺1/3

以降のものであることから、この測定結果との間に矛盾が生じることとなる。この矛盾を解消しうる説明としては、シルトの堆積状況の地点差、二次堆積などが考えられるが、いずれも現在のところ確証は得られていない。

縄文後期の土器（Ⅲ14～Ⅲ40） すべて不定形土坑埋土からの出土である。Ⅲ14～Ⅲ20は有文の口縁部。Ⅲ14は肥厚した口縁の外側に面取りを施し、その下には3本の沈線が確認できる。Ⅲ15は肥厚させた口縁部の上下に沈線をめぐらせ、その間を縄文で埋めている。福田K 2式。Ⅲ17・Ⅲ18は口縁と平行に沈線をめぐらす浅鉢の口縁部である。Ⅲ19は口縁端部内側に刻みを施す。Ⅲ20は口縁を肥厚させ、円形押圧を施す主文様部と、2本沈

線と縄文からなる従文様部とから構成されている。縄文は中段にRL、上段と中段の一部にLRが施されている。Ⅲ21～Ⅲ30は胴部の破片。Ⅲ21～Ⅲ24は縦方向に沈線を施し、Ⅲ25・Ⅲ26は半截竹管状の原体による条線を施す。Ⅲ27～Ⅲ30はいわゆる磨消縄文を施すもので、Ⅲ30の縄文はLR、それ以外はRLである。以上はすべて北白川上層式である。Ⅲ31～Ⅲ40は無文の口縁部。Ⅲ31は口縁端部内側を肥厚させ、上面に面取りを施している。広瀬土坑40段階。Ⅲ37は二枚貝条痕による調整が施される。Ⅲ32～Ⅲ40は後期前葉のものとしてとらえられる。

弥生前期の土器（Ⅲ41～Ⅲ51） すべて不定形土坑埋土からの出土。Ⅲ41～Ⅲ43は壺の口縁部。Ⅲ43は口縁端部に篋描沈線を施している。Ⅲ44は壺の蓋。笠形の器形で、内外面を丁寧に篋磨きしている。Ⅲ45～Ⅲ48は壺の胴部。Ⅲ45・Ⅲ46は沈線を施す破片。Ⅲ47・Ⅲ48は削出し突帯上に2条の沈線を巡らす。Ⅲ49は短く外反する口縁部をもつ破片で、頸部に3条の沈線が確認でき、口唇部に刻み目を施す。器形は鉢あるいは短頸壺の様相を呈するが、甕と同様の装飾を施す特異な資料である。Ⅲ50・Ⅲ51は甕の口縁。頸部に3条の沈線をめぐらし、口縁端部に刻み目を施す。以上は前期中段階にまとまる内容のものである。

弥生中期の土器（Ⅲ52） 不定形土坑埋土から直口壺の口縁（Ⅲ52）が1点出土している。口縁端部は帯状に肥厚し、横撫でにより端面は凹線状にくぼむ。外面は主に縦位、内面は斜位方向に刷毛調整される。第Ⅳ様式。

(3) 木材の樹種鑑定 (図版39・40, 表7)

今回取り上げられた木材のうち32点につき、樹種の同定をおこなった。定法にしたがい、安全カミソリで三断面の切片を切り出し、顕微鏡用標本を作製し、通常の光学顕微鏡で観察ならびに写真撮影をおこなった。

樹種同定の拠点

カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) : 樹脂道や樹脂細胞を欠く。仮道管に対になったらせん肥厚がみられる。

アカガシ亜属 (*Quercus* spp. Cyclobalanopsis) : 大きさが中庸の、厚壁の道管が放射方向にならぶ。放射組織は広放射組織と単列放射組織からなる。

ムクノキ (*Aphananthe aspera* Planchon) : 大きさ中庸の道管が散在する。軸方向柔組織は連合翼状ないし帯状となって接線方向に連なる。放射組織は1-6列で異性。

ヤマグワ (*Morus australis* Poiret) : 環孔材で年輪始めの道管は大きい。道管内にチロースが詰まる。小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は異性で、1-6列。

ツバキ (*Camellia japonica* L.): 散孔材。小さい道管が多数散在するが年輪始めで道管はやや大きい。道管は階段せん孔を有する。放射組織に大型の直立細胞が存在し、内部に結晶を含む。

ツルウメモドキ? (*Celastrus orbiculatus* Thunb.): 環孔材。年輪幅は狭く、ときにチロースを含む大型の管孔が年輪を占める。小道管が集団をなして見られ、小道管にらせん肥厚が存在する。放射組織は1-7列。

ウリカエデ (*Acer crataegifolium* Sieb. et Zucc.): 散孔材。木口面で木繊維がカエデ属特有の雲紋状を呈する。道管は単せん孔で、内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織は同性で1-3列。

カエデ属 (*Acer* spp.): 散孔材。木口面で木繊維がカエデ属特有の雲紋状を呈する。道管は単せん孔で、内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織は同性で1-5列。

環孔材: 大型の道管が孔圏を形成する。晩材部に向かって道管の径は減少する。道管はほぼ単独で分布し、単せん孔を有する。放射組織は1-6列で高さはきわめて高い場合がある。

散孔材A: やや疎らに散在する。道管は単せん孔を有し、らせん肥厚がみられる。放射組織は異性で、1-4列。

散孔材B: 道管は完全に變形しているが、散在する。放射組織は1-2列。

広葉樹材: 厚壁の道管が一部みられるが、何面に相当するのかも特定できない。

樹種同定の結果は表7に示す通りである。この表から読み取れるように、ウリカエデも含めてカエデ属が15点と全体の約半数を占める。次いで、ムクノキとツルウメモドキ(?)が3点ずつで、ツバキ、ヤマグワ、アカガシ亜属、ムクロジなど京都近辺の山野に普通にみられる樹種が出土している。なお、針葉樹ではカヤが一点みられている。

表7 出土木材の樹種

試料	登録番号	樹種	試料	登録番号	樹種	試料	登録番号	樹種
1	P9	広葉樹	12	P71	カエデ属	23	P117	ムクノキ
2	P10	アカガシ亜属	13	P77	ムクロジ	24	P119	カエデ属
3	P23	フジキ	14	P78	ムクノキ	25	P120	カエデ属
4	P24	カエデ属	15	P86	ツルウメモドキ(?)	26	P121	カエデ属
5	P30	カエデ属	16	P87	カエデ属	27	P182	カエデ属
6	P32	環孔材	17	P97	カヤ	28	P183	ムクノキ
7	P45	ツルウメモドキ(?)	18	P98	カエデ属	29	P212	ツバキ
8	P50	ウリカエデ	19	P100	散孔材B	30	P213	ツバキ
9	P64	散孔材A	20	P101	カエデ属	31	P219	カエデ属
10	P67	ヤマグワ	21	P102	カエデ属	32	P221	カエデ属
11	P68	カエデ属	22	P115	ツルウメモドキ(?)			

※出土層位はすべて暗褐色粘質土 (縄文時代前期以前)

4 中世の遺跡

(1) 中世の遺構 (図版38, 図78)

中世の遺構は、土取り跡とみられる不定形土坑からなっている。採取の対象になったのは黄灰色シルトや青灰色シルトであり、土取りがおこなわれる以前には、それらのシルト層の上に、古代に形成された黒褐色土や中世前半の遺物を含む茶褐色土などの土層がほぼ水平に堆積していたと考えられる。これらの土層はほぼ調査区全域において土取りのために掘削され、不定形土坑の埋土となっている。また、道路の路面の破碎されたものが、調査区北辺の不定形土坑の埋土中に含まれていた。後述のように近世の道路が調査区の北辺を西南西から東北東にむかってのびていたと推定されるが、中世においてもほぼこれに対応する路面があったことも推定できる。不定形土坑の単位は総計74個ほどを数える。その大きさや形態をみると、たとえば調査区中央部に南北約4 m東西約1.5 m程度のものが5個隣接しており、これらは一連の掘削によって残された痕跡である可能性もある。しかし、全体としては大きさや形態に統一的な規格があったとは考えられない。

掘削の順序について、埋土が単一の土で構成されているものはほとんどないため、平面的な切り合い関係の認定は困難であった。そこで層位断面をみると、不定形土坑の埋土をいくつかに分層できる(図73)。その埋積の状況は、西から東、南から北に傾斜して不定形土坑を埋めている傾向が高い。南に隣接する143地点でも同じ傾向がみられ、埋め戻し作業が、西から東、南から北へとおこなわれたことを示している。ただし、図73の南北畔(Y=2030.5)のX=1284以北にみられるように、北から南へと埋積している場合もあり、定方向に作業がおこなわれたと断定できない。

南に隣接する134地点では、14世紀中葉ごろの井戸に切られている不定形土坑があり、不定形土坑が13世紀前葉ごろの木枠組井戸を完全に埋めていることなどから、その掘削が13世紀中葉～14世紀前葉ごろにおこなわれたものと考えた。しかし、今回の調査で検出した不定形土坑の埋土から出土した遺物を詳細に観察すると、13～14世紀の土師器や陶磁器が圧倒的多数をしめているが、14世紀後葉～15世紀前葉ごろと考えられる土師器が少量ながら埋土下層にしかもほぼ全域にわたって包含されていることが判明した。これから14世紀後葉～15世紀前葉ごろに、土取りが最も活発におこなわれていたとみたい。ただし、埋土の上層からは一部16～17世紀に属する遺物も少量ながら出土しており、そのころに部分的に土取りがおこなわれたことをまったく否定してしまうことはできない。

中世の遺跡

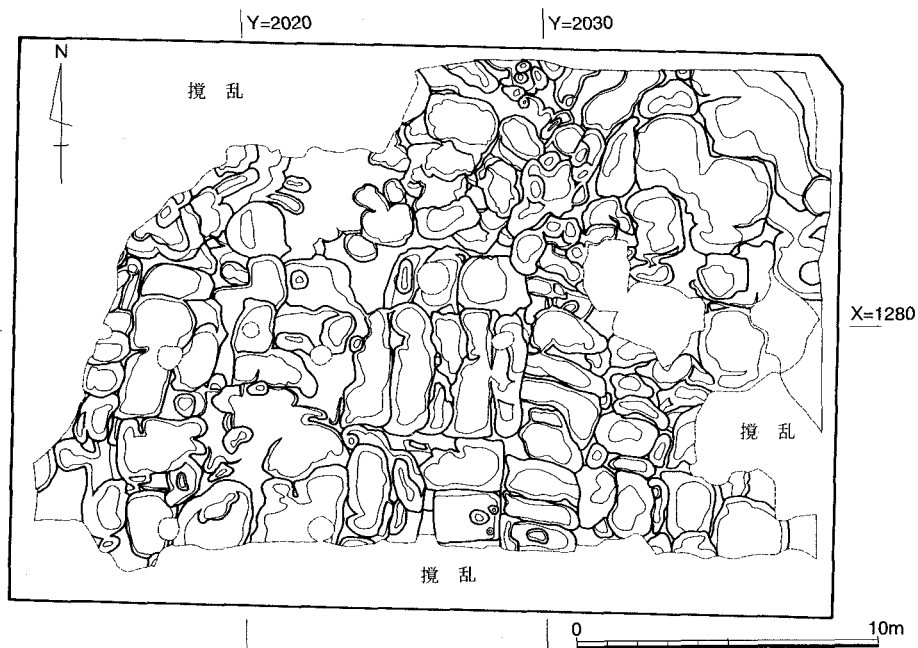


図78 中世の遺構 縮尺1/250

(2) 中世の遺物 (図79・80)

不定形土坑の埋土から出土した中世の土師器、瓦器、陶磁器類を図79と図80に示した。Ⅲ53～Ⅲ90は土師器。Ⅲ53～Ⅲ79は赤褐色、Ⅲ80～Ⅲ90は灰白色をそれぞれ呈する。大型の皿のうち、Ⅲ53は2段撫でつまみあげ手法C₁類、Ⅲ54・Ⅲ55は1段撫で面取り手法D₁類、Ⅲ56・Ⅲ57は1段撫で面取り手法D₂類、Ⅲ58・Ⅲ59は1段撫で面取り手法D₃類、Ⅲ60は1段撫で手法E₁類、Ⅲ61は1段撫で手法E₂類、Ⅲ62～Ⅲ64は1段撫で手法E₃類である。小型皿のうち、Ⅲ65・Ⅲ66はD₁類、Ⅲ67はD₂類、Ⅲ68～Ⅲ73はE₁類、Ⅲ74～Ⅲ76はE₂類、Ⅲ77～Ⅲ79はE₃類である。Ⅲ80は小型椀。丸い器形が特徴である。Ⅲ81～Ⅲ85は大型椀。ともに1段撫で手法E₁類。Ⅲ86はF₂類。Ⅲ87～Ⅲ90は小型椀。Ⅲ87・Ⅲ90は口縁端部に面取りがあり、Ⅲ88・Ⅲ89は凹み底をなす。

Ⅲ91は瓦器小杯。篋状工具で口縁を5輪花に形成し内面を篋磨きする。内底部には斜格子の暗文を施す。Ⅲ92は白磁玉縁付椀。Ⅲ93・Ⅲ94は同趣の青磁皿。Ⅲ94の底部には劃花文を施す。同安窯系の製品である。Ⅲ95・Ⅲ96は褐釉陶器壺の口縁部と底部。口縁は玉縁状をなす。Ⅲ97は瀬戸・美濃産の皿。内面は菊花状をなし黄緑色の釉がかかる。Ⅲ98は天目椀。Ⅲ99は青磁椀。口縁はゆるやかに外反する。Ⅲ100は卸皿。Ⅲ101は志野皿。Ⅲ102

京都大学医学部構内A N20区の発掘調査

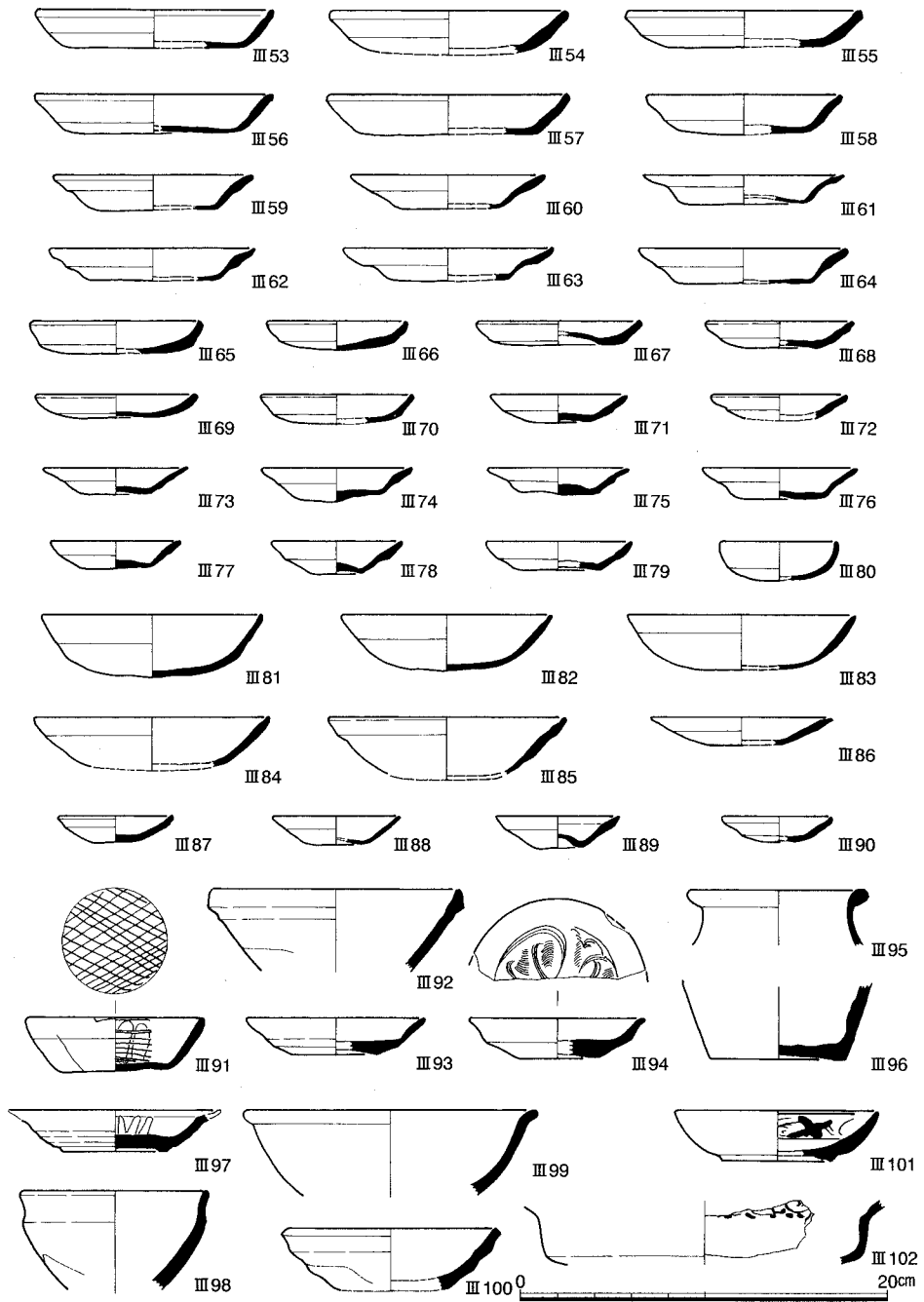


図79 不定形土坑出土遺物(1) (III 53~III 90土師器, III 91瓦器, III 92白磁, III 93・III 94・III 99青磁, III 95・III 96褐釉陶器, III 97瀬戸・美濃, III 98天目, III 100瀬戸, III 101志野, III 102唐津)

中世の遺跡

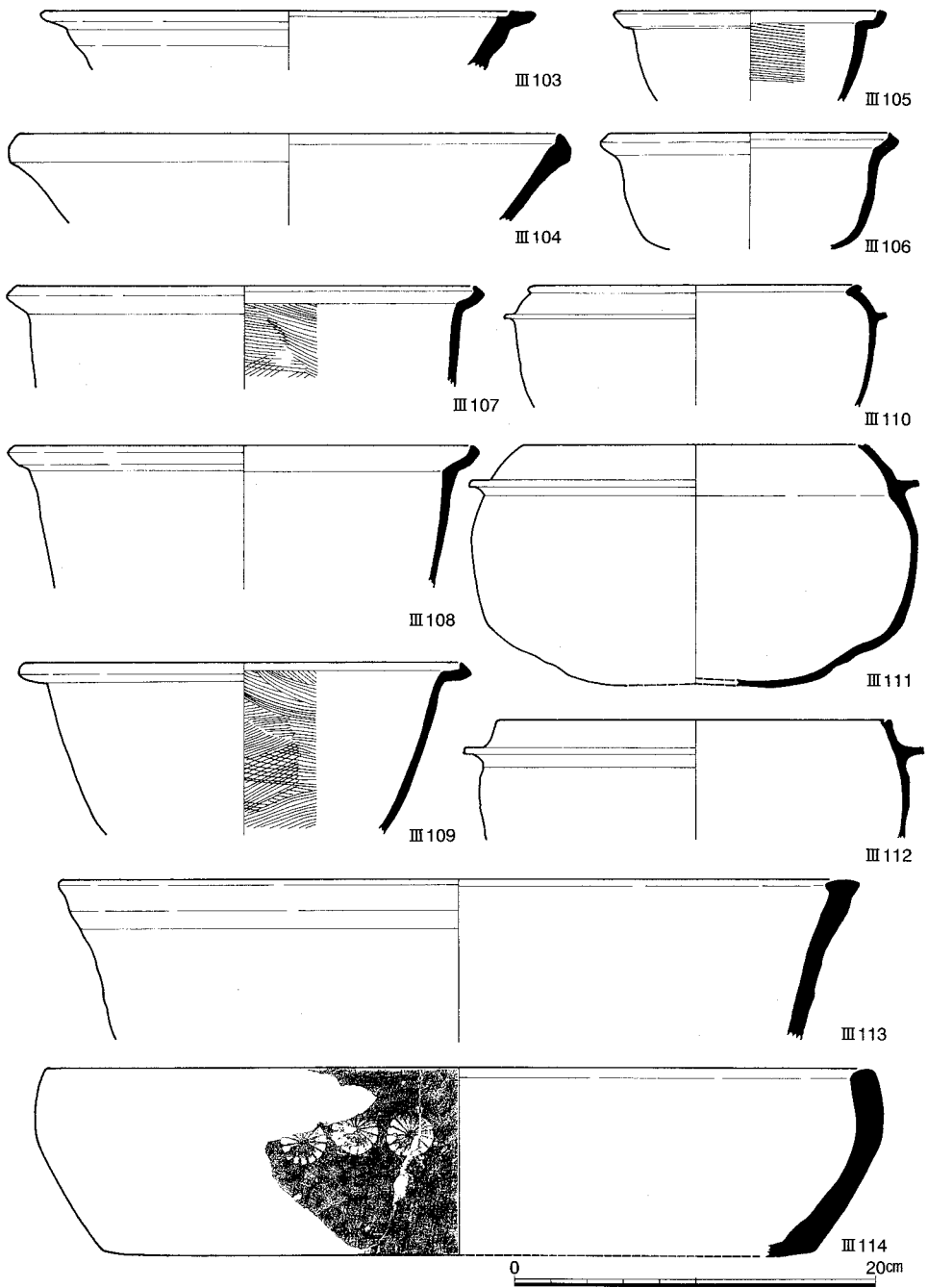


図80 不定形土坑出土遺物(2) (III 103灰釉系陶器, III 104須恵器, III 105~III 114瓦器)

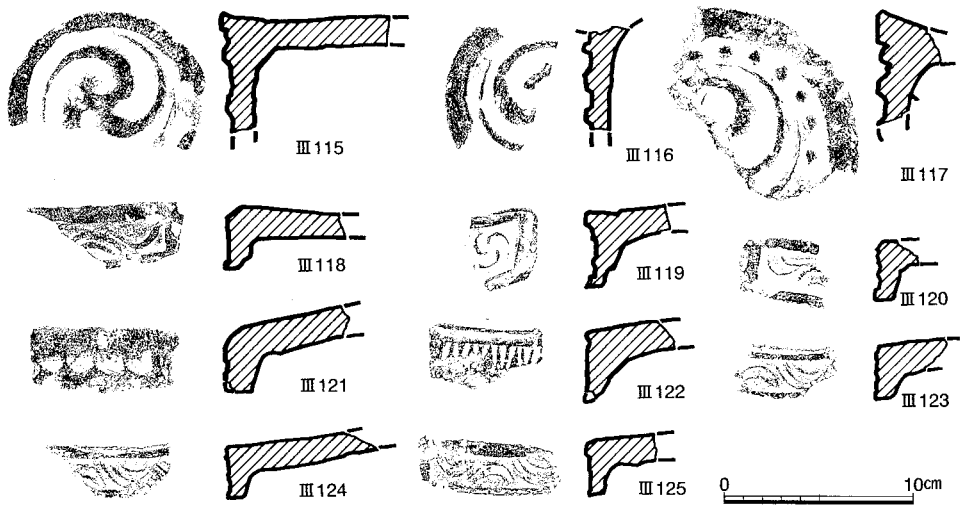


図81 軒丸瓦（Ⅲ115・Ⅲ116不定形土坑，Ⅲ117SE 8），軒平瓦（Ⅲ118～Ⅲ125不定形土坑）

は唐津椀。鼠地に黒釉で蔓草を描く。

Ⅲ103は灰釉系陶器の鉢。口縁部内面に段差がある。Ⅲ104は東播系の須恵器すり鉢。口縁は上下に拡張している。Ⅲ105～Ⅲ114は瓦器。器壁が摩滅して調整などの見分けのつかないものが多い。Ⅲ105～Ⅲ109は鍋。Ⅲ105は口縁が丸く屈曲する。Ⅲ106～Ⅲ108は口縁の屈曲があまくなってきている。Ⅲ109は口縁の屈曲が少なく、口縁端部に突出を作って鍋蓋受けとしている。Ⅲ110～Ⅲ112は羽釜。Ⅲ110・Ⅲ111は肩部から口縁にかけての傾斜が著しく、Ⅲ111は体部も丸い形態を示す。ともに中世でも早い時期のもの。Ⅲ112は口縁部が直立している。Ⅲ113は盤。口縁端部が内外に突出し、外面には粘土紐による凹凸が残る。Ⅲ114は火鉢。15弁の菊花のスタンプを外面部部に押ししている。器壁は厚い。

図81に中世の軒瓦を示す。12世紀から15世紀ごろのものである。いずれも不定形土坑や近世の遺構から出土しており、葺かれていた建物遺構は検出していないが、調査区の北西部周辺に多い傾向がみとめられる。Ⅲ115～Ⅲ117は軒丸瓦。ともに巴文ながら、Ⅲ115とⅢ117は左回り、Ⅲ116は右回り。Ⅲ117は巴の周囲に珠文を巡らす。Ⅲ118～Ⅲ125は軒平瓦。Ⅲ118・Ⅲ120は唐草文軒平瓦。Ⅲ119は連巴文軒平瓦。Ⅲ121・Ⅲ122は剣頭文軒平瓦。Ⅲ122は細弁。Ⅲ123～Ⅲ125は波文軒平瓦。

以上のように、不定形土坑には13世紀前葉ごろから17世紀初頭ごろにいたる、かなり長い期間のものが含まれているが、16～17世紀のものは、ごく少量のものが狭い範囲から出土しており、土取りが最も活発におこなわれたのは、15世紀を中心とするところであろう。

5 近世の遺跡

(1) 近世の遺構 (図82・83)

近世の遺構は、基本的に畑地の耕作に関するものであり、野壺SE1～SE7と井戸SE8のほか柱穴や溝、石列を検出した。

野壺SE1・SE5は漆喰製の杵をもつもので、下半が完存していたSE1の杵の直径は約1.5mである。SE2・SE6は、円形の本杵があったものとみられる。SE3は調査区の端にかかり、またSE4やSE7は他の野壺に切られており、それらの構造は明らかではない。検出されたこれらの野壺は、東北東から西南西にむかう一直線にほぼ連なることがわかる。本調査区の西約70mに位置するAN18区(143地点)では、東西にはしる近世の道路SF1を検出しており〔五十川・宮本88〕、このSF1を東に延長すると、ちょうど本調査区の野壺を結んだ線の北側付近にあたる。このことから、本調査区の北縁に近世の道路があったことはまちがいない。また、前述のように中世にもこれに対応する道路があったことも推定される。

また、井戸SE8と野壺SE5・SE6・SE7とは、糞尿を溜めて腐敗させ、適度に水と攪拌して施肥するという農作業に必要な一対の施設と考えることができる。こうした施設は耕地の単位の隅に設けられた可能性がある。このSE8の南側において南北方向の石列を検出しており、その下部で溝を検出した。これを畔にかかわる遺構とみれば上記の推定に符合する。このほか、土取り穴の埋土の上には、近世の柱穴が散在していた。耕作や境界にかかわる柵列と推定されるが、その柱間や方向を確認できなかった。

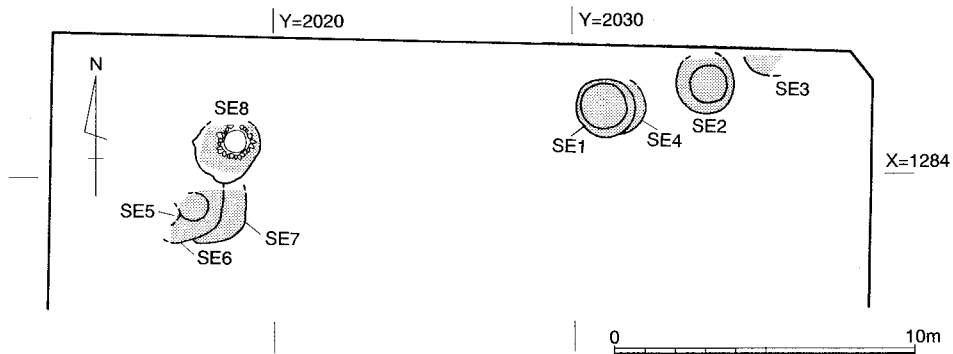


図82 近世の遺構 縮尺1/250

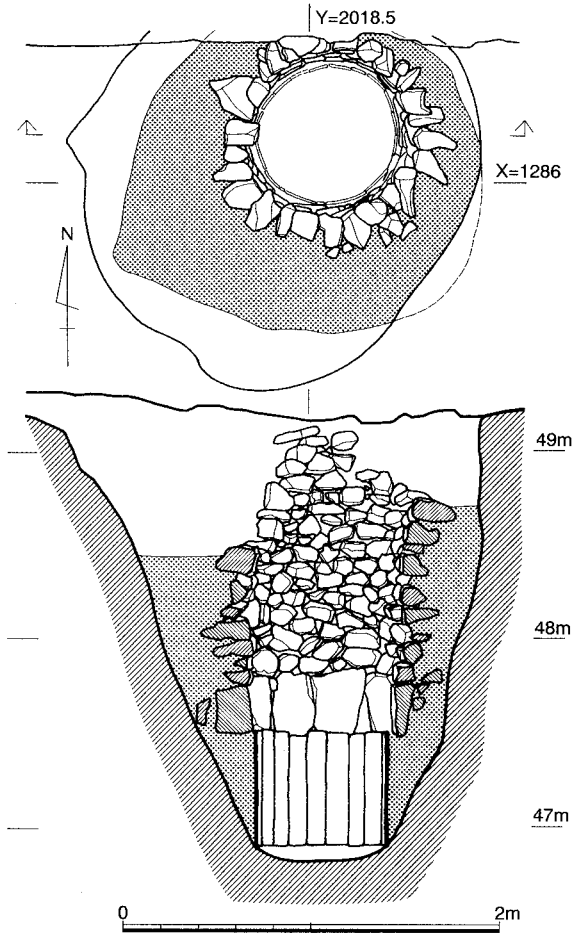


図83 井戸SE 8 縮尺1/40

下層の先史時代の遺物包含層を掘り下げる過程で、近世の終りごろの井戸SE 8を検出した。上部は攪乱によって徹底的に破壊されていたが、中位から底部にいたる石組や枡板部分が残存していた。

石組に使われた石材は花崗岩を主体としており、その表面は焼けこげと思われる黒い変色がみられた。小石による石組が、1.3mにわたって残り、その下には約30cmの大型の花崗岩を並べて、石組の基礎としていた。さらに、その下には長さ60cmの桶の枡板を並べた直径70cmの水溜をもうけており、底部は厚い赤褐色砂礫層に達していた。掘形は、検出面で約2mの不整円形であるが、下部にゆくにしながら急激に縮小し、最下部では桶枡の端部に接していた。底部はややくぼんでいる。

(2) 近世の遺物 (図84)

野壺や井戸からは陶磁器を中心とする相当量の遺物が出土したが、細片が多く図化しうるものは少ない。図84に野壺SE 7・SE 1と柱穴埋土から出土した遺物を示した。

Ⅲ126・Ⅲ127はSE 7出土遺物。ともに断面がV字形の圈線をもつ土師器皿。焼成があまり、表面が摩耗している。

Ⅲ128～Ⅲ135はSE 1出土遺物。Ⅲ128～Ⅲ133は陶器。Ⅲ128～Ⅲ130は灯明皿。外面は露胎、内面に淡緑色の釉を施す。Ⅲ131・Ⅲ132は垂下するかえりをもつ蓋。Ⅲ131は無釉で赤褐色を呈する。Ⅲ132は口縁部より上に淡黄色の釉を施す。Ⅲ134・Ⅲ135は染付碗。ともに内面に2本一組の圈線を2対、外面に花文を描く。

近世の遺跡

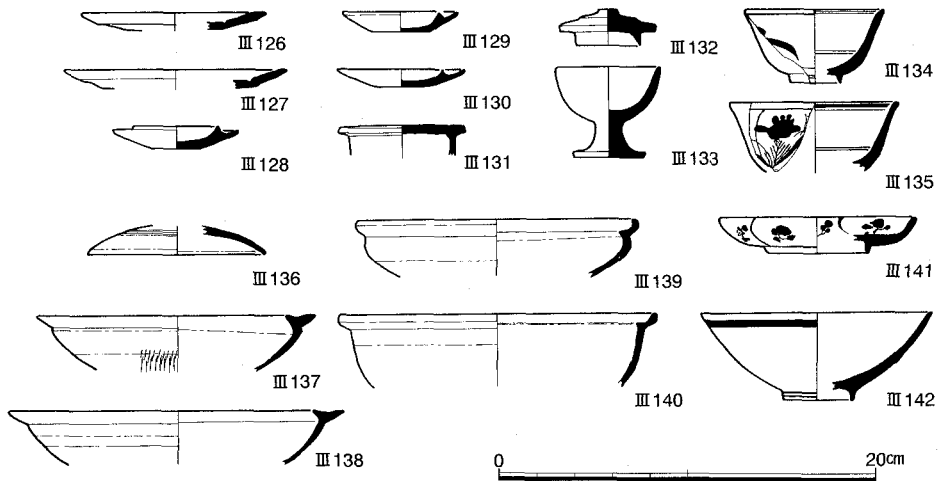


図84 SE 7出土遺物 (Ⅲ126・Ⅲ127土師器), SE 1出土遺物 (Ⅲ128～Ⅲ133陶器, Ⅲ134・Ⅲ135染付), 柱穴出土遺物 (Ⅲ136～Ⅲ140陶器, Ⅲ141・Ⅲ142染付)

Ⅲ136～Ⅲ142は柱穴出土遺物。Ⅲ136～Ⅲ140は陶器。Ⅲ136は蓋。Ⅲ137・Ⅲ138は鍋。口縁部は内外に突出する。Ⅲ137は内外ともに赤褐色, Ⅲ138は暗緑色の釉を施す。Ⅲ139・Ⅲ140は行平鍋。口縁は丸く屈曲し蓋を受ける。Ⅲ139・Ⅲ140ともに灰白色の釉を施す。Ⅲ141・Ⅲ142は染付。Ⅲ141は皿。Ⅲ142は椀。口縁の外周に簡素な圈線を描くのみである。これらは近世後半, 19世紀ごろの資料とみられる。

6 小 結

以上のような遺構の状況から, これまでの周辺の調査成果も勘案して, この遺跡地の歴史的景観の変遷について述べる。

先史時代の地形 先史時代に形成されたとみられる黄灰色シルト以下の堆積層をみると, 調査区一帯は, 広く吉田山周辺地域におよぶ洪水や小河川の流入にさらされる不安定な土地であった。縄文前期以前のある段階において, 一時的ながら小河川が流れこむ安定した時期があり, 湿気が多い河川の縁辺に森林が形成されたものとみてよい。本調査区の堆積層にふくまれている土器は, 摩滅の著しいものが多く, 使用・廃棄された場所から小河川や洪水によって運ばれて, この地に堆積したと推定できる。これらの土器の使用された当時の集落の中心地は, 流路の方向からみて北東にあたる地であろう。

中世の土取り 土取りの遺構は, 北側のAP19区 (74地点) や南側のAL20区 (169地点) でもほぼ調査区全体にわたって確認しており [清水・吉野81, 浜崎90], 医学部構

内東半の広い地域が集中的な土砂の採取地として継続的に機能していたことが判明している。前述のように、その掘削の時期については確定が困難な場合が多いのであるが、少なくとも14世紀以降17世紀初頭ごろにおよぶものであることはまちがいない。これらの中世の土取り穴は掘形が不整形をしており、近世の方形のものとは異なっている。これについては、中世における年貢を納めて土を採取する方式と近世の採取した土量に応じて代価を支払う方式との違いによるものではないかと推定する〔五十川91〕。

近世の耕地 野壺や井戸の配置から、攪乱によって破壊された近世道路遺構を復原した。こうした道路南面に連なる野壺群は、本部構内A W28区（57地点）・A X28区（90地点）・A W27区（181地点）などにおいても検出されている〔岡田・吉野80, 五十川83, 五十川ほか92〕。この道路はさらに東に延長すれば、本学総合人間学部構内における吉田二本松町と吉田近衛町の字境界線にも重なってくるものであり、近世の地割線として重要なものであったことがわかる。表土や攪乱層の厚い場合にはこうした道路遺構はまず残存しないが、掘形の深い野壺や井戸の遺構は検出されることが多い。近世の地割を推定するために、こうした遺構の存在意義は大きい。また、こうして復原される近世の字境が、中世の土地境界を踏襲したものであることが実に多いことにも注目したい。

参 考 文 献

- 赤澤秀則 1998年 「佐太講武貝塚について」『考古学ジャーナル』435
- 足利健亮 1983年 「京都盆地東縁の南北古道——推古、道登・道昭、行基、秀吉らとのかかわりから」『環境文化』58
- 網伸也・鈴木久男 1989年 「Ⅲ平安宮内裏」『平安京跡発掘調査概報昭和63年度』
- 石田志朗・中村徹也・中村友博 1972年 『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』
- 泉 拓良 1980年 「北白川上層式土器の細分——京都大学教養部構内A O 24区出土の縄文土器を中心に——」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』
- 1985年 「中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ——北白川追分町縄文遺跡の調査——』
- 五十川伸矢 1981年 「京都大学本部構内A T 27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
- 1983年 「京都大学本部構内A X 28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
- 1986年 「京都大学医学部構内A N 20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』
- 1991年 「土取りの歴史的変遷」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ』
- 五十川伸矢・伊藤淳史・伊東隆夫 1995年 「京都大学医学部構内A M 17区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』
- 五十川伸矢・千葉 豊・伊東隆夫 1992年 「京都大学本部構内A W 27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1988年度』
- 五十川伸矢・飛野博文 1984年 「京都大学教養部構内A P 22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
- 五十川伸矢・浜崎一志・伊東隆夫 1989年 「京都大学病院構内A J 18・A J 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
- 五十川伸矢・宮本一夫 1988年 「京都大学医学部構内A N 18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度』
- 伊藤淳史 1995年 「京都盆地の弥生時代の遺跡」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』
- 1999年 「北白川追分町弥生時代遺跡の展開——北部構内B A 30区（追分地藏地点）出土資料の紹介——」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』
- 上田秀夫 1982年 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No 2
- 上原真人 1978年 「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14
- 1995年 「京都における鎌倉時代の造瓦体制」『文化財論叢Ⅱ』（奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集）
- 1997年 「2. 瓦類」『史跡大覚寺御所跡発掘調査報告』（大沢池北岸域復原整備事業に伴う調査）
- 碓井小三郎編 1915年 「上京第廿七学区（聖護院町）之部」『京都坊目誌』
- 宇野隆夫・岡田保良 1979年 「京都大学吉田キャンパスの試掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
- 梅川光隆 1994年 「中世京都の採暖・炊事の炬」『風俗』32-3
- 梅原末治 1923年 「京都帝国大学農学部敷地ノ石器時代遺跡」『京都府史蹟勝地調査會報告 第5冊』

参 考 文 献

- 1935年 「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第16冊
- 1936年 「摂津阿武山古墓調査報告」『大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第7輯
- 大谷高等学校法住寺殿跡遺跡調査会 1984年 『大谷中・高等学校校内遺跡発掘調査報告書』
- 岡田保良 1979年 「京都大学構内遺跡と京・白河」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
- 岡田保良・浜崎一志 1985年 「山科寺内町の遺跡調査とその復元」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集
- 岡田保良・吉野治雄 1980年 「京都大学医学部構内AW28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
- 小野正敏 1982年 「15、16世紀の染付椀、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2
- 小野山節 1968年 『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第2部日本歴史時代
- 小野山節・都出比呂志 1973年 『高槻市安満遺跡の条里遺構』
- 小野山節・中村徹也 1976年 『京都大学教養部A号館増築予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要』
- 角谷江津子 1992年 「肥前京焼風陶器と京焼——新島会館地点出土資料を中心として——」『関西近世考古学研究』Ⅲ
- 川勝政太郎 1939年 『石造美術』（スズカケ出版部）
- 川上 貢 1977年 「京都大学構内における史跡の文献的考察」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 木戸雅寿 1995年 「信楽」『概説中世の土器・陶磁器』（中世土器研究会）
- 京大調査会（京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会）
- 1977年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 京大埋文研（京都大学埋蔵文化財研究センター）
- 1978年a 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』
- 1978年b 『京都大学埋蔵文化財調査報告第1冊——京大農学部遺跡BG36区——』
- 1979年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
- 1980年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』
- 1981年a 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ——白川北殿北辺の調査——』
- 1981年b 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
- 1983年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
- 1984年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
- 1985年 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ——北白川追分町縄文遺跡の調査——』
- 1986年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』
- 1987年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』
- 1988年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度』
- 1989年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
- 1990年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』
- 1991年 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ——京都大学病院構内遺跡の調査——』
- 1992年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1988年度』
- 1993年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1989～1991年度』
- 1995年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』
- 1997年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1993年度』
- 1998年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1994年度』
- 1999年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』
- 京都大学広報委員会編 1977年 『京都大学建築八十年のあゆみ』
- 京都市文化市民局 1996年 『京都市遺跡地図』

参 考 文 献

- 京都市編 1983年 『史料京都の歴史』第2巻考古
- 京都市埋文研(京都市埋蔵文化財研究所) 1978年 『常盤仲ノ町集落跡発掘調査報告』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告一Ⅲ)
- 1980年 『坂東善平収蔵品目録』
- 1986年 『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報昭和60年度』
- 1990年 『仁和寺境内発掘調査報告書——御室会館建設に伴う調査——』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告第9冊)
- 1998年 『南ノ庄田瓦窯跡』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告第18冊)
- 京都府立総合資料館編 1984年 『大田垣蓮月』
- 古賀秀策 1999年 『京都大学本部構内A X 25・A X 26区の発掘調査』『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』
- 古代学協会 1984年 『押小路殿跡・平安京左京三条三坊十一町』(平安京跡研究調査報告第12輯)
- 小森俊寛・上村憲章 1996年 『京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究』『研究紀要』第3号(京都市埋蔵文化財研究所)
- 佐川正敏 1995年 『鎌倉時代の軒平瓦の編年研究—よみがえる中世の瓦—』『文化財論叢Ⅱ』(奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集)
- 清水芳裕 1991年 『遺跡の形成と地形の変化』『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅳ
- 清水芳裕・吉野治雄 1981年 『京都大学医学部構内A P 19区の発掘調査』『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
- 島田貞彦 1924年 『京都市北白川追分町発見の石器時代遺跡』『考古学雑誌』第14巻第5号
- 島田貞彦・水野清一・小川五郎・三宅宗悦 1929年 『摂津国高槻「摂津農場」石器時代遺跡調査報告』『人類学雑誌』第44巻第7号
- 菅原正明 1983年 『畿内における土釜の制作と流通』『文化財論叢』(奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集)
- 杉本秀太郎 1976年 『大田垣蓮月』淡交選書、淡交社
- 大本山東福寺 1990年 『東福寺防災施設工事・発掘調査報告書』
- 竹村恵二・檀原徹 1988年 『土壌火山ガラス抽出分析による遺跡の地層対比および編年』『考古学と自然科学』第20号
- 田辺昭三 1966年 『陶邑古窯址群Ⅰ』
- 千葉豊 1991年 『病院構内の先史時代遺跡』『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ——京都大学病院構内遺跡の調査——』
- 千葉豊・吉井秀夫・小崎隆・矢内純太・藁科哲男 1997年 『京都大学本部構内A W 25区の発掘調査』『京都大学構内遺跡調査研究年報 1993年度』
- 徳田光圓ほか 1982年 『大田垣蓮月』講談社
- 鳥羽雛宮跡調査研究所 1975年 『栢杜遺跡調査概報』
- 富井 眞 1998年 『北白川追分町遺跡出土の縄文土器——北白川C式の成立を考える——』『京都大学構内遺跡調査研究年報 1994年度』
- 中野晴久 1995年 『生産地における編年について』『常滑焼と中世社会』(永原慶二編)小学館
- 中村健二編 1993年 『小川原遺跡Ⅰ』(滋賀県教育委員会)
- 中村徹也 1973年 『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』
- 1974年a 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅰ』
- 1974年b 『京都大学理学部ノートパイオロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』
- 1975年 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅱ』

参 考 文 献

- 中村直勝 1941年 「勸修寺家領に就いて」『紀元二千六百年記念史學論文集』（京都帝国大学文学部）
- 奈文研（奈良国立文化財研究所）編 1961年 『平城京跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告』（奈良国立文化財研究所学報第十冊）
- 1976年 『平城宮発掘調査報告』Ⅶ
- 並木和子 1982年 「平安中期の吉田神社について」『風俗』21-3
- 植崎彰一 1983年 「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告』Ⅲ
- 難波洋三 1989年a 「京都大学教養部構内A P 25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
- 1989年b 「市坂の土器作り」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
- 1992年 「徳川氏大坂城期の焙烙」『難波宮址の研究』第九（本文）
- 葉賀七三男 1990年 「るつば・とりべ」『金属』1990年11月号
- 橋本久和 1980年 「高槻における中世土器の編年」『上牧遺跡発掘調査報告書』
- 浜崎一志 1983年a 「昭和56年度京都大学構内の試掘・立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
- 1983年b 「浄蓮華院と吉田構——応仁の乱後の吉田の復原的考察——」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
- 1984年 「京都大学病院西構内A F 15区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
- 1990年 「京都大学医学部構内A L 20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
- 1991年 「白河の条坊地割」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ——京都大学病院構内遺跡の調査——』
- 浜崎一志・千葉豊・森下章司 1993年 「京都大学病院構内A H 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1989～1991年度』
- 浜崎一志・宮本一夫 1987年 「京都大学病院A F 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』
- 平田 泰 1988年 「15森ヶ東瓦窯跡・和泉式部町遺跡」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』
- 平田泰・加納敬二 1991年 「11広隆寺旧境内・上ノ段町・和泉式部町遺跡・一ノ井町遺跡・森ヶ東瓦窯跡・常盤東ノ町古墳群」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』
- 福山敏男 1977年 『日本の美術』（至文堂）No129
- 藤岡謙二郎 1973年 「北白川扇状地と教養部構内発見の遺物包含層並びにその先史地理学的意義」『人文』第19集（京都大学教養部）
- 藤澤良祐 1996年 「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界——その生産と流通——』（助瀬戸市埋蔵文化財センター設立5周年記念シンポジウム資料集）
- 平安博物館 1977年 『平安京古瓦図録』
- 前田義明 1994年 「中期の瓦」『平安京提要』
- 間壁忠彦 1991年 『備前焼』（考古学ライブラリー60）
- 増田綱・丹羽桃溪 1801年 『鼓銅図録』（『江戸科学古典叢書』1、恒和出版、1976年）
- 山田 猛 1990年 「下郡遺跡群出土の播鉢」『Mie history』第1巻
- 横田賢次郎・森田勉 1978年 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について——型式分類と編年を中心として——」『九州歴史資料館研究論集』4
- 横山浩一・佐原眞 1960年 『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第1部日本先史時代
- 吉村正親 1993年 「栗栖野瓦窯跡の調査（その2）」『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報平成4年度』
- 渡辺 誠 1985年 「焼塩」『塩業・漁業』講座・日本技術の社会史第2巻

京都大学構内遺跡調査要項 1996年度

京都大学埋蔵文化財研究センター要項

- 第1条 京都大学に埋蔵文化財研究センター（以下「センター」という）を置く。
- 第2条 センターは、京都大学敷地内の埋蔵文化財についての調査研究及びその保存のため必要な業務を行なう。
- 第3条 センターにセンター長を置く。
- 2 センター長は、京都大学の専任の教授をもって充てる。
- 3 センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 4 センター長は、センターの所務を掌理する。
- 第4条 センターに、必要に応じて、助教授、助手その他の職員を置く。
- 第5条 センターに、調査研究及び保存に関する業務を処理するため、研究部を置く。
- 2 研究部に主任を置き、前条の教官をもって充てる。
- 3 主任は、研究部の業務をつかさどる。
- 第6条 センターにセンターの事業に関する基本的計画、人事その他管理運営に関する重要事項を審議するため、運営協議会を置く。
- 2 運営協議会は、次の各号に掲げる委員で組織する。
- (1)センター長
- (2)センターの研究部の主任
- (3)前2号以外の学識経験者のうちから総長の委嘱した者 若干名
- (4)事務局長及び施設部長
- 3 センター長は、運営協議会を招集し、議長となる。
- 4 前各項に規定するもののほか、運営協議会の運営に関し必要な事項は、運営協議会が定める。
- 第7条 この要項に定めるもののほか、センターの組織及び運営に関し必要な事項はセンター長が定める。

センター長

山中 一郎（文学研究科教授）

運営協議会委員

大山 喬平（文学研究科教授）

鎌田 元一（文学研究科教授）

石田 英實（理学研究科教授）

瀬戸口烈司（理学研究科教授）

高橋 康夫（工学研究科教授）

足利 健亮（人間・環境学研究科教授）

伊東 隆夫（木質科学研究所教授）

清水 芳裕（文学研究科助教授）

中林 勝男（事務局長 1996.6.30）

黒川 征（事務局長 1996.7.1～）

安部 矩敏（施設部長 1996.4.1～）

研究部主任

清水 芳裕（文学研究科助教授）

同研究員

五十川伸矢（文学研究科助手）

千葉 豊（文学研究科助手）

伊藤 淳史（文学研究科助手）

古賀 秀策（工学研究科助手）

富井 眞（文学研究科助手

1996.12.1～）

磯谷 敦子（施設部教務補佐員）

中田 敬子（施設部教務補佐員）

柴垣恵理子（施設部教務補佐員）

事務室

松本 一代（施設部事務補佐員）

表8 京都大学構内遺跡のおもな調査

(地点は図版1を参照, 文献中「埋」は)
京大埋文研, 「調」は京大調査会をさす。

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1923	農学部	1・2	濱田耕作	表採・試掘			縄文土器, 石器	梅原23, 島田24	
1924	農学部	不明	藤本理三郎				石棒	横山・佐原60	
1929	大阪府満安		島田貞彦 水野清一 ほか	発掘			弥生土器	島田・水野ほか29	
1934	大阪府阿武山古墳		梅原末治	発掘			乾漆棺・玉飾枕	梅原36	
1935	北白川小倉町		梅原末治				縄文土器, 石器	梅原35	
1956	農学部	3	羽館易	採集			縄文土器		
1971	農学部	4	石田志朗	採集			弥生土器	埋79	
1972	農学部	5		採集			石棒		
	大阪府満安		小野山節都 出比呂志	事前発掘	1500	条里の溝	弥生土器	小野山・都出73	建物をずらし条里の溝を保存
	追分地藏	6	石田志朗 中村徹也	事前発掘	600		弥生土器	石田ほか72, 伊藤99	
	教養部	7	藤岡謙二郎	工事中採集・実測			縄文土器	藤岡73	
1973	農学部	8	中村徹也	事前発掘	13	瓦溜	縄文土器, 瓦(平安)	埋78b	瓦溜埋戻し
	農学部	9	中村徹也	事前発掘	600		縄文土器, 土師器	中村73	
	植物園	11	中村徹也	事前発掘	400	縄文後期甕棺・配石遺構	縄文土器	中村74b, 泉77	甕棺・配石遺構の移築を決定
1974	農学部	12	中村徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村74a	
	農学部	13	中村徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村75	
1975	教養部	14	小野山節 中村徹也	事前発掘	750		土師器, 瓦, 陶磁器	小野山・中村76	
1976	農学部BE33区	16	泉拓良	事前発掘	900	縄文晩期土壙墓	縄文土器, 土師器, 瓦	調77	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1976	病院 AE15区	19	岡田 保良	事前発掘	2200	古代・中世 溝、池、土 器溜	土師器、瓦、 陶磁器	調77, 埋81 a	
	植物園 BD35区	29	吉野 治雄	保 存				調77	甕棺・配石 の移築復原
	病院 AH17区	34	泉 拓良	事前発掘	200	近世溝、井 戸、集石	土師器、瓦	埋78 a	
	教養部 AS23区	35	吉野 治雄	試 掘	10	溝	縄文土器、 須恵器	埋77	
	北部 BJ33区	36	宇野 隆夫	試 掘	10		縄文土器	埋77	
	和歌山県 瀬 戸		丹羽 佑一	事前発掘	300	縄文時代土 坑墓	縄文土器、 人骨	埋78 a	
1977	病院 AF14区	39	岡田 保良 宇野 隆夫	事前発掘	800	古代護岸、 溝、井戸	土師器、瓦、 陶磁器	埋78 a, 埋81 a	
	医学部 AO18区	41	泉 拓良 吉野 治雄	事前発掘	1200	中世溝、土 器溜、井戸	土師器、瓦、 陶磁器	埋79	
	北部 電 気 管	43	吉野 治雄 宇野 隆夫	立 合		溝、土坑	須恵器、土 師器	埋78	
	教養部 AQ23区 AN23区	48	宇野 隆夫	試 掘	80	溝	弥生土器、 土師器、瓦	埋79	
	白河北殿 比 定 地 AA18区	49	岡田 保良	試 掘	40	溝	土師器、瓦、 陶磁器	埋79	
1978	理学部 BE29区	54	岡田 保良 宇野 隆夫 吉野 治雄	事前発掘	500	弥生中期方 形周溝墓、 中世火葬塚	弥生土器、 土師器、瓦	埋79	火葬塚と方 形周溝墓を 現地保存
	農学部 BG32区	55	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	100	縄文土坑、 古代溝、土 坑	縄文土器、 土師器	埋79	
	北部 BG31区	56	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	650	縄文晩期埋 没林	縄文土器	埋80, 埋85	
	本部 AW28区	57	岡田 保良 吉野 治雄	事前発掘	500	近世白川道	陶磁器、土 師器、銭貨	埋80	
	本部 AY22区	60	泉 拓良	立 合		高野川旧河 道		埋79	
	病院 AN19区	64		立 合		井戸、溝	弥生土器	埋79, 埋80	
1979	北部 BH37区	66	吉野 治雄	試 掘	46	土坑	土師器、須 恵器	埋80	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1979	教養部 AM24区	69	岡田 保良 清水 芳裕	試掘	8		弥生土器, 土師器	埋80	
	本部 AT29区	70	吉野 治雄	試掘	28	溝, 土坑	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 瓦	埋80	
	本部 AZ30区	71	西川 幸治 浜崎 一志	試掘	30	中世溝	土師器, 瓦, 瓦器	埋80	
	医学部 AP19区	74	清水 芳裕 五十川伸矢 吉野 治雄	事前発掘	2776	中世溝, 井 戸, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器, 旧 石器	埋81 b	
	本部 AT27区	75	五十川伸矢	事前発掘	400	奈良後期堅 穴住居, 中 世土壙墓, 近世道路	土師器, 須 恵器, 白磁	埋81 b	堅穴住居跡 を現地保存
	北部 BD32区	79	泉 拓良	立合			瓦(平安)	埋80	
1980	本部 AT27区	89	泉 拓良	事前発掘	115	近世道路, 堀	土師器, 近 世陶磁器	埋81 b	
	本部 AX28区	90	泉 拓良 五十川伸矢 浜崎 一志	事前発掘	1120	近世白川道, 中世土器溜, 井戸, 建物	土師器, 瓦, 陶磁器, 銅 鏃(弥生), 磨製石鏃	埋83	
	京都府 美月		泉 拓良 清水 芳裕 五十川伸矢 浜崎 一志 吉野 治雄	事前発掘	1468	弥生中・後 期水路, 土 坑, 中世土 器溜	弥生土器, 打製石斧, 瓦器, 陶磁 器	埋83	立ち合い調 査中に遺跡 を発見, 工 事を中断し 発掘調査
	教養部 AO21区	91	吉野 治雄	事前発掘	112	中世井戸, 土壙墓	土師器, 瓦 器, 陶磁器	埋83	
	教養部 AM22区	93	吉野 治雄	立合		火葬墓, 石 列	瓦器, 陶器	埋81	
	本部 実験排水	98	清水 芳裕	立合		流路, 中世 土器溜	土師器, 丸 瓦	埋83	遺構実測
1981	理学部 BD30区	109	泉 拓良 浜崎 一志	事前発掘	272	古代建物, 近世瓦溜	土師器, 瓦, 陶磁器	埋83	
	和歌山県 瀬戸		泉 拓良 清水 芳裕 五十川伸矢 浜崎 一志	事前発掘	1500	弥生土坑, 弥生配石, 古墳時代土 坑	縄文土器, 硬玉管玉, 弥生土器, 製塩土器	埋84	
	本部 AX28区	110	浜崎 一志	事前発掘	34	中世土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器, 硯	埋83	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1981	教養部 AP22区	111	五十川伸矢 飛野博文	事前発掘	1716	古墳, 古代 梵鐘鑄造遺 構, 中世門, 溝, 墓	縄文土器, 弥生土器, 須恵器, 土 師器, 鋳型, 溶解炉	埋84	梵鐘鑄造遺 構を現地保 存
	京都市 本山			分布調査			縄文土器, 緑釉陶器, 灰釉陶器	埋83	
1982	京都府 中海道		泉 拓良	試掘	20	中世土器溜	縄文土器, 土師器	埋84	
	病院 AF15区	122	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	1028	中世井戸, 溝, 土坑	土師器, 瓦 器, 白磁	埋84	
	農学部 BF33区	123	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	787	縄文住居跡, 中世土坑	縄文土器, 土師器	埋84	
	和歌山 県瀬戸		泉 拓良	事前発掘	297	古代製塩炉	縄文土器, 弥生土器, 製塩土器	埋84	古代製塩炉 を移築保存
	本部 AT29区	124	泉 拓良 飛野 博文	事前発掘	890	中世濠, 建 物	土師器, 瓦 器, 陶磁器	埋86	
	農学部 BE33区	125	泉 拓良 飛野 博文	事前発掘	803	中世・近世 水田, 溝	土師器, 瓦 器, 陶磁器	埋86	
1983	医学部 AN20区	134	泉 拓良 五十川伸矢	事前発掘	863	中世井戸, 土取り穴	須恵器, 瓦 器, 土師器	埋86	
	北部 BF31区	135	清水 芳裕 五十川伸矢	事前発掘	737	縄文埋没林, 古代・中世 溝	縄文土器, 土師器, 緑 釉陶器	埋87 富井98	
	医学部 AM19区	139	泉 拓良 浜崎 一志	立合		中世土取り 穴	土師器, 瓦 器, 石鍋	埋86	
1984	病院 AF19区	141	浜崎 一志 宮本 一夫	事前発掘	863	近世池, 井 戸, 野壺	縄文土器, 蓮月焼	埋87	
	病院 AJ19区	142	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	260	中世土坑, 近世土取り穴	土師器, 近 世陶磁器	埋87	
	医学部 AN18区	143	五十川伸矢 宮本 一夫	事前発掘	1920	中世井戸, 土取り穴, 中世梵鐘鑄 造遺構	土師器, 瓦 器, 鋳型	埋88	
1985	北部 BJ31区	153	清水 芳裕 宮本 一夫	事前発掘	624	古代溝, 建 物跡, 土坑, 近世溝	弥生土器, 土師器, 須 恵器	埋88	
	病院 AJ18区	154	清水 芳裕 浜崎 一志 斐田 哲郎	事前発掘	4295	中世井戸, 近世土取り 穴	土師器, 近 世陶磁器	埋89	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1985	病院 AJ19区	155	五十川伸 矢宮本 一夫	事前発掘	3000	中世井戸, 近世土取り 穴	土師器, 近 世陶磁器, 鋳型	埋89	
1986	教養部 AP25区	167	清水 芳裕 宮本 一夫 難波 洋三	事前発掘	599	中世・近世 溝	土師器, 近 世陶磁器	埋89	
	本部 AX30区	168	清水 芳裕 難波 洋三	事前発掘	330	古代土坑, 中世道	土師器, 陶 磁器	埋89	
	医学部 AL20区	169	浜崎 一志 難波 洋三	事前発掘	331	近世土取り 穴	土師器, 陶 磁器	埋90	
	教養部 AL23区	170	清水 芳裕 五十川伸 矢宮本 一志 浜崎 一志	試掘	24	中世溝	土師器, 瓦 器, 陶器	埋89	
1987	北部 BD33区	180	浜崎 一志 難波 洋三	事前発掘	618	土坑, 河川	縄文土器, 土師器, 須 恵器	埋90	
	本部 AW27区	181	五十川伸 千葉 千豊	事前発掘	1604	中世土坑, 近世道路	縄文土器, 土師器, 陶 磁器	埋92	
	本部 AT25区	188	清水 芳裕	立合		近世尾張藩 邸堀		埋90	
1988	牛ノ宮町 AR19区	190	清水 芳裕 森下 章司	事前発掘	216	中世土坑, 近世道路	土師器, 瓦, 陶磁器	埋92	
	病院 AH19区	191	浜崎 一志 千葉 千豊 森下 章司	事前発掘	2495	中世土坑, 溝	土師器, 瓦, 陶磁器	埋93	
	病院 AE12区	192	千葉 千豊 森下 章司 宮原恵美子	事前発掘	598.5	近世道路, 溝, 野壺, 井戸	土師器, 瓦, 陶磁器	埋93	
1989	病院 AE13区	198	千葉 千豊 森下 章司 宮原恵美子	事前発掘	805	近世井戸, 野壺, 柵列	土師器, 陶 磁器, 瓦	埋93	
1992	病院 AG14区	200	千葉 千豊 森下 章司	事前発掘	393.5	近世井戸, 道路	土師器, 陶 磁器	埋95	
	教養部 AR21区	202	五十川伸 矢宮本 一志 浜崎 一志 森下 章司	立合		中世土坑	土師器	埋93	
1992	医学部 AM17区	207	五十川伸 矢宮本 一志 森下 章司	事前発掘	1950	中世井戸, 土器溜	土師器, 陶 磁器	埋95	
	北部 BA28区	208	浜崎 一志 千葉 千豊	事前発掘	1242	噴砂, 古代 埋納遺構, 近世堀	縄文土器, 土師器, 陶 磁器, 棧瓦	埋95	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1992	和歌山県 瀬戸	213	浜崎 一志 伊藤 淳史	立 合		縄文包含層	縄文土器、 石器	埋95	
	本 部 AV30区	214	千葉 豊 伊藤 淳史	事前発掘	1480	中世砂取り穴、 近世野壺	土師器、陶 磁器	埋97	
1993	北 部 BB28区	217	清水 芳裕 古賀 秀策	事前発掘	1323	古代溝、中 世土坑	土師器、陶 磁器	埋97	
	本 部 AW25区	218	千葉 豊 吉井 秀夫	事前発掘	929	中世井戸、 濠、溝、土 坑	縄文土器、 石器、土師 器、陶磁器	埋97	
	本 部 AU30区	219	伊藤 淳史 古賀 秀策	事前発掘	1074	弥生流路、 古代溝、中 世土器溜	弥生土器、 土師器、陶 磁器	埋97	
	総合人間 学部 AO22区	220	五十川伸矢 伊藤 淳史	事前発掘	4080	弥生水田、 古代梵鐘鑄 造遺構、中 世井戸、溝	縄文土器、 弥生土器、 土師器、陶 磁器	埋99	
	北 部 BF34区	221	千葉 豊 吉田 広	事前発掘	1228	古代土器溜、 土坑、中世・ 近世道路	土師器、陶 磁器、瓦	埋98	
	病 院 AF12区	222	伊藤 淳史	試 掘	112.5	近世道路	土師器、陶 磁器	埋97	
1994	北 部 BF30区	229	千葉 豊 古賀 吉田 秀策 広	事前発掘	530	縄文貯蔵穴、 弥生方形周 溝墓、平安 土墳墓	縄文土器、 弥生土器、 土師器	埋98	
	本 部 AX25区	230	古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	1314	古代溝、土 器溜	土師器、陶 磁器	埋99	
1995	総合人間 学部 AR25区	238	伊藤 淳史 古賀 秀策	事前発掘	2092	弥生土器棺墓、 古代溝、土坑、 中世溝	弥生土器、土 師器、陶磁 器、瓦	第2章	
	病 院 AG20区	239	千葉 豊 吉田 広	事前発掘	2260	縄文流路、弥 生流路、中世 井戸、近世大溝	縄文土器、弥 生土器、土師 器、蓮月焼	第3章	
	病 院 AF20区	240	千葉 豊 吉田 広	事前発掘	280	近世池、土 坑	土師器、陶磁 器	第3章	
	本 部 AX26区	241	古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	627	中世大溝、 近世柵列	土師器、陶 磁器	埋99	
1996	医 学 部 AN20区	248	五十川伸矢 古賀 秀策	事前発掘	510	縄文流路 中世土取穴 近世井戸	縄文土器、弥 生土器、土師 器、陶磁器	第4章	
	総合人間 学部 AR24区	249	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	330	中世掘立柱 建物、土坑、 溝	弥生土器、土 師器、陶磁 器、銭貨		発掘中

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1996	工学部 AU28区	250	古賀 秀策	立合					中世包含層
	北白川 小倉町	251	千葉 豊 富井 眞	立合				第1章	時期不明包含層
	本部 AV25区	252	古賀 秀策	立合				第1章	縄文包含層
	本部 AX26区	253	古賀 秀策	立合					

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとだいがくこうないせきちようさけんきゅうねんぼう1996ねんど							
書名	京都大学構内遺跡調査研究年報1996年度							
編著者名	山中一郎, 清水芳裕, 五十川伸矢, 千葉 豊, 伊藤淳史, 富井 眞, 阪口英毅, 伊東隆夫							
編集機関	京都大学埋蔵文化財研究センター							
所在地	〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町 TEL 075-753-7691							
発行年月日	西暦 2000年 8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査 期間	調査 面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
総合人間 学部構内 AR25区	京都府京都市左京区 吉田二本松町	26100	—	35° 1' 18"	135° 47' 1"	1995 1018 ? 1996 0517	2092	総合人間学部 校舎新営に伴 う発掘調査
病院構内 AG20・ AF20区	京都府京都市左京区 聖護院河原町	26100	—	35° 1' 0"	135° 46' 50"	1995 1201 ? 1996 0531	2541	中央診療棟取り壊 し工事及びMRI- CT装置棟新営に 伴う発掘調査
医学部構内 AN20区	京都府京都市左京区 吉田近衛町	26100	—	35° 1' 18"	135° 46' 52"	1996 0502 ? 1996 0814	510	放射性同位元素総 合センター教育訓 練棟新営に伴う発 掘調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
総合人間 学部構内 AR25区	散布地	縄文時代			縄文土器		弥生前期の土器棺墓 室町時代の濠状大溝 と多種類の軒瓦出土	
	墓地	弥生時代	土器棺墓 2		弥生土器			
	散布地	古墳時代			須恵器, 埴輪			
	集落跡	奈良～ 室町時代	土器溜 井戸 溝	2 1 多数	土師器, 瓦器, 陶磁器, 瓦, 石製品, 金属製品			
	田畑	江戸時代	柵列 野壺	多数 多数	土師器, 陶磁器			
病院構内 AG20・ AF20区	散布地	縄文・ 弥生時代	自然流路		縄文土器, 弥生土器		幕末の蓮月焼一括資 料	
	宮都・ 集落跡	平安～ 室町時代	井戸 土坑 溝	11 8 1	土師器, 瓦器, 陶磁器			
	集落跡	江戸時代	井戸 溝 池	8 3 1	土師器, 陶磁器			
医学部構内 AN20区	散布地	縄文・ 弥生時代	自然流路		縄文土器, 弥生土器		縄文前期以前の流路	
	生産址	鎌倉～ 室町時代	土取り穴		土師器, 陶磁器			
	田畑	江戸時代	井戸 野壺	1 7	土師器, 陶磁器			

京都大学構内遺跡調査研究年報 1996年度

目 次

- 1 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点
- 2～20 京都大学総合人間学部構内A R 25区の発掘調査
- 21～37 京都大学病院構内A G 20・A F 20区の発掘調査
- 38～40 京都大学医学部構内A N 20区の発掘調査

Y = 1500 (構内座標)
Y = -20500 (国土座標)

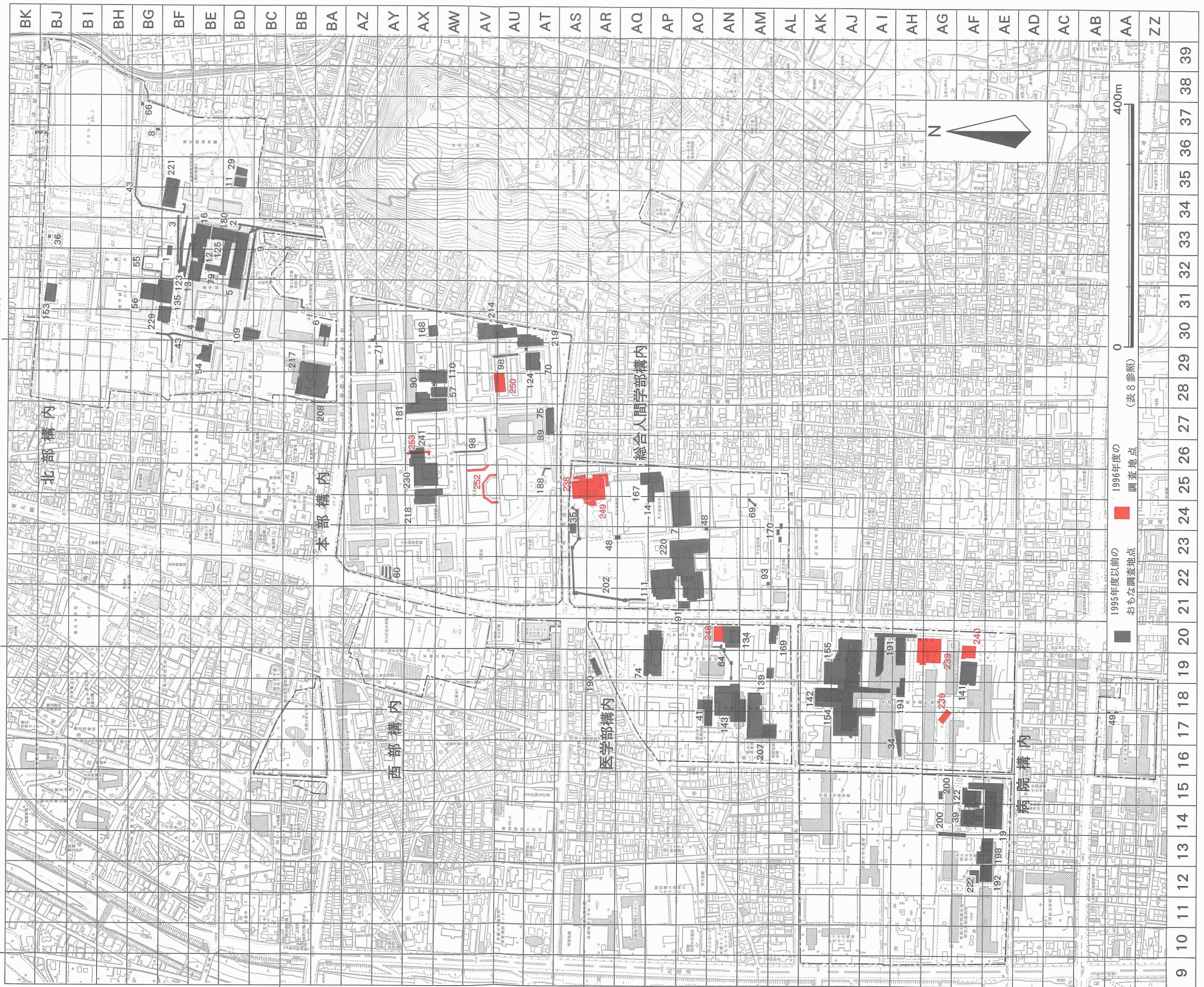
Y = 2000 (構内座標)
Y = -20000 (国土座標)

Y = 2500 (構内座標)
Y = -19500 (国土座標)

X = 2000 (構内座標)
X = -108000 (国土座標)

X = 1500 (構内座標)
X = -108500 (国土座標)

X = 1000 (構内座標)
X = -109000 (国土座標)



図版 1 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点



1 調査区全景（南から）



2 溝SD11東北コーナーと畝溝群（北東から）



1 南調査区表土除去後（東から）



2 北調査区表土除去後（東から）



3 南調査区近世遺構（東から）



4 北調査区近世遺構（東から）



5 南調査区完掘後（東から）



6 北調査区完掘後（東から）



1 南調査区近世遺構（南から）



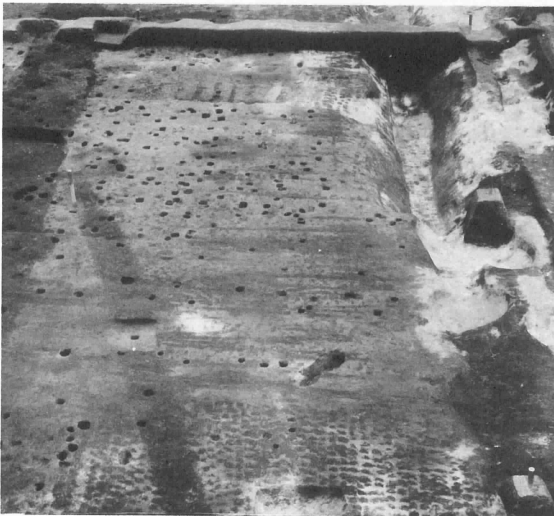
2 南調査区中世遺構（南から）



3 近世段差と杭列痕（西から）



4 中世段差と植栽痕（西から）



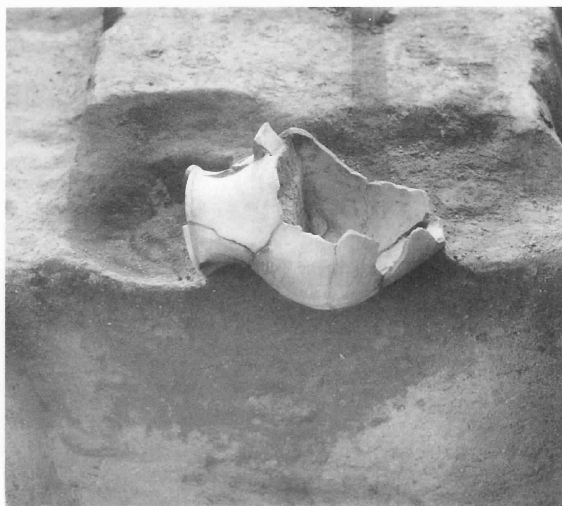
5 耕作溝・根茎痕等検出状況（南から）



6 東調査区完掘後（南から）



1 土坑SK13 (東から)



2 SK13半割断面 (東から)



3 土坑SK 9 (南から)



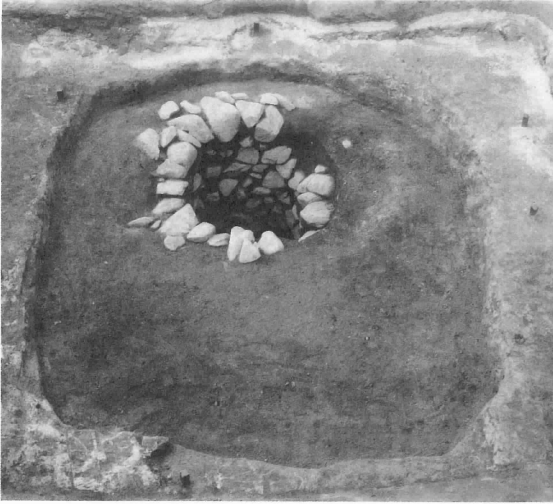
4 瓦溜SK 8 (東から)



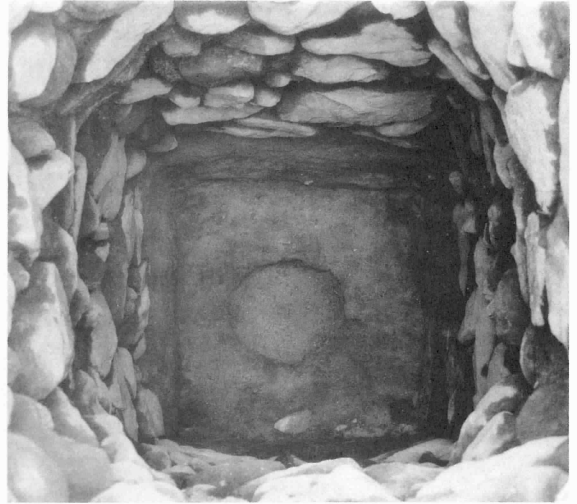
5 土器溜SK10 (南から)



6 SK10下層土坑 (東から)



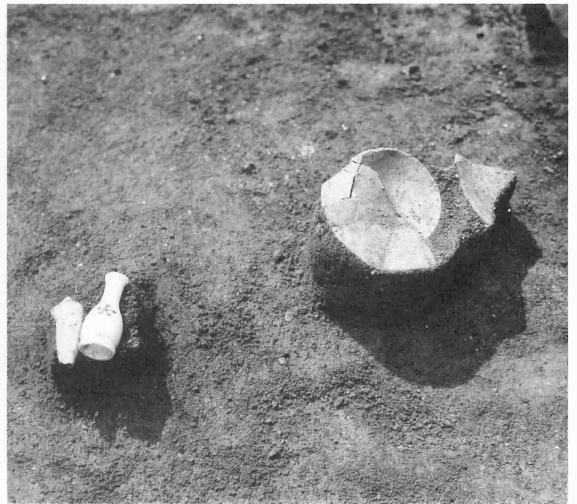
1 井戸SE5 (東から)



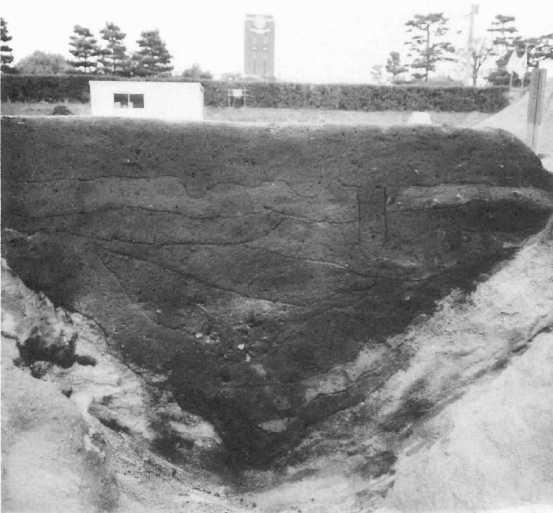
2 SE5井筒内 (東から)



3 溝SD13・16~21 (南から)



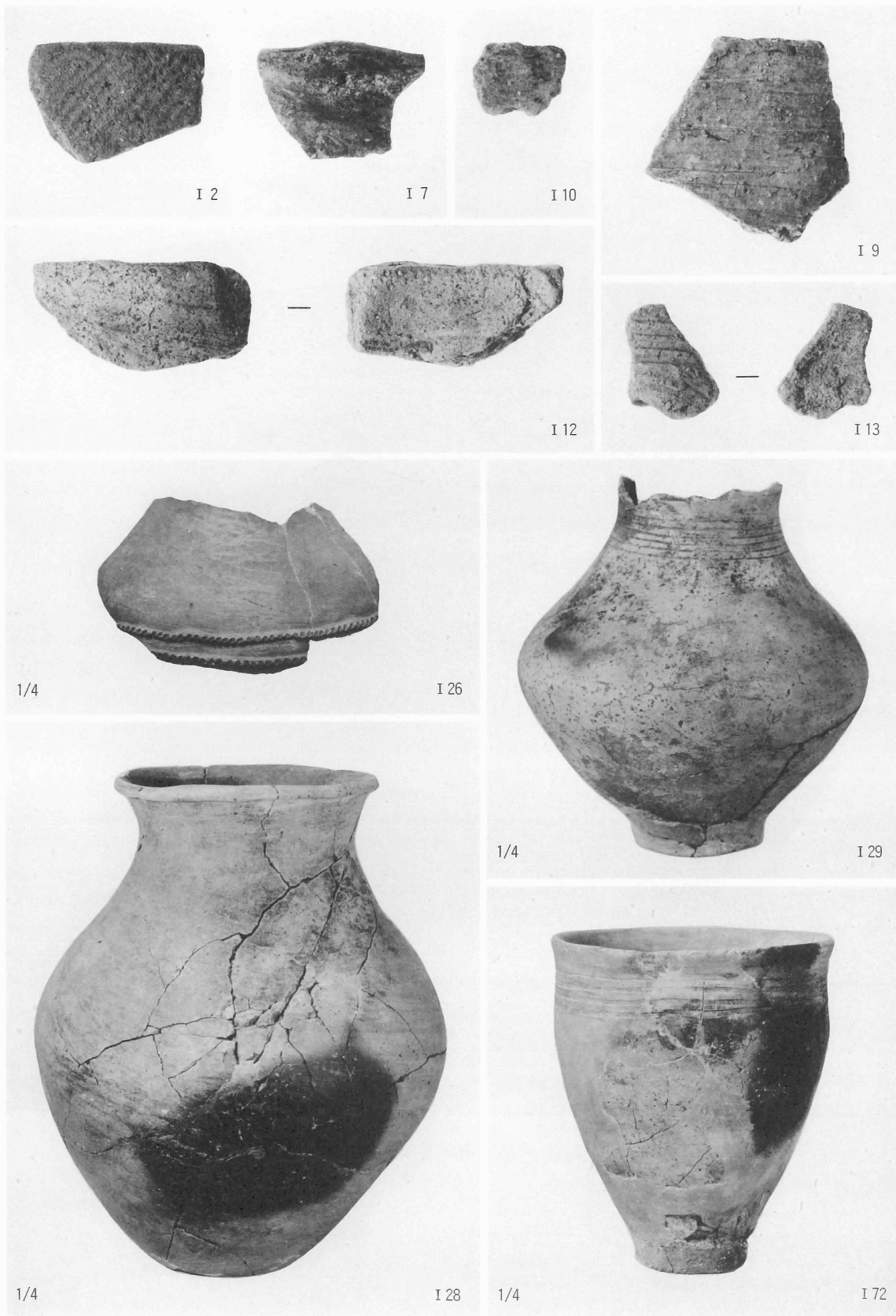
4 埋納遺構SX 2 出土状況 (北から)



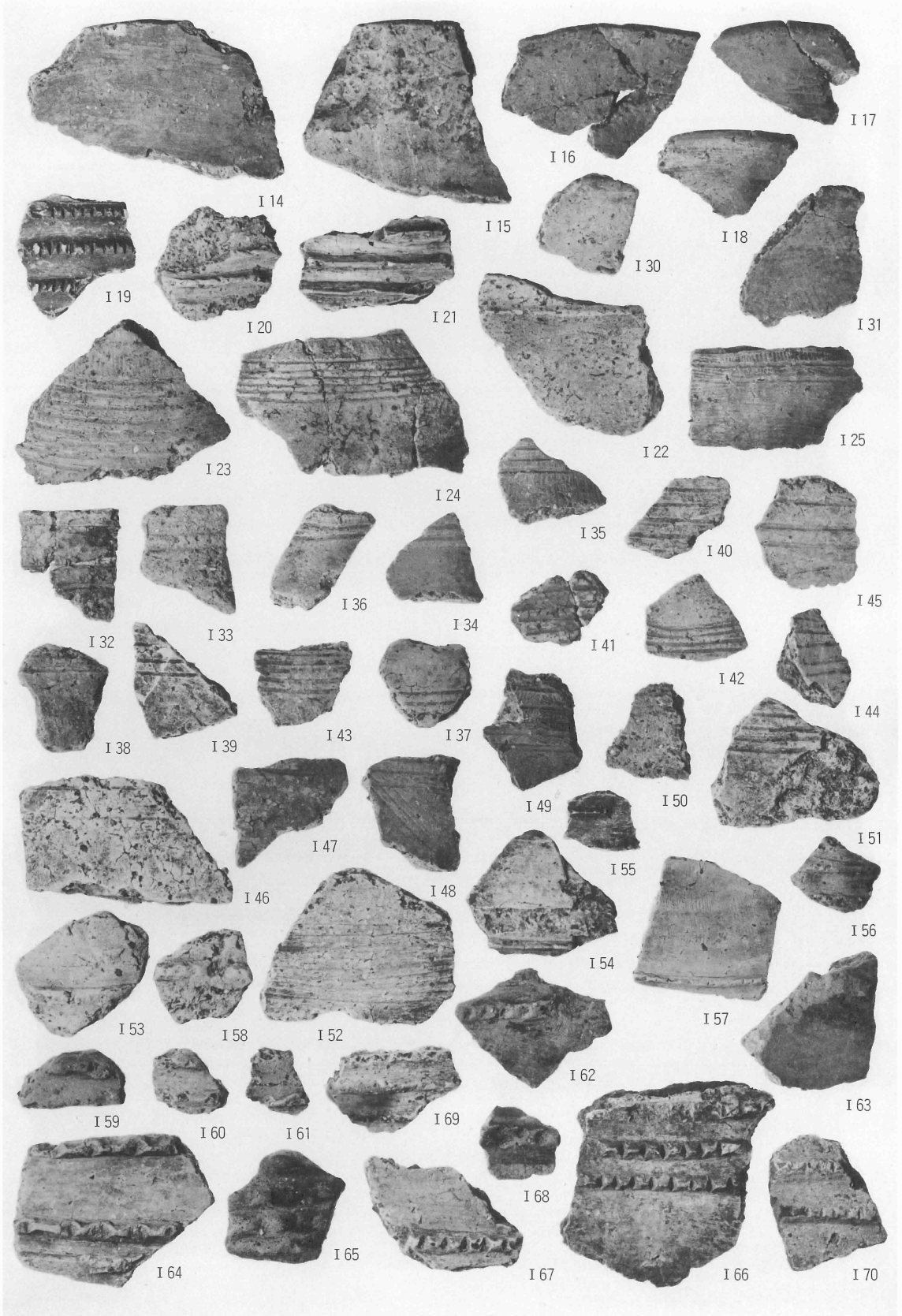
5 溝SD11東西畦断面 (南から)



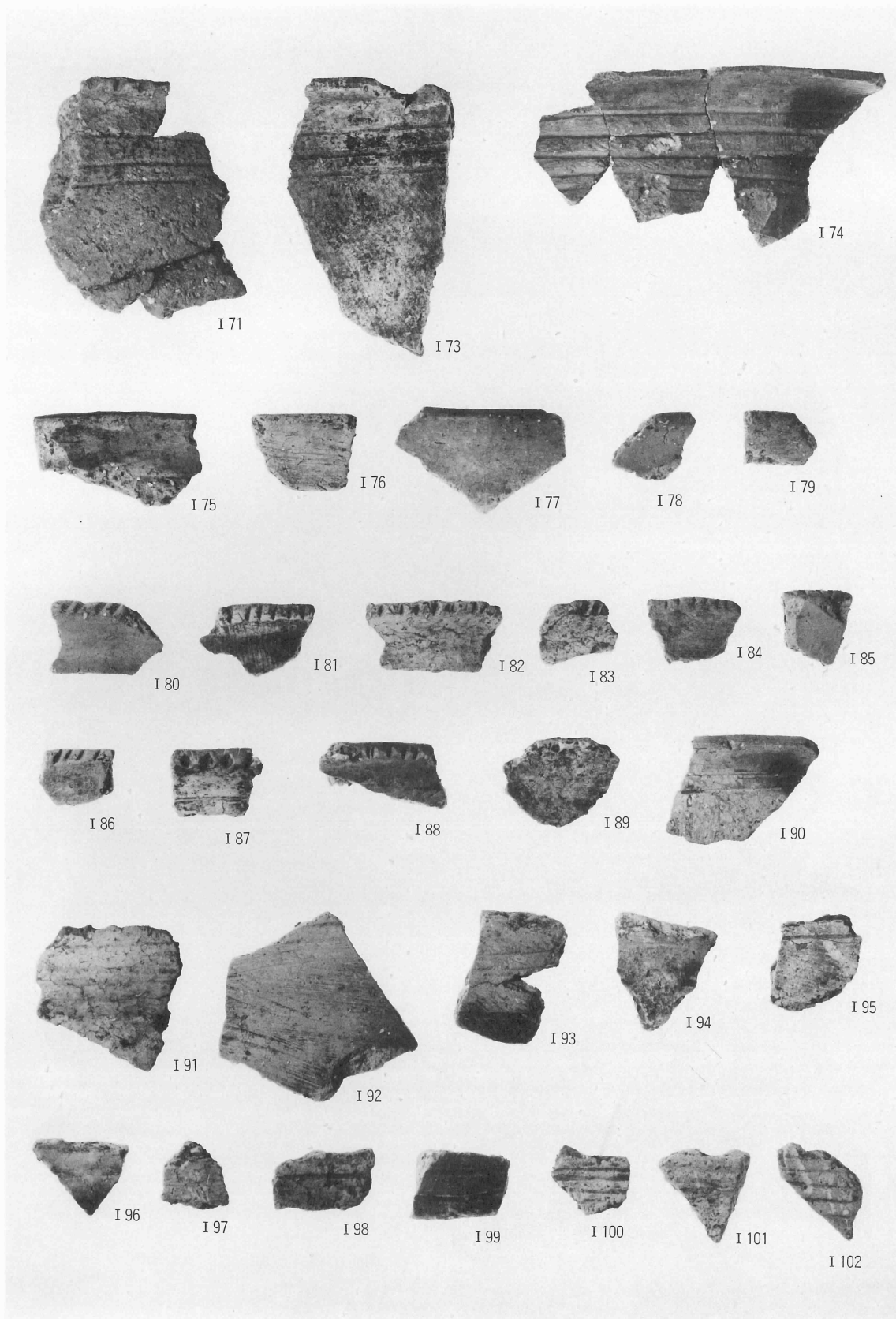
6 中・近世段差調査区西壁断面 (東から)



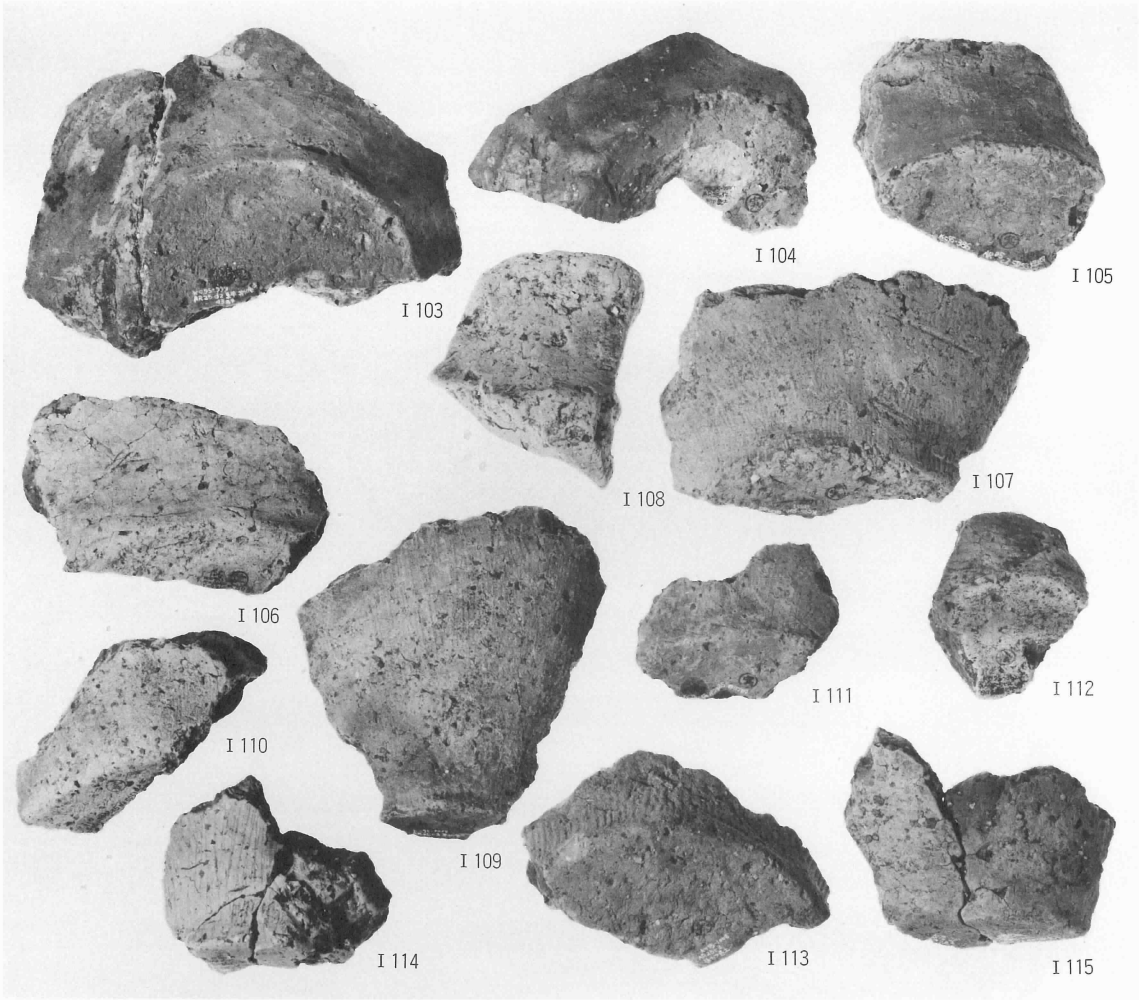
縄文・弥生時代の遺物(1) (I 2・I 7・I 9・I 10縄文土器, I 12・I 13条痕文土器, I 26・I 28・I 29・I 72弥生土器)



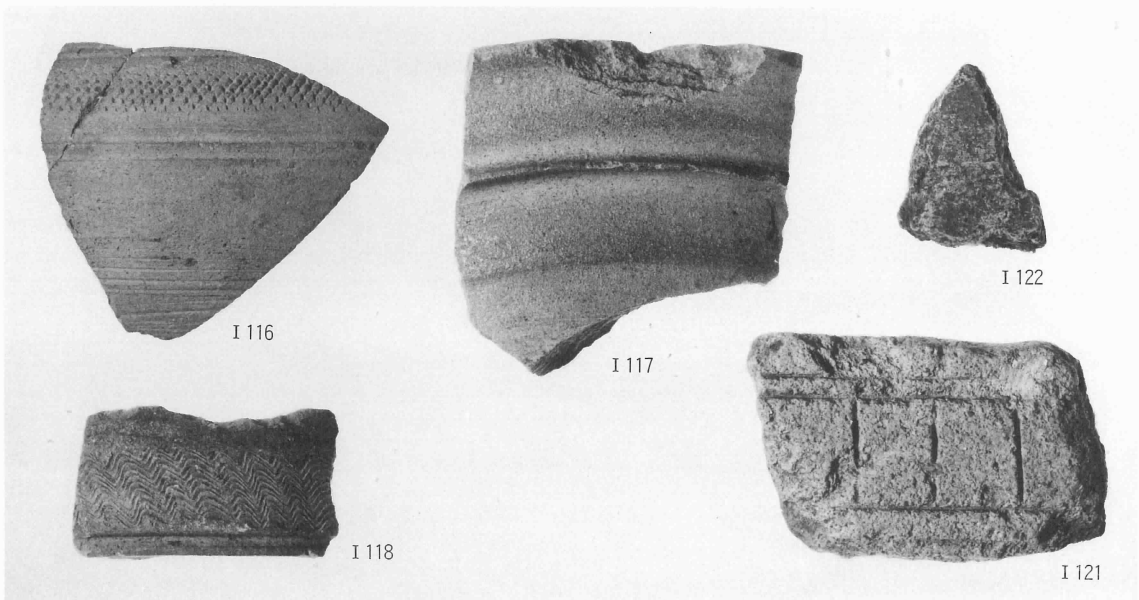
縄文・弥生時代の遺物(2) (I 14~ I 25・ I 30~ I 70弥生土器)



縄文・弥生時代の遺物(3) (I 71・I 73～I 102弥生土器)



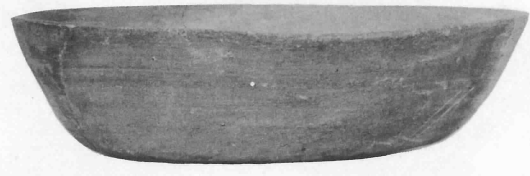
1 縄文・弥生時代の遺物(4) (I 103～ I 115弥生土器)



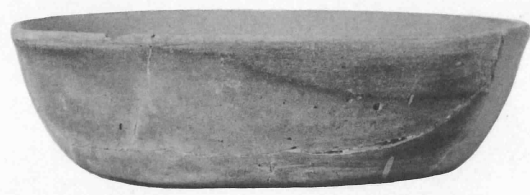
2 古墳時代の遺物 (I 116～ I 118須恵器, I 121・ I 122埴輪)



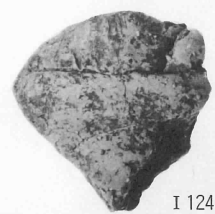
I 129



I 138



I 141



I 124



I 137



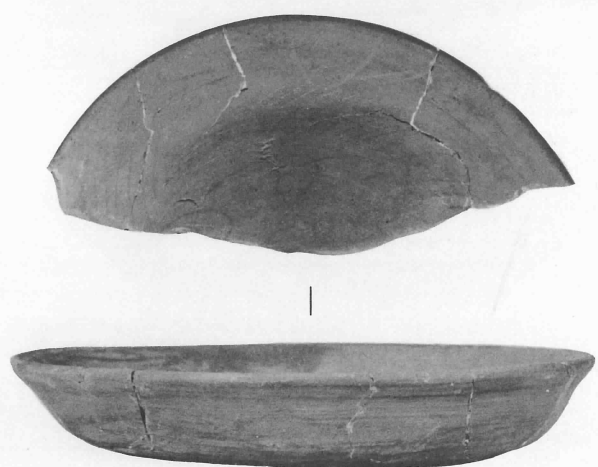
(裏面)



I 140

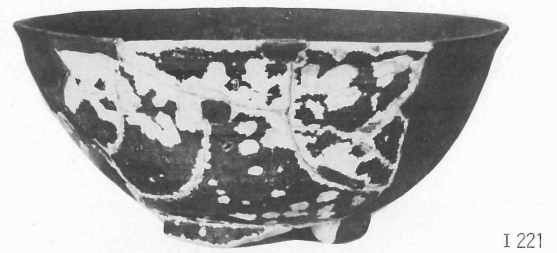
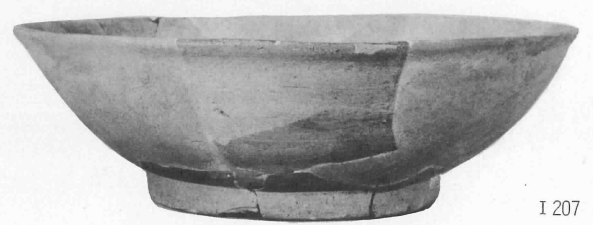
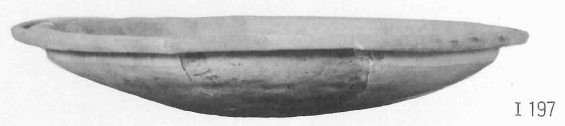
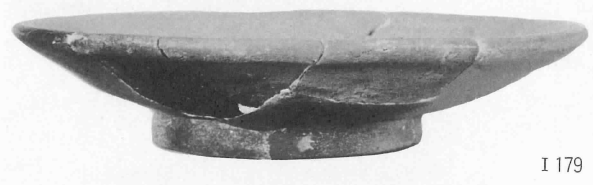
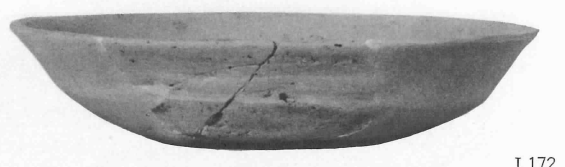
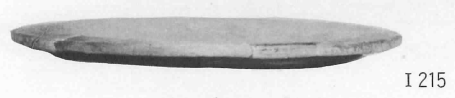
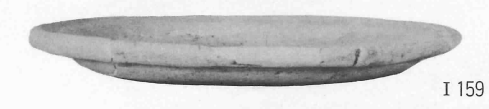


I 150

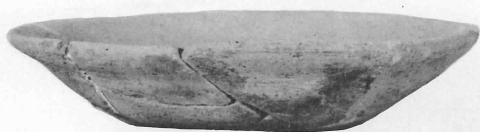


I 148

SK 5 出土遺物 (I 124 製塩土器), SK10 出土遺物 (I 129 土師器), SK11 出土遺物 (I 137 製塩土器), SK12 出土遺物 (I 138 須恵器), SK17 出土遺物 (I 140 製塩土器, I 141 須恵器), SD62 出土遺物 (I 148 土師器), 黒褐色土出土遺物 (I 150 製塩土器)



SD55出土遺物 (I 153・I 159・I 169・I 172・I 179土師器, I 188緑釉陶器),
SD16出土遺物 (I 197土師器, I 200須恵器, I 207灰釉陶器),
SD56出土遺物 (I 213・I 215・I 217土師器, I 221緑釉陶器),
SD33出土遺物 (I 236・I 244・I 246土師器)



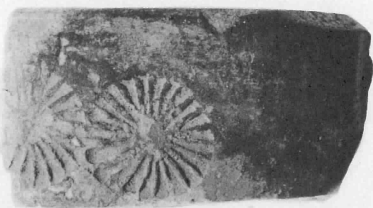
I 269



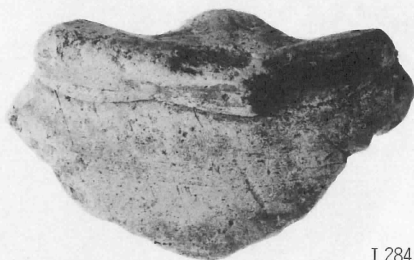
I 271



I 278



I 280



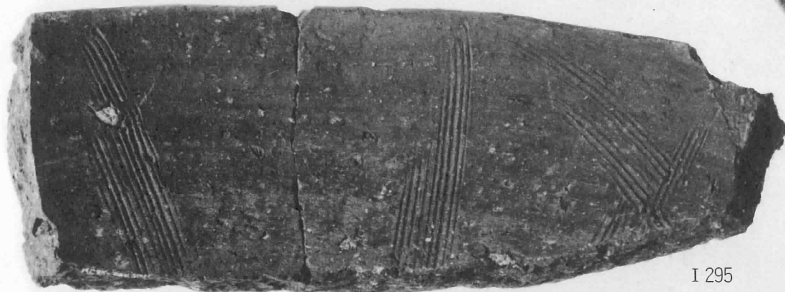
I 284



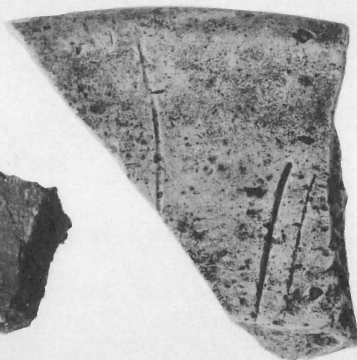
I 283



I 290



I 295



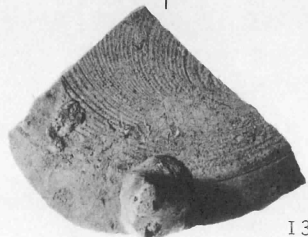
I 294



I 300

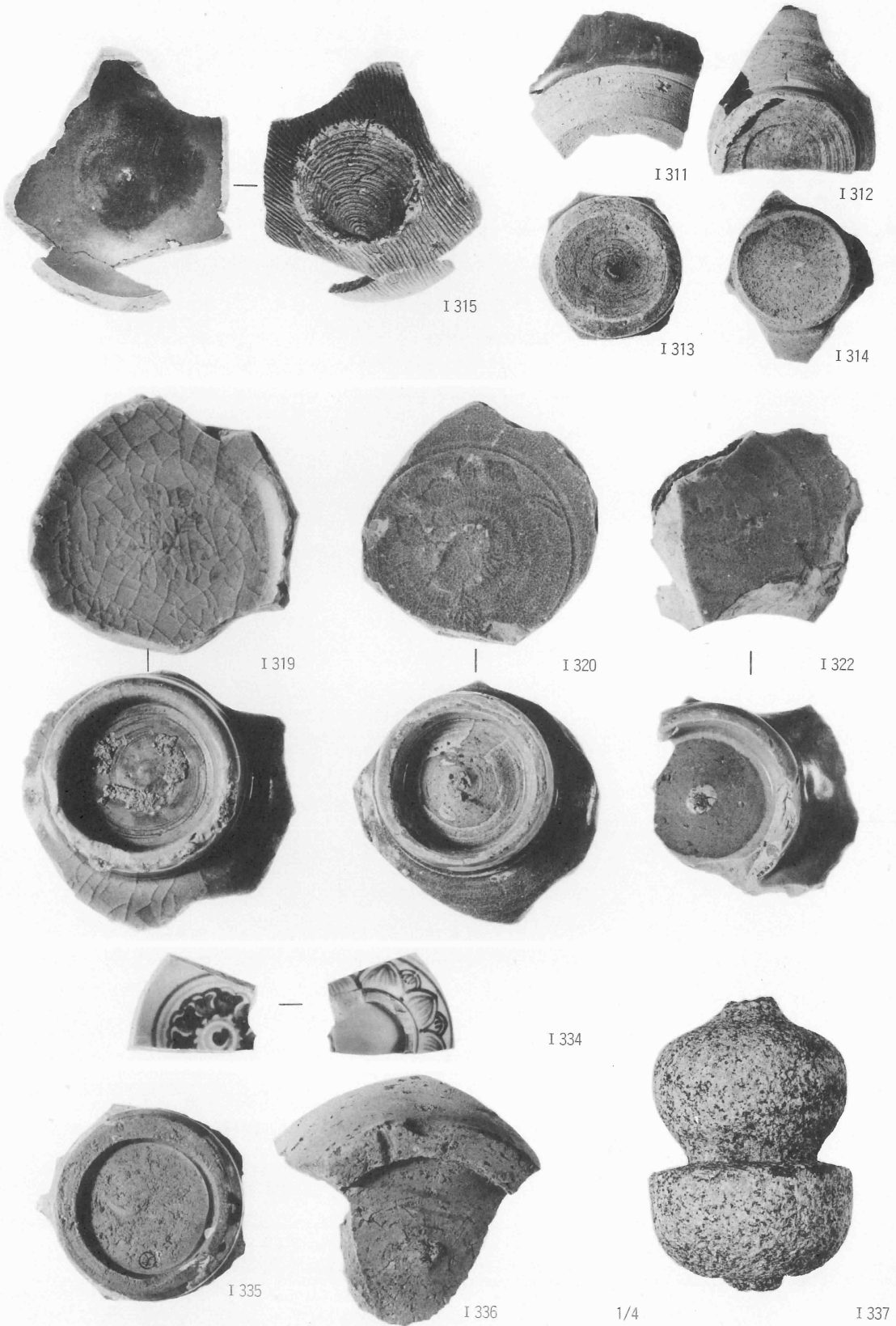


I 303



I 310

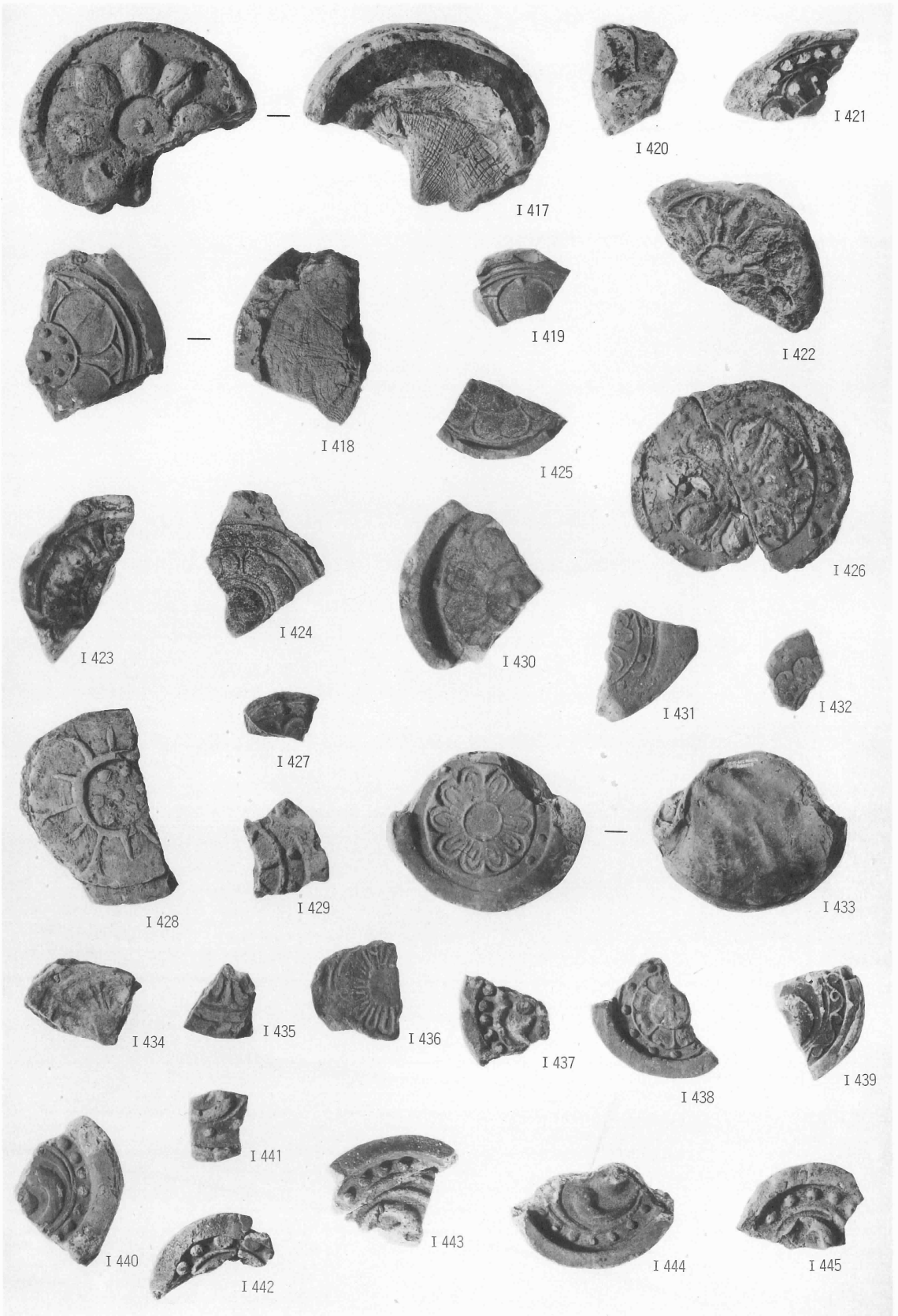
SD11出土遺物(1) (I 269・I 271土師器, I 278・I 280・I 283・I 284瓦器, I 290・I 294・I 295陶器, I 300・I 303・I 310灰釉系陶器)



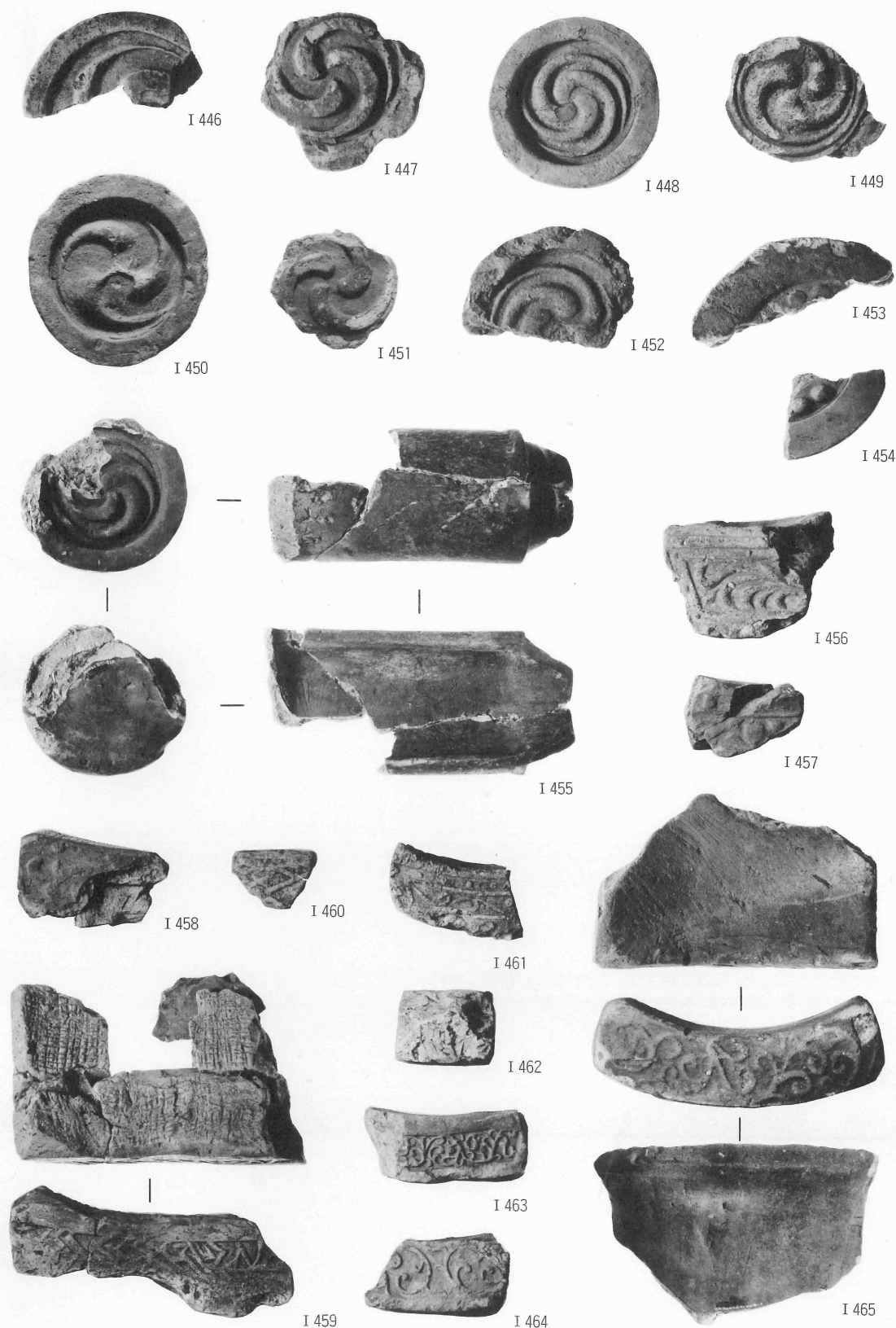
SD11出土遺物(2) (I 311 ~ I 315 灰釉系陶器, I 319 · I 320 · I 322 青磁, I 334 青花, I 335 · I 336 陶器, I 337 石製品)



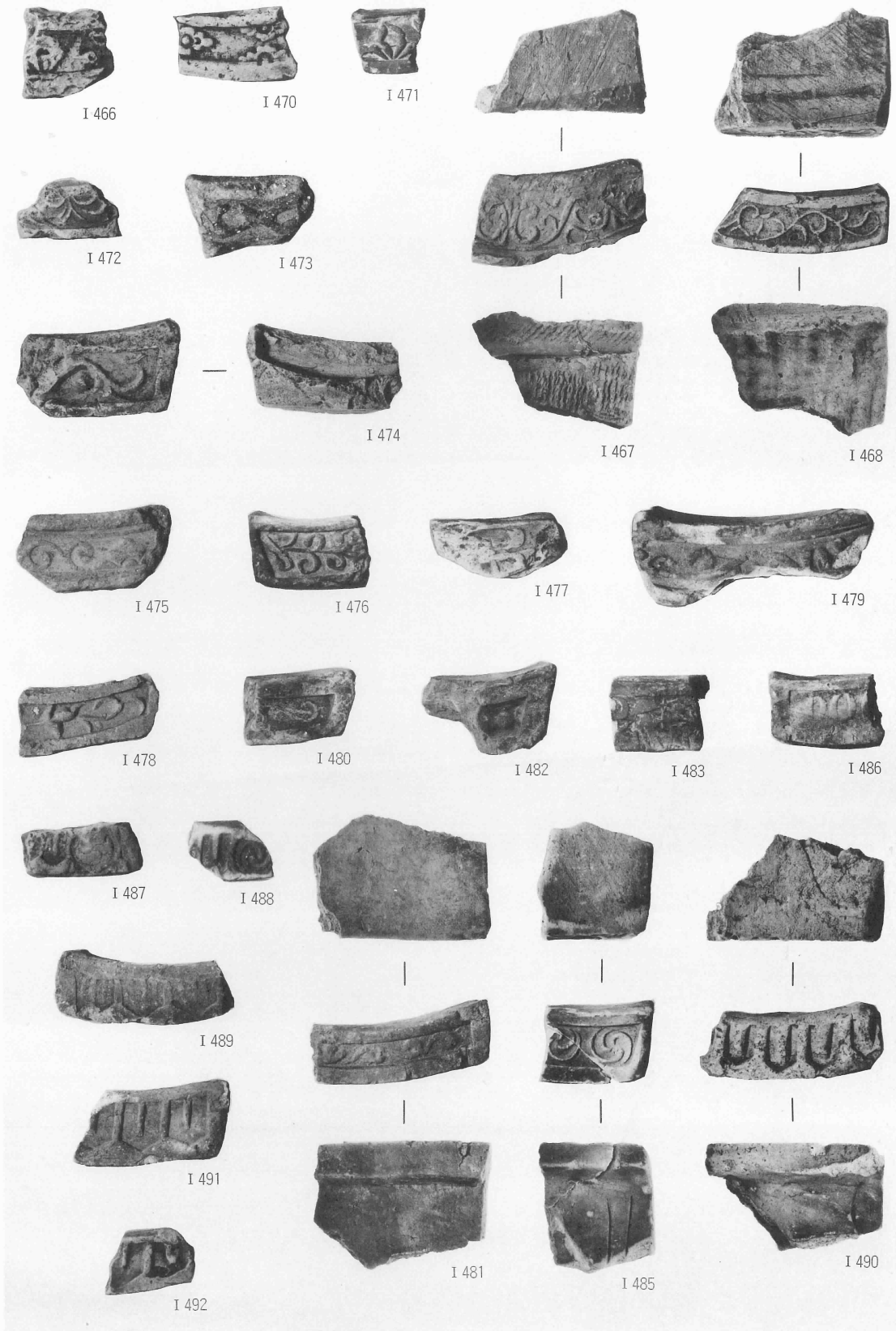
SD11出土遺物(3) (I 339~ I 342金属製品),
 SD53出土遺物 (I 349瓦器, I 351・I 371陶器, I 361・I 362灰釉系陶器),
 茶褐色土出土遺物 (I 386土師器, I 388灰釉系陶器), 段差内堆積層出土遺物 (I 397土師器),
 斜面堆積層出土遺物 (I 414白磁)



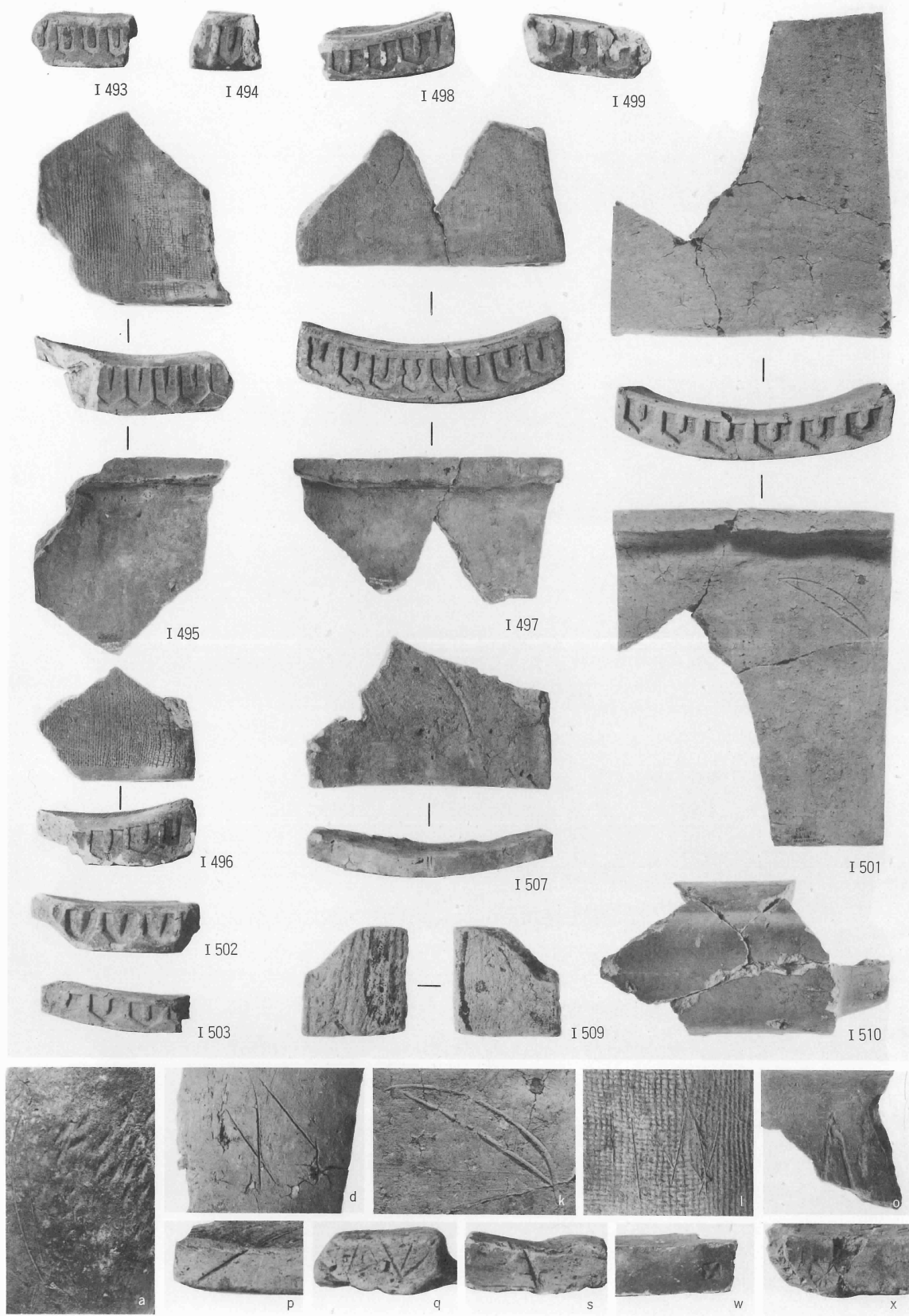
古代・中世の瓦(1) (I 417~ I 445軒丸瓦) 縮尺1/4



古代・中世の瓦(2) (I 446~ I 455軒丸瓦, I 456~ I 465軒平瓦) 縮尺1/4



古代・中世の瓦(3) (I 466~ I 468・I 470~ I 483・I 485~ I 492軒平瓦) 縮尺1/4



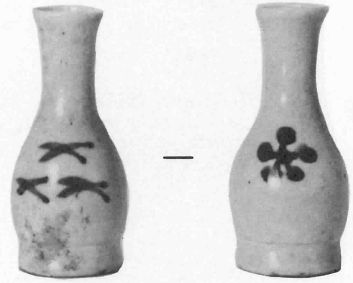
古代・中世の瓦(4) (I 493~ I 499・I 501~ I 503軒平瓦, I 507・I 509平瓦, I 510丸瓦) 縮尺1/4,
 篋記号・刻印 (a丸I A類, d丸II A類, k平I類, l平II A類, o平II c類, p平III A類,
 q・s平III B類, w刻印A類, x刻印B類)



I 515



I 516



I 517

I 513



I 518



I 522

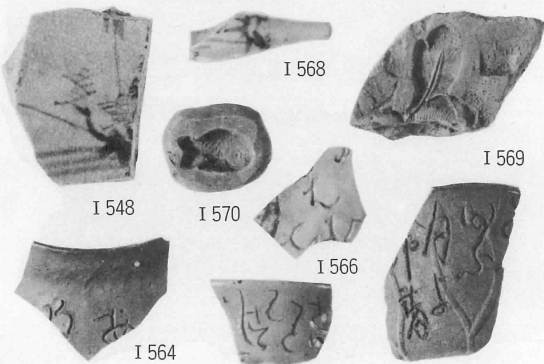
I 514



I 531



I 538



I 527



I 528

I 548

I 568

I 569

I 570

I 566

I 564

I 565

I 563



I 579

SX 1 出土遺物 (I 513・I 514土師器), SX 2 出土遺物 (I 515・I 516土師器, I 517染付), 灰褐色土出土遺物 (I 518・I 522・I 527・I 528土師器, I 531・I 538・I 548・I 563~I 566陶器, I 568染付, I 569・I 570土製品), SE20出土遺物 (I 579陶器)



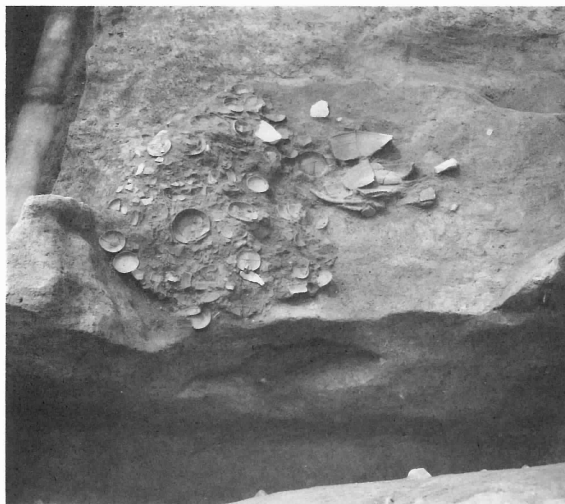
1 AG20区東調査区全景（北東から）



2 AG20区西調査区全景（西から）



3 溝SD4～6（北から）



1 井戸SE14遺物出土状況（東から）



2 井戸SE13（東から）



3 土坑SK 3（南から）



4 土坑SK 6（東から）



5 井戸SE 2（北から）



6 井戸SE 5（北から）



1 AF20区全景（東から）



2 井戸SE1（南から）



3 流路SR1・池SG1（北から）



4 流路SR1・杭列SA1・2（南から）



5 埧堀出土状況（西から）



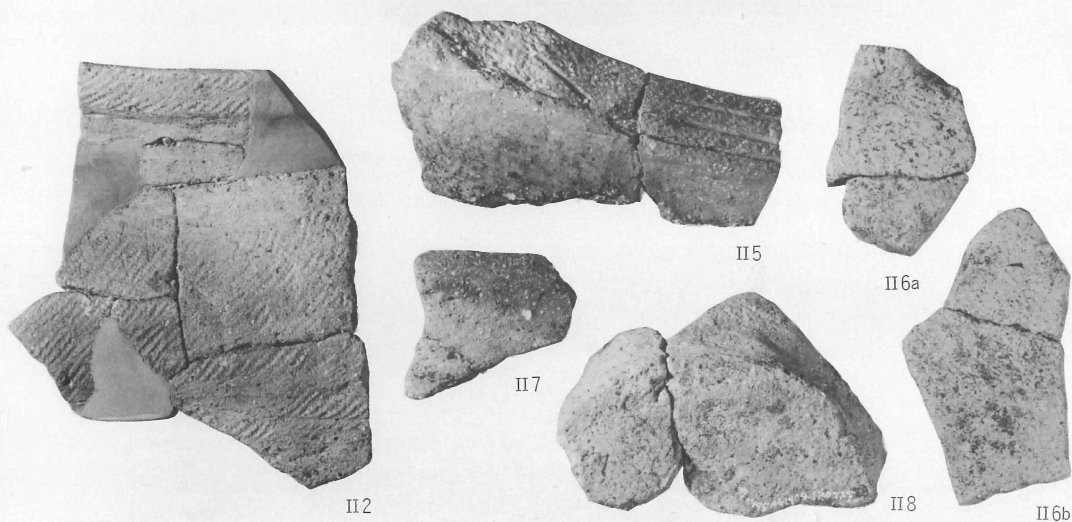
2/5

II 1

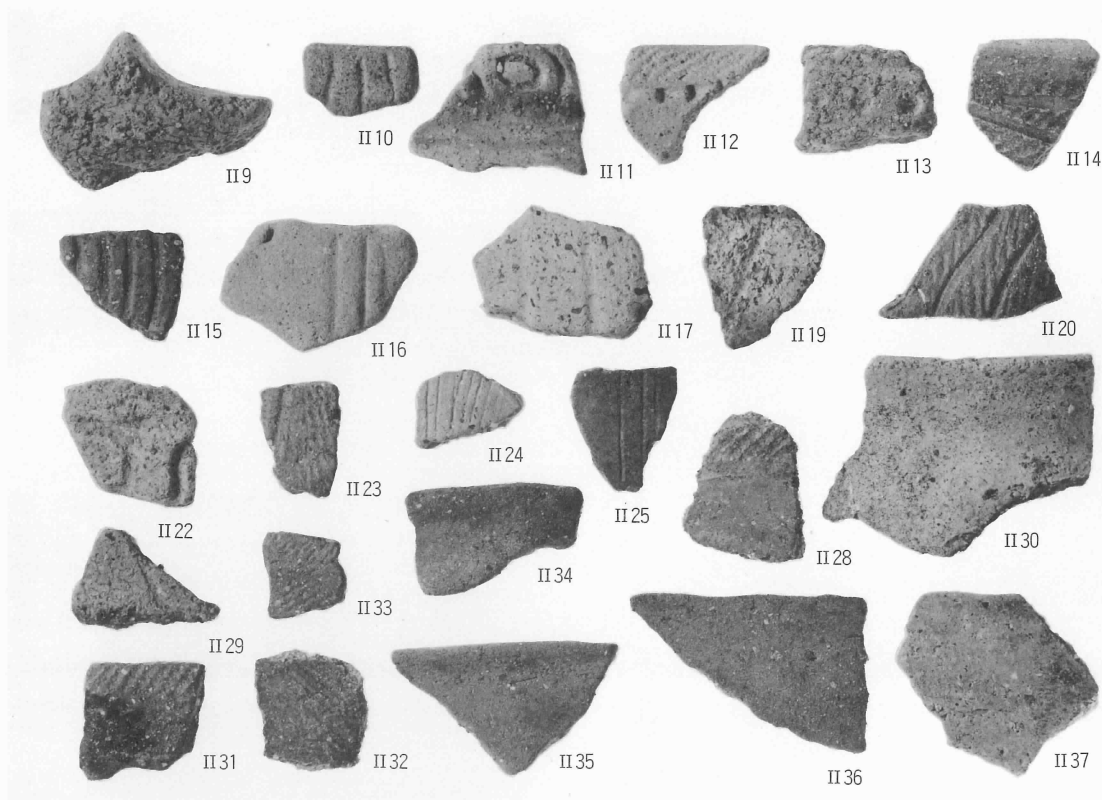


2/5

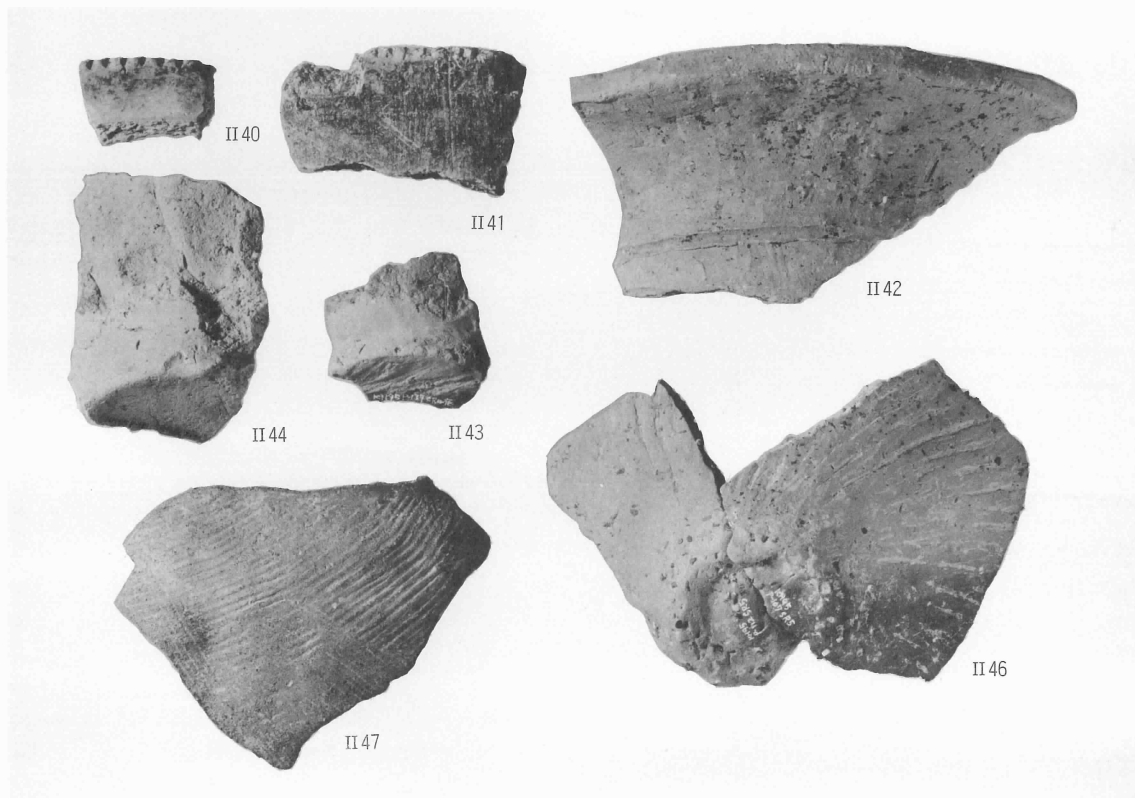
II 4



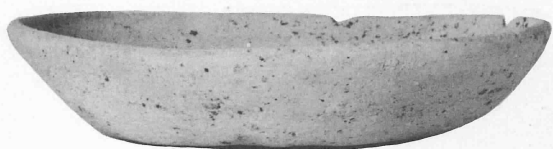
淡褐色砂質土出土遺物 (II 1・II 2・II 4～II 8 縄文後期)



1 SR 7 出土遺物 (II 9 ~ II 17・II 19・II 20・II 22 ~ II 25・II 28 ~ II 37 縄文後期)



2 SR 4 出土遺物 (II 40 ~ II 44 弥生前期), SR 5 出土遺物 (II 46 弥生後期, II 47 庄内式)



II53



II80

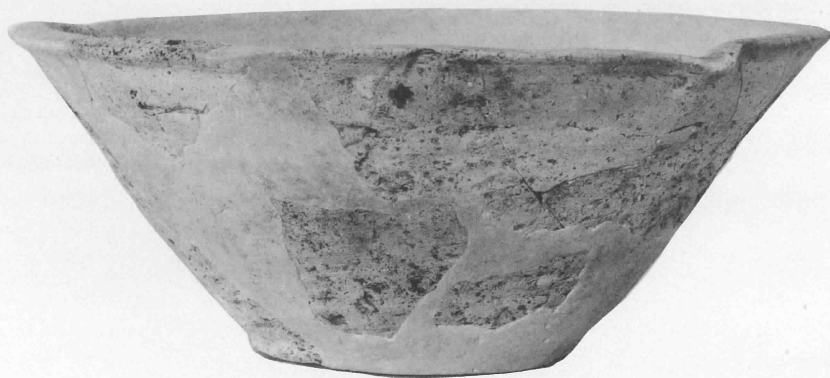


II89



2/5

II93



1/3

II235

SE14出土遺物 (II53・II89土師器, II80瓦器, II93須恵器), SK 6 出土遺物 (II235信楽)



II 272



II 279



II 273



II 281



II 286



II 280



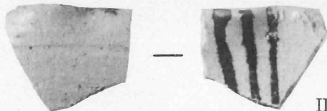
II 282



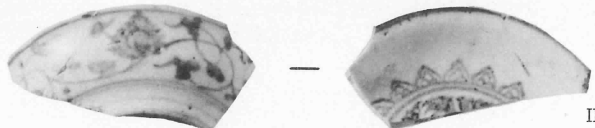
II 289



II 291



II 283



II 292

SD 4 出土遺物(1) (II 272土師器, II 273・II 279~II 283・II 286陶器, II 289染付, II 291・II 292青花)



II 297



II 296



II 294



II 299



II 310



II 325



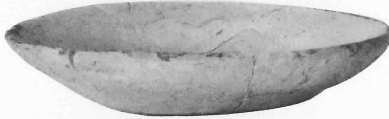
II 318



II 333



II 330



II 352



II 357



II 355



II 362



II 363

SD 5 出土遺物 (II 310・II 318土師器, II 325陶器, II 330青磁, II 333染付),
SE 7・8 出土遺物(1) (II 352・II 355・II 357・II 362土師器, II 363陶器)



II 365



II 366



II 367



II 368



II 376



II 369



II 370



II 372



II 400



II 399



II 402



II 401



II 403

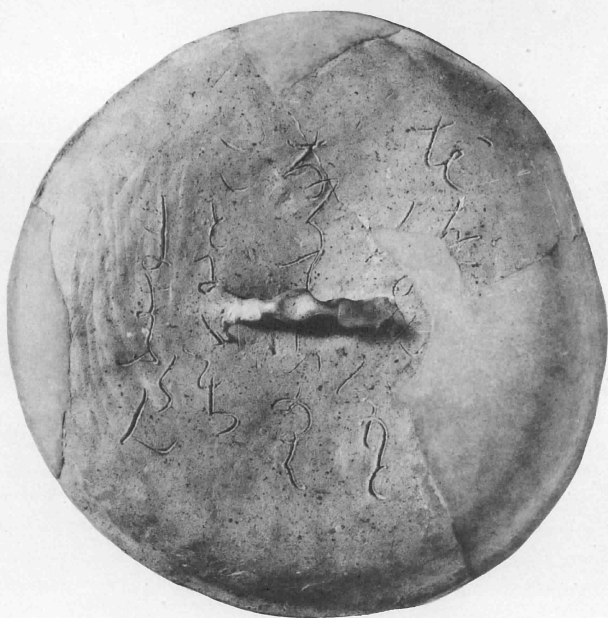
蓮月焼(1) (II 399・II 400急須, II 401急須蓋, II 402湯瓶, II 403皿)



II406



II408



II405



2/3

II411



2/3

II412



2/3

II414

蓮月焼(2) (II405・II406・II408蓋物, II411・II412・II414碗)



蓮月焼(3) (II410・II413椀, II417茶托, II415鉢, II418~II421香合) 縮尺2/3



1/2

II 422

1/3

II 423

1/3

II 424

蓮月焼(4) (II 422壺形, II 423涼炉, II 424火炉)



II431



II458



II459



II435



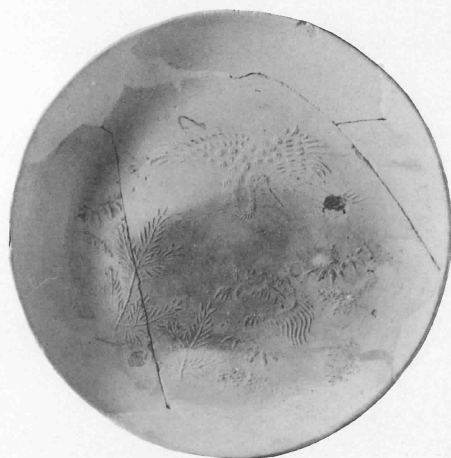
II448



II451



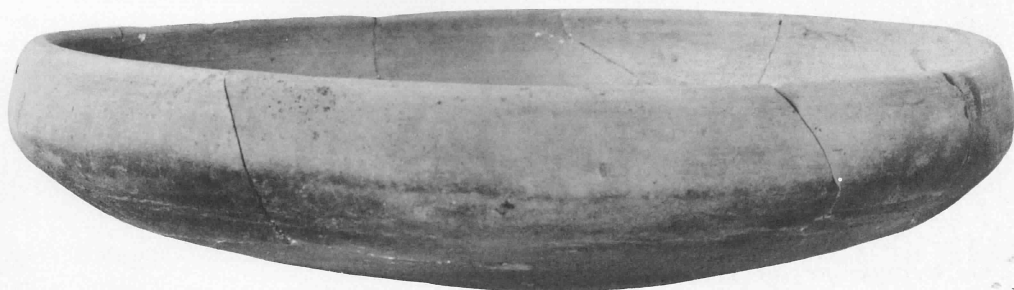
II457



II455



II471



II456

SG 1 出土遺物(1) (II431・II435・II448・II451・II455～II459土師器, II471陶器)



I



II 469



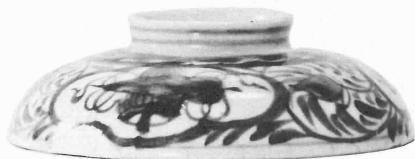
II 461



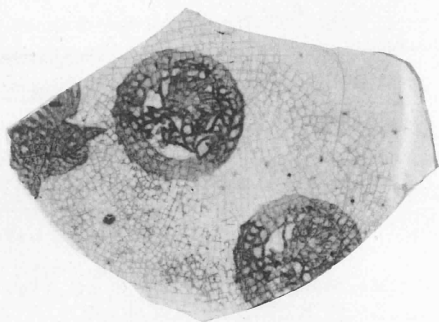
II 477



II 474



II 483



II 481



II 484



II 495



II 494



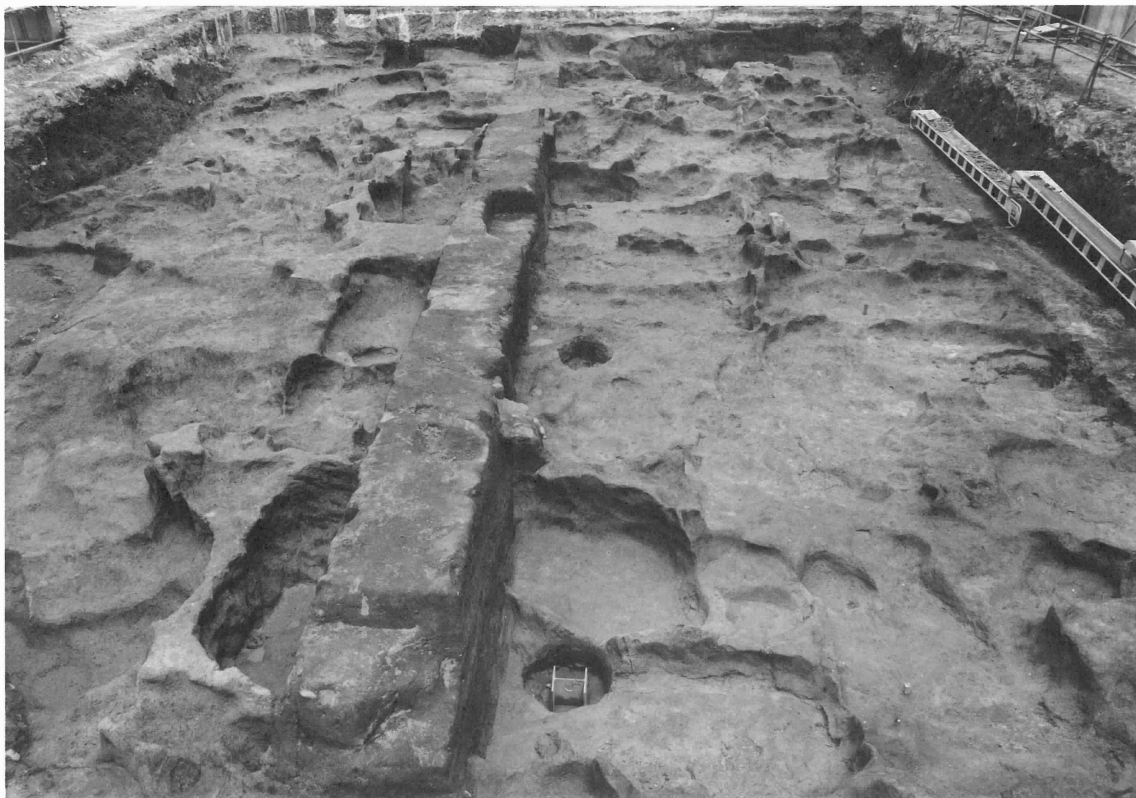
原寸

II 495細部



II 493

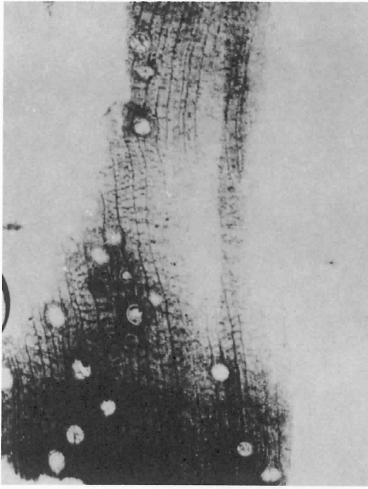
埴 罎 (II 493・II 494灰褐色土出土, II 495SG 1 出土) 縮尺1/4



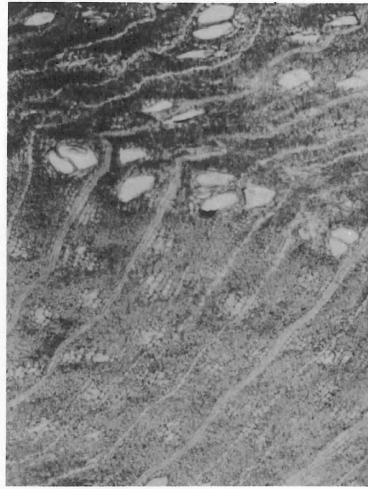
1 調査区全景（西から）



2 黒褐色粘質土内木材出土状況（南から）



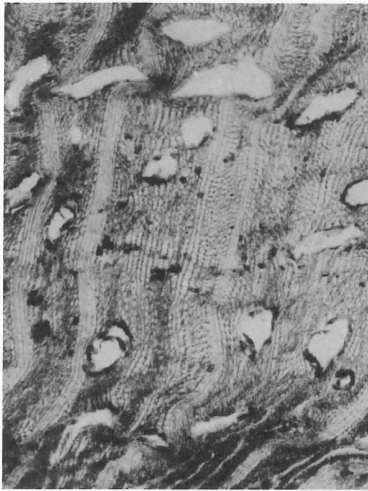
1. アカガシ亜属 (P10) ×20



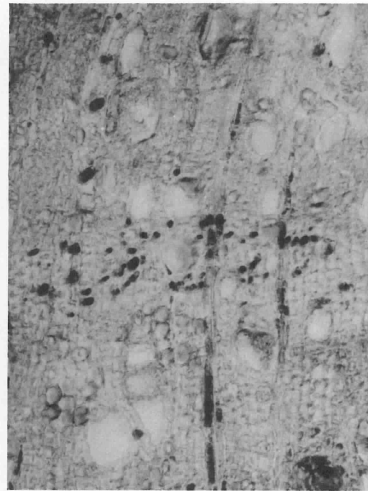
2. フジキ (P23) ×50



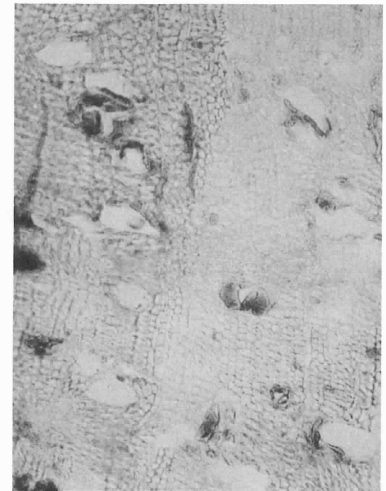
3. カエデ属 (P24) ×5



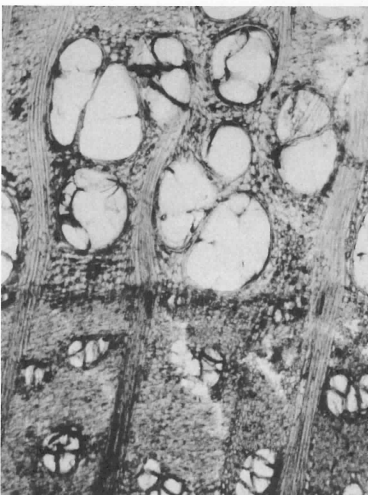
4. 環孔材 (P32) ×50



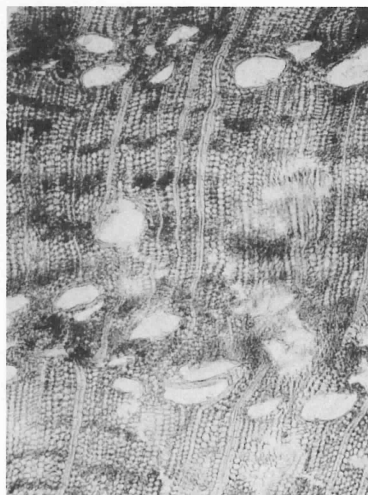
5. ウリカエデ (P50) ×120



6. 散孔材A (P64) ×100



7. ヤマグワ (P67) ×50



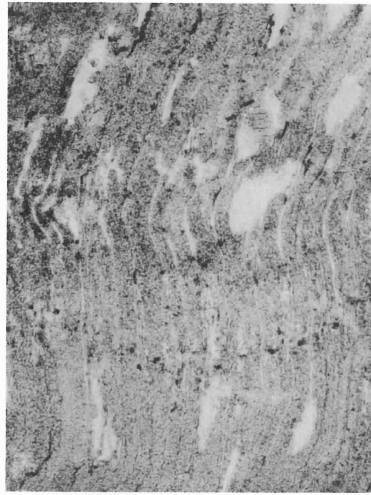
8. ムクロジ (P77) ×50



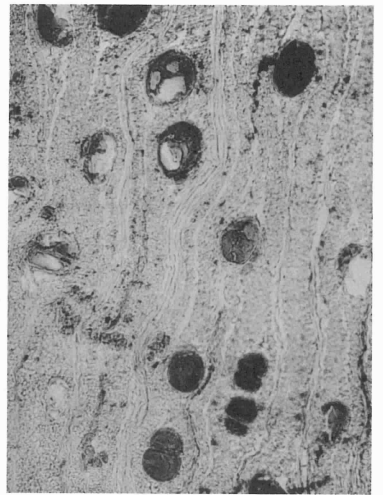
9. ムクノキ (P78) ×50



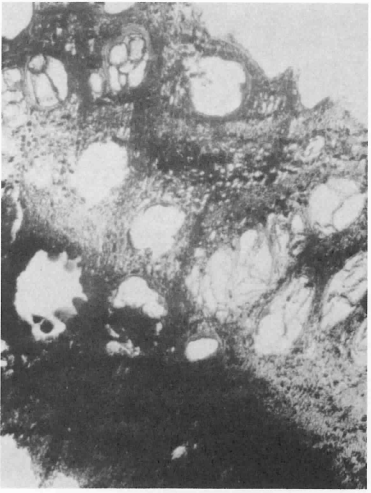
10. カヤ (P97) ×150



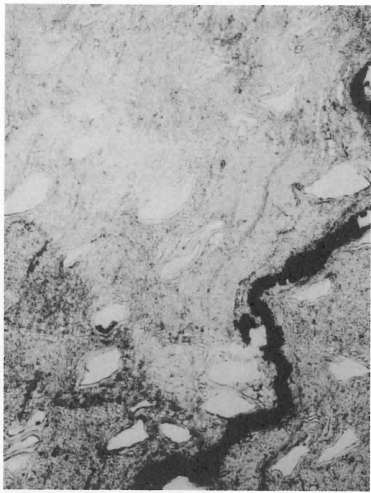
11. 散孔材B (P100) ×60



12. カエデ属 (P102) ×120



13. ツルウメモドキ? (P115) ×60



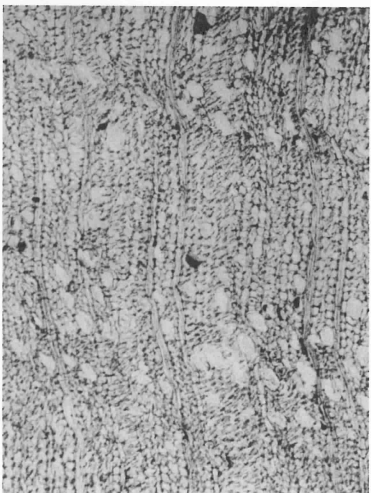
14. ムクノキ (P117) ×50



15. カエデ属 (P182) ×60



16. ムクノキ (P183) ×50



17. ツバキ (P212) ×60



18. ツバキ (P213) ×50

2000年8月31日 発行

京都大学構内遺跡調査研究年報

1996年度

編 集 京都大学埋蔵文化財研究センター
発 行

京都市左京区吉田本町

本文印刷
製 本 (株)石田大成社

図版印刷 有限会社 真 陽 社

京都市下京区油小路仏光寺上ル